地にむかひて甚だ大きくなり十天軍におよぶまでに高くなりその軍と星數箇を地に投りだしてこれを踏つけ
十一また自ら高ぶりてその軍の主に敵しその常供の物を取のぞきかつその聖所を毀てり十二軍卒の故に
よりて常供の物とともに棄られたり彼者はまた眞理を地に擲ち事をなしてその意志を得たり十三かくて我
聞に一箇の聖者語ひをりしが又一箇の聖者ありてその語ひをる聖者にむかひて言ふ常供の物と荒廢を來
らする罪とにつきて異象にあらはれたるところの事聖所とその軍との蹂られて踏つけらるゝ事は何時まで
斯てあるべきかと十四彼すなはち我に言ふるは二千三百の朝夕をかさねるまで斯てあらん而して聖所は潔め
らるべし十五我ダニエルこの異象を見てその意義を知んと求めをりける時人のごとく見る者わが前に立り
十六時に我聞にウライ河の兩岸の間より人の聲出て呼はりて言ふがブリエルよこの異象をその人に曉らし
めよと十七彼すなはち我の立る所にきたりしがその到れる時に我おそれて仆れ伏たるに彼われに言けるは人
の子よ曉れ此異象は終の時にかゝはる者なりと十八彼の我に語ひける時我は氣を喪へる狀にて地に俯伏を
りしが彼我に手をつけて我を立せ言けるは十九視よ我怒怒の終に起らんところの事を汝に知せん此事は終末
の期におよびてあらん二十汝が見たるかの二の角ある牡羊はメデアとペルシヤの王なり二一またかの牡山羊
はギリシヤの王その目の間の大なる角はその第一の王なり二二その角折てその代に四の角生じたれ卽ち
ばその民よりして四の國おこらん然ど第一の者の權勢には及ばざるなり二三彼らの國の末にいたり罪人の卽
實盈におよびて一人の王おこらんその顏は猛惡にして巧に詭譎を言ひ二四その權勢は熾盛ならん但し自己の
能力をもて之を致すに非ずその毀滅ことを爲は常ならず意志を得て事を爲し權能ある者等と聖民とを滅
ぼさん二五彼は機巧をもて詭譎をその手に行なひ遂げ心にみづから高ぶり平和の時に衆多の人を打滅ぼしま
た君の君たる者に敵せん然ど終には人手によらずして滅ぼされん二六前に告たる朝夕の異象は眞實なり汝そ
の異象の事を秘しおけ是は衆多の日の後に有べき事なり二七是において我ダニエル疲れはてふ數日の間病
わづらひて後興いでて王の事務をおこなへり我はこの異象の事を案ひて駭けり人もまたこれを曉ることを得

一メデア人アハシユエロスの子ダリヨスがカルデヤ人の王とせられしその元年二すなはちその
世の元年に我ダニエルエホバの言の預言者エレミヤにのぞみて告たるその年の數を書によりて曉れり
卽ちその言にエルサレムは荒て七十年を經んとあり三是において我面を主エホバに向け斷食をなし麻の衣を
着灰を蒙り祈りかつ願びて求むることをせり四卽ち我わが神エホバに禱り懺悔して言り嗚呼大にして畏る
べき神なる主自己を愛し自己の誡命を守る者のために契約を保ち之に恩惠を施したまふ者よ五我等は罪を犯
し悖れる事を爲し惡を行ひ叛逆を爲して汝の誡命と律法を離れたり六我等はまた汝の僕なる預言者等が
汝の名をもて我らの王等君等先祖等および全國の民に告たる所に聽したがはざりしなり七主よ公義は汝
に歸し羞辱は我らに歸せりその狀今日のごとし卽ちユダの人々エルサレムの居民およびイスラエルの全家
の者は近き者も遠き者も皆汝の逐やりたまひし諸の國々にて羞辱を蒙れり是は彼らが汝に背きて獲たる
罪によりて然るなり八主よ羞辱は我等に歸し我らの王等君等および先祖等に歸す是は我等なんぢに向ひて
罪を犯したればなり九憐憫と赦宥は主たる我らの神にあり其は我らこれに叛きたればなり十我らはまた
我らの神エホバの言に遵はず エホバがその僕なる預言者等によりて我らの前に設けたまひし律法を行はざ
りしなり十一卽ちイスラエルの人は皆汝の律法を犯し離れさりて汝の言に遵はざりき是をもて神の僕
モーセの律法に記したる呪詛と誓詞我らの上に斟ぎかゝれり是は我らこれに罪を獲たればなり十二卽ち神は
大なる災害を我らに蒙らせたまひてその前に我らさばきを行ひさげたる我らの士師さにむかひて宣ひし言を
鞫ける士師をして我らを攻しめ天の下に未だ曾て有ざりしなり十三モーセの律法に記したるごとくにこの災害すべて我らに臨みしかども我らはその神エホバの面を和めんとも爲ずその惡を離れて汝の眞
理を曉らんとも爲ざりき十四是をもてエホバ心にかけて災害を我らに降したまへり我らの神エホバは何事
をなしたまふも凡て公義いますなり然るに我らはその言に遵はざりき十五主たる我らの神よ汝は強き手を

もて汝の民をエジプトの地より導き出して今日のごとく汝の名を場たまふ我らは罪を犯し悪き事を行へり
十六 主よ願くは汝が是まで公義き御行爲を爲たまひし如く汝の邑エルサレム汝の聖山より汝の怒怒と憤
恨を取離したまへ其は我らの罪と我らの先祖の悪のためにエルサレムと汝の民は我らの周圍の者の笑柄と
十七 なりたればなり十七 然ば我らの神よ僕の禱と願を聽たまへ汝は主にいませばかの荒たる汝の聖所に汝
十八 の面を輝かせたまひ十八 我神よ耳を傾けて聽たまへ目を啓きて我らの荒蕪たる狀を覩汝の名をもて稱へらる
邑を覩たまへ我らが汝の前に祈禱をたてまつるは自己の公義によるに非ず唯なんぢの大なる憐憫によるな
十九 り十九 主よ聽いれたまへ主よ赦したまへ主よ聽いれて行ひたまへこの事を遲くしたまふなかれわが神よ汝み
二十 づからのために之をなしたまへ其は汝の邑と汝の民は汝の名をもて稱へらるればなり二十 我わく言て祈りか
二一 つわが罪とわが民イスラエルの罪を懺悔し我神の聖山の事につきてわが神エホバのまへに願をたてまつり
二二 をる時二一 即ち我祈禱の言をのべをる時我が初に異象の中に見たるかの人ガブリエル迅速に飛て晩の祭
二三 物を獻る頃我許に達し二二 我に告げ我に語りて言けるはダニエルよ今我なんぢを教へて了解を得せしめん
とて出きたれり二三 汝が祈願を始むるに方りて我言を受たれば之を汝に示さんとて來れり汝は大に愛せ
二四 らるゝ者なり此言を了りその現れたる事の義を曉れ二四 汝の民と汝の聖邑のために七十週を定めおゝろ
二五 而して惡を抑へ罪を封じ愆を贖ひ永遠の義を攜へ入り異象と預言を封じ至聖者に膏を濯がん二五 汝曉
二六 り知べしエルサレムを建なほせといふ命令の出るより メッシヤたる君の起るまでに七週と六十二週ありそ
の街と石垣とは擾亂の間に建なほされん二六 その六十二週の後にメッシヤ絕れん但し是は自己のために非
ざるなりまた一人の君の民きたりて邑と聖所とを毀たんその終は洪水に由るごとくなるべし戰爭の終るこ
までに荒蕪すでに極まる二七 彼一週の間衆多の者と固く契約を結ばん而して彼その週の半に犧牲と
供物を廢せんまた殘暴可惡者羽翼の上に立ん斯てつひにその定まれる災害殘暴る者の上に斟ざくだ
らん

一 ペルシヤの王クロスの三年にベルテシヤザルといふダニエル一の事の默旨を得たるがその事は
二 眞實にしてその戰爭は大なり彼その事を曉りその示現の義を曉れりニ 當時我ダニエル三七日の間哀
三 めり三 即ち三七日の全く滿るまでは旨き物を食ず肉と酒とを口にいれずまた身に膏油を搽ざりき四 正月
四 の二十四日に我ヒデケルといふ大河の邊に在り五 目を擧て望觀しに一箇の人ありて布の衣を衣リバズの金
五 の帶を腰にしめたり六 その體は黃金色の玉のごとくその目は火の熠のごとくその手とその足の色は磨けり銅
六 のごとくその言ふ聲は群衆の聲の如しセ この示現は唯我ダニエル一人これを覩たり我と偕なる人々はこの示現を見ざりしが何となくその身大に慄きて逃かくれたり八 故に我ひとり遺りたるがこの大なる示現を覩るにおよびて力ぬけさり顏色まつたく變りて毫も力なかりきル 我その語ふ聲を聞けば我戰ひながら跪づきて手をつきたるに十 一の手ありて我に搖りけれ
七 八 九 十 十一
十一 れよ汝まづ起あがれ我は今汝の許に遣はされたるなりと彼がこの言を我に告る時に我は戰て立り十二 彼す
十二 なはち我に言けるはダニエルよ懼るゝ勿れ汝が心をこめて悟らんとし汝の神の前に身をなやませるその初
の日よりして汝の言はすでに聽れたれば我汝の言によりて來れり十三 然るにペルシヤの國の君二十一日
十三 の間わが前に立塞がりけるが長たる君の一なるミカエル來りて我を助けたれば我勝留りてペルシヤの王等
十四 の傍にをる十四 我は末の日に汝の民に臨まんとするところの事を汝に曉らせんとて來れりまた後の日に關
十五 はる所の異象ありと十五 彼是等の言を我に宣たる時に我は面を土につけて居り辭を措こころ無りしが十六 人
十六 の子のごとき者わが脣に捫りければ我すなはち口を開きわが前に立る者に陳て言り我主よこの示現により
十七 て我は畏怖にたへず全く力を失なへり十七 此わが主の僕いかでか此わが主と語ふことを得んとその時は我
十八 まつたく力を失ひて氣息も止らんばかりなりしが十八 人の形のごとき者ふたゝび我に捫り我に力をつけて
十九 言けるは愛せらるゝ人よ懼るゝ勿れ安んぜよ心強かれ心強かれと斯われに言ければ我力づきて曰

二十 り我主よ語りたまへ汝われに力をつけたまへりと 二十一 彼われに言けるは汝は我が何のために汝に臨めるかを
二一 知や我今また歸りゆきてペルシヤの君と戰はんとす我が出行ん後にギリシヤの君きたらん 二 但し我まづ眞
實の書に記されたる所を汝に示すべし我を助けて彼らに敵る者は汝らの君ミカエルのみ

二 我はまたメデア人ダリヨスの元年にかれを助け彼に力をそへたる事ありしなり 二 我いま眞
實を汝に示さん視よ此後ペルシヤに三人の王興らんその第四の者は富ること一切の者に勝りその富強の大
なるを恃みて一切を激發してギリシヤの國を攻ん 三 また一個の強き王おこり大なる威權を振ふて世を治めそ
の意のまゝに事を爲ん 四 但し彼の正に旺盛なる時にその國は破裂して天の四方に分れん其は彼の兒孫に歸せ
ず又かれの振ひしほどの威權あらず即ち彼の國は拔さられて是等の外なる者等に歸せん 五 南の王は強からん
然どその大臣の一人これに逼て強くなり威權を振はんその威權は大なる威權なるべしが 年を經へて後彼等相結
ば 六 即ち南の王の女子北の王に適て和好を圖らん然どその腕には力なしまたその王およびその腕は立ことを
得じこの女子これを導けるものどもこれを生せたる者どもこれに力をつけたる者はみな時におよびて付されん 七
斯て後この女の根より出たる芽興りて之に代り北の王の軍勢にむかひて來りこれが城に打いりて之を攻て勝
を得八之が神々鑄像および金銀の貴き器具をエジプトに携へさらん彼は北の王の上に立て年を重れん 九 彼南の王の國に打入ことおらん然ど自己の國に退ぞくべし 十 その子等また憤激して許多の大軍を聚め進
み來り溢れて往來しその城まで攻寄ん 十一 是において南の王大に怒り出きたりて北の王と戰ふべし彼大
軍を興してこれに當らん然れどもその軍兵はこれが手に付されん 十二 大軍すなはち興りて彼心に高ぶり
數萬人を仆さん然れどもその勢力はこれがために增じ 十三 また北の王は退きて初よりも大なる軍兵を興
し或時すなはち或年數を經へて後かならず大兵を率ゐ莫大の輜重を備へて攻來らん 十四 是時にあたりて衆多
の者興りて南の王に敵せん又なんぢの民の中の奸惡人等みづから高ぶりて事を爲しつひに預言をして應ぜし
めん即ち彼らは自ら仆るべし 十五 茲に北の王襲ひきたり壘を築きて堅城を攻おとさん南の王の腕はこれに
當ることを得じ又その撰拔の民もこれに當る力なかるべし 十六 之に攻きたる者はその意に任せて事をなさん
その前に立ことを得る者なかるべし彼は美しき地に到らんその地はこれがために荒さるべし 十七 彼その全國
の力を盡して打入んとその面をこれに向べければごまたこれと和好をなして婦人の女子を之に與へん然るにそ
の婦人の女子は之がために身を滅ぼすに至り何事をも成あたはず毫も彼のために益する所なかるべし 十八 彼
またその面を島々にむけて之を多く取ん然に一人の大將ありて彼が與へたる恥辱を雪ぎその恥辱をかれの
身に與へかへさん 十九 かくて彼その面を自己の國の城々に向ん而して終に躓き仆れて亡ん 二十 彼に代りて興
ろ者は榮光の國に人を出して租稅を征斂しめん但し彼は忿怒にも戰鬥にもよらずして數日の內に滅亡ん
二一 また之にかはりて起る者は賤まる〳〵者にして國の尊榮これに歸せざらん然れども彼不意に來り巧言をも
て國を獲ん 二二 洪水のごとき軍勢かれのために押流されて敗れん契約の君たる者も然らん 二三 彼は之に契約
をむすびて後詭詐を行ひ上りきたりて僅少の民をもて勢を得ん 二四 彼すなはち不意にきたりてその國の
膏腴なる處に攻いりその父もその父の父も爲ざりしところの事を行はん彼はその客ひたる物掠めたる物およ
び財寶を衆人の中に散すべし彼は謀略をめぐらして堅固なる城々を攻取べし時の至るまで斯のごとくなら
ん 二五 彼はその勢力を奮ひ心を勵まして大軍を率ゐて南の王に攻よせん南の王きはめて大なる強
き軍勢をもて迎へ戰はん然ど謀略をめぐらして攻るが故にこれに當ることを得ざるべし 二六 すなはち彼
の珍膳に與り食ふ者彼を倒さんその軍兵溢れん打死する者衆かるべし 二七 此二人の王は害をなさんと心
にはかり同席に共に食して詭詐を言ん然どもその志ならざるべし定まれる時のいたるまでは其事終ら
じ 二八 彼は莫大の財寶をもちて自己の國に歸らん彼は聖約に敵する心を懷きて事をなし而してその國にかへ
らん 二九 定まれる時にいたりて彼また進みて南に到らん然ど後の模樣は先の模樣のごとくならざらん 三十
即ちキッテムの船かれに到るべければ彼方をおこして還り聖約にむかひて忿怒をもらして事をなさん而し
て彼歸りゆき聖約を棄る者と相謀らん 三一 彼より腕おこりて聖所すなはち堅城を汚し常供の物を撤除

二二 かせかつ殘暴可惡物を立ん 三 彼はまた契約に關て卑を獲る者等を巧言をもて引誘して背かせん然ごその
二三 神を知る人々は力ありて事をなさん 三三 民の中の穎悟者等衆多の人を教ふるあゝん然ながら彼らは暫時
二四 の間刃にかゝりや火にやかれ擄はれ掠められ等して仆れん 三四 その仆るゝ時にあたりて彼らは少く扶助を
二五 獲ん又衆多の人詐りて彼らに合せん 三五 また穎悟者等の中にも仆るゝ者あらん斯のごとく彼らの中に試む
二六 ろ事淨むる事潔よくするる事おこなはれて終の時にいたらん即ち定まれる時まで然るべし 三六 此王その意の
二七 まゝに事をおこなひ萬の神に逾て自己を高くし自己を大いにし神々の神たる者にむかひて大言を吐き等して
二八 忿怒の息む時までその志を得ん其はその定まれることこゝろの事成ざるべからざればなり 三七 彼はその先祖
二九 の神々を顧みず婦女の愉快を思はずまた何の神をも顧みざらん其は彼一切に逾て自己を大にすればなり 三八
三〇 彼はこれかはりいくさがみ神を崇めん 三九 彼はこの異邦の神に由り要害の城々にむかひて事を爲ん凡て彼を尊ぶ者には彼加ふるに榮を以しこれをして衆多の人を治
三一 めしめ土地をこれに分ち與へて賞賜させん 四十 終の時にいたりて南の王彼と戰はん北の王は車と馬と衆多
三二 の船をもて大風のごとく之に攻寄せ國に打いりて潮のごとく溢れ渉らん 四一 彼はまた美しき國に進み入ん彼
三三 のために亡ぶる者多かるべし然ごエドム モアブ アンモニ人の中の第一なる者などは彼の手を免かれん 四二
三四 彼國々にその手を伸さんエジプトの地も免かれがたし 四三 彼は遂にエジプトの金銀財寶を手にいれんリ
三五 ブエ人とエテオピヤ人は彼の後に從はん 四四 彼東と北より報知を得て周章ふためき許多の人を滅ぼし絕
三六 んと大に忿りて出ゆかん 四五 彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん然ごその終

第十二章

一 その時汝の民の人々のために立ところの大なる君ミカエル起あがらん是艱難の時なり國あ
二 りてより以來その時にいたるまで斯る艱難ありし事なかるべしその時汝の民は救はれん即ち書にしるされた
三 る者はみな救はれん 二 また地の下に睡りをる者の中衆多の者目を醒さんその中 永 生を得る者あり また
四 星のごとくなりて永遠にいたらん 四 ダニエルよ終末の時まで此 言 を秘し此書を封しおけ衆多の者跋渉ら
五 ん而して知識增べしと 五 茲に我ダニエル觀に別にまた二箇の者ありて一箇は河の此旁の岸にあり一箇は河の
六 彼旁の岸にありけるが 六 その一箇の者かの布の衣を衣て河の水の上に立る人天にむかひて言り此奇跡は何の時
七 にいたりて終るべきやと 七 我聞にかの布の衣を衣て河の水の上に立る人天にむかひてその右の手と左の手を
八 擧げ永久に生る者を指て誓ひて言りその間は一時と二時と半時なり 聖 民の手の碎くること終らん時に是
九 等の事みな終るべしと 八 我聞たれども曉ることを得ざりき我また主よ是等の事の終は何ぞやと 九 彼
十 いひけるはダニエルよ往け此 言 は終極の時まで秘かつ封し置るべし 十 衆多の者淨められ潔よくせられ試
十一 みられん然ご惡き者は惡き事を行なはん惡き者は一人も曉ることを無るべし然ご顯悟者は曉るべし 十一 常供の
十二 物を除き殘暴可惡者を立ん時より三百九十日あらん 十二 待かりて一千二百九十日を享ん
十三 福なり 十三 汝終りに進み行け汝は安息に入り日の終りに至り起て汝の分を享ん

だにえろしよ

但以理書 終

第一章 一これユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの世イスラエルの王ヨアシの子ヤラベアムの世にベエリの子ホセアに臨めるエホバの言なり二エホバはじめホセアによりて語りたまへる時エホバホセアに宣はく汝ゆきて淫行の婦人を娶り淫行の子等を取れこの國エホバに違ざかりてはなはだしき淫行をなせばなり三是において彼ゆきてデブライムの女子ゴメルを妻に娶りけるがその婦はらみて男子を產り四エホバまた彼にいひたまひけるは汝その名をエズレルと名くべし暫時ありて我エズレルの血をエヒウの家に報いイスラエルの家の國をほろぼすべければなり五其日われエズレルの谷にてイスラエルの弓を折べしと六ゴメルまた孕みて女子を產ければエホバホセアに言たまひけるは汝その名をロルハマ（憐まれぬ者）と名くべしそは我もはやイスラエルの家をあはれみて赦すがごときことをせじ七然れどわれユダの家をあはれまんその神エホバによりて之をすくはん我は弓、劍、戰爭、馬、騎兵などによりてすくふことをせじ八ロルハマ乳をやめゴメルまた孕みて男子を產けるに九エホバ言たまひけるはその子の名をロアンミ（吾民に非ざる者）と名くべし其は汝らは吾民にあらず我は汝らの神に非ざればなり十然ごイスラエルの子孫の數は濱の沙石のごとくに成ゆきて量ることも數ふることも爲がたく前になんぢらわが民にあらずと言れしその處にて汝らは活神の子なりと言れんとす十一斯てユダの子孫とイスラエルの子孫は共に集まり一人の首をたてゝその地より上り來らんエズレルの日は大なるべし

第二章 一汝らの兄弟に向ひてはアンミ（わが民）と言ひ汝らの姉妹にむかひてはルハマ（憐まるゝ者）と言へ二なんぢらの母とあげつらへ論辨ふことをせよ彼はわが妻にあらず我はかれの夫にあらざるなりなんぢら斯してかれにその面より淫行を除かせその乳房の間より姦淫をのぞかしめよ三然らざれば我かれを剝て赤體にしその生れいでたる日のごとくにしまた荒野のごとくならしめ潤ひなき地のごとくならしめ渴によりて死しめん四我その子等を憐まじ淫行の子等なればなり五かれらの母は淫行をなせりかれらを生る者は恥

べき事をおこなへり盜かれいへる言あり我はわが戀人等につきしたがはん彼らはわがパン、わが水わが羊
毛、わが麻、わが油、わが飲物などを我に與ふるなりと六この故にわれ荊棘をもてなんぢの路をふさぎ垣を
たて、彼にその徑をえざらしむべし七彼はその戀人たちの後をしたひゆけども追及ことなく之をたづねど
も遇ことなし是において彼いはん我ゆきてわが前の夫にかへるべしかのときのわが狀態は今にまさりて善り
きと八彼が得る穀物と酒と油はわが與ふるところ彼がバアルのために用ゐたる金銀はわが彼に增あたへたる
ことろなるを彼はしらざるなり九これによりて我わが穀物をその時におよびて奪ひわが酒をその季にいたり
てうばひ又かれの裸體をおほふに用ふべきわが羊毛およびわが麻をとらん十今われかれの恥ろことろをそ
の戀人等の目のまへに露はすべし彼をわが手より救ふものあらじ十一我かれがすべての喜樂すなはち祝筵新
月のいはひ安息日およびすべての節會をして息しめん十二また彼の葡萄の樹と無花果樹をそこなはん彼さき
に此等をさしてわが戀人の我にあたへし賞賜なりと言しがわれこれを林となし野の獸をしてくらはしめん
十三われかれが耳環頸玉などを掛てその戀人らをしたひゆき我をわすれ香をたきて事へしもろ〳〵のバアル
の日のゆゑをもてその罪を罰せんエホバかく言たまふ十四斯るがゆゑに我かれを誘ひて荒野にみちびきいり
終にかれの心をなぐさめ十五かしこを出るや直ちにわがぶどう園を與へアコル（患難）の谷を望
の門となしてあたへん彼はわかゝりし時のごとくかしこにて歌うエジプトの國より上りきたりし時のごとく
たはん十六エホバ言たまふその日にはなんぢ我をふたゝびバアリとよばずしてイシ（吾夫）とよばん十七
我もろ〳〵のバアルの名をかれが口よりとりのぞき重てその名を世に記憶せらるることなからしめん十八そ
の日には我かれら（吾民）のために野の獸そらの鳥および地の昆蟲と醫約をむすびまた弓箭戰をり戰爭を全
世界よりのぞき彼らをして安らかに居ふむべし十九われ汝をめとりて永遠にいたらん公義と公平と寵愛と憐
憫とをもてなんぢを娶り二十かはろことなき眞實をもて汝をめとるべし汝エホバを知らん二十一エホバいひ
給ふその日われ應へんわれは天にこたへ天は地にこたへ二二地は穀物と酒と油とに應へまた是等のものはエ
ズレルに應へん二三我わがためにかれを地にまき憐まれざりし者をあはれみわが民ならざりし者にむかひて
汝はわが民なりといはんかれらは我にむかひて汝はわが神なりといはん

第二章

一エホバわれに言給ひけるは汝ふたゝび往てエホバに愛せらるれども姦淫をおこなふ婚人
かひ葡萄の菓子を愛するイスラエルの子孫のごとくそのつれそふものに愛せらるれども姦淫をおこなふ婚人
をあいせよ二われ銀十五枚おほむぎ一ホメル半をもてわが爲にその婚人をえたり三我これにいひけるは汝お
ほくの日わがためにこゝまりて淫行をなすことなかれ我もまた汝にむかひて然せん四
イスラエルの子孃は多くの日王なく君なく犧牲なく他の人にゆくことなかれ我もまた汝にむかひて然せん四
イスラエルの子孃は多くの日王なく君なく犧牲なく他の人にゆくことなかれ我もまた汝にむかひて然せん四
イスラエルの子孃は多くの日王なく君なく犧牲なく他の人にゆくことなく裏柱なくエポデなくテラピムなくして居ん五その後
イスラエルの子孃はかへりてその神エホバとその王ダビデをたづねもとめ末日になのりてエホバとその恩
惠さにむかひてゆかん

第四章

一イスラエルの子孃よエホバの言を聽けエホバこの地に住る者と爭辨たまふ其は此地には誠實なく
愛情なく神を知る事なければなり二たゞ詛ひ僞り殺　盜み姦淫のみにして互に相襲ひ血血につゞき流
る三このゆゑにその地うれひにしづみ之にすむものはみな野のけもの空のとりさゝもにおよろへ海の魚もま
た絕はてん四されど何人もあらそふべからずいましむ可らず汝の民は祭司と爭ふ者の如くなれり五汝は晝つ
まづき汝と偕なる預言者は夜つまづかん我なんぢの母を亡ぼすべし六わが民は知識なきによりて亡ぼさるな
んぢ知識を棄ることによりて我もまた汝を棄てわが祭司たらしめじ汝おのが神の律法を忘るゝによりて我もなん
ぢの子等をわすれん七彼らは大なるにしたがひてますます我に罪を犯せば我かれらの榮を辱に變ん八彼らは
わが民の罪をくらひ心をかたむけてその罪戾をかすを願へり九このゆゑに民の遇ふところは祭司もまた同じ
われその途をかれらにきたらせその行爲をもて之にむくゆべし十かれらは食へども飽ず淫行をなせどもその
敷まさずその心をエホバにとむることを止ればなり十一淫行と酒と新しき酒はその人の心をうばふ十二わが
民木にむかひて事をとふその杖かれらに事をしめす是かれら淫行の靈にまよはされその神の下を離れて淫行

十三 を爲すなり 十三 彼らは山々の嶺にて犧牲を獻げ岡の上にて香を焚き橡樹楊樹栗樹の下にてこの事をおこなふ此はその樹蔭の美しきによりてなりこゝをもてなんぢらの女子は淫行をなしなんぢらの兒婦は姦淫を
十四 なんぢらもみづから離れゆきて妓女さゝもに居り淫婦さゝもに獻物をそなふればなり悟らざる民はほろぶ
十五 べし 十五 イスラエルよ 汝淫行をなすともユダに罪を犯さする勿れギルガルに往なかれベテアベンに上るな
十六 かれエホバは活くと曰て誓ふなかれ 十六 イスラエルは頑強なる牛のごとくに頑強なり今エホバ羔羊をひろき
十七 野にはなてるが如くして之を牧はん 十七 エフライムは偶像にむすびつらなれりその爲にまさせよ 十八 かれら
十九 の酒はくされかれらの淫行はやまずかれらの楯さなる恥を愛しいたく之を愛せり 十九 かれは風の
翼につゝまれかれらはその經物によりて恥辱をかうむらせん

第五章 一 祭司等よこれを聽けイスラエルの家よ耳をかたむけよ王のいへよ之にこゝろを注よさばきは汝等
二 にのぞまんそはなんぢらはミズパに設る羅タボルに張る網のごとくなればなり 二 悖逆者はふかく罪にしづ
三 みたり我かれらをことごとく懲しめん 三 我はエフライムを知るイスラエルはわれに隱るゝところ無しエフラ
四 イムよなんぢ今すでに淫行をなせりイスラエルはすでに汚れたり 四 かれらの行爲かれらをしてその神に歸る
五 ここと能はざらしむそは淫行の靈その裏にありてエホバを知ることなければなり 五 イスラエルの驕傲はその面
六 にむかひて証をなしその罪によりてイスラエルとエフライムは仆れユダもまた之とゝもにたふれん 六 かれら
は羊のむれ牛の群をたづさへ往てエホバを尋求めん然ごあふことあらじエホバ既にかれらより離れ給ひた
七 ればなり 七 かれらエホバにむかひ貞操を守らずして他人の子を産り新月かれらとその產業さをともに滅ぼ
八 さん 八 なんぢらギベアにて角をふきラマにてラッパを吹ならしベテアベンにて呼はりて音へベニヤミンよな
九 んぢの後にありさゐ 九 刺せらるゝの日にエフライムは荒蕪れん我イスラエルの支派の中にかならず有るべきこ
十 さを示せり 十 ユダの牧伯等は境界をうつすものゝごとくなれり我わが震怒を水のごとくに彼らのうへに酙が
十一 ん 十一 エフライムは甘んじて人のさだめたるところに從ひあゆむがゆゑに鞫をうけて虐げられ壓らん 十二
十二 われエフライムには蠹のごとくユダの家には腐朽のごとし 十三 エフライムおのれに病あるを見ユダおのれに
十三 傷あるをみたり斯てエフライムはアッスリヤに往きヤレブ王に人をつかはしたれど彼ばなんぢらを醫すことを
十四 をえず又なんぢらの傷をのぞきさることを得ざるべし 十四 われエフライムには獅子のごとくユダの家にはわ
十五 かき獅子のごとし我しも我は抓裂てさり掠めゆけごも救ふ者なかるべし 十五 我ふたゝびわが處にかへりゆき
彼らがその罪をくいてひたすらわが面をたづれ求むるまで其處にをらん彼らは艱難によりて我をたづれもと
むることをせん

第六章 一 來れわれらエホバにかへるべしエホバわれらを抓裂たまひたれごもまた醫すことをなし我儕を
二 ち給ひたれごもまたその傷をつゝむことを爲したまふ可ればなり 二 エホバは二日のゝちわれらを活かへし三
三 日にわれらを起せたまはん我らその前にて生ん 三 このゆゑに我らエホバを知ることを
求むべしエホバは晨光のごとく必ずあらはれいで雨のごとくわれらにのぞみ後の雨のごとく地をうるほ
四 し給ふ 四 エフライムよ我なんぢに何をなさんやなんぢの愛情はあしたの雲
五 のごとくまたたちにきゆる露のごとし 五 このゆゑにわれ預言者等をもてかれらを殺せりわが審判はあらはれいづる光明のごとし 六 われは愛情をよろこびて犧牲をよろこばず神を
六 れらを悅ぶことを燔祭にまさりし 六 然るにかれらはアダムのごとく誓をやぶりかしこにて不義をわれにおこなへり 十
七 りハ ギレアデは惡をおこなふものゝ邑にして血の足跡そのなかに徧しル 祭司のごともがらは山賊の群のごとく
八 したまちして人をそこなひシケムに往く大路にて人をころす彼等はかくのごとき惡きことをおこなへり 十
九 れイスラエルのいへに憎むべきことあるを見たりかの處にてエフライムは淫をおこなふイスラエルは汚たり
十 十一 ユダよ我わが民の俘囚をかへさんときまた汝のために穫刈をそなへん

第七章 一 われイスラエルを醫さんときエフライムの愆ざサマリヤのあしきわざ露ばるかれらは詐譎をお

二 ごなひ内には偸盗いろあり外には山賊のむれ掠めさろあり
三 こを思はず今その行爲はかれらを圍みふさぎて皆わが目
四 詐譎をもてもろ〳〵の牧伯を悦こばせり四かれらはみな姦
五 のごとし捏粉をこれてその發酵ときまでしばらく火をお
六 もろの牧伯は酒の熱によりて疾し王は嘲けるものさろも
七 して備をなすそのパンを燒くものは終夜れむりにつき
のごとくに熱してその審士をやくそのもろ〳〵の王は
八 エフライムは異邦人にいりまじるエフライムはかへ
九 のまろれごも之をしらず白髪その身に雜り生れごもこれ
十 証をなすかれらは此もろ〳〵の事あれごもその神エホバ
十一 エフライムは智慧なくして愚なる鴿のごとし彼等はエジ
十二 かれらの往ときわが網をその上にはりて天空の鳥のごと
十三 しめん十三禍なるかなかれらは我をはなれて迷ひいで
十四 我をかしたり我かれらを贖はんとおもへごもかれら我に
十五 ふばず唯牀にありて哀號べりかれらは穀物とあたらしき酒の
十六 我かれらを教へその腕をつよくせしかごも彼らはわれに
至高者にへらず彼らはたのみがたき弓のごとし彼ら
たふれん彼らは之がためにエジプトの國にて嘲笑をうくべし

第八章 一ラツパをなんぢの口にあてよ敵は鷲のごとくエホバの家にのぞめりこの民わが契約をやぶりわが
律法を犯しるによるこかれら我にむかひてわが神よわれらイスラエルはなんぢを知れりと叫ばん三イスラ

ルは善をいみきらへり敵これを追ん四かれら王をたてたり然れごも我によりて立しにあらずかれら牧伯をた
てたり然れごも我がしらざるところなり彼らまたその金銀をもて己がために偶像をつくれりその造れるは毀
ちすてられんが爲にせしにこならず五サマリヤよなんぢの犢はイスラエルより出づ匠人のつくれる者にして神にむか
ひて燃ゆかれら何れの時にか罪なきにいたらん六この犢はイスラエルより出づ匠人のつくれる者にして神にむか
あらずサマリヤの犢はくだけて粉さならん七かれらは風をまきて狂風をかりさらん種さころは生長る穀物な
くその穗はみのらざるべしたとひ實るさも他邦人これを呑ん八イスラエルは既に呑れたり彼等いま列國の
中においてに悦こばれざる器のごとくアッスリヤにゆけりエフ
ライムは物を餽りて戀人を得たり十かれら列國の民に物を餽りたりさ雖も今われ彼等をつどへ集む彼らは
諸侯伯の王に貢せらるるに重擔のために衰へ始めん十一エフライムは多くの祭壇を造りて罪を犯すこの祭
壇はかれらが罪に陷る楷さはなれり十二我かれらのために律法をたろして數件の簡條を示したれご彼らは反
て之を異物さおもへり十三かれらは我に献ふべき物を献ふれごも只肉をそなへて己みづから之を食ふエ
ホバは之を納たまはず今かれらの愆を記彼らの罪を罰したまはん彼らはエジプトに歸るべし十四イスラエ
ルは己が造主を忘れてもろ〳〵の社廟を建てユダは堺をさりまはせる邑を多く增し加へたり然ごわれ火を
その邑々におくりて諸の城を燒亡さん

第九章 一イスラエルよ異邦人のごとく喜びすさむ勿れなんぢ淫行をなして汝の神を離る汝すべての麥の
打場にて賄はろ淫行の賞賜を愛せり二打場さ酒醡さは
れらはエホバの地にさどまらずエフライムはエジプトに歸りアッスリヤにて汚穢たる物を食はん四彼等はエ
ホバにむかひて酒を灌ぐべき者にあらずその祭物はエホバの悦びたまふ所にあらずかれらの獵牲は喪に居
ものごパンのごとし凡てこれを食ふものは汚るべし彼等のパンは只おのが食ふためにのみ用ふべくしてエホ
バの家に入るべきにあらず五なんぢら集會の日さエホバの節會の日に何をなさんさするや六視よかれら滅亡

の故によりて去ゆきぬエジプトかれらをあつめメンヒスかれらを葬らん茨棘かれらが銀の貴物を獲いばら
七 彼らの天幕に蔓らんセ刑罰の日きたり應報の日きたれりイスラエルこれを知ん預言者は愚なるもの靈に感
八 じたるものは狂るものなり是なんぢの惡おほいなるに因るハエフライムは我が神にならべて
他の神をも佇望めり預言者の一切の途は鳥を捕ふる者の網のごとく且その神の室の中にて怨恨を懷けりネ
九 れらはギベアの日のごとく甚だしく惡き事を行なへりエホバはその惡をこゝろに記てその罪を罰したまはん
十 在昔われイスラエルを見ること荒野の葡萄のごとく汝らの先祖等を看ること無花果樹の始にむすべる最
先の果のごとくなしゝに彼等はバアルペオルにゆきて身を恥辱にゆだねその愛する物さゝもに憎むべき者さ
十一 はなれり十一エフライムの榮光は鳥のごとく飛さらん即ち產ことも孕むことも妊娠ことさらなるべし十二假
令かれら子等を育るとも我その子を喪ひて遺る人なきにいたらしめん我が離るゝ時かれらの禍大いなる哉
十三 われエフライムを美地に植てツロのごとくなしゝかごもエフライムはその子等を携へいだして人に殺す
者に付さんとす十四エホバよ彼らに與へたまへ爾なにを與へんとしたまふや孕まざる胎と乳なき乳房とを與
十五 へたまへ十五かれらが凡の惡はギルガルにあり此故に我かしこにて之を惡めりその行爲あしければ我が家よ
り逐いだし重て愛することをせじその牧伯等はみな悖れる者なり十六エフライムは擊れその根はかれて果を
結ぶまじ若し產ことあらば我その胎なる愛しむ實を殺さん十七かれら聽從はざるによりて我が神これを棄
たまふべしかれらは列國民のうちに流離人とならん

第十一章 一イスラエルは果をむすびて茂り榮る葡萄の樹その果の多くなるがまゝに祭壇をましその地の饒か
二 なるがまゝに偶像を美しくせりニかれらは二心をいだけり今かれら罪せらるべし神はその祭壇を打毀ちそ
三 の偶像を折棄たまはん三かれら今いふべし我儕神を畏れざりしに因て我らに王なしこの王はわれらのため
四 に何をかなさんと四かれらは虛しき言をいだし僞りの誓をなして約をたつ審判は畑の畝にもえいづる菌蕈の
五 ごとし五サマリヤの居民はベテアベンの犢の故によりて戰慄かんその民とこれを悅ぶ祭司等はその榮のうせ
たるが爲になげかん六犢はアッスリヤに携へられ禮物として ヤレブ王に献げらるべしエフライムは羞をかう
七 むりイスラエルはおのが計謀を恥んセサマリヤはほろびその王は水のうへの木片のごとし八イスラエルの
八 罪なるアベンの崇邱は荒はてゝ荊棘と蒺藜その壇のうへにはえ茂らんその時かれら山にむかひて我等を
おほへ陵にむかひて我儕のうへに倒れよといはんセイスラエルよ汝はギベアの日より罪をなせり彼等はそ
九 こに立り邪惡のひさ〳〵を攻たりし戰爭はギベアにてかれらに及ばざりき十我思ふまゝに彼等をいましめん
十 彼等その二の罪につながれん時もろ〳〵の民あつまりて之をせめん十一エフライムは馴されたる牝牛のごと
十一 くにして穀をふむことを好むされど我その美しき頸に物を負しむべし我エフライムに軛をかけんユダは耕し
ヤコブは土塊をくだかん十二なんぢら義を生ずるために種をまき憐憫にしたがひてかりさり汝新地をひらけ
十二 今はエホバを求むべき時なり終にはエホバきたりて義を雨のごとく汝等のうへに降せたまはん十三なんぢら
十三 は惡をたがへし不義を蒔をさめ虛僞の果をくらへりこは汝おのれの途をたのみ己が勇士の數衆をたのめ
十四 に緣十四この故になんぢらの民のなかに擾亂おこりて汝らの城はことごとく打破られんシャルマンが戰鬥の
十五 日にベテアルベルを打破りしにことならず母その子ともに碎かれたり十五なんぢらの大なる惡のゆゑによ
りてベテル如此なんぢらに行なへろなりイスラエルの王はあしたに滅ん

第十一章 一イスラエルの幼かりしとき我これを愛しぬ我わが子をエジプトより呼いだしたりニかれらは呼
二 ろふに隨ひていよ〳〵その呼者に遠ざかり且もろ〳〵のバアルに犧牲をさゝげ雕たる偶像に香を焚り三われ
三 エフライムに歩むことを我をしへ彼等をわが腕にのせて抱けり然ざかれらは我にいやされたるを知ず四われ人
四 にもちゐる索すなはち愛のつなをもて彼等をひけり我かれらを待ふは軛をその頤より離のくにして彼等に食物をあたへたり五かれらはエジプトの地にかへらじ然ざかれらがエホバに歸らざるによりて
五 アッスリヤ人その王とならん六劍かれらの諸邑にまはりゆきてその關門をこぼち彼らをその計策
六 の故によりて滅ぼさんセわが民はこもすれば我にはなれんとする心あり人これを招きて上に在るものに屬し

八 めんさすれども身をおこすもの一人だになし八エフライムよ我いかで汝をわたさんや我いかで汝をアデマのごとくせんや爭でなんぢをゼボイムのごとく爲んやわが心わが衷にかはりて我の憐憫ことごとく燃おこれり九我わが烈しき震怒をほどこすことをせじ我かさねてエフライムを滅すことをせじ我は人にあらず神なればなり我は汝のうちにいます聖者なり憤怒をもて臨まじ十かれらはしし獅子の吼るごとくに聲を出したまふエホバに隨ひて歩まんエホバ聲を出したまへば子等は西より急ぎ來らん十一かれらエジプトより鳥のごとくアッスリヤより鴿のごとくに急ぎ來らん我かれらをその家々に住はしむべし是エホバの聖言なり十二エフライムは謊言をもてイスラエルの家は詐僞をもて我を圍めりユダは神と信ある聖者とに屬みつかすみ漂蕩をれり

第十二章

一 エフライムは風をくらひ東風をおひ日々に詐僞と暴逆とを增くはへアッスリヤと契約を結び油をエジプトに饋れり二エホバはユダと爭辨をなしたまふヤコブをその途にしたがひて罰しその行爲にしたがひて報いたまふ三ヤコブは胎にゐし時その兄弟の踵をさらへまた己が力をもて神と角力あらそへり四かれは天の使と角力あらそひて勝なきて之に恩をもとめたり彼はベテルにて神にあへり其處にて神われらに語ひたまへり五これは萬軍の神エホバなりエホバは其記念の名なり六然ばなんぢの神にかへり矜恤と公義とをまもり恒になんぢの神を仰ぐべし七彼はカナン人（商賈）なりその手に詭詐の權衡をもち好であざむき取ることをなすハエフライムはいふ誠にわれは富る者となれり我は身に財貨をえたり凡てわが勞したるここの中に罪をうべき不義を見いだす者なかるべし九我エホバはエジプトの國をいでしより以來なんぢらの神なり我いまも尙なんぢを蒂屋にすまはせて節會の日のごとくならしめん十我もろ〳〵の預言者にかたり又これに益々おほく異象を示めしたり我もろ〳〵の預言者に托して譬喩をまうく十一ギレアデは不義なる者ならずや彼らは全く虛しかれらはギルガルにて牛を犧牲に獻ぐかれらの祭壇は圃の畝につみたる石の如し十二ヤコブはアラムの野ににげゆけりイスラエルの妻を得んために人に事へ妻を得んために羊を牧り十三エホバ一人の預言者をもてイスラエルを上にさよめその恥辱をかれに歸らせたまはん

第十三章

一 エフライム言を出せば人なのふけり彼はイスラエルのなかに已をかたうしバアルにより罪を犯して死たりしが二今も尙ます〳〵罪を犯しその銀をもて己のために像を鑄その機巧にしたがひて偶像を作る是みな工人の作なるなり彼らは之につきていふ犧牲を獻ぐる者はこの犢に吻を接べしと三是によりて彼らは朝の雲のごとく速にきえうする露のごとく打場より大風に吹散さるゝ穀殼のごとく烟より出ゆく煙のごとくならん四されど我はエジプトの國をいでゝより以來なんぢの神エホバなり爾われの外に神を知ことなし我のほかに救者なし五我さきに荒野にて水なき地にて爾を顧みたり六かれらは秣場によりて食に飽き飽によりてその心たかぶり是によりて我を忘れたり七斯るがゆゑに我かれらに對ひて獅子のごとくなり途の傍にひそみうかがう豹のごとくならん八われ子なうしなへる熊のごとく彼らに向ひてその心膜を裂き獅子のごとくこれを食はん野の獸これを攫斷るべし九イスラエルよ汝のもろ〳〵の邑に汝を助くべき汝の王は今いづくにかあるなんぢらがその王と牧伯等とを我に與へよと言たりし士師等は今いづくにかあろ十一われ忿怒をもて汝に王を與へ憤恨をもて之をうばひたり十二エフライムの不義は包まれてありその罪はをさめたくはへられたり十三劬勞にかゝれる婦のかなしみ之に臨まん彼は愚なる子なり時に臨みでもなほ產門に入ず十四我かれらを陰府の手より贖はん我かれらを死より贖はん死よなんぢの疫は何處にあるか陰府よなんぢの災は何處にあるか悔改はかくれて我が目にみえず十五彼は兄弟のなかにて果を結ぶこと多けれども東風吹きたりエホバの息荒野より吹おこらん之がためにその泉は乾その源は涸んその積蓄はへたるもろ〳〵の寶貴器皿は掠め奪はるべし十六サマリヤはその神にそむきたれば刑せられ劍に斃れんその嬰兒はなげくだかれその孕たる婦は剖れん

第十四章

一 イスラエルよ汝の神エホバに歸れよ汝は不義のために仆れたり二汝ら言閒をたづさへ來りエホ

パに歸りていへ諸の不義は赦して善きところを受納たまへ斯て我らは唇をもて牛のごとくに汝に獻げん三
アッスリヤはわれらを拯じ我らは馬に騎じまたふたゝび我等みづからの手にて作れる者にむかひわが神なり
と言じ孤兒は即によりて憐憫を得べければなりと四我かれらの反逆を醫し悅びて之を愛せん我が怒はかれを
離れ去たり五我イスラエルに對しては露のごとくならん彼は百合花のごとく花さきレバノンのごとく根をは
らん六その枝は茂りひろがり其美麗は橄欖の樹のごとくその芬芳はレバノンのごとくならん七その陰に
住む者かへり來らんかれらは穀物の如く活かへり葡萄樹のごとく花さきその馨香はレバノンの酒のごとく
なるべし八エフライムはいふ我また偶像と何のあづかる所あらんや我これに應へたり我かれを顧みん我は
替翠の松のごとし汝われより果を得ん九誰か智慧ある者ぞその人はこの事を曉らん誰か顯悟ある者ぞその人
は之を知んエホバの道は凡て直し義者は之を歩む然ど罪人は之に躓かん

何西阿書終

約耳書

第一章

一ペトエルの子ヨエルに臨めるエホバの言二老たる人よ汝ら是を聽けすべて此地に住む者汝ら耳
を傾けよ汝らの世あるは汝らの先祖の世にも是のごとき事ありしや三汝ら之を子に語り子はまた之をその子
に語りその子之を後の代に語りつたへよ四噬くらふ蝗虫の遺せる者はなめつくすおほれむしのくらふ所となりその
遺せる者は蝗虫のくらふ所となれり五醉
る者よ汝ら目を醒して泣けすべて酒をのむ者よ哭きさけべあたらしき酒なんぢらの口に絶えたればなり六そ
はこゝなる民わが國に攻よすればなりその勢ひ強くその齒は獅子の齒のごとくその牙は
牝獅子の牙のごとし七彼等わが葡萄の樹を荒しわが無花果の樹を折りその皮をはぎはだかにして之を棄つそ
の枝白くなれり八汝ら哀哭かなしめ貞女その若かりしときの夫のゆゑに麻布を腰にまとひて哀哭かなしむが
ごとくせよ九素祭灌祭ともにエホバの家に絶えたり祭司等哀傷をなす十田は荒れ地は哀傷む、
是穀物荒はて新しき酒つき油たえんとすればなり十一こむぎ大むぎの故をもて農夫羞よ葡萄つくり哭よ田
の禾稼うせはてたればなり十二葡萄樹は枯れ無花果樹は萎れ石榴椰子林檎および野の諸の樹は凋みたり是を
もて世の人の喜樂かれうせぬ十三祭司よ汝ら麻布を腰にまとひてなきかなしめ祭壇に事ふる者よ汝らなき
さけべ神に事ふる者よなんぢら來り麻布をまとひて夜をすごせ、其は素祭も灌祭も汝らの神の家に入ことを
あらざればなり十四汝ら斷食を定め集會を設け長老等を集めエホバにむかひて號呼れよ十五あゝその日は禍なる
かなエホバの日近く暴風のごとくに全能者より來らん十六我らがまのあたりに食物絶しにあらずや我らの神の家に歡喜と快樂絶しにあらずや十七種は
土の下に朽ち倉は壞れ廩は圮ろそは穀物ほろぼされたればなり十八いかに畜獸は哀み鳴や牛の群は亂れ迷
ふ草なければなり、羊の群もまた死喪ん十九エホバよ我なんぢに向ひて呼はらん荒野の諸の草は火にて燒け
野の諸の樹は火焰にてやけつくればなり二十野の獸もまた汝にむかひて呼はらん、其は水の流涸はてあれ

のふ草火にてやけつくればなり

第二章

一 汝らシオンにて喇叭を吹け我聖山にて音たかくこの地の民みな懍ひわなゝかんそはエホバの日きたらんとすればなりすでに近づけり二 この日は黒くをぐらき日雲むらがるまぐらき日にしてしのゝめの山々にたなびくが如し數おほく勢さかんなる民むれいたらんかゝる者はいにしへよりありしことなくのちの代々の年にもあることなかるべし三 火彼らの前を焚き火焔かれらの後にもゆその過ざる前は地エデンのごとくその過しのちは荒はてたる野の如し此をのがれうるものなしに四 彼らの狀は馬のごとくにして馳ありくことは軍馬のごとし五 その山の嶺にとびをどるその聲がごとしまた火のたちのごとく其馳ありくことは軍馬のごとし五 その山の嶺にとびをどるその聲がごとしまた火の神株をやくおさのごとくにしてその樣強き民の行伍をたてゝ戰陣にのぞむに似たり六 そのむかふところ諸民戰慄その面みな色を失ふ七 彼らは勇士のごとくに趨あるき軍人のごとくに石垣に攀のぼる彼ら各おのが道を進みゆきてその列を亂さず八 彼ら互に推あはず各その道にしたがひて進み行く彼らは刃に觸るゝも身を害はずれ彼らは邑をかけめぐり石垣の上に奔り家に攀登り盜賊のごとくに窓より入る十 そのむかふところ地ゆるぎ天震ひ日も月も暗くなり星その光明を失ふ十一 エホバその軍勢の前にて聲をあげたまふ其軍旅はなはだ大なればなり其言を爲ごぐる者は強しエホバの日は大にして甚だ畏るべし誰かこれに耐ることを得んや十二 然ごエホバ言たまふ今にても汝ら斷食と哭泣と悲哀とをなし心をつくして我に歸れ十三 汝ら衣を裂すして心を裂き汝等の神エホバに歸るべし彼は恩惠あり憐憫あり忍つ怒ること遲く愛憐大にして災害をなすを悔たまふなり十四 誰か彼のあをひは立歸り悔て祝福をその後にとめのこし汝らをして素祭と灌祭とをなんぢらの神エホバにさゝげしめたまはじと知んや十五 汝らシオンにて喇叭を吹きなら し斷食を定め公會をよびつどへ十六 民を集めその會を潔くし老たる人をあつめ孩童と乳哺子を集め新郎をその室より呼いだし新婦をその密室より呼いだせ十七 而して祭司等は廊と祭壇の間にて泣て言へエホバよ汝の民を赦したまへ汝の產業を恥辱しめらるゝに任せ之を異邦人に治めさする勿れ何ぞ異邦人をして彼らの神は何處にあるぞと言しむべけんや十八 然せばエホバ已の地のために嫉妬を起しその民をあはれみたまはん十九 エホバ應へてその民に言たまはん視よ我穀物とあたらしき酒と油を汝におくる汝らこれに飽ん、我なんぢらをして重ねて異邦人の中に恥辱を蒙らしめじ二十 我北よりきたる軍を遠く汝らより離れしめうるほひなき荒地に逐やらん其前軍を東の海にその後軍を西の海に入んその臭味立ちその惡臭ら ん是大なる事を爲たるに因る二一 地よ懼るゝ勿れ喜び樂しめエホバ大なる事を行なひたまふなり二二 野の獸よ懼るゝ勿れあれ野の牧草はもえいで樹は果をむすびいちじくの樹葡萄樹はその力をめざすなり二三 シオンの子等よ汝らの神エホバによりて樂め喜べエホバは秋の雨を適當なんぢらに賜ひまた前のごとく秋の雨と春の雨とを汝らの上に降せたまふ二四 打場には穀物盈ち醡には新酒と油溢れん二五 我が汝らに遣はしゝ大軍すなはち群ゐる蝗なめつくす蝗 嚙はろばす 蝗 嚙くらふ蝗の蝕あらせる年を我汝らにつぐなはん二六 汝らは食ひ、食ひて飽きよのつねならずなんぢらを待ひたまひし汝らの神エホバの名をほめ頌へん我民はさこしへに辱しめらるゝことなかるべし二七 かくて汝らはイスラエルの中に我が居るを知り汝らの神エホバは我のみにて外に無きことを知ん我民は永遠に辱しめらるゝことなかるべし二八 その後われ吾靈をすべて一切の人に注がん汝らの男子女子は預言せん汝らの老たる人は夢を見汝らの少き人は異象を見ん二九 その日我またわが靈を僕 婢に注がん三十 また天と地に徵證を顯はさん即ち血あり火あり煙の柱あるべし三一 エホバの大なる畏るべき日の來らん前に日は暗く月は血に變らん三二 凡てエホバの名を顧ぶ者は救はるべしそはエホバの宣ひし如くシオンの山とエルサレムとに救はれし者あるべければなり其遺れる者の中にエホバの召し給へるものあらん

第三章

一 視よ我ユダとエルサレムの俘囚人を歸さんその日その時二 萬國の民を集めヨシャパテの谷にくだりかしこにて我民我ゆづりの產なるイスラエルのために彼らをさばかん彼らこれを國々に散ちてその地を分ち取りたればなり三 彼らは籤をひきて我民を取り童子を娼妓に換へ童女を賣り酒に換て飲り

四 ツロシドンよ ペリシテのすべての國よ 汝ら我と何のかゝはりあらんや 汝ら我がなしゝことに返をなさんとするや 若し我に返報をなさんとならば 我忽ち迅速に汝らがなしゝことを汝らの首に歸らしめん 五 是は汝らは我の金銀を取り我のしたふべき寶を汝らの宮にたづさへゆきゝまたユダの人とエルサレムの人を ギリシヤ人に賣りてその本國より遠く離らせたればなり 七 視よ我かれらを起して汝らが賣たる處より出し汝らがなしゝことをもてその首にかへらしめん 八 我はなんぢらの男子女子をユダの人の手に賣り彼らは之を遠き民なるシバ人に賣らん エホバこれを言ふ 九 もろ〳〵の國に宣つたへよ 戰爭の准備を爲し勇士をはげまし 軍人をことごとくちかより來らしめよ 十 汝等の鋤を劍に打かへ 汝らの鎌を鎗に打かへよ 弱き者も我は強しと言へ 十一 四周の國々の民よ 汝ら急ぎ上りて集れ エホバよ 汝の勇士をかしこに降したまへ 十二 國々の民よ起て上りヨシヤパテの谷に至れ 彼處に我座をしめて四周の國々の民をことごとく鞫かん 十三 鎌をいれよ 穀物は熟せり來り踏よ 酒搾は溢ち甕は溢る 彼らの惡大なればなりと 十四 かまびすしき無數の民審判の谷にありてかまびすしエホバの日審判の谷に近づくが故なり 十五 日も月も暗くなり星その光明を失ふ 十六 エホバシオンよりよびさふろかしエルサレムより聲をはなち天地を震ひうごかしたまふ 然れどエホバはその民の避所 イスラエルの子孫の城となりたまはん 十七 かくて汝ら我はエホバ 汝等の神にして 我聖山シオンに住むことをしろべしエルサレムは聖き所となり他國の人は重ねてその中をかよふまじ 十八 その日山にあたらしき酒滴り岡に乳流れユダのもろ〳〵の河に水流れエホバの家より泉水流れいでゝシッテムの谷に灌がん 十九 エジプトは荒すたれエドムは荒野とならん 是はかれらユダの子孫を虐げ辜なき者の血をその國に流したればなり 二十 されどユダは永久にすまひエルサレムは世々に保たん 二一 我さきにはかれらが流しゝ血の即を報いざりしが今はこれをむくいんエホバシオンに住みたまはん

約耳書　終

第二章 一 テコアの牧者の中なるアモスの言、是はユダの王ウジヤの世、イスラエルの王ヨアシの子ヤラベアムの世地震の二年前に彼が見されたる者にてイスラエルの事を論るなり 其言に云く 二 エホバシオンより呼號りエルサレムより聲を出したまふ、牧者の牧場は哀き、カルメルの巓は枯る 三 エホバかく言たまふ、ダマスコは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らは鐵の打禾車をもてギレアデを打り 四 我ハザエルの家に火を遣りベ子ハダデの宮殿を焚くべし 五 我ダマスコの關を碎きアベンの谷の中よりその居民を絶のぞきベテエデンの中より王の杖を執る者を絶のぞかんスリアの民は擄へられてキルにゆかん エホバかく言たまふ 六 エホバかく言たまふ、ガザは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らは俘囚をことごとく曳ゆきてこれをエドムに付せり 七 我ガザの石垣の内に火を遣り一切の殿を焚ん 八 我アシドドの中よりその居民を絶のぞきアシケロンの中より王の杖を執る者を絶除かん 我また手を反してエクロンを擊んとせり シラ人の遺れる者亡ぶべし 主エホバこれを言ふ 九 エホバかく言たまふ、ツロは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らは俘囚をことごとくエドムに付しまた兄弟の契約を忘れたり 十 我ツロの石垣の内に火を遣り一切の殿を焚ん 十一 エホバかく言たまふ、エドムは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らはその兄弟を追ひ全く憐憫の情を斷ち恒に怒りて人をとこしへに裂き 其怒を常に保ち其憤を永くその憤恨をたくはへたり 十二 我テマンに火を遣りボヅラの一切の殿を焚ん 十三 エホバかく言たまふ、アンモンの人々は三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らはその國境を擴めんとてギレアデの孕める婦を剖たり 十四 我ラバの石垣に火を放ちその一切の殿を焚ん 是は戰鬥の日に吶喊の聲をもて爲れ暴風の日に旋風をもて爲れん 十五 彼らの王はその牧伯等と諸共に擄へられて往しエホバこれを言ふ、

第三章 一 エホバかく言たまふ、モアブは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼はエ

ドムの王の骨を燒て灰となせり二我モアブに火を遣りケリオテの一切の殿を焚ん、モアブは騒擾と吶喊の聲と喇叭の音の中に死ん三我その中より審判長を絶除きその諸の牧伯を之とともに殺さんエホバこれを言ふ

○四エホバかく言たまふユダは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らはエホバの律法を輕んじその法度を守らずその先祖等が從がひし僞の物に惑はさる五我ユダに火を遣りエルサレムの諸の殿を焚ん○六エホバかく言たまふイスラエルは三の罪あり四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ即ち彼らは義者を金のために賣り貧者を一足のために賣ればなり七彼らは弱き者の頭に地の塵のあらんことを喘ぎて求め柔き者の道を曲げまた父子ともに一人の女子に行て我聖名を汚す八彼らは質に取る衣服をすべて壇の傍に敷てその上に偃し罰金をもて得たる酒をその神の家に飲む九嚮に我はアモリ人をその前に絶たりアモリ人はその高きこと香柏のごとくその強きこと橡の樹のごとくなりしが我その上の果と下の根とをほろぼしたり十我は汝らをエジプトの地より拽さへのぼり四十年のあひだ荒野において汝らを導き終にアモリ人の地を汝らに獲させたり十一我は汝らの子等の中より預言者を興したりイスラエルの子孫よ然ろにあらずやエホバこれを言ふ十二然ろに汝らはナザレ人に酒を飲せ預言者に命じて預言するなかれと言り十三視よ我麥束を積滿せる車の物を壓するがごとく汝らを壓せん十四その時は疾走者も逃るに暇あらず強き者もその力を施こすを得ず勇士も己の生命を救ふこと能はず十五弓を執る者も立ことを得ず足敏の者も自ら救ふあたはず馬に騎る者も己の生命を救ふこと能はず十六勇士の中の心剛き者もその日には裸にて逃んエホバこれを言ふ

第四章

一イスラエルの子孫よエホバが汝らにむかひて言ところの此言を聽けニ地の諸の族の中にて我たゞ汝らを而已を知りこの故に我なんぢらの諸の罪のために汝らを罰せんニ二人もし相會せずば爭で共に歩かんや四獅子もし獲物あらずば豈林の中に吼んや猛獅子もし物を擄まずば豈その穴より聲を出さんや五もし諺の設なくば鳥あに地に張る網にかゝらんや網もし何の得るところも無ば豈地よりあがらんや六邑にて喇叭を吹ば民おどろかざらんや邑に災禍のおころはエホバのこれを降したまふならずや七夫主エホバはその隱たる事をその僕なる預言者に傳へずしては何事をも爲たまはざるなり八獅子吼ゆ、誰か懼れざらんや、主エホバ言語たまふ、誰か預言せざらんやアシドドの一切の殿に傳へエジプトの地の一切の殿に宣て言へ汝等サマリヤの山々に集りその中にある大なる紛亂を觀その中間におこなはるゝ虐過を觀よ十エホバいひたまふ、彼らは正義をおこなふことを知ず虐たげ取し物と奪ひたる物とをその宮殿に積蓄はふ十一是故に主エホバかく言たまふ敵ありて此國を攻かこみ汝の權力を汝より取下さん汝の一切の殿は掠めらるべし十二エホバかく言たまふ牧羊者は獅子の口より羊の兩足あるひは片耳を取かへし得るのみサマリヤに於て床の隅または牀の角に坐するイスラエルの子孫もその救はるゝこと是のごとくならん十三萬軍の神主エホバこれを言ふ聽てヤコブの家に證せよ十四我イスラエルの諸の罪を罰する日にはベテルの壇を罰せん其壇の角は折て地に落べし十五我また冬の家および夏の家をうたん象牙の家ほろび大きなる家失んエホバ

第四章

一バシヤンの牝牛等よ汝ら此言を聽け汝らはサマリヤの山に居り弱者を虐げ貧者を壓し夫その主にむかひて此に持きたりて我らに飲せよと言ふニ主エホバ己の聖を指し誓ひて云ふ視よ日汝らの上に臨む、その日には人汝らを鈎にかけ汝等の遺餘者を釣魚鈎にかけて曳いださん三汝らは各その前なる石垣の破壞たる處より奔出てハルモンに逃往んエホバこれを言ふ四汝らベテルに往て罪を犯せ、ギルガルに往て益ます〳〵罪を犯せ、朝ごとに汝らの犧牲を携へゆけ三日ごとに汝らの什一を携へゆけ五酵いれたる者を感謝祭に獻げ願意よりする禮物を召てこれを告示せイスラエルの子孫よ汝らは斯するを好むなりと主エホバ言たまふ六また我汝らの一切の邑に於て汝らの齒を淸からしめ汝らの一切の處において汝らの食を乏しからしめたり然ろに汝らは我に歸らずとエホバ言たまふ七また我收獲までには尙三月あるに雨をとゞめて汝らに下さずかの邑には雨を降しこの邑には雨をふらさゞりき、此田圃は雨を得彼田圃は雨

を得すして枯れたり八二三の邑、別の一の邑に隠めきゆきて水を飲ごも飽ことあたはず然ろに汝らは我に
九 歸らすとエホバ言たまふ九我枯死殻と朽腐穂とをもて汝等を撃なやませりまた汝らの衆多の園と葡萄園と
十 無花果樹と橄欖樹とは蝗これを食へり然ろに汝らは我に歸らずとエホバいひたまふ十我なんぢらの中にエジ
十一 プトに爲し如く疫病をおこし劍をもて汝らの少き人を殺し又汝らの馬を奪さり汝らの營の臭氣をして鼻
十二 りて汝らの鼻を撲しめたり然ろも汝らは我に歸らずとエホバいひたまふ十一我なんぢらの中の邑を滅ぼすこ
ソドム、ゴモラを神の滅ぼしたまひし如くしたれば汝らは火爐の中より取いだしたる燃柴のごとくなれり
然ろも汝らは我に歸らずとエホバ言たまふ十二イスラエルよ然ば我かく汝に行はん我是を汝に行ふべけ
十三 れればイスラエルよ汝の神に會ふ准備をせよ十三彼は即ち山を作りなし風を作り出し人の思想の如何なるをそ
の人に示しまた晨光をかへて黑暗となし地の高處を踏む者なりその名を萬軍の神エホバといふ
第五章 一イスラエルの家よ我が汝らに對ひて宣る此言を聽け是は哀歎の歌なり二處女イスラエルは仆れ
て復起あがらず、彼は己の地に扑倒さる、之を扶け起す者なし三主エホバかく言たまふイスラエルの家にお
いては前に千人出たる邑は只百人のみのこり前に百人出たる邑は只十人のみのこらん四エホバかくイスラエ
ルの家に言たまふ、汝ら我を求めよさらば生べし五ベテルを求むるなかれ、ギルガルに往なかれベエルシバ
に赴く勿れ、ギルガルは必ず擄へられゆきベテルは無に歸せん六汝らエホバを求めよ然ば生べし恐らくはエ
ホバ火のごとくにヨセフの家に落くだりたまひてその火これを燒ん、ベテルのためにこれを熄す者一人もあ
らじ七汝ら公道を茵蓀に變じ正義を地に擲つる者よ八昴宿および參宿を造り死の陰を變して朝さなし晝
を暗くして夜さなし海の水を呼て地の面に溢れさする者を求めよ其名はエホバといふ九彼は滅亡を忽然強
者に臨ましむ、滅亡つひに城に臨む十彼らは門にありて勘戒る者を惡み正直かに言ふ者を忌嫌ふ十一汝らは貧
き者ん踐つけ麥の贈物を之より取る、是故に汝らは斲石の家を建しも雖もその中に住ことあらじ美しき葡
萄園を作りしも雖ごもその酒を飲ことあらじ十二我知る汝らの愆は多く汝らの罪は大なり汝らは義き者を

虐げ賄賂を取り門において貧き者を推枉ぐ十三是故に今の時は賢き者默す是惡き時なればなり十四汝ら善を
求めよ惡を求めざれ然らば汝ら生べしまた汝らが言ごとく萬軍の神エホバ汝らと偕に在さん十五汝ら惡を
惡み善を愛し門にて公義を立よ萬軍の神エホバあるひはヨセフの遺る者を憐みたまはん十六是故に主たる
萬軍の神エホバかく言たまふ諸の衢にて人哀哉哀哉と呼ん又農夫を呼て哭泣しめ諸の葡萄園にも啼ことあら
ん諸の大路にて人哀哉哀哉と呼ん又農夫を呼きたりて哀哭しめ啼女を招きて啼しめん十七またエホバの日を望む
るべければなりエホバこれを言たまふ十八エホバの日を望むや是昏くして光りなし十九人獅子の前を逃れて熊に遇ひ又家にいりてその手を壁に附て蛇に咬るごとし宛も
似たり二十エホバの日は昏くして光なく暗にして糀なきに非ずや二一我は汝らの節逢を惡みかつ藐視む、
また汝らの集會を悦こばし二二汝ら我に燔祭または素祭を献るとも我これを受納じ汝らの肥たる犧の感謝
祭は我これを顧みじ二三汝らの歌の聲を我前に絶て、汝らの琴の音は我これを聽じ二四公道を水のごとくに
正義をつきざる河のごとくに流れしめよ二五イスラエルの家よ汝らは四十年荒野に居し間犧牲と供物を
我に献げたりしや二六かへつて汝らは汝らの王シクテを負ひ汝らの偶像キウンを負へり是即ち汝らの神さ
する星にして汝らの自ら造り設けし者なり二七然ば我汝らをダマスコの外に移さん萬軍の神さ〳〵なふるエ
ホバこれを言たまふ

第六章 一身を安くしてシオンに居る者思ひわづらはずしてサマリヤの山に居る者、請の國にて勝れたる國
の中なる冠え高くしてイスラエルの家に就きした、がはる〳〵者は禍なるかなニカル子に渉りゆき彼處より大
ハマテに至りまたペリシテ人のガテに下りて視よ其等は此二國に愈るや彼らの土地は汝らの土地よりも大な
るや三汝等は災禍の日をもて尚遠ざ爲し強暴の坐を近づけ四自ら象牙の牀に臥し暇邊の上に身を伸し群
の中より羔羊を取り圈の中より犢牛を取て食ひ五琴の音にあはせて唱ひ嗓ぎダビデのごとくに樂器を製り出
し六大盃をもて酒を飲み最も貴き香を身に抹りヨセフの艱難を憂へざるなり七是故に今彼等は擄はれ

八 て俘囚人の眞先に立て往ん、かの身を伸したる者等の
九 呻の聲止べし八萬軍の神エホバ言たまふ主エホバ
十 己を指て譬へり我ヤコブが誇る所の物を忌嫌ひその宮殿を悪む、我この邑とその中に充る者とを付すべしル
十一 一の家に十人遺りをるとも皆死ん十而してその親戚すなはち之を焚く者その死骸を家より運びいださんとて
十二 之を取あげまたその家の奥に潜み居る者に向ひて他になほ汝とゝもに居る者あるやと言ふとき對へて一人も
十三 無しと言ん此時かの人また言べし默せよエホバの名を口に擧ること有べからずと十一視よエホバ命を下し大
十四 なる家を撃て瓦礫とならしめ小き家を撃て微塵とならしめたまふ十二馬あに能く岩の上を走らんや人あに牛
十五 をもて岩を耕へすことを得んや然るに汝らは公道を毒に變じ正義の果を茵蔯に變じたり十三汝らは無物を喜
十六 こび我等は自分の力をもて角を得しにあらずやと言ふ十四是をもて萬軍の神エホバ言たまふイスラエルの
十七 家よ我一の國を起して汝らに敵せしめん是はハマテの入口よりアラバの川までも汝らをなやまさん

第七章

一 主エホバの我に示したまへるところ是のごとし即ち草の再び生ずる時にあたりて彼蝗を遣りたまふその草は王の刈たる後に生じたるものなりニその蝗地の青物を食盡しゝ後我言り主エホバよ願くは
二 赦したまへ、ヤコブは少し爭か立ことを得んと三エホバその行へる事につきて悔なし我これを爲じと言
三 たまふ四主エホバの我に示したまへる所是のごとし即ち主エホバ火を呼たまひければ
四 火大淵を焚きまた産業の地を焚んとす五時に我言り主エホバよ願くは止たまへヤコブは小し爭か立ことを
五 得んと六エホバその行へる事につきて悔なし我これを爲じと言たまふ七また我に示したまへるところ是のごとし即ち準繩をもて築けろ石垣の上にエホバ立ちその手に準繩を執たまふ八而してエホバ
六 我にむかひアモス汝何を見るやと言たまひければ準繩を見るとき我答へしに主また言たまはく我準繩を
七 我民イスラエルの中に設く、我再び彼らを見過しにせじ九イサクの崇邱は荒されイスラエルの聖所
八 は毀たれん我劍をもちてヤラベアムの家に起むかはんと〇十時にベテルの祭司アマジヤ、イスラエルの王ヤ
九 ラベアムに言遣はしけるはイスラエルの家の眞中にてアモス汝に叛けり彼の諸の言には此地も堪るあた

十 はざるなり十一即ちアモスかく言りヤラベアムは劍によりて死んイスラエルは必ず擄へられてゆきてその國
十一 を離れんと十二而してアマジヤ、アモスに言けるは先見者よ汝往てユダの地に逃れ彼處にて預言して汝
十二 ベテルにては重ねて預言すべからず是は王の聖所王の宮なればなり十四アモス對
十三 へてアマジヤに言けるは我は預言者にあらずまた預言者の子にも非ず我は牧者なり桑の樹を作る者なり
十四 十五然るにエホバ羊に從ふ所より我を取り往て我民イスラエルに預言せよとエホバわれに宣へり十六今
十五 エホバの言を聽け汝は言ふイスラエルにむかひて預言する勿れイサクの家にむかひて言を出すなかれと十七
十六 是故にエホバかく言たまふ、汝の妻は邑の中にて妓婦となり汝の男子女子は劍に斃れ汝の地は繩をもて分た
十七 れん而して汝は穢たる地に死イスラエルは擄られゆきてその國を離れん

第八章

一 主エホバの我に示したまへるところ是のごとし即ち熟したる果物一筐ありニエホバわれにむ
二 かひてアモス汝何を見るやと言たまひければ熟したる果物一筐を見るとこたへしにエホバ我に言たまは
三 く我民イスラエルの終いたれり我ふたゝび彼らを見過しにせじ三主エホバ言たまふ其日には宮殿の歌は哀哭
四 に變らん死屍おびたゞしくあり人これを遍き處に投棄んと默せよ四汝ら喘ぎて貧き者に迫り且地の困難者を
五 滅ぼす者よ之を聽け五汝らは言ふ月朔は何時過去んか我ら麥
六 倉を開かんとす我らエパを小くしシケルを大くし偽の權衡をもて欺む事をなし六銀をもて賤しき者を買ひ
七 鞋一足をもて貧き者を買ひかつ屑麥を賣いださんと七エホバヤコブの榮光を指て誓ひて言たまふ我かならず彼等の一切の行爲を何時までも忘れじ八之がために地
八 のごとく噴あがらんエジプトの河のごとく湧あがり又沈まん九主エホバ言たまふ其日には我日をして眞晝に
九 沒せしめ地なして白晝に暗くならしめ十汝らの節筵を悲傷に變らせ汝らの歌を盡く哀哭に變らせ一切の人
十 に麻布を腰に纏はしめ一切の人に頂を剃しめ其日を志て獨子を喪へる哀傷のごとくならしめ其終を苦き日のごとくならしめん十一主エホバ言たまふ視よ日至らんとすその時我饑饉を此國におくらん是はパ

十二 ンに乏しきに非す水に渇くに非すエホバの言を聽こと
十三 の饑饉なり十二彼らは海より海にさまよひ歩き北より
東と奔まはりてエホバの言を求めん然ど之を得ざるべし
十四 めに絶いらん十四かのサマリヤの罪を指て誓ひダンよ汝の神は活くと言ひまたベエルシバの路は活くと言ろ
者等は必ず仆れ人復興ることあらじ

第九章

一 我覩るに主壇の上に立て言たまはく柱の頭を擊て閾を震はせ之を打砕きて一切の人の首に落かからしめよ其遺れる者をば我劍をもて殺さん彼らの逃る者も逃おほすることを得ず彼らの遁るゝ者もたすからじ二假令かれら陰府に掘くだるとも我手をもて之を其處より曳おろさん三假令かれらカルメルの嶺に匿るゝとも我これを捜して其處より曳いださん、これを其處より海の底に匿れて我目を逃るゝとも我蛇に命じて其處にて之を咬まめん四假令かれらその敵に擄はれゆくとも我劍に命じて其處にて之を殺さまめん我かれらの上に我目を注ぎて災禍を降さん福祉を降さじ
五 主たる萬軍のエホバ地に捫れば地鎔けその中に住む者みな哀む即ち全地は河のごとくに湧あがりエジプトの河のごとくにまた洗むなり六彼は樓閣を天に作り穹蒼の基を地の上に置ふまた海の水を呼て地の面にこれを瀉ぐなり其名をエホバといふ七エホバ言たまふイスラエルの子孫よ我は汝らを視ることエテオピア人を視るがごとくするにあらずや我はイスラエルをエジプトの國よりペリシテ人をカフトルよりスリア人をキルより導き來りしにあらずや八視よ我主エホバその目を此罪を犯すところの國に注ぎ之を地の面より滅ぼし絶ん但し我はヤコブの家を盡くは滅ぼさじエホバこれを言ふ九我すなはち命を下し篩にて物を篩ふがごとくイスラエルの家を萬國の中にて篩はん一粒も地に落ざるべしと言をろ者等は皆劍によりて死ん十一其日には我ダビデの倒れたる幕屋を興しその破壊を修繕ひその傾圮たるを興し古代の日のごとくに之を建なほすべしと十二而して彼らはエドムの遺餘者および我名をもて稱べらるゝ一切の民を獲ん此事を行なふエホバかく言なり十三エホバ言ふ視よ日いたらんとす、その時には耕者は刈者に相繼ぎ葡萄を踐む者は播種者に相繼んまた山々には酒滴り岡は皆鎔て流れん十四我わが民イスラエルの俘囚を返さん彼らは荒たる邑々を建なほして其處に住み葡萄園を作りてその酒を飲み園圃を作りてその果を食はん十五我かれらをその地に植つけん彼らは我がこれに與ふる地より重れて抜さらるゝことあらじ汝の神エホバこれを言ふ

亞歷士書 終

阿巴底亞書

一 オバデヤの預言、主エホバエドムについて斯いひたまふ、我らエホバより出たる音信を聞り一人の使者國
二 國の民の中に遣はされて云ふ起よ我等起てエドムを攻撃んと 二 我汝をして國々の中において小き者たらし
三 む、汝は大に貌視らるゝなり 三 山崖の巖屋に居り高き處に住む者よ汝が心の傲慢なんぢを欺むけり汝
四 心の中に謂ふ誰か我を地に曳くだすことを得んと 四 汝たとひ鷲のごとくに高く翔り星の間に巢を造るとも我
五 そこより汝を曳くださんエホバこれを言たまふ 五 盜賊汝に來り强盜夜なんぢに來り縮むとき、いかの心に滿
六 るときは止ざらんや、嗚呼なんぢは滅ぼされて絶ゆ、葡萄を摘む者汝にいたるも倘幾何を遺さよらんや
七 六 嗚呼エサウは搜されその隱しおける物は探りいだされ 七 汝と盟約を結べる人々はみな汝を國境に遂やり、
八 汝と和好をなせる人々はみな汝を欺きて汝に勝ち、汝の食物を食ふ者等は汝の下に網を設く、彼の中には
九 顯悟あらず 八 エホバ言たまふ當日には我智慧ある者をエドムより絶除き顯悟をエサウの山より絶除かざらん
十 やヲテマンよ汝の勇士は驚き懼れん而して人みな終に殺されてエサウの山より絶除かるべし 十 汝はその兄弟
十一 ヤコブに暴虐を加へたるに因て恥辱なんぢを蒙はん汝は永遠に至るまで絶るべし 十一 汝が遠く離れて立を
十二 りし日即ち異邦人これが財寶を奪ひ他國人これが門に進み入りエルサレムのために鬮を掣たる日には汝
十三 も彼らの一人のごとくなりき 十二 汝は汝の兄弟の日すなはちその災禍の日を覩るべからず又ユダの子孫
十四 の滅亡の日を喜こぶべからずその苦難の日には汝口を大きく開べからざるなり 十三 我民の滅ぶる日には汝
十五 その門に入べからず其滅ぶる日には汝その患難を見べからず又その滅ぶる日には汝その財寶に手をかく可ら
十六 ず 十四 汝路の辻々に立てその逃亡者を斬べからず其患難の日にこれが遺る者を付すべからず 十五 エホバの
十七 日萬國に臨むこと遠し汝の爲せるごとく汝も爲られ汝の應報なんぢの首に歸すべし 十六 汝等のわが聖山に
十八 て飲ごとく萬國の民も恒に飲み飲かつ嚥りて從前より有ざりし者のごとく成ん 十七 シオン山には
十九 救はるゝ者等ありてその山聖所とならんまたヤコブの家はその產業を獲ん 十八 ヤコブの家は火となりヨセ

フの家は火談となりエサウの家は藁とならん卽ち彼等これが上に燃てこれを焚んエサウの家には遺る者一人も無にいたるべしエホバこれを言なり十九南の人はエサウの山を獲、平地の人はペリシテを獲ん、又彼らはエフライムの地およびサマリヤの地を獲べニヤミンはギレアデを獲ん二十かの擄はれゆきしイスラエルの軍旅はカナン人に屬する地をザレパテまで取ん、セパラデにあるエルサレムの俘擄人は南の邑々を獲ん二十一然ろ時に救者シオンの山に上りてエサウの山を鞫かん而して國はエホバに歸すべし

阿巴底亞書　緒

約拿書

第一章

一エホバの言アミタイの子ヨナに臨り、いはく二起てかの大なる邑ニネベに往きこれを呼はり覺よ、そは其惡わが前に上り來ればなりさニしかるにヨナはエホバの面をさけてタルシシへ逃んと起てヨツパに下り行けるが擬しもタルシシへ往く舟に遇ければその價を給へエホバの面をさけてタルシシへ行んとてその舟に乘り四時にエホバ大風を海の上に起したまひて烈しき颶風海にありければ舟は幾ど破んさせり五かゝりしかば舵夫恐れて各おのれの神を呼び又舟を輕くせんとてその中なる載荷を海に投すてたり、然ろにヨナは舟の奥に下りぬて臥て酣睡せり六船長來りて彼に云けるは汝なんぞかく酣睡するや、起て汝の神を呼べ、あるひは彼われらを眷顧て淪亡ざらしめんさせ七衆互に云けるは此災の我儕にのぞめるは誰の故なるかを知んがため去來鬮を掣んさやがて鬮をひきしに鬮ヨナに當りければ八みな彼に云けるはこの災禍なにゆゑに我らにのぞめるか請ふ告よ、汝の業は何なるや何處より來れるや、汝の國は何處ぞや、何處の民なるやヱヨナ彼等にいひけるは我はヘブル人にして海と陸とを造りたまひし天の神エホバを畏るゝ者なり十是に於て船夫甚しく懼れて彼に云けるは汝なんぞその事をなせしやと、その人々はかれがエホバの面をさけて逃れしなるを知り、其はさきにヨナ彼等に告たればなり十一遂に船夫彼にいひけるは我儕のために海を靜かにせんには汝に如何がなすべきや、其は海いよ〳〵甚だしく狂瀾たればなり十二ヨナ彼等に曰けるはわれを取りて海に投いれよ、さらば海は汝等の爲に靜にならん、そはこの大なる颶風の汝等にのぞめるはわが故なるを知ばなり十三されご船夫は陸に漕もどさんとつとめたりしが終にあたはざりき、其は海かれらにむかひていよ〳〵烈しく蕩たればなり十四こゝにおいて彼等エホバに呼はりて曰けるはエホバよこひねがはくは此人の命の爲に我儕を滅亡したまふ勿れ、又罪なきの血をわれらに歸したまふなかれそはエホバよ汝聖意にかなふところを爲したまへるなればなりと十五すなはちヨナを取りて海に投入たり、然かして海のあるゝことやみぬ十六かくりしかばその人々おほいにエホバを畏れエホバに犧牲を獻げ誓願

な立たり十七さてエホバすでに大なる魚を備へおきてヨナを呑しめたまへり、ヨナは三日三夜魚の腹の中に
ありき

第二章　一ヨナ魚の腹の中よりその神エホバに祈禱てニ曰けるはわれ患難の中よりエホバを呼びしに彼われ
にこたへたまへり、われ陰府の腹の中より呼はりしに汝わが聲を聽たまへり三汝われを淵のうち海の中心に
投いれたまひて海の水我を環り、汝の波濤と巨浪すべて我上にながる四われ曰けるは我なんぢの目の前より
逐れたれども復汝の聖殿を望まん五水われを環りて魂にも及ばんとし、淵我をさりかこみ、海草わが
頭に纏へり六われ山の根基にまで下れり、地の閂木いつもわれうしろにありき、されども我神エホバよ汝は
わが命を深き穴より救ひあげたまへりセわが靈魂衰に弱し時我エホバをおもへり、ふかしてわが祈なんぢ
に至り、なんぢの聖殿におよべりハいつはりなる虚き者につかふるものは自己の恩たる者を棄つるされど
我は感謝の聲をもて汝に献祭をなし、又わが誓願をなんぢに償さん、救はエホバより出るなりとナエホ
バ其魚に命じたまひければヨナを陸に吐出せり

第三章　一エホバの言ふたゝびヨナに臨めり曰くニ起てかの大なる府ニ往きわが汝に命ずるところ
を宣よ三ヨナすなはちエホバの言に循ひて起てニ往り、ニ子べは滅だ大なる邑にしてこれをめぐ
るに三日を歷る程なり四ヨナその邑に入はじめ一日路を行つゝ呼はり曰けるは四十日を歷ばニ子べは滅亡さ
るべし五かゝりしかばニ子べの人々神を信じ斷食を宣れ、大なる者より小き者に至るまでみな麻布を衣たり
たゝこの言ニ子べの王に聞えければ彼位より起ち朝服を脫ぎ麻布を身に纏ふて灰の中に坐せりセまた王大
臣さゝふもに命をくだして、ニ子べ中に宣しめて曰く人も畜も牛も羊もさもに何をも味ふべからず、又物を
くらひ水を飲べからず八人も畜も麻布をまとひ、只嘗神に呼はり且おの〳〵其惡き途および其手に作す邪
惡を離るべしセ或は神その聖旨をかへて悔い其烈しき怒を息てわれらを滅亡さゝらん、誰かその然らざるを
知んやセ神かれらの爲すところをかんがみ其あしき途を離るゝを見そなはし、彼等になさんと言し所の災禍
を悔てこれをなしたまはざりき

第四章　一ヨナこの事を甚だ惡しとさして烈く怒りニエホバに祈て曰けるはエホバよ我なほ本國にありし時斯
あらんと曰しに非ずや、さればこそ前にタルシへ逃たるなれ、其は我汝は矜恤ある神憐憫あり、怒るこ
こと遲く慈愛深くまて災禍を悔たまふものなりと知ばなり三エホバよ願くは今わが命を取たまへ、其は生るよ
ことよりも死るかた我に善ればなり四エホバ曰たまひけるは汝の怒る事いかで宜しからんや五ヨナは邑より
出てその東の方に居り己が爲に其處に一の小屋をつくりひその陰の下に坐して府の如何に成行くかを見る六
エホバ神瓢を備へこれをまて發生てヨナの上を覆はしめたりこはヨナの首の爲に庇陰をまうけてその憂を
慰めんが爲なりき、ヨナはこの瓢の木によりて甚だ喜べり七されど神あくる日の夜明に虫をそなへて其ひ
さごを嚙せたまひければ瓢は枯たり八かくて日の出し時神暑き東風を備へたまひ又日ヨナの首を照しけ
れば彼よわりて心の中に死ることを願ひて言ふ生ることよりも死るかた我に善しと九神またヨナに曰ひたまひ
けるは瓢の爲に汝のいかる事いかで宜しからんや、彼曰けるはわれ怒りて死るさもよろしと十エホバ曰たまひ
けるは汝は勞ずまくはへず生育ざる此の一夜に生じて一夜に亡びし瓢を惜めりと十一まして十二萬餘の右左
を辨へざる者と許多の家畜さあるこの大なる府ニ子べをわれ惜まざらんや

よなしよをほ
約拿書終

米迦書

第一章

一 ユダの王ヨタム、アハズおよびヒゼキヤの代にモレシテ人ミカに臨めるエホバの言、是すなはちサマリアとエルサレムの事につきて彼が示されたる者なり 二 萬民よ聽け地とその中の者よ耳を傾けよ主エホバ汝らに對ひて證を立たまはん即ち主その聖殿より之を立たまふべし 三 視よエホバその處より出てくだり地の高處を踏たまはん 四 山は彼の下に融け谷は裂けたり火の前なる蠟のごとく、坂に流るゝ水のごとし 五 是みなヤコブの愆の故イスラエルの家の罪のゆゑなり、ヤコブの愆とは何か、サマリヤにあらずや、ユダの崇邱とは何か、エルサレムにあらずや 六 是故に我サマリヤを野の石堆となし葡萄を植る處となし又その石を谷に投おとしその基を露さんセ その石像はみな碎かれ、その獲たる偶金はみな火にて焚れん、我そ の偶像をことごく毀たん彼妓女の偶金よりこれを積たれば是はまた歸りて妓女の偶金となるべし、八 我これがために哭き咷ばん衣を脫き裸體にて歩行ん山犬のごとくに哭き駝鳥のごとくに啼んカ サマリヤの傷は癒すべからざる者にてすでにユダに至り我民の門エルサレムにまでおよべり十 ガテに傳ふるなかれ泣さけぶ勿れ、ベテレアフラにて我塵の中に輾びたり十一 サピルに住る者よ汝ら裸になり辱を蒙りて進みゆけ、ザアナンに住る者は敢て出ず、ベテエゼルの哀哭によりて汝らは立處を得ず十二 マロテに住る者は己の幸福につきて思ひなやむ、其は災禍エホバより出てエルサレムの門に臨めばなり十三 ラキシに住る者よ馬に車をつなげ、ラキシはシオンの天の罪の根本なりイスラエルの愆はなんぢの中に見ゆ十四 この故に汝モレセテガテに離別の贈物を與へよ、アクジブの家々はイスラエルの王等におけるごとく人を欺く溪川のごとくなるべし十五 マレシヤにすめる者よ我また汝の地を獲べき者を汝に携へ往べしイスラエルの榮光アドラムに往ん十六 汝その悅ぶところの子等の故によりて汝の髮を剃おろせ、汝の首の剃し處を大くして鷲のごとくにせよ其は彼等擄へられて汝を離るればなり

第二章

一 その牀にありて不義を圖り惡事を工夫る者等には禍あるべし彼らはその手に力あるが故に天亮

二 におよべはこれを行ふニ彼らは田圃を貪りてこれを奪ひ家を貪りて是を取りまた人を虐げてその家を掠め人
三 を虐げてその産業をかすむ三是故にエホバかく言たまふ視よ我此族にむかひて災禍を降さんと謀る、汝ら
四 はその頸を是より脱することを能はにしまた首をあげ歩くこと能はざるべし其時は災禍の時なればなり四その
五 日には人汝らにつきて詩を作り悲哀の歌をもて悲哀て言ん事既にいたれり我等は盡く滅ぼさる、彼わが
六 民の産業を人に與ふ、如何なれば我よりこれを離すや我等の田圃を遊逆者に分ち與ふ五然ば汝らエホバの會
七 衆の中には籤によりて繩をうつ者一人も有じ六預言する勿れ、彼らは預言す、彼らは是等の者等にむかひて
八 預言せじ、恥辱彼らを離れざるべし七汝ヤコブの家と稱へらるゝ者よエホバの氣短からんやエホバの
九 行爲是のごとくならんや我言は品行正直者の益とならざらんや八然るに我民は近頃起りて敵となれり
十 汝らは夫の戰爭を避て心配なく過るところの者等に就てその衣服の外衣を奪ひ九我民の婦女をその悦ぶ
十一 ところの家より逐いだしその子等より我の敎飾を永く奪ふ十起て去是は汝らの安息の地にあらず是は已に汚
十二 れたれば必ず汝らを滅ぼさん其滅亡は劇かるべし十一人もし風に歩み謊言を宣べ我葡萄酒と濃酒の事につ
十三 きて汝に預言せんと言ここおちばその人はこの民の預言者とならん十二ヤコブよ我かならず汝をことごとく
集へ必ずイスラエルの遺餘者を聚めん而して我之を同一に置てボツラの羊のごとく成しめん彼らは人數衆
十四 きによりて牧場の中なる群のごとくにその聲をたてん十三打破者かれらに先だちて登り彼ら遂に門を打敗
十五 り之を通りて出ゆかん彼らの王その前にたちて進みエホバその首に立たまふべし

第三章 一我言ふヤコブの首領よイスラエルの家の侯伯よ汝ら聽け公義は汝らの知べきことに非ずや二汝ら
二 は善を惡み惡を好み民の身より皮を剝ぎ骨より肉を剔り三我民の肉を食ひその皮を剝ぎその骨を碎きこれを
三 切きざみて鍋に入る物のごとくし鼎の中にいるゝ肉のごとくす四然ば彼時に彼らエホバに呼はるともエホバ
四 かれらに應へたまはじ却てその時には面を彼らに隱したまはん彼らの行惡ければなり五我民を惑はす預
五 言者は齒にて噬べき物を受る時は平安あらんと呼はれども何をもその口に與へざる者にむかひては戰門の準
六 備をなす、エホバ彼らにつきて斯いひたまふ六然ば汝らは夜に遭べし復異象を得ず黑暗に遭べし復卜兆
七 を得ず日はその預言者の上をはなれて沒りその上は晝も暗かるべし七見者は愧を抱き卜者は面を赧らめ皆共
八 にその口唇を掩はん神の垂應あらざればなり八然れども我はエホバの御靈によりて能力身に滿ち公義および
九 勇氣裏に滿ればヤコブにその愆を示しイスラエルにその罪を示すことを得九ヤコブの家の首領等およびイス
十 ラエルの家の牧伯等公義を惡み一切の正直事を曲る者よ汝ら之を聽け十彼らは血をもてシオンを建て不義
十一 をもてエルサレムを建つ十一その首領等は賄賂をとりて審判をなしその祭司等は値錢を取て敎誨をなす又そ
十二 の預言者等は銀子を取て占卜を爲しエホバに倚賴みて云ふエホバわれらと偕に在すにあらずや然ば災禍わ
れらに降らじと十二是によりてシオンは汝のゆゑに田圃となりて耕へされエルサレムは石堆となり宮の山は
樹の生しげる高處とならん

第四章 一末の日にいたりてエホバの家の山、諸の山の巓に立ち諸の嶺にこえて高く聳へ萬民河のごとく之に流れ歸せん二即ち衆多の民來りて言ん去來我等エホバの山に登りヤコブの神の家にゆかんエホバ
その道を我らに敎へて我らにその路を歩しめたまはん律法はシオンより出でエホバの言はエルサレムより
出べければなり三彼衆多の民の間を鞫き強き國を規戒め遠き處にまでも然したまふべし彼らはその劍を鋤に
打かへその鎗を鎌に打かへん國と國とは劍を舉ず又その無花果樹の下に居ん之を懼れしむる者なかるべし萬軍のエホバの口これを言ふ五一切の民はみな各その神の名によりて歩む然ども我らはわれらの神エホバの名によりて永遠に歩まん六エホバ言たまふ其日には我が苦しめし者を聚めその散されし者および我が惡なへたる者を集へかの散されし者をもて遺餘民となし遠く逐やられたりし者をもて強き民となさん而してエホバシオンの山においてこれより永遠にこれが王となら
ん七羊樓シオンの女の山よ最初の權汝に歸らん即ちエルサレムの女の國辭なんぢに歸るべし汝なにこて喚叫ぶや汝の中に王なきや汝の議者絶果しや汝は產婦のごとくに痛苦を懼くなり十シオンの女よ產婦

のごとく劬労て虐め汝は今邑を出て野に宿りバビロンに往ざるを得ず彼處にて汝救はれんエホバ汝をかしこにて汝の敵の手より贖ひ取りたまふべし十一今許多の國民あつまりて汝におしよせて言ふ願くはシオンの汚されんことを、我ら目にシオンを覩てなぐさまんと十二然ながら彼らはエホバの思念を知すまたその御謀議を曉らず　エホバ麥束を打場にあつむるごとくに彼らを聚めたまへり十三シオンの女よ起てこなせ我なんぢの角を鐵にし汝の蹄を銅にせん汝許多の國民を打砕くべし汝かれらの掠取物をエホバに獻げ彼らの財產を全地の主に奉納べし

第五章

一軍隊の女よ今なんぢ集りて隊をつくれ、敵われらを攻圍み杖をもてイスラエルの士師の頬を擊つ○二ベテレヘム、エフラタ汝はユダの那中にて小き者なり然れども汝の中より我ために出べしその出る事は古昔より永遠の日よりなり三是故に產婦の產おさすまで彼等を付しおきたまはん然る後その遺れる兄弟イスラエルの子孫とふもに歸るべし四彼はエホバの力に由りその神エホバの名の威光によりて立てその群を牧ひ之をして安然に居しめん今彼は大なる者となりて地の極にまでおよばん五彼は平和なりアッスリヤ人われらの國に入りわれらの宮殿を踏あらさんとする時は我等七人の牧者八人の人君を立てこれに當らん六彼ら劍をもてアッスリヤの地をほろぼしニムロデの地の邑々をほろぼさんアッスリヤの人我らの地に攻いり我らの境を踏あらす時には彼その手より我らを救はん七ヤコブの遺餘者は衆多の民の中に在ること人に賴ず世の人を俟ずしてエホバより降る露の如く青草の上にふりしく雨の如くならん八ヤコブの遺餘者の國々になり衆多の民の中になる樣は林の獸の中に獅子の居るごとく羊の群の中に猛き獅子の居るごとくならんその過るさきは踏みかつ裂ことをなす、救ふ者なし九望らくは汝の手汝が讐の敵の上にあげられ汝がもろ〳〵の仇ことごとく絶れんことを十エホバ言たまふ其日には我なんぢの馬を汝の中より絶ら汝の車を毀ち十一汝の國の邑々を絶し汝の一切の城をこと〴〵く圮さん十二我また汝の手より寃術を絶ん汝の中に卜筮師無にいたるべし十三我なんぢの影像および柱像を汝の中より絶ん汝の手にて作れる者を汝重て拜むこと無るべし十四我また汝のアシラ像を汝の中より拔たふし汝の邑々を滅ぼさん十五而して我怒恕と憤恨をもてその聽從はざる國民に仇を報いん

第六章

一請ふ汝らエホバの宣まふところを聽け汝起あがりて山の前に辨爭へ、岡に汝の聲を聽しめよ二山々よ地の易ることなき基よ汝らエホバの辨爭を聽けエホバその民と辨爭を爲しイスラエルと論ぜん三我民よ我何を汝になしゝや何において汝を疲勞たるや我にむかひて證せよ四我はエブトの國より汝を導きのぼり奴隷の家より汝を贖ひいだしモーセ、アロンおよびミリアムを遣はして汝に先だゝしめたり五我民よ請ふモアブの王バラクが謀りし事およびベオルの子バラムがこれに應へし事を念ひシッテムよりギルガルにいたるまでの事等を念へ然らば汝エホバの正義を知んか六我エホバの前に何をもちゆきて高き神を拜せん、燔祭の物および當歲の犢をもてその御前にいたるべきか七エホバ數千の牡羊、萬流の油を悅びたまはんか我愆尤のために我身の產を獻げんか、入人よ彼さきに善事の何なるを汝に告たりエホバの汝に要めたまふ事は唯正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神さふもに歩む事ならずやエホバの聲邑にむかひて呼ばる、智慧ある者はなんぢの名を仰がん汝ら笞杖および之をおくらんと定めし者に聽け九惡人の家に猶惡財ありや凹ばき縮小たる升ありや十一我もし正からざる權衡を用ひ袋に偶の碼子をいれおかば爭で潔からんや十二その富る人は強暴にて充ち北居民は謊言を言ひその舌は口の中にて欺むくことを爲す十三是をもて我も汝を擊て重傷を負せ汝の罪のために汝を滅ぼす十四汝は食ふべきも飽ず腹はつねに空ならん、汝は移すともつひに拯ふことを得じ汝が拯ひし者は我これを劍に付すべし十五汝は播ども刈ることあらず橄欖を踐ともその油を身に抹ることあらず葡萄を踐ともその酒を飲ことあらじ十六さしめ且その居民を胡盧となさしめんが爲なり汝らはオムリの法度を守りアハブの家の一切の行爲を行ひて彼等の謀計に遵ふ、是は我をして汝を荒

第七章

一我は禍なるかな我の景況は夏の菓物を採る時のごとく遺れる葡萄を啖むる時に似たり食ふべき

二 補猶おろこと無く我が心に嗜む初結の無花菓おろこと無し二善人地に絶ゆ、人の中に直き者なし、皆血を流
さんと伏て伺ひ、各網をもてその兄弟を獵る三兩手は惡を善なすに急がし牧伯は要求め裁判人は賄賂を
四 取りて、ある人はその心の悪き望を言あらはし斯共にその悪
く最も直き者も刺ある樹の垣より悪し汝の覩望人の日すなはち汝の刑罰の日いたる、彼らの中に今混亂あ
五 らん汝ら伴侶を信ずる勿れ朋友を恃むなかれ、汝の懐に寝る者にむかひても汝の口の戸を守れ六 父を親視め女子は母に背き媳は姑に背かん、人の敵はその家の者なるべしも我はエホバを仰ぎ望み我を救
七 ふ神を望み俟つ、我神われに聽たまふべし八わが敵人よ我につきて喜ぶなかれ、我仆るれば興おがろ、幽暗
九 に居ばエホバ我の光となりたまふ、エホバわが訴訟を理し我ために審判をおこなひたまふまで我は忍びてそ
の怒をかうむらん其は我これに即を得たればなりエホバ
十 ホバの正義を見ん十わが敵これを見ん、汝の神エホバは何處にあるやと我に言る者恥辱をかうむらん我かれ
十一 を目に見るべし彼は街衢の泥のごとくに踏つけらるべし十一汝の垣を築く日いたらん其日には法度遠く徙る
十二 べし十二その日にはアツスリヤよりエジプトの邑々より人人
十三 より山までの人々汝に來り就ん十三その日地はその居民の故によりて荒はつべし是その行爲の果報なり
十四 汝の杖をもて汝の民即ち獨離れてカルメルの中の林にをる汝の産業の羊を牧養ひ之をして古昔の
十五 日のごとくバシヤンおよびギレアデにおいて草を食はしめたまへ十五汝がエジプトの國より出來し日のごと
十六 く我ふしぎなる事等を彼にしめさん十六國々の民見てその一切の能力を恥ちその手を口におてんその耳は聾
十七 さなるべし十七彼らは蛇のごとくにその城より振て出で戰慄て我らの神エホ
十八 バに詣り汝のために懼れん十八何の神か汝に如ん汝は即を赦しその産業の遺餘者の愆を見過したまふなり、
十九 神は憐憫を悦ぶが故にその震怒を永く保ちたまはず十九ふたゝび願みて我らを憐れみ我らの愆を踏つけ我ら
二十 の諸の即を海の底に投じづめたまはん二十汝古昔の日われらの先祖に誓ひたりしその眞實をヤコブに賜
ひ憐憫をアブラハムに賜はん

米迦書 終

第一章

一 二子べに關る重き預言、エルコシ人ナホムの異象の書 二 エホバは妬みかつ仇を報ゆる神エホバは
仇を報ゆる者また忿怒の主、エホバは己に逆ふ者に仇を報い己に敵する者にむかひて憤恨を含む者なり
三 エホバは怒ること遲く能力の大なる者また罰すべき者をば必ず赦すことを爲ざる者、エホバの道は旋風
に在り大風に在り雲はその足の塵なり 四 彼海を指斥で之を乾かし河々をしてことごとく涸しむ、バシヤンな
よびカルメルの艸木は枯れレバノンの花は凋む 五 彼の前には山々ゆるぎ嶺々溶く、彼の前には地壞上り世界
およびその中に住む者皆ふきあげらる 六 誰かその燃る忿怒に堪ることを得
ん其震怒のそゝぐこと火のごとし巖も之がために裂くせ エホバは善なる者にして患難の時の要害なり彼は己
に依頼む者を善知たまふ、八 彼漲ぎる洪水をもてその處を全く滅ぼし己に敵する者を幽暗處に逐やりた
まはん 九 汝らエホバに對ひて何を謀るや彼全く滅ぼしたまふべし、患難かさねて起らじ 十 彼等むすびから
まれる荊棘のごとくなるとも酒に浸りなるとも乾ける藁のごとくに焚つくさるべし 十一 エホバに對ひて惡事
を謀る者一人汝の中より出て邪曲なる事を勸むと 十二 エホバかく言たまふ彼等全くしてその數夥多しかれど
るとも必ず芟たふされて皆絶ん、我前にはなんぢを苦めたれども重て汝を苦めじ 十三 いま我かれが汝に負
せし軛を碎き汝の繩を切はなすべし 十四 エホバ汝の事につきて命令を下す汝の名を追ふ者再び播ること
なし我汝の墓を備へん、汝輕ければなり 十五 嘉
音信を傳ふる者の脚、山の上に見ゆ、彼平安を宣ぶ、ユダよ汝の節筵を行ひ汝の誓願を果せ、邪曲な
る者重て汝の中を通らざるべし彼は全く絶る

第二章

一 撃破者攻のぼりて汝の前に至る、汝城を守り路を覗ひ腰を強くし汝の力を大に強くせよ
二 エホバはヤコブの榮を舊に復してイスラエルの榮のごとくしたまふ、其は掠奪者これを掠めその葡萄蔓
を壞ひたればなり 三 その勇士は楯を紅にしその軍兵は紅に身を甲ふ、其行伍を立る時には戰車の

燔灼燦て火のごとし鎗また閃めきふるふ四戰車街衢に狂ひ奔り大路に推あふ、其形狀火炬のごとく
其疾く馳ること電光の如し五彼その將士を憶ひいだす、彼らはその途にて躓き仆れその石垣に奔ゆき大楯
を備ふ六河々の門啓け宮消うせんセこの事定まれり彼は裸にせられて擄はれゆきその宮女胸を打て鴿のご
とくに啼くべし八ニ子べはその建し日より以來水の滿る池に似たりしがその民今は逃奔ろ、止れ止れと
呼ごも後を顧る者なしカ白銀を奪へよ黄金を奪へよそのの寶物限なく諸の貴き器用夥多しキ滅
亡たり穴虚なれり荒果たり心は消え膝は慄ひ腰には凡て劇しき痛あり面はみな色を失ふ十一獅子の穴は何處
ぞや少き獅子の物を食ふ處は何處ぞや雄獅子雌獅子その小獅子さへもに彼處に歩むに之を懼れしむる者なし
十二雄獅子は小獅子のために物を噛ころし雌獅子の爲に物をくびり殺しその掠獲たる物をもて穴に充しその
穽殺しゝ物をもて住所に滿す十三萬軍のエホバ言たまふ視よ我なんぢに臨む我なんぢの戰車を焚て煙さ
なすべし汝の少き獅子はみな劍の殺す所さならん我また汝の獲物を地より絶べし汝の使者の聲かされて聞ゆ
ること無らん

第二章

一禍なるかな血を流す邑、その中には全く詭譌および暴行充ち掠め取ること息ず二鞭の音あり輪
の響く音あり馬は躍り跳ね車は輾り行く三騎兵馳のぼり劍きらめき鎗ひらめく、殺さるゝ者夥多しく屍
死骸山を爲し死骸限なし皆死屍に躓きて倒る四是はかの冤術の主なる美しき妓女多く淫行を行ひそ
の淫行をもて諸國を奪ひその冤術をもて諸族を惑はしたるに因てなり五萬軍のエホバ言たまふ視よ我なんぢ
に臨む、我なんぢの裳裾を揭げて面の上にまで及ぼし汝の陰所を諸民に見し汝の羞る所を諸國に見すべ
し六我また穢はしき物を汝の上に投かけて汝を辱しめ汝をして賤物さならしめんセ凡て汝を見る者はみな
汝を避て奔り去りニ子べは亡びたりと言ん、誰か汝のために哀かんや何處よりして我なんぢを弔ろふ者を尋
れ得んや八汝あにノアモンに愈らんやノアモンは河々の間に立ち水をその周圍に環らし海をもて壕さなし海
をもて垣さなせりカかつその勢力たる者はエテオピア人およびエジプト人なごにして限あらずフテ人レビ
人等汝を助けたりき十然ろに是も俘囚さなりて擄はれてゆきその子女は一切の衢の隅々にて投付られて碎
け又その尊貴者は籤にて分たれ其大なる者はみな鏈に繋がれたり十一汝もまた醉せられて終に隱匿ん汝
もまた敵を避て逃るゝ處を尋れ求めん十二汝の城々はみな初に結びし果のなれる無花果樹のごさし之を搖が
せばその果落て食はんとする者の口にいろ十三汝の中にある民は婦人のごさし汝の地の門はみな汝の敵の前
に廣く開きてあり火なんぢの關を焚ん十四汝水を汲て圍まるゝ時の用に備へ汝の城々を堅くし泥の中に入
て踐て石灰を作りかつ瓦燒窯を修理へよ十五其處にて火汝を燒き劍なんぢを斬ん其なんぢを滅ぼすこと吸
蝗のごさくなるべし汝吸蝗のごさく數多からば多かれ汝群蝗のごさく數多からば多かれ十六汝はお
のれの商賈を空の星よりも多くせり吸蝗掠めて飛さる十七汝の重臣は群蝗のごさく汝の軍長は蝗の
群のごさし寒き日には垣に巢窟を構へ日出きたれば飛て去る、その在る處を知る者なし十八アッスリヤの王
よ汝の牧者は睡り汝の貴族は臥す、又なんぢの民は山々に散さる、之を聚むる者なし十九汝の傷は愈ろこ
と無し汝の創は重し汝の事を聞およぶ者はみな汝の故により手を拍ん誰か汝の惡行を恒に身に受ざる者
やあるゝ

拿翁書 終

哈巴谷書

第一章

一 預言者ハバククが示を蒙りし預言の重貢ニ ―― ヱホバよ我呼はるに汝の我に聽たまはざること何時
二 までぞや我なんぢにむかひて 強暴を訴たふれごも汝は助けたまはざるなり 三 汝 何ごて我に害惡を見せた
三 まふや何ごて艱難を瞻望居たまふや奪 掠および 強暴わが前に行はる、且爭論あり鬪諍おこる 四 是によ
四 りて律法弛み公義正しく行はれず、惡き者 義き者を圍むが故に公義曲りて行なはる 五 汝ら國々の民の中を
五 望み觀、驚ろけ、驚ろけ 汝らの日に我 一の事を爲ん、之を告る者あるとも汝ら信ぜざらん 六 視よ我カルデ
六 ヤ人を興さんとす、是すなはち猛くまた荒き國人にして地を縱橫に行めぐり己の有ならざる 住處を奪ふ
七 者なり 七 是は憚るべく又 懼るべし其是非處光は 己より出づ 八 その馬は豹よりも迅く夜來食する狼よけ
八 も疾し、其騎兵は跑まはる即ちその騎兵は遠き處より來る、其飛ことは物を食はんと急ぐ鷲のごとし 九 是は
九 全く強暴のために來り其面を前にむけて顙に進む、その俘虜を寄集むることは砂のごとし 十 是は王等を侮
十 り君等を笑ひ諸の城を笑ひ土を積あげてこれを取ん 十一 斯て風のごとくに行めぐり進みわたりて罪を獲
十一 ん、是は己の 力を神とす 十二 ヱホバわが神わが聖者よ汝は永遠より在すに非ずや、我らは死じ、ヱホバよ
十二 汝は是を懲戒のために立たまへり、磐よ汝は是を嚴刑のために設けたまへり、 十三 汝は目淸くして肯て惡を觀
十三 たまはざる者、肯て不義を視たまはざる者なるに何ゆゑ邪曲の者を觀すて置たまふや、惡き者の己にまさり
十四 て義き者を呑噬ふに何ゆゑ、 十四 汝は人をして海の魚のごとくならしめ君あらぬ昆蟲のごと
十五 くならしめたまふ 十五 彼鉤をもて之を盡く釣あげ網をもて之を寄せ集め引網をもて之を捕ふるより是に
十六 因て彼歡び樂しむ 十六 是故に彼その網に犧牲を獻げその引網に香を焚く、其は之がためにその分肥まさり
十七 その食饒になりたればなり 十七 然ど彼はその網を傾けつゝなほたえず國々の人を憎みなく殺すことをす
ろならんか

第二章

一 我わが觀望所に立ち戍樓に身を置ん而して我 候ひ望みて其われに何と宣まふかを見わが訴言

二 に我みづから何と答ふべきかを見んニエホバわれに答へて言たまはく此默示を書しるして之を板の上に明白
三 に錦つけ、弈りながらも之を讀べからしめよ三此默示はなほ定まれる時を俟てその終を急ぐなり偽ならず
四 若し遲くあらば待べし必ず臨むべし遲滯りはせじ四視よ彼の心は高ぶりその中にありて直からず然ど義き者
五 はその信仰によりて活べし五かの酒に耽る者は邪曲なる者なり驕傲者にして安んぜず彼はその情慾を陰府
六 のごとくに濶くすまた彼は死のごとし又足ことを知ず萬國を集へて己に歸せしめ萬民を聚めて己に就しむ六
七 それら其等の民みな諺語をもて彼を評し嘲弄の詩歌をもて彼を調せさらんや即ち言ん己に屬せざる物を積聚ねる者
八 は禍なるかな期て何の時にまでおよばんや嗟かの質物の重荷を身に負ふ者よ七汝を噬む者にはかに興らざ
九 らんや汝を惱ます者醒出ざらんや、汝は之に掠められるべし八汝衆多の國民を掠めしに因てその一切の
十 者の遺れる者なんぢを掠めん、是人の血を流しふに因るまた強暴を地上に行なひて邑とその内に住る一切の
十一 者とに及ぼせしに因るなり九災禍の手を免れんがために高き處に巢を構へんとして己の家に不義の利を取る
十二 者は禍なるかな十汝は事を圖りて己の家に恥辱を來らせ衆多の民を滅して自ら罪を取り十一石垣の石叫び
十三 建物の梁これに應へん十二血をもて邑を建て惡をもて城を築く者は禍なるかな十三諸の民は火のために
十四 勞し諸の國人は虛空事のために疲る、是は萬軍のエホバより出る者ならずや十四エホバの榮光を認むる
十五 の知識地上に充て宛然海の水の掩ふが如くならん十五人に酒を飲せ己の忿怒を酌和へて之を醉せ而して之
十六 が陰所を見んとする者は禍なるかな十六汝は榮譽に飽ずして羞辱に飽り汝もまた飲て汝の不割禮を露
十七 はせ、エホバの右の手の杯汝に巡り來るべし汝は汚なき物を吐て榮耀を掩はん十七汝がレバノンに爲たる
十八 强暴と獸を懼れしめしその殲滅さは汝の上に報いきたるべし、是人の血を流しふに因りまた強暴を地
十九 上に行ひて邑とその内に住る一切の者とに及ぼしふに因るなり十八雕像はその作者これを刻みたりとて何
二十 の益あらんや又鑄像および僞師は語ひぬ偶像なればその像の作者これを作りて賴むとも何の益あらんや
二十一 木にむかひて興ませと言ひ、語はぬ石にむかひて起たまへと言ふ者は禍なるかな、是あに教誨を爲ん
二十二 や視よ是は金銀を着せたる者にてその中には全く氣息なし二十然りさいへごもエホバはその聖殿に在ます
二十三 ぞかし、全地その御前に默すべし

第三章

一シギョノテに合せて歌へる預言者ハバククの祈禱、ニエホバよ我なんぢの宣ふ所を聞て懼るエ
ホバよこの諸の年の中間に汝の運動を活發かせたまへ、怒る時にも憐憫を忘れたまはざれ三神テマンより來り聖者パ
ラン山より臨みたまふ、セラ、其榮光諸天を蔽ひ、其讃美世界に徧れし四その明耀は日のごとく光線その手より出づ、彼處はその權能の隱ろ〳〵所なり五
疫病その前に先だち行き熱病その足下より出づ六彼立て地を震はせ、觀まはして萬國を戰慄しめたまふ、
永久の山は崩れ、常磐の岡は陷いる、彼の行ひたまふ道は永久なりセ我觀るにクシャンの天幕は艱難に懼り
ミデアンの地の幃幕は震ふ八エホバよ汝は馬を驅り、汝の拯救の車に乘たまふ、是河にむかひて怒りたまふ
なるか、河にむかひて汝の忿怒を發したまふなるか、海にむかひて汝の憤恨を洩したまふなるか、九汝の
弓は全く露を出で杖は言をもて言かためらる、セラ、汝は地を裂て河となしたまふ十山々汝を見て震ひ
洪水溢れわたり淵聲を出してその手を高く擧ぐ十一汝の奔る矢の光のため汝の鎗の電光のごとき閃爍の
ために日月その住處に立さぶまる十二汝は憤ほりて地を行めぐり、怒りて國民を踏つけたまふ十三汝は
汝の民を救んとて出きたり汝の膏沃げる者を救はんとて臨みたまふ汝は惡き者の家の頭を碎きその石礎を
露はして頸におよぼしたまへり十四汝は彼の鎗をもてその將帥の首を刺とほしたまふ、彼らは我を散さん
とて大風のごとくに進みきたる、彼らは貧き者を密に呑ほろぼす事をもてその樂とす十五汝は汝の馬を
もて海を乘とほり大水の逆巻ところを涉りたまふ十六我聞て腸を斷つ、我唇その聲によりて震ふ、腐
朽わが骨に入り我下體わななく、其時には即はち此民に攻寄る者ありてわれ安然に待ばなり、其は我患難の日の來るを待ばなり、其時には無花果の樹は花咲ず、葡萄の樹には果ならず、橄欖の樹の產は空くなり田圃は
之に押逼らん十七その時には無花果の樹は花咲ず、葡萄の樹には果ならず、橄欖の樹の產は空くなり田圃は
食糧を出さず圈には羊絕え小屋には牛なかるべし十八然ながら我はエホバによりて樂みわが拯救の神により

十九 て喜こばん 主エホバは我力にして我足を鹿のごとくならしめ我をしてわが高き處を歩ましめたまふ○
伶長これを我琴にあはすべし

哈巴谷書

四番雅書

第三章

一 ゼパニヤはクシの子クシはゲダリアの子ゲダリアはアマリヤの子アマリヤはヒゼキヤの子なりニエホバ言たまふわれ地の面よりすべての物を掃ひのぞかん三われ人と獣畜をほろぼし空の鳥海の魚および躓礙になる者と悪人とを滅さん我かならず地の面より人をほろぼし絶んエホバこれを言ふ四われユダとエルサレムの一切の居民との上に手を伸ん我此處よりかの遍のこれるバアルを絶ちケマリムの名を祭司と與に絶ち五また屋上にて天の衆軍を拜む者エホバに誓を立て拜みながらも亦おのれの王を指て誓ふ ことをする者六エホバに悖り離るゝ者エホバを求めず尋れざる者を絶んセ汝主エホバの前に默せよそはエホバの日近づきエホバすでに犠牲を備へその招くべき者をさだめたまひたればなり八エホバの犠牲の日に我もろ〳〵の牧伯と王の子等および凡て異邦の衣服を着る者を罰すべし九その日には我また凡て閾をとびこえ強暴と詭譎をもて獲たる物をおのが主の家に満す者等を罰せん十エホバ曰たまはくその日には魚の門より號呼の聲おこり下邑より喚く聲おこり山々より大なる敗壊の聲おこらん十一マクテシの民よ汝ら叫べ其は商賈する民悉くほろび銀を擔ふ者悉く絶たればなり十二その時はわれ燈をもちてエルサレムの中を尋ねん而して滓の上に居着て心の中にエホバは福もなさず災をもなさずといふ者を罰すべし十三かれらの財寶は掠められ彼らの家は荒果んかれら家を造るともそこに住ことを得ず葡萄を植るともその葡萄酒を飲ことを得ざるべし十四エホバの大なる日近づけり近づき速かに來る聽よ是エホバの日なるぞ彼處に勇士のいたく叫ぶあり十五その日は怒怒の日患難および痛苦の日、荒かつ亡るの日、黒暗またをぐらき日、濃き雲および黒雲の日十六笛をふき鯨聲をつくり堅き城を攻めて高き楼を攻るの日なり十七われ人々に患難を蒙むらせて盲者のごとくに歩ひあるかしめん彼らエホバにむかひて罪を犯したればなり彼らの血は流されて塵のごとくになるべし彼らの肉は捨られて糞土のごとくになるべし十八かれらの銀も金もエホバの烈き怒の日にはかれらを救ふことあたはず全地その嫉妬の火に呑るべし即ち

エホバ地の民をことごとく滅したまはん其事まことに速なるべし
二 第二章 一汝等羞恥を知ぬ民早く自ら内に省みよ二夫日は糠粃のごとく過ぎさる然ば詔言のいまだ行はれざる先エホバの烈き怒のいまだ汝等にきたらざるさきに自らかへりみるべし三すべてエホバの律法を行ふ斯地の遜るものよ汝等エホバを求め公義を求め謙遜を求めよ然すれば汝等エホバの忿怒の日に或は匿さるることあらん四夫ガザは棄られアシケロンは荒はてアシドドは白昼に逐はらはれエクロンは抜さらるべし五海濱に住る者およびケレテの國民は禍なるかな、ペリシテ人の國カナンよエホバの言なんぢらを攻む我なんぢを滅して住者なきに至らしむべし六海邊は必らず牧場となり牧者の洞および羊の牢そこに在ん七此地はユダの家の殘餘れる者に歸せん彼ら其處にて草飼ひ暮に至ればアシケロンの家に臥んそは彼らの神エホバかれらを顧みその俘囚を歸したまふべければなり八我すでにモアの嘲弄とアンモンの子孫の罵詈を聞り彼らはわが民を嘲けり自ら誇りて之が境界を侵せしなり九是故に萬軍のエホバイスラエルの神言たまふ我は活く必ずモアはソドムのごとくになりアンモンの子孫はゴモラのごとくにならん是は共に蕁麻の蔓延る處となり鹽坑の地となりて長久に荒はつべし我民の遺れる者かれらを掠めわが國民の餘されたる者かれらを獲ん十この事の彼らに臨むはその傲慢によるなり即ち彼ら萬軍のエホバの民を嘲りて自から誇りたればなり十一エホバは彼等に對ひて畏ろしくましまし地の諸の神を饑し滅したまふなり諸の國の民おの〳〵その處より出てエホバを拜まん十二エテオピア人よ汝等もまたわが劍にかりて殺さる十三エホバ北に手を伸てアッスリヤを滅したまはん亦ニネベを荒して荒野のごとき旱地となしたまはん十四而して畜の群もろ〳〵の類の生物その中に伏し鵜鶘および刺猬其柱の頂に住み囀る者の聲窓の内にきこえ荒落たる物閾の上に積り香柏の板の細工露顯になるべし十五是邑は驕り傲ぶりて安泰に立たり惟我あり我の外には誰もなしと心の中に言つゝありし者なるが斯も荒はてゝ畜獣の臥す處となる者

第三章 一此暴虐を行なふ悖りかつ汚れたる邑は禍なるかな二是は聲を聽いれず教誨を承ずエホバに依賴ずおのれの神に近よらず三その中にをる牧伯等は吼る獅子のごとくその審士は明旦までに何をも遺さざる夜求食する狼のごとし四その預言者は傲りかつ詐はる人なりその祭司は聖物を汚し律法を破ることをなせり五その中にいますエホバは義くして不義を行なひたまはず朝な朝な已の公義を顯はして缺ることなし然るに不義なる者は恥を知ずハ我國々の民を滅ぼしたれば其櫓は凡て荒たり我これが街を荒涼れしめたれば往來する者なしその邑々は滅びて人なく住む者なきに至りセわれ前に言り汝たゞ我を畏れまた譬教を受べし然らばその住家は我が凡て之につきて定めたる所のごとく滅ぼされざるべしと然るに彼等は夙に起て已の一切の行狀を壞れり八エホバ曰たまふ是ゆえに汝らわが起て後物をする日いたるまで我を俟て我もろもろの民を集へ諸の國を聚めてわが憤恨こわが烈き怒怒を盡くその上にそゝがんと思ひ定む全地はわが嫉妬の火に燒ほろぼさるべし九その時われ國々の民に清き唇をあたへ彼らをして凡てエホバの名を呼しめ心をあはせて之につかへしめん十わが散せし者等の女卽ち我を拜む者エテオピアの河々の彼旁よりもきたりてわれに禮ものをさゝぐべし十一その日には汝わがなせる諸の行爲をもて羞を得ことなかるべしその時には我なんぢの中より高ぶり樂む者等を除けば汝かさねてわが聖山にて傲り高ぶることなけれればなり十二われ柔和にして貧き民をなんぢの中にのこさん彼らはエホバの名に依賴むべし十三イスラエルの遺れる者は惡を行はず謊ひいはず詭偽の舌なし彼らは草食ひ臥やすまん之を懼れしむる者なかるべし十四シオンの女よ歡喜の聲を擧よイスラエルよ樂み呼はれエルサレムの女よ心のかぎり喜び樂め十五エホバすでに汝の鞫を止め汝の敵を逐はらひたまへりイスラエルの王エホバ汝の中にいます、汝はかさねて災禍にあふことあらじ十六その日にはエルサレムに向ひて言あらん懼るなかれシオンよ汝の手をしなへ垂るなかれと十七なんぢの神エホバなんぢの中にいます、彼は拯救を施す勇士なり彼なんぢのために喜び樂しみ、愛の餘りに默し汝のために喜びて呼はりたまふ十八われ節會のことにつき

十九 て憂ふるものを集めん彼等は汝より出し者なり恥辱かれらに蒙むること重眞のごとし十九 視よその時われ汝
を虐遇る者を盡く處置し足蹇たるものを救ひ逐はなたれたる者を集め彼らをして其羞辱を蒙りし一切
二十 の國にて稱譽を得させ名を得さすべし二十 その時われ汝らを携へその時われ汝らを集むべし我なんぢらの目
の前において汝らの俘囚をかへし汝らをして地上の萬國に名を得させ稱譽を得さすべしエホバこれを言ふ

せばにやしよ　をはり

哈基書

第一章

一 ダリヨス王の二年六月其月の一日にエホバの言預言者ハガイによりてシヤルテルの子ユダの
二 方伯ゼルバベルおよびヨザダクの子祭司の長ヨシュアに臨めり曰く二萬軍のエホバかく曰たまふ是民はエホ
三 バの殿を建べき時期未だ來らずといへり三 エホバの言また預言者ハガイによりて臨めり曰く四 此殿かく毀壞
四 れをれば汝等板をもてはれる家に居るべき時ならんや五 されば今萬軍のエホバかく曰たまふ汝等おのれの
五 行爲を省察べし六 汝らは多く播ごも收入ること少なく、食へごも飽ことを得ず飲ごも滿足ことを得ず衣
六 れごも暖きことを得ず又工價を得るものはこれを破れたる袋に入るに至ると七 萬軍のエホバまた曰たまふ汝等おの
七 れの行爲を省察べし八 山に上り木を携へ來て殿を建よさすれば我これを悅び又榮光を受んエホバこれを言ふ
八 九 なんぢら多く得んと望みたりしに反て少なかりき又汝等これを家に攜へ歸りし時我これを吹はらへり、
九 萬軍のエホバいひたまふ是何故ぞや、是は我が殿破壞をるに汝等おのく己の室に走り至ればなり十 この
十 故になんぢらの上の天は雨露を止め地はその產物を止めたり十一 且われ地にも山にも穀物にも新酒にも油に
十一 も地の生ずる物にも人にも家畜にも手のもろ〳〵の工にもすべて毀壞を召きかうむらしめたり十二 シヤルテ
十二 ルの子ゼルバベルとヨザダクの子祭司の長ヨシュアおよびその殘れるすべての民ともに其神エホバの聲と預
言者ハガイの言に聽したがへり是は其神エホバかれを遣したまひしに因る民みなエホバの前に敬畏たり十三
十三 時にエホバの使者ハガイ エホバの命により民に告て曰けるは我なんぢらと偕に在りとエホバ曰たまふと十四
十四 エホバシヤルテルの子ユダの方伯ゼルバベルの心とヨザダクの子祭司の長ヨシュアの心およびその殘れるす
べての民の心をふりおこしたまひければ彼等來りて其神萬軍のエホバの殿にて工作を爲り十五 これダリヨ
十五 ス王の二年六月二十四日なりき

第二章

一 七月其月の二十一日エホバの言預言者ハガイによりて臨めり曰くニ シヤルテルの子ユダの方
二 伯ゼルバベルとヨザダクの子祭司の長ヨシュアおよびその殘れる一切の民に告よ三 なんぢら遺れる者の中こ

四 の殿の前の栄光を見しものは誰ぞや、今これを如何に見るや、
五 見ゆるにあらずや 四 エホバ曰たまふ、ゼルバベルよ自ら強くせよ、ヨザダクの子ヨシュアよ自ら
六 強くせよ エホバ言たまふ、この地の民よ自ら強くしてはたらけ我なんぢらと共に在り萬軍の エホバ
七 を言ふ 汝らがエジプトより出し時わが汝らと約せし言のごとし我の靈なほ汝らの中に留れり、
八 勿れ萬軍の エホバ、ひたまふ、いま一度しばらくありて我天と地と海と陸とを震動はん
九 又われ萬國を震動はん、萬國の願ふ所のもの來らん又われ榮光をもて、この殿を充さん、
十 萬軍の エホバ、ひたまふ、この後の殿の榮光は前の榮光より大ならん、萬軍の エホバ、
十一 ひたまふ、この處においてわれ平康をあたへん、萬軍の エホバ、ひたまふ 〇十一 ダリ
十二 ヨスの二年九月二十四日エホバの言ハガイにより臨めり、曰く十二 萬軍の エホバ、かく曰ふ
十三 律について祭司に問ふて曰ふ、人その衣の裾に聖肉を携くだらん、その裾もしパンまたは
十四 羹または酒または油または凡の食物に觸ば、それらは聖ものとなるや、祭司たち答て曰ふ
十五 はしと、ハガイまた曰ふ、屍体に觸りてけがれしものは、これらの物にそはらば、それは
十六 汚れんや、祭司たち答て曰ふはしと、ここにおいてハガイ答て曰ふ エホバ曰たまふ、わが前に
十七 出る民もかくのごとし此國もかくのごとし彼らの手のすべて爲ところもかくのごとし
十八 又彼らがここに献るものもけがれたるものなり十八 今われなんぢらに告ん、この日より以前すなはち エホバの殿に石の上に石の置れざりし時を憶念くし
十九 は二十袋もあるべきを麦二十にて取しに二十をえ、また酒桶に入て五十桶を汲んとせしに二十を得たり
二十 のみ十八 なんぢらが手をもて爲せる一切の事において われ不實なる粟と黴と雹とをもて
二十一 われに歸らざりき エホバこれをいふ 十九 なんぢらこの日より以前を慎みかよ、即ち九月二十四日より エ
二十二 ホバの殿の基を置し日まで、種子なほ倉にあるや、葡萄の樹、無花果の樹、石榴の樹、橄欖の
二十三 樹もいまだ實をむすばざるにより、この日よりのち我なんぢを恵まん〇二十三 この月の二十四日にエホバの言ハガイ
二十四 に再び臨めり

二十五 曰ユダの總督ゼルバベルに語れ、われ天地を震動し、
二十六 國の權を覆し、諸國の力を滅さん、又車とこれに乗る者を覆さん、馬とこれに乗る者もの〳〵其伴侶の劍によりて
二十七 互に倒さん、萬軍の エホバこれをいふ 二十三 萬軍の エホバかく曰たまふ、ゼルバベルよエホバいふその日にわれなんぢを
二十八 取りなんぢを印の如くにせん、そはわれ汝を選びだせばなり、萬軍の エホバこれを言ふ

哈基番絲

撒加利亞書　第一章

一 ダリヨスの二年八月エホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く二 エホバいたく汝らの父等を怒りたまへり三 萬軍のエホバかく言ふと汝かれらに告よ萬軍のエホバ言ふ、汝ら我に歸れ萬軍のエホバいふ我も汝らに歸らん四 汝らその父等のごとくならざれ、前の預言者等かれらに向ひて呼はりて言り萬軍のエホバかく言たまふ請ふ汝らその惡き道を離れその惡き行を棄て歸れと然るに彼等は聽ず耳を我に傾むけざりきエホバこれを言ふ五 汝らの父等は何處にありや預言者等永遠に生んや六 然ながら我僕なる預言者等に我が命じたる言言わが法度とは汝らの父等に追及たるに非すや然ゆゑに彼らかへりて言り萬軍のエホバ我らの道に循がひ我らの行に循がひて我らに爲んと思ひたまひし事を我らに爲たまへりと〇七 ダリヨスの二年十一月すなはち十一日にエホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く八 我夜觀しに一箇の人赤馬に乘て谷の裏なる烏拓樹の中に立ちその後に赤馬、駁馬、白馬ありき九 我我主よ是等は何ぞやと問けるに我と語ふ天の使われに示さんと言り十 烏拓樹の中に立る人答へて言けるは是等は地上を遍れく歩かしめんとてエホバの遣はしたまひし者なりと十一 彼ら答て烏拓樹の中に立るエホバの使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穩にして安し十二 エホバの使こたへて言ふ萬軍のエホバよ汝いつまでエルサレムとユダの邑々を恤みたまはざるか汝はこれを怒りたまひてすでに七十年になりぬと十三 エホバ我と語ふ天の使に嘉言慰言をもて答へたまへり十四 かくて我と語ふ天の使我に言けるは汝呼はりて言へ、萬軍のエホバかく言たまふ我エルサレムのためシオンのために甚はだしく心を熱して嫉妬おもひ十五 安居せる國々の民を太く怒る其は我すこしく怒りしに彼ら力を出して之に害を加へたればなり十六 エホバかく言ふ是故に我憐憫をもてエルサレムに歸る、萬軍のエホバのたまふ我室その中に建られ量繩エルサレムに張れん十七 汝また呼はりて言へ萬軍のエホバかく宣まふ我邑々には再び嘉物あふれんエホバふたゝびシオンを慰め再びエルサレム

十八 を簡びたまふべしと○十八 かくて我目を擧て觀しに四の角ありければ十九 我に語ふ天の使に是等は何なるやと問しに彼われに答へけるは是等はユダイスラエルおよびエルサレムを散したる角なりと二十 時にエホバ四
二十 箇の鍛冶を我に見したまへり二一 我是等は何を爲んとて來れるやと問しに斯こたへたまへり是等の角はユダ
二一 を散して人にその頭を擧しめざりし者なるが今この四箇の者來りて之を威しかのユダの地にむかひて角を擧
てて之を散せし諸國の角を擲たんとす

第二章 二 茲に我目を擧て觀しに一箇の人量繩を手に執居ければ二 汝は何處へ往くやと問しにエルサレム
を量りてその廣と長の幾何なるを觀んとすと我に答ふ三 時に我に語ふ天の使山行たりしが又一箇の天の
使出きたりて之に會ひ四 之に言けるは走ゆきてこの少き人に告て言へエルサレムはその中に人と畜と餓な
ろによりて野原のごとくに廣く宜るべし五 エホバ言たまふ我その四周にて火の垣となりその中にて榮光とな
らん六 エホバいひたまふ、來れ來れ北の地より逃きたれ、我なんぢらを四方の天風のごとくに行わたらしし
むればなりエホバこれを言ふ七 來れ、バビロンの女子とともに居るシオンよ遁れ來れ八 萬軍のエホバかく言
たまふエホバ汝等を攜へゆきし國々へ榮光のために我等を遣はしたまふ、汝らを打つ者は彼の目の球を打な
ればなり九 即ち我手をかれらの上に揺ん彼らは己に事へし者の俘虜となるべし汝らは萬軍のエホバの我を遣
はしたまへるなるを知ん十 エホバ言たまふシオンの女子よ喜び樂め、我きたりて汝の中に住べなり十一 そ
の日には許多の民エホバに附て我民とならん我なんぢの中に住べし汝は萬軍のエホバの我を遣したまへるな
るを知ん十二 エホバ聖地の中にてユダを取て己の分となし再びエルサレムを簡びたまふべし十三 エホバ興て
その聖住所よりいでたまへば凡そ血肉ある者エホバの前に瘖然たれ

第三章 一 彼祭司の長ヨシュアがエホバの使の前に立ちサタンのその右に立てこれに敵しをるを我に見すニ
エホバサタンに言たまひけるはサタンよエホバ汝をせむべし、即ちエルサレムを簡びしエホバ汝をいまし
しむ是は火の中より取いだしたる燃柴ならずやと三 ヨシュア汚なき衣服を衣て使の前に立をりしが四 エホバ

己の前に立る者等に告て汚なき衣服を之に脱せよと宣ひまたヨシュアに言たまふ我なんぢの罪を汝の身よ
り取のぞけり汝に美服を衣すべしと宣へり五 我また潔き冠冕をその首に冠らせよと言り是において潔き冠冕
をその首に冠らせ衣服をこれに衣すエホバの使は立をる六 エホバの使誰してヨシュアに言ふ萬軍のエ
ホバかく言たまふ汝もし我道を歩みわが職守を守らば我家を司どり我庭を守ることを得ん我また此に立る者
等の中に往來する路を汝に與ふべし七 祭司の長ヨシュアよ請ふ汝と汝の前に坐する汝の同僚ともに聽べ
し彼らは即ち前表となるべき人なり我かならず我僕たる枝を來らすべしハ ヨシュアの前に我が立るところ
の石を視よ此一箇の石の上に七箇の目あり我自らその彫刻をなす萬軍のエホバこれを言ふなり我この地の
罪を一日の內に除くべし九 萬軍のエホバ言たまふ其日には汝等おの〳〵互に相招きて葡萄の樹の下無花果の
樹の下にあらん

第四章 一 我に語へる天の使また來りて我を呼醒せり我は睡れる人の呼醒されしごとくなりき二 彼我にむか
ひて汝何を見るやと言ければ我いへり我觀に燈金の燈臺一箇ありてその頂に油を容る器ありまた燈臺の
上に七箇の燈盞ありその燈盞は燈臺の頂にありて之に各々七本づゝの管あり三 また燈臺の側に橄
欖の樹二本ありて一は油を容る器の右にあり一はその左にあり四 我答へて我と語ふ天の使に問けるは我
主よ是等は何なるやと五 我と語ふ天の使我に答へて汝是等の何なるを知ざるかと言しにより我主よ知ず
こわれ言り六 彼また答へて我に言けるはゼルバベルにエホバの告たまふ言は是のごとし萬軍のエホバのたま
ふ是は權勢に由ず能力に由ず我靈に由なりセ ゼルバベルの前にあたれる大山よ汝は何者ぞ汝は平地とならん彼は恩惠あれと之に恩惠あれと呼ばる冕石を曳いだすべし九 エホバの言われに臨めり云くゼルバベルの手この室の石礎を置たり彼の手これを成終ん汝しらん萬軍のエホバ我を汝等に遣したまひしと十 誰か小き事の日を藐視むる者ぞ、夫の七の者は遍れく全地に往來するエホバの目なり準繩のゼルバベルの手にあるを見て喜こばん十一 我また彼に問て燈臺の右左にある此二本の橄欖の樹は何なるやと言ひ十二 重ねて

十三 また彼に問て此二本の金の管により金の油をその中より斟き出す二枚の橄欖は何ぞやと言しに十三彼わ
十四 れに答へて汝是等の何なるを知ざるかと言ければ我主よ知ずと言けるに十四彼言らく是等は油の二個の子
にして全地の主の前に立つ者なり

第五章 一我また目を擧て觀しに巻物の飛おり二彼われに 汝何を見るやと言ければ我言ふ我巻物の飛ふ
二 を見る、其長は二十キユビト、その寛は十キユビト三彼またわれに言けるは是は全地の表面を往めぐる呪
三 詛の言なり凡て竊む者は巻物のこの面に照して除かれ凡て誓ふ者は巻物のこの面に照して除かるべし四萬軍
四 のエホバのたまふ我これを出せり是は竊盜者の家に入りまた我名を指て僞り誓ふ者の家に入てその家の中に
五 宿りその木と石とを蝕せて盡く之を燒べしと○五我に語へる天の使進み來りて我に言けるは請ふ目を擧
六 てこの出きたれる物の何なるを見よ六これは何なるやと我言ければ彼言ふ此出來れる者はエパ舛なりまた言
七 ふ全地において彼等の形狀は是のごとしと七かくて鉛の圓き蓋を取あぐれば一人の婦人エパ舛の中に坐し居
八 る八彼是は罪惡なりと言てその婦人をエパ舛の中に投いれ鉛の錘をその舛の口に投かぶらせたり九我また
九 目を擧て觀しに婦人二人出きたれり之に鵠の翼のごとき翼ありてその翼風を含む、彼等そのエパ舛を天地
十 の間に持擧ぐ、十我すなはち我に語ふ天の使にむかひて彼等エパ舛を何處へ携へゆくなるやと言けるに十一
十一 彼我に言ふシナルの地にて之がために家を建んとてなり是は彼處に置られてその盛の上に立ん

第六章 一我また目を擧て觀しに四輛の車二の山の間より出きたれりその山は銅の山なり二第一の車
二 には赤馬を着け第二の車には黑馬を着け三第三の車には白馬を着け第四の車には白點ある强馬を着く四我す
三 なはち我に語いふ天の使にむかひて我主よ是等は何なるやと言けるに五天の使こたへて我に言ふ是は四の天風
四 にして全地の主の前より罷り出たる者なり六黑馬は北の地をさして進み行き白馬その後に從がふ又白點馬は
五 南の地をさして進みゆき七强馬は進み出て地を徧れく行めぐれと言たまひければ則はち地を行めぐれり八彼われを呼て我に告て言ふ此北の地に往る者等は北の地にて我靈を安ん

九 ずる○九エホバの言われに臨めり曰く十汝かの囚虜人の中の者ヘルダイ、トビヤおよびエダヤより取こと
十 せよ即ちその日に汝彼らがバビロンより歸りて宿りをるゼパニヤの子ヨシヤの家に到り十一金銀を取て冠
十一 冕を造りヨザダクの子なる祭司の長ヨシユアの首にこれを冠らせ十二彼に語りて言べし萬軍のエホバ斯言た
十二 まふ視よ人ありその名を枝さいふ、彼おのれの處よりいでて殿を建て尊榮を帶びその位に坐して政事を施しその位にありて祭司とならん此二の者の間に平和の計畫あ
十三 るべし十四偖またその冠冕はヘレム、トビヤ、エダヤおよびゼパニヤの子ヘンの記念のために之をエホバの
十四 殿に納むべし十五遠き處の者等來りてエホバの殿を建んこと是のごとくなるべしとは汝らもし汝らの神エホバの聲に聽したがはよと言ふを知にいたらん

第七章 一ダリヨス王の四年の九月すなはちキスリウと云ふ月の四日にエホバの言ゼカリヤに臨めり二ベ
テルかの時シヤレゼル、レゲンメレクおよびその從者を遣はしてエホバを和めさせ三かつ萬軍のエホバの室
にをる祭司に問しめ且預言者に問しめて言けらく我今まで年久しく爲きたりしごとく尙五月をもて哭きかつ
齋戒すべきやと四こゝにおいて萬軍のエホバの言我に臨めり云く五國の諸民およびこの祭司に告て言へ汝らは
七十年のあひだ五月と七月とに斷食しかつ哀哭せしがその斷食せしや汝らの
食かつ飮は全く己のために食ひ己のために飮ならずやと七在昔エルサレムおよび周圍の邑々人の住ふありて平安なりし時南の地および平野にも人の住ひをりし時に巳往の預言者によりてエホバの宣ひたりし言を
汝ら知ざるや○八エホバの言ゼカリヤに臨めり云く九萬軍のエホバかく宣まへり云く正義審判を行ひ互
に相愛しみ相憐れめ十寡婦、孤兒、旅客および貧者を虐たぐる勿れ人を害せんと心に圖る勿れと十一
然ろに彼等は肯て耳を傾けず背を向け耳を鈍くして聽ず十二且その心を金剛石のごとくし萬軍のエホバが
その御靈をもて巳往の預言者に由て傳へたまひし律法と言詞に聽したがはざりき是をもて大なる怒萬軍のエホバ
エホバより出て臨めり十三彼かく呼はりたれども彼等聽ざりき其ごとく彼ら呼はるとも我聽じ萬軍のエホバ

これを言ふ十四我かれらをその識ざる諸の國に吹散すべし其後にてこの地は荒て往來する者なきに至らん
彼等かく美しき國を荒地となす

第八章

一萬軍のエホバの言われに臨めり曰く二萬軍のエホバかく言たまふ我シオンのために甚はだしく心
を熱して妬く思ひ大なる忿怒を起して之がために妬く思ふ三エホバかく言たまふ今我シオンに歸れり我エル
サレムの中に住んエルサレムは誠實ある邑と稱へられ萬軍のエホバの山は聖山と稱へらるべし四萬軍のエ
ホバかく言たまふ、エルサレムの街衢には再び老たる男老たる女坐せん皆年高くして各々杖を手に持
べし五またその邑の街衢には男の兒、女の兒滿て街衢に遊び戲むれん六萬軍のエホバかく言たまふ、この事
その日には此民の遺餘者の目に奇きこと有んや萬軍のエホバこれを言ふ七萬軍の
エホバかく言たまふ視よ我わが民を日の出る國より救ひ出し八かれらを携へ來りてエルサレ
ムの中に住しめん彼らは我民となり我は彼らの神となりて共に誠實と正義に居ん九萬軍のエホバかく言たま
ふ汝ら萬軍のエホバの室なる殿を建んとて其基礎を置たる日に起りし預言者等の口の言詞を今日聞く者よ
汝らの腕を強くせよ十此日の先には人も工の價を得ず獸畜も工の價を得ず出者も入者も仇の故をもて安然
ならざりき即ち我人々をして互に相攻しめたり十一然れども今は我此民の遺餘者に對することは曩の
日のごとくならずと萬軍のエホバ言たまふ十二即ち平安の種子あるべし葡萄の樹は果を結び地は產物を出し
天は露を與へん我この民の遺餘者にこれを盡く獲さすべし十三ユダの家およびイスラエルの家よ汝らが
國々の中に呪詛となりしごとく此度は我なんぢらを救ふて祝言とならしめん懼るゝ勿れ汝らの腕を強くせよ
十四萬軍のエホバかく言たまふ在昔汝らの先祖我を怒らせし時に我これに災禍を降さんと思ひて之を悔ざ
りき萬軍のエホバこれを言ふ十五是のごとく我また今日エルサレムとユダの家に福祉を降さんと思ふ汝ら懼
るゝ勿れ十六汝らの爲べき事は是なり汝ら各たがひに眞實を言べし又汝等の門にて審判する時は眞實と執
て平和の審判を爲べし十七汝等すべて人の災害を心に圖る勿れ僞の誓を好む勿れ是等はみな我が惡む者な
りと、エホバ言たまふ〇十八萬軍のエホバの言われに臨めり云く十九萬軍のエホバかく言たまふ、四月の斷食、
五月の斷食、七月の斷食、十月の斷食かへつてユダの家の宴樂となり佳節となるべし惟なんぢ
ら眞實と平和を愛すべし二十萬軍のエホバかく言たまふ、國々の民および衆多の邑の居民來り就ん二一即
ちこの邑の居民往てかの邑の者に向ひ我等すみやかに往てエホバを和め萬軍のエホバを求めんと言ん二二衆多の民強き國民エルサレム
に來りて萬軍のエホバを求めエホバを和めん二三萬軍のエホバかく言たまふ其日には諸の國語の民十人にてユダヤ人一箇の裾を拉へん即ち之を拉へて言ん我
ら汝らと與に往べし其は我ら神の汝らと偕にいますを聞たればなり

第九章

一エホバの言詞の重負ハデラクの地に臨む、ダマスコはその止まる所なりエホバ世の人を眷みイス
ラエルの一切の支派を眷みたまへばなり二之に界するハマテも然りツロ、シドンも亦はなはだ伶俐ければ同
じく然るべし三ツロは自己のために城廓を築へ、銀を塵のごとくに積み、金を街衢の土のごとくに積り
四視よ主これを攻取り海にて之が力を打ほろぼしたまふべし是は火にて焚うせん五アシケロンこれを見て懼
れかがもこれを見て太く慄ふ、エクロンもその望む所の辱しめらるゝに因て亦然りがザには王絕えアシ
ドンには住者なきに至らん六アシドドにはまた雜種の民すまん我ペリシテ人が誇る所の者を絕べし七我こ
れが口より血を取除き之が齒の間より憎むべき物を取除かん是も遺りて我等の神に歸しユダの牧伯のごとく
に成べしまたエクロンはエブス人のごとくになるべし八我わが家のために陣を張て敵軍に當り之をして往來
するこを無らしめん虐遇者かされて過ること無るべし我いま我目をもて親ら見ればなり〇九シオンの女よ
大に喜こべ、エルサレムの女よ呼はれ、視よ汝の王汝に來ると、彼は正義にして拯救を賜はり柔和にして驢馬
に乘る即ち牝驢馬の子なる駒に乘るなり十我エフライムより車を絕ちエルサレムより馬を絕ん戰爭弓も絕
るべし彼國々の民に平和を諭さん其政治は海より海に及び河より地の極におよぶべし十一汝につい
ても汝の契約の血のために我かの水なき坑より汝の被俘人を放ち出さん十二望を圖く被俘人よ汝等城

十三 に歸れ、我今日もなほ告て言ふ我がならす倍して汝等に賚ふべし十三我ユダを張て弓となしエフライムを
十四 矢となして之につがへん、ジオンよ我汝の人々を振起して汝等ギリシヤの人々を攻しめ汝をして大丈夫の劍の
十五 ごとくならしむべし十四エホバこれが上に顯はれてその箭を電光のごとくに射いだしたまはん主エホバ喇叭
十六 を吹ならし南の暴風に乘て出來まさん十五萬軍のエホバ彼らを護りたまはん彼等は食ふことを爲し投石器の
十七 石を踏つけん彼等は飲ことを爲し酒に醉るごとくに聲を擧んその盛るること血を盛る鉢のごとく祭
壇の隅のごとくになるべし十六彼らの神エホバ當日に彼らを救ひたまはん彼等はその民を羊のごとくに救ひたまはん
冠冕の玉のごとくになりて其地に輝くべし十七その福祉は如何計ぞや其美麗は如何計ぞや穀物は童男
を長ぜしめ新酒は童女を長ぜしむ

第十章 一汝ら春の雨の時に雨をエホバに乞へエホバ電光を造り大雨を人々に賜ふべし二夫テラピムは空虚き事を言ひ卜筮師はその見る
所は徒然なり是をもて民は羊のごとくに迷ひ牧者なきに因て惱む三我牧者にむかひて怒を發す我牡山羊を
罰せん、萬軍のエホバその群なるユダの家を顧みこれをしてその美しき軍馬のごとくならしめたまふ四隅石
彼より出で釘かれより出で軍弓かれより出で等たる者みな齊く彼より出ん五彼等靦かふ時は勇士のごとく
にして街衢の泥の中に敵を誅殺らんエホバかれらとともに在せば彼ら戰かはん、馬に騎る者等すなはち娩を
拙くべし六我ユダの家を強くしヨセフの家を救はん我かれらを復せば我かれらを憐むが故に彼らをして歸り住しめん彼らは我
に棄られし事なきが如くなるべし我はエホバなり我かれらに聽べしセ エフライム人は勇士に等しく
して酒を飲たるごとく心に歡ばん其子等は見て喜びエホバに因て心に樂まん八我かれらに向ひて嘯きて
これを集めん其は我これを贖ひたればなり彼等は昔殖增たるごとくに殖增んだ我かれらを國々の民の中に播
ん彼等は遠き國においても我をおぼえん彼らは其子等とともに生ながらへて歸り來るべし十我かれらをエジプ
トの國より携へかへりアツスリヤより彼等を集めギレアデの地およびレバノンに彼らを携へゆかんその居處

十一 も無きほどなるべし十一彼艱難の海を通り海を擊破りたまふ、ナイルの淵は盡く涸る、アツスリヤの傲慢
十二 は卑くせられエジプトの杖は移り去ん十二我彼らをしてエホバに由て强くならしめん、彼等はエホバの名を
もて歩まんエホバこれを言たまふ

第十一 一レバノンよ汝の門を啓き火をして汝の香柏を焚しめよ二松よ叫べ、香柏は倒れ、威嚴樹はそ
こなはれたり、バシヤンの橡よ叫べ、高らかなる林は倒れたり三牧者の叫ぶ聲あり其榮そこなはれたればな
り猛き獅子の吼る聲ありヨルダンの叢そこなはれたればなり四我神エホバかく言たまふ宰らるべき羊を
牧へ五之を買ふ者は之を宰ろことも罪なし之を賣る者は言ふ我富を得ればエホバを讚すべしと其牧者もこれ
を惜まざるなり六エホバ言たまふ我かさ れて地の居民を惜まじ視よ我人を各々その鄰人の手に付しその王
の手に付さん彼ら地を荒すべし我これを彼らの手より救ひ出さじ七我すなはち其宰らるべき羊を牧り是は最
も憫然なる羊なり我みづから二本の杖を取り一を恩と名け一を結と名けてその羊を牧りハ我一月に牧
者三人を絕り我心に彼らを厭ひしが彼等も心に我を惡めりル我言り我は汝らを飼はじ死る者は死に、絕る
る者は絕れ、遺る者は互にその肉を食ひあふべしト我恩と名けし杖を取て之を折り是 諸の民に立し我契
約を廢せんとてなりき十一是はその日に廢せられたり是にお いて、の我に聽したがひし憫然なる羊は之をエ
ホバの言なりと知り十二我かれらに向ひて汝等もし善と視なば我價を我に授けよ若しからずば止めよと
言ければ彼等すなはち銀三十を權りて我價 さ せり十三エホバ我に言たまひけるは彼等に我が估價せられし
その善價を陶人に投あたへよと我すなはち銀三十を取てエホバの室に投いれて陶人に歸せしむ十四我
また結と いふ杖を折り是ユダとイスラエルの間の和好を絕んとてなりき〇十五エホバ我に言たまはく汝また
愚なる牧者の器を取れ十六視よ我地に一人の牧者を興さん彼は亡ぶる者を顧みず迷へる者を尋ず傷つけ
ろ者を醫さず健剛なる者を飼はず肥たる者の肉を食ひ且その蹄を裂ん十七其羊の群を棄る惡き牧者は禍
なるかな、劍その腕に臨みその右の目に臨まん其腕は全く枯へその右の目は全く盲れん

第十二章
一 イスラエルにかゝはるエホバの言詞の重負、エホバ卽ち天を舒べ、地の基を置き、人の內の
二 靈魂を造る者言たまふ、視よ我エルサレムをしてその周圍の國民を眼暗はする杯ならしむべしエルサレ
三 ムの攻圍まるゝ時是はユダにも及ばん、其日には我エルサレムをして、諸の國民に對ひて重石とならしむべ
四 し之を持擧ら者は大傷を受ん地上の諸國みな集まりて之に攻寄べし、其日には我一切の馬を
五 擊て駭かせその騎手を擊て狂はせん而して我ユダの家の目を開き、諸の國民の馬を擊て盲になすべし
六 ユダの牧伯等その心の中に謂んエルサレム人はなほエルサレムにてその本の處に居ることを得べし
七 エホバまづユダの幕屋を救ひたまはん是ダビデの榮およびエルサレムの居民の榮のユダに勝ることの
八 無らんためなり、當日エホバエルサレムの居民を護りたまはん彼らの中の躓き者もその日にはダビデのごさ
九 くなるべしまたダビデの家は神のごとく彼らに先だつエホバの使のごとくなるべし、その日には我エルサレ
十 ムに攻きたる國民をことごく滅はすことを務むべし、我ダビデの家およびエルサレムの居民に憐憫と祈禱
の靈をそゝがん、彼等はその刺たりし我を仰ぎ覩、獨子のために哭くがごとく之がために哭長子のために
十一 悲しむがごとく之がために痛く悲しまん、十一その日にはエルサレムに大なる哀哭あらん是はメギドンの谷な
十二 るハダデリンモンに在し哀哭のごとくなるべし、十二國中の族おの〳〵別れ居て哀哭べし、即ちダビデの家
の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭かん、ナタンの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭かん
十三 十三レビの家の族別れ居て哀哭きシメイの族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭かん
十四 て哀哭かん、十四その他の族も凡て然りすなはち族おの〳〵別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭くべし

第十三章
一 その日罪と汚穢を清むる一の泉ダビデの家とエルサレムの居民のために開くべし、二萬軍のエ
ホバ言たまふ、其日には我地より偶像の名を絕のぞき盡れて人に記憶らるゝこと無らしむべし我また預言者
およ び汚穢の靈を地より去しむべし三人もしなほ預言することあらば其生の父母これに言ん汝は生べからず
汝はエホバの名をもて虛僞を語るなりと而してその生の父母これが預言しをる時これを刺ん四その日には預言者等
預言するに方りてその異象を羞ん重て人を欺むかんために毛衣を纏はじ五彼言ん我は預言者にあらず地を耕
へす者なり卽ち我は若き時より人に買れたりと六若これに向ひて然らば汝の兩手の間の傷は何ぞやと言あら
ば是は我が愛する者の家にて受たる傷なりと答へん〇七萬軍のエホバ言たまふ劍よ起て我牧者我伴侶なる
人を攻よ、牧者を擊て然らばその羊散ん我また我手を小き者等の上に伸べし八エホバ言たまふ全地の人二
分は絕れて死に、三分の一はその中に遺らん九我その三分の一を携さへて火にいれ銀を熬分ごとくに之を
煉分け金を試むるごとくに之を試むべし彼らわが名を呼ん、我これにこたへん、我これは我民なりと言ん彼
等またエホバは我神なりと言ん

第十四章
一 視よエホバの日來る、汝の貨財奪はれて汝の中にて分たるべし二我萬國の民を集めてエル
サレムを攻擊しめん、邑は取れ、家は掠められ、婦女は犯され、邑の人の半は擄へられてゆかん、然ごその
餘の民は邑より絕れじ三その時エホバ出きたりて其等の國人を攻擊たまはん在昔その軍陣の日に戰たまひ
しごとくなるべし四其日にはエルサレムの前に當りて東にあるさゝろの橄欖山その山の半は北に半は南に移るべし五汝らは我山の
谷に逃いらん、其山の谷はアザルにまで及ぶべし汝らはユダの王ウジヤの世に地震を避て逃しごとくに逃ん、
我神エホバ來りたまはん、諸の聖者なんぢと偕もなるべし六その日には光明なくるべく輝く者消うすべし
七 茲に只一の日あるべしエホバこれを知たまふ晝にもあらず夜にもあらず夕暮の頃に明くなるべし八
その日に活る水エルサレムより出その半は東の海にその半は西の海に流れん、夏も冬も然あるべし九エホ
バ全地の王となりたまはん、其日には只エホバのみ只その御名のみにならん十全地はアラバのごとくなりて
ゲバよりエルサレムの南のリンモンまでの間のごとくなるべし而してエルサレムは高くなりてその故の處に

立ちべニヤミンの門より第一の門の處に及び隅の門にいたり又ハナニエルの戍樓より王の酒榨倉までに迯る
十一 その中には人住んで重れて呪詛あらじエルサレムは安然に立べし
十二 エホバ災禍を降してこれを擊なやましたまふこと是のごとくなるべし即ち彼らその足にて立たる中に肉腐れ
十三 目その孔の中にて腐れ舌その口の中にて腐れん その日にはエホバかれらをして大に狼狽しめたまはん彼
十四 らは各〻人の手を執へん此手と彼手擊あふべし ユダもまたエルサレムに於て戰かふべし その四周の
十五 すべて一切の國人の財寶金銀衣服など甚だ多く聚められん 又エホバ また馬、騾、駱駝、驢馬およびその諸營の一切の
十六 家畜の蒙むる災禍もこの災禍のごとくなるべし エルサレムに攻きたりし 諸〻の國人の遺れる者はみな歲
十七 に上りきてその王なる萬軍のエホバを拜み 結茅の節を守るにいたるべし
十八 もし地上の諸族の中その王なる萬軍のエホバを拜みにエルサレムに上らざる者の上には凡て雨ふらざるべし
十九 もし埃及の族もし上り來らざる時はその上に雨ふらじ エホバその結茅の節を守りに上らざる一切の國人を擊なやます災禍を
二十 これに降したまふべし 埃及エジプトの罰凡て結茅の節を守りに上り來らざる國人の罪是のごとくなるべし
二十一 その日には馬の鈴にまでエホバに聖としるさん 又エホバの室の鍋は壇の前の鉢と等かるべし ニ エルサ
レムおよびユダの鍋は都て萬軍のエホバに聖としるさん 又エホバの聖物となるべし 凡そ犧牲を獻ぐる者は來りてこれを取り其中に
て祭肉を煮ん 其日には萬軍のエホバの室に最早カナン人あらざるべし

瑪加利亞書終

瑪拉基書

一 これエホバの言の重負なりニ エホバ曰たまふ我 汝らを愛したり 然るに汝ら云ふ 汝何に我儕を愛せしやとエホバいふエサウはヤコブの兄に非ずやされど我はヤコブを
二 愛しニ エサウを惡めり、且つわれ彼の山を荒し其嗣業を山犬にあたへたり 四 エドムは我儕ほろぼされたれど
三 も再び荒たる所を建んといふによりて萬軍のエホバかく曰たまふ彼等は建ん、されど我これを倒さん、人は
四 彼等を惡境およびエホバの恒に怒りたまふ人民と稱へん 五 汝らこれを目に見て云ん エホバはイスラエル
五 の地に大なりと六 子は其父を敬ひ 僕はその主を敬ふさればもし父たらば我をおそるゝこと安にあるや 我もし
六 主たらば我をおそるゝこと安にあるやなんぢら我が名を藐視る祭司よ萬軍のエホバいひたまふ然るに汝曹
七 はいふ我儕何に汝の名を藐視りしやと七 汝ら汚たるパンをわが壇の上に獻げ玷しておいて言ふ我儕何に爾を
八 汚せしやと 汝曹エホバの壺は卑しきなりと云しがゆゑなり 八 又跛足なるものを獻ろは惡に非ずや、今これを
九 汝の手になれり彼なんぢらを納んや、萬軍のエホバこれを言ふ 十 汝ら神にわれらを
十 受納るや萬軍のエホバこれをいふ 請ふ汝ら神にわれらをあはれみたまはんことをもとめよ、これらは凡て
十一 汝らの手になれり彼なんぢらを納んや、萬軍のエホバこれを言ふ 十一 汝らがわが壇の上にいたづらに火をたく
十二 ことなからんために汝らの中一人扉を閉る者あらまほしわれ汝らを悦ばず又なんぢらの手より 獻物を受じ
十三 と萬軍のエホバいひたまふ 十二 日の出る處より沒る處までの列國の中に我名は大ならん、又何處にても香さ
十四 潔き 獻物を我名に獻げんそはわが名列國の中に大なるべければなりと萬軍のエホバいひたまふ 十三 しかる
十五 になんぢらこれを褻したり、そは汝曹はエホバの壺は汚れたり、また其果すなはちその食物は卑しと云ばな
十六 り 十三 なんぢらは又如何に煩勞むきことにあらずやといひ且これを藐視たり、萬軍のエホバこれをいふ、又
十七 なんぢらは奪し物 跛足たる者病る者を携へ來ればわれ之をなんぢらの手より受べけんやエホバこれをいひ玉へり 十四 群の中に牡あるに誓を立て疵あるものをエホバに獻る詐偽者は

詛はるべしそは我は大なる王また我名は列國に畏れらるべきなればなり萬軍のエホバこれをいふ
二 第二節 二祭司等よ今この命令なんぢらにあたへらるる二萬軍のエホバいひたまふ汝等もし聽きしたがはず又
三 これを心にとめず我名に榮光を歸せずばわれ汝らの上に詛を來らせん又なんぢらの祝福を詛はん、われすで
に此等を詛へり、汝らこれを心にとめざりしに因てなり三 視よ我なんぢらのために糧をいましめん、また糞
四 すなはち汝らの撒牲の糞を汝らの面の上に撒さん、汝これらさるもに挑へさられん四 わが此命令をなん
ぢらに下し與ふるは我契約をして レビに保たしめんためなるを汝ら知るべし、萬軍のエホバこれをいふ五
わが彼と結びし契約は生命と平安とにあり、我かれを畏しめんが爲なり、彼われ
を愼れわが名の前になのゝきけり六 眞理の法彼の口に在て不義その口唇にあらず、彼平安と公義をさりて
我とともにあゆみ、又多の人を不義より立歸らせたりき七 夫れ祭司の口唇に知識を持べく又人彼の口よ
り法を請求べしそは祭司は萬軍のエホバの使者なればなり八 汝らは道を離れ、衆多の人を法に跌倒つまづかせ
せ、レビの契約を壞りたり萬軍のエホバこれをいふ九 汝らは我道を守らず法をおこなふに當りて人に偏りし
故にわれも汝らを一切の民の前に輕められまた賤められしむ〇十 我儕の父は皆同一なるにあらずや、われら
を造りし神は同一なるにあらずや、我儕先祖等の契約を破りて各おのれの兄弟にいつはりを行ふは何ぞ
第二章 十一 ユダは誓約にそむけりイスラエル及びエルサレムの中には憎むべき事行はる、すなはちユダはエホバ
の愛したまふ聖所を褻して他神の女をめとれり十二 つぎに又なにもヤコブの幕屋よりのぞきたまはん萬軍のエホバに獻物をさゝぐるものにてもまた然り十三
んぢらはこれをなせり、即ち涙と泣と歎きとをもてエホバの壇をおほはしめたり、故に彼もはや獻物を顧
みずまたこれを汝らの手より悦び納たまはざるなり十四 汝らはなほ何故ぞやと言ふ、そは是はエホバ汝と
なんぢの若き時の妻の間にいりて證をなしたまへばなり、彼はなんぢの伴侶汝が契約をなせし妻なるに汝
誓約に背きてこれを褻つ十五 エホバは只一を造りたまひしにあらずや、されども彼にはなほ靈の餘ありき、

何故にひとつのみなりしや、是は神を敬虔の裔を得んが爲なりき、故になんぢら心に謹みその若き時の妻を
誓約にそむきて棄るなかれ十六 イスラエルの神エホバいひたまふわれは離縁を憎みまた虐遇をもて其衣を
蔽ふ人を惡む故に汝ら誓約にそむきて棄を待遇はざるやう心につつしむべし萬軍のエホバこれをいふ〇十七
なんぢらは言をもてエホバを煩勞はせり、されど汝ら言ふ何にわづらはせしやと、如何になればなんぢら凡
て惡をなすものはエホバの目に善と見えかつ彼に悦ばるゝと言ひ、また審判の神は安にあるやさいえばなり
第三章 一 視よ我わが使者を遣さん、かれ我面の前に道を備へん、また汝らが求むるところの主すなはち汝ら
の悦樂ぶ契約の使者忽然その殿に來らん、視よ彼來らんと萬軍のエホバ云たまふ二 されど其來る日には誰か
堪えんや、その顯者る時には誰か立えんや、彼は金をふきわくるものゝ如く布晒の灰汁のごとくなら
ん三 かれは銀をふきわけてこれを潔むる者のごとく坐せん、彼はレビの裔を潔め金銀の如くかれらをきよめ
ん、而して彼等は義をもて獻物をエホバにさゝげん四 その時ユダとエルサレムの獻物はむかしの日の如
く又先の年のごとくエホバに悦れん五 われ汝らにちかづきて審判をなし巫術者にむかひ姦淫を行ふ者に
むかひ僞の誓をなせる者にむかひ傭人の價金をかすめ寡婦と孤子をしへたげ異邦人を推枉げ我を畏
ざるものどもにむかひて速に證をなさんと萬軍のエホバ云たまふ六 それわれエホバは易らざる者なり、故
にヤコブの子等よ汝らは亡されず七 なんぢら其先祖等の日よりこのかたわが律例をはなれてこれを守らざり
き、我にかへれ、われ亦なんぢらに歸らん、萬軍のエホバこれを言ふ然るに汝らはわれら何において歸
べきやと言り八 人ひと神の物をぬすむことをせんやされど汝らはわがものを盜めり汝らは又何において汝の物
をぬすみしやさいへり、十分の一および獻物に於てなり九 汝らは呪詛をもて詛はる、またなんぢら一切の
國人はわが物をぬすめり十 わが殿に食物あらしめんために汝ら什一をすべて我倉にたづさへきたれ、而し
て是をもて我を試み、わが天の窓をひらきて容べきところなきまでに恩澤を汝らにそゝぐや否やを見るべし
萬軍のエホバこれを言ふ十一 我また噛食ふ者をなんぢらの爲に抑へてなんぢらの地の產物をやぶらざらしめ

ん、又なんぢらの葡萄の樹をして時のいたらざる前にその實を圖におとさやらしめん萬軍のエホバこれをいふ　十二又萬國の人なんぢらを幸福なる者さふなへん、そは汝ら樂しき地となるべければなり萬軍のエホバ　十三エホバ云たまふ汝らは言詞をはげしくして我に逆らへり、ふかるも汝らは我儕なんぢらにさからひて何をいひしやさへかなし！　十四汝らは言へらく神に服事るは徒勞なり、われらその命令をまもりつつ萬軍のエホバの前に憯みて歩みたりさて何の益あらんや　十五今われらは驕傲ものを幸福なりと稱ふ、また惡をおこなふものも盛になり、神を試むるものすらも救はるさ　十六その時エホバを畏るゝ者互に相かたりエホバ耳をかたむけてこれを聽たまへり、また記念の書をかきしるせり　十七萬軍のエホバ曰ふ我わが設くる日に、われらをもて我寶となすべし、前に記念の書をかきしるせり　十七萬軍のエホバ曰ふ我わが設くる日に、われらをもて我寶となすべし、また人の己につかふる子をあはれむがごさく我儕等をあはれまん　十八その時汝らは更にまた義者と惡きものさ神に服事るものさ事へざる者さの區別をしらん

第四章

一萬軍のエホバいひたまふ視よ爐のごさくに燒る日來らん、すべて驕傲者さ惡をおこなふ者は藁のごさくにならん其きたらんさする日彼等を燒つくして根も枝ものこらざらしめん　二されど我名をおそるゝ汝らには義の日いでゝ昇ちんその翼には醫す能をそなへん、汝らは牢よりいでし犢の如く躍跳ん　三又なんぢらは惡人を踐つけん、即ちわが設くる日にかれらはホバの足の掌の下にありて灰のごさくならん、萬軍のエホバこれを言ふ　四なんぢらわが僕モーセの律法をおぼえよ、すなはち我がホレブにてイスラエル全體のために彼に命ぜし法度と誡命をおぼえよ　五視よエホバの大なる畏るべき日の來るまへにわれ預言者エリヤを汝らにつかはさん、かれ父の心にその子女を慰はせ、子女の心にその父をおもはしめん、是は我が來りて詛をもて地を擊ことなからんためなり

馬拉基書　終

NEW TESTAMENT.

新約全書

大日本神戸市前町拾四番

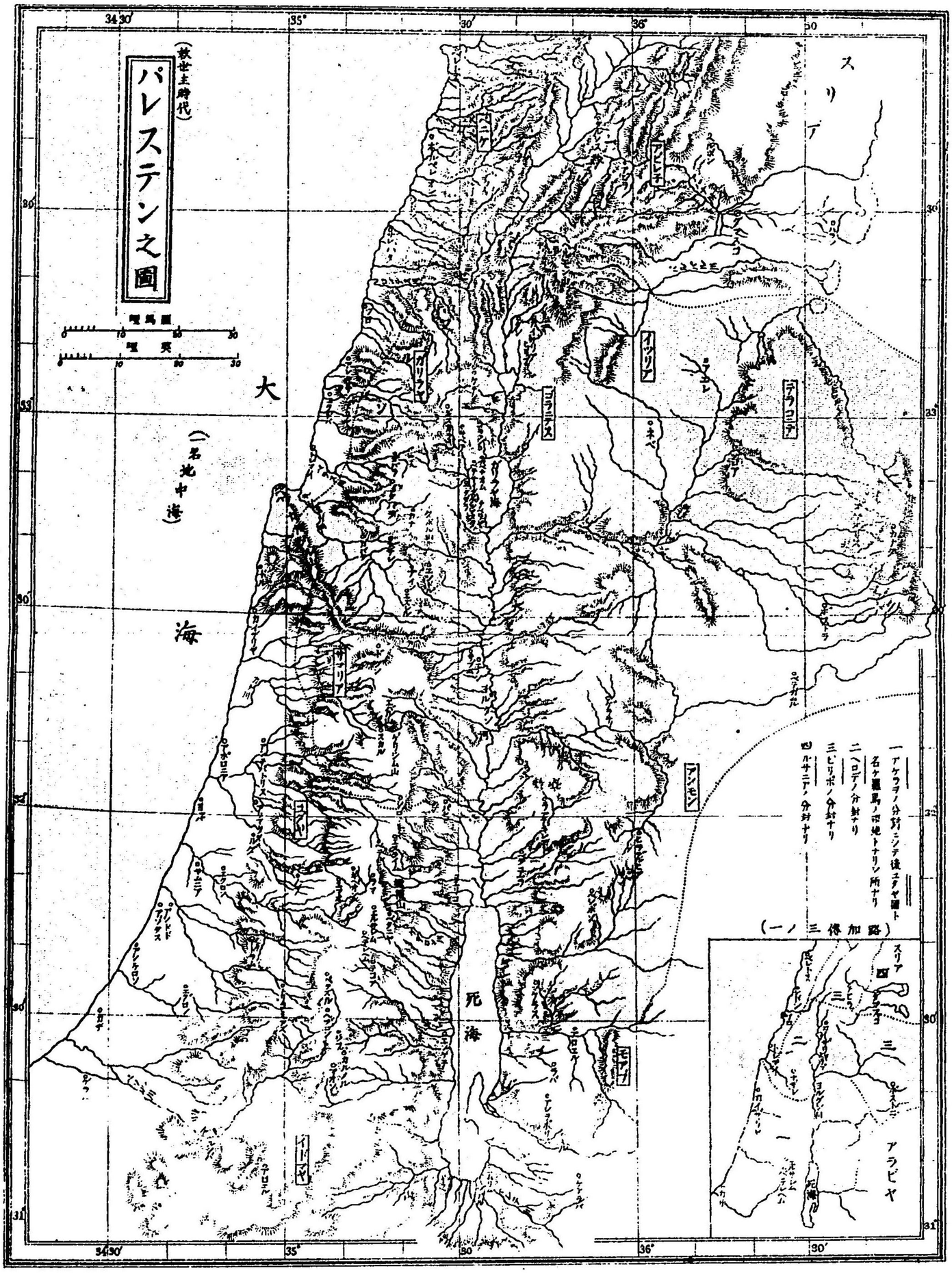
大英國
北英國　聖書會社

BRITISH & FOREIGN BIBLE SOCIETY
AND
NATIONAL BIBLE SOCITY
OF SCOTLAND

No. 6 Type.　KOBE JAPAN.　1907.

新約全書目錄

書名	章數	頁
馬太傳福音書	二十八章	一二五九
馬可傳福音書	十六章	一三〇一
路加傳福音書	二十四章	一三二九
約翰傳福音書	二十一章	一三七三
使徒行傳	二十八章	一四〇九
達羅馬人書	十六章	一四五五
達哥林多人前書	十六章	一四七五
達哥林多人後書	十三章	一四九五
達加拉太人書	六章	一五〇九
達以弗所人書	六章	一五一七
達腓立比人書	四章	一五二五
達哥羅西人書	四章	一五三一
達帖撒羅尼迦人前書	五章	一五三七
達帖撒羅尼迦人後書	三章	一五四三
達提摩太前書	六章	一五四七
達提摩太後書	四章	一五五三
達提多書	三章	一五五七
達腓利門書	一章	一五六一
達希伯來人書	十三章	一五六三
雅各書	五章	一五七七
彼得前書	五章	一五八三
彼得後書	三章	一五八九
約翰第一書	五章	一五九三
約翰第二書	一章	一五九九
約翰第三書	一章	一六〇一
猶大書	一章	一六〇三
約翰默示錄	二十二章	一六〇五


（救世主時代）
パレスチン之圖
里馬圖
哩
大
（一名地中海）
海
死海
スリア
アラビヤ
ガリラヤ
サマリヤ
ユダヤ
ペレア
イドマヤ
アンモン
モアブ
ガリラヤ
ゴラニテス
トラコニア
アンチレバヌス
一 アケラヲノ分封ニシテ後ニヤ國ト名ケ國長ノ部地トナリシ所ナリ
二 ヘロデノ分封ナリ
三 ピリポノ分封ナリ
四 ルサニヤノ分封ナリ
（羅馬帝國ノ三分一）

第一章 ニアブラハムの裔なるダビデの裔イエスキリストの系圖

二 アブラハムイサクを生イサクヤコブを生ヤコブユダとその兄弟を生り 三 ユダタマルに由てパレスとザラを生パレスエスロンを生エスロンアラムを生 四 アラムアミナダブを生アミナダブナアソンを生ナアソンサルモンを生 五 サルモンラハズに由てボアズを生ボアズルツに由てオベデを生オベデエツサイを生 六 エツサイダビデ王を生ダビデ王ウリヤの妻に由てソロモンを生 七 ソロモンレハベアムを生レハベアムアビアを生アビアアサを生 八 アサヨサパテを生ヨサパテヨラムを生ヨラムウヅヤを生 九 ウヅヤヨタムを生ヨタムアカズを生アカズヘゼキヤを生 十 ヘゼキヤマナセを生マナセアモンを生アモンヨシアを生 十一 ヨシアバビロンに徙されたる後エホヤキンとその兄弟を生り 十二 バビロンに徙さるゝ時ヨシアエホヤキンシアテルを生シアテルゼルバベルを生 十三 ゼルバベルアビウデを生アビウデエリアキンを生エリアキンアゾルを生 十四 アゾルザドクを生ザドクアキムを生アキムエリウデを生 十五 エリウデエリアザルを生エリアザルマツタンを生マツタンヤコブを生 十六 ヤコブマリアの夫ヨセフを生り此マリアよりキリストと稱るイエス生れ給ひき 十七 其世系を數れバアブラハムよりダビデに至るまで十四代ダビデよりバビロンに徙さるゝ時まで十四代バビロンに徙されしよりキリストまで十四代なり ○ 十八 それイエスキリストの生れ給ふこと左の如し其母マリアはヨセフと聘定を爲るのみにて未だ偕にならざりしさき聖靈に感じて孕しが 十九 其孕たること顯れければ夫ヨセフ義人なる故に之を辱しむることを願ず密に離縁せんと思へり 二十 斯て此事を思念せる時に主の使者かれが夢に現れて曰けるはダビデの裔ヨセフよ汝妻マリアを娶ることを懼るゝ勿その孕る所の者は聖靈に由なり 二一 かれ子を生ん其名をイエスと名くべし蓋その民を罪より救ひんとすれば也 二二 凡てこの事は預言者に託て主の曰たまひし言に 二三 處女は孕りて子を生ん其名をインマヌエルと稱べしと有に應せん爲なり其名を譯れば神われらと偕に在すの義なり 二四 ヨセフ寤より起て主の使者の命ぜし言に遵ひ其妻を

娶たれど二五子の生るゝまで牀を同にせざりき其生れし子をイエスと名けたり

第二章

一夫イエスはヘロデ王の時ユダヤのベテレヘムに生れ給しが其さき博士たち東の方よりエルサレムに來り二曰けるはユダヤ人の王として生れ給る者は何處に在す乎われら東の方にて其星を見たれば彼を拜せんために來れり三ヘロデ王これを聞て痛む又エルサレムの民もみな然り四凡の祭司の長と民の學者とを集てヘロデ問けるはキリストの生るべき處は何所なる乎五答けるはユダヤのベテレヘムなり盖預言者の錄されたる言に

六ユダヤの地ベテレヘムよ爾はユダヤの郡中にて至小きものに非ず我イスラエルの民を牧ふべき君その中より出んと云ればなり七是に於てヘロデ密に博士等を召星の現れし時を詳に問て八彼等をベテレヘムに遣さんとして曰けるは往て嬰兒の事を細に尋これに遇ば我に告よ我も亦ゆきて拜すべしと九かれら王の命を聞て往り前に東の方にて見たりし星かれらに先ちて嬰兒の置所にいたり其上に止りぬ十彼等この星を見て甚く喜び十一既に室に入れば嬰兒の其母マリアと偕に居を見ひれふして寶盒を開て黄金、乳香、沒藥など禮物を獻たり十二博士夢にヘロデへ返る勿との默示を蒙りて他の途より北國に歸れり○十三彼等が去るのち主の使者ヨセフの夢に現れて曰けるは起て嬰兒と其母さを率て埃及に逃て我が爾に示さん時まで彼處に在せ嬰兒を索て殺さんとするなりと云給ひしに十四ヨセフ起て夜嬰兒と其母さを率てエジプトに往十五ヘロデの死るまで其所に止れり是主預言者に託て我わが子をエジプトより召出せりと云給ひしに應せん爲也十六是に於てヘロデ博士に欺られたるを知り大にいかり人を遣して博士に詳く問たる時を度りベテレヘムと其境の內ある二歳以下の嬰兒を悉く殺せり十七即ち預言者エレミヤの言に十八欲き愁み甚く歎くラマに聞ゆるクルル其兒子を歎き其兒子の無により慰むを肯ざるなりと云るは是ヘロデ死しが故也○十九ヘロデ死しかば主の使者ヨセフの夢にエジプトにて現れ曰けるは二十起て嬰兒とその母さを率へイスラエルの地にゆけ嬰兒の生命を索る者ども已に死りと云に彼おきて嬰兒と其母さを率へイスラエルの地に至しが二十一アケラヲ父ヘロデに代てユダヤの王たりと聞ければ彼處に往ことを懼る又夢に告を蒙りてガリラヤの內に遯二十二ナザレと云る邑に至りて居り彼ナザレ人と稱れんと預言者に託て云れたる言に應せん爲なり

第二節

一當時バプテスマのヨハ子來りてユダヤの野に宣傳へて二曰けるは天國は近けり悔改めよ三是は主の道を備その路線を直せよと野に呼る人の聲ありと預言者イザヤが言し人なり四此ヨハ子は身に駱駝の毛衣をき腰に皮の帶をつかれ蝗蟲と野蜜を食物させり五斯時エルサレム及びユダヤの人々の多く來れるを見て彼等に曰けるは蝮の裔よ誰なんぢらに來んさするを受んとてバリサイ及サドカイの人々を斥られたり七バプテスマを授く我より後に來者は我に勝て能力あり我は其履を提にも足ず彼は聖靈と火をもて爾曹にバプテスマを授ん八手に箕を持て其禾場を淨め麥は倉に收めて其糠は消ざる火にて燒べし○十三斯時イエスはヨハ子にバプテスマを受んとてガリラヤよりヨルダンに來り給ふ十四ヨハ子辭て曰けるは我は爾よりバプテスマを受べき者なるに爾反て我に來る乎十五イエス答けるは暫く許せ如此すべての義き事は我儕盡す可あり是において我儕に許せり十六イエスバプテスマを受て水より上れるとき天忽ち之が爲にひらけ神の靈の鴿のごとくくだり其上に來るを見る十七又天より聲ありて此は我心に適わが愛子なりと云り

第四節

一偖イエス聖靈に導かれ惡魔に試られん爲に野に往り二四十日四十夜食ふ事をせず後うみたり三試むる者かれに來りて曰けるは爾もし神の子あらば命じて此石をパンと爲よ四イエス答けるはパンのみにて生るものに非ず唯神の口より出る凡の言に因と錄されたり五是に於て惡魔かれを聖京に携へゆき殿の頂上に立せて曰けるは爾もし神の子ならば己が身を下へ投よ盖なんぢが爲に神その使等に命ぜん彼等手にて支へ爾が足の石に觸ざるやうすべしと錄されたりと六イエス彼に曰けるは

八 からすこ亦縁せり 八惡覺また彼を最高き山に携へゆき世界の諸國とその榮華とを見せて九爾もし俯伏て我を
九 拜せバ此等を悉なんぢに與ふべしと曰けるへサタンよ退け主たる爾の神を拜し惟之にのみ事
十 ふべしと錄されたり十一終に惡覺かれを離れ天使たち來り事ふ〇十二イエス曰子子の囚れし事を聞てが
十一 リヤに往十三ナザレを去ゼブルンとナフタリとの界ある海邊のカペナウンに至て此に居り十四これ預言者
十二 イザヤの言に十五ゼブルンの地ナフタリの地海に沿たる地ヨルダンの外の地異邦人のガリラヤ十六此等の幽
十三 暗になる民へ大ある光なみ死地と死陰に坐する者の上に光いでたりと云しに應せん爲なり〇十七斯時よりイ
十四 エス始て道を宣傳へ天國へ近けり悔改めよと曰たまへり十八イエスがリヤの海邊を歩てペテロと云
十五 シモンその兄弟アンデレと二人にて海に網うてるを見たり彼等を漁る者と爲ん 二十彼等やがて網を棄てイ
十六 エスに從ふ二此より進けるに又外の兄弟二人即
十七 ちゼベダイの子ヤコブと其兄弟 ヨハ子父ゼベダイと僧に舟にて網を補へるを見て之を召しに三彼等も
十八 頓て舟と父とを置てイエスに從へり〇三イエスガリラヤ
十九 傳へつ民の中ある諸の病もろ〳〵の疾を醫しぬ二四そ
二十 へる者皆殊の病また痛惱る者あるひハ鬼に憑たるもの癲癇、癱瘓の病に罹れる者を彼に携來ければ
二一 之を醫せり 二五ガリラヤとデカポリス エルサレムユダヤ ヨルダンの外より多の人々きたり從ふ

第五章

一イエス許多の人を見て山に登り坐し給ければ弟子等も其下に來れり 二イエス口を啓て彼等に敎へ
二 曰けるへ 三心の貧き者へ福なり天國へ即ち其人へ
三 ハ也 五柔和なる者へ福あり其人へ地を嗣ことを得べけれ
四 ば也 六義に渴ごとく我を慕者へ福あり其人へ飽ことを得べければ也 七矜恤ある者へ福なり其人へ矜
五 恤を得べければ也 八心の清き者へ福なり其人へ神
六 を見ことを得べければ也 九和平を求る者は福なり其人へ神
七 らるゝ者へ福なり天國へ即ち其人の者なれば也十二我ために人なんぢらを詬辱また浪害いつはりて各樣

八 の惡言ふいはん其時へ爾曹福なり 十二喜び樂め天
九 に於て爾曹の報賞おほければ也そへ爾曹より前の預
十 言者をも如此せめたりき〇十三爾曹は地の鹽なり鹽もし其味を失はゞ何を以か故の味に復さん後へ用なし
十一 外に棄られて人に踐るゝ而已 十四爾曹は世の光なり山の上に建られたる城は隱ることを得ず 十五燈を燃し
十二 て斗の下におく者なし燭臺に置て家に在すべての物を
十三 然れば人々なんぢらの善行を見て天に在す爾曹の父を榮むべし〇十六われ律法と預言者を廢ろ爲に來れ
十四 りと意ふ勿われ來て之を廢るに非ず成就せん爲なり 十八是故に人もし誡の至微き一を壞り又その如く人に敎なば天國
十五 一重も遺ることなし 十九に於て至微き者と稱れん凡そ之を行ひ且人に敎ふる者は天國に於て大なる者と稱ろべし 二十我なんぢらに
十六 告ん學者とパリサイの人の義よりも爾曹の義ことに勝ずば必ず天國に入ことを能じ〇二一古の人に告て殺
十七 ことを勿れ殺す者へ審判に干らんと言ることを有は爾曹が聞し所なり 二二然ど我あんぢらに告ん凡て故なくして
十八 其兄弟を怒る者へ審判に干らん又その兄弟を愚者よといふ者へ議會に干らん又狂妄よといふ者へ地
十九 獄の火に干るべし 二三是の故に爾もし禮物を拋へて壇に往たる時かしこにて兄弟に恨ることあるを
二十 憶起さゞ 二四その禮物を壇の前に留まづ往て爾の兄弟と和ぎ後きたりて爾の禮物を獻よ 二五爾を
二一 訴ふる者と偕に途間にある時はやく和げよ恐くハ訴ふる者あんぢを審官に付し審官また爾を下吏に付し
二二 遂に爾へ獄に入られん 二六我まことに爾に告ん分釐までも償へざれば必ず其所を出ることを能ざる也〇二七
二三 古の人に告て奸淫することを勿と言ることあるハ爾曹が聞し所なり 二八然ど我なんぢらに告ん凡そ婦を見
二四 て色情を起す者へ中心ですでに姦淫したる也 二九もし右の眼なんぢを跌に陷さゞ抉出して之を棄よ盤五
二五 體の一を失ふへ全身を地獄に投入らるゝよりハ勝れり 三十もし右の手なんぢを跌に陷さゞ之を斷て棄よ盤
二六 五體の一を失ふへ全身を地獄に投入らるゝよりハ勝れり〇三一また曰ることあり凡そ人その妻を出さんと
二七 せバ之に離緣狀を與ふべしと 三二然ど我爾曹に告ん奸淫の故あらで其妻を出す者へ之に奸淫あさしむる

三三 也又出されたる婦を娶る者も奸淫を行ふなり○三三 また古の人に告て偽の誓を立ること勿なんぢ誓ふ
三四 所ゐ必ず主に遂べしと言ること有ゐ爾曹が聞し所なり 三四 然ど我なんぢらに告ん更に誓ごと勿れ天を指て
三五 誓ふ勿れ是神の座位なれば也 三五 地を指て誓ふこと勿これ神の足凳なれば也エルサレムを指て誓ふこと勿こ
三六 れ大王の京城なれば也 三六 爾の首を指て誓ふ勿それ一すぢの髪だに白し黒くすること能ざれば也 三七 爾曹
三七 たゞ是々否々といへ此より過るゐ悪より出るなり○三八 目にて目を償ひ歯にて歯を償へと言ること有ゐ
三八 爾曹が聞し所なり 三九 然ど我なんぢらに告ん悪に敵すること勿れ人なんぢの右の頬を批ば亦ほかの頬をも轉
三九 して之に向よ 四〇 爾を訟て裏衣を取んとする者には外衣をも亦こらせよ 四一 人なんぢに一里の公役を強ゐ
四〇 ば之と偕に二里ゆけ 四二 爾に求る者には予へ借んとする者を郷くる勿れ○四三 爾の隣を愛み仇を悪
四一 ゐしと言ること有ゐ爾曹が聞し所なり 四四 然ど我なんぢらに告ん爾曹の敵を愛み詛ふ者を祝し
四二 曹を悩む者を為に祈禱せよ 四五 如此するゐ天に在す爾曹の父の子さならん為なり夫天
四三 の父ゐ其日を善者にも悪者にも照し雨を義き者にも殺からざる者にも降せ給へり 四六 爾曹おのれを愛する
四四 者を愛するゐ何の報賞かあらん税吏も然せざらん乎 四七 安否を兄弟にのみ問ゐ人より何の過たる事かあ
四五 らん税吏も然せざらん乎 四八 是故に天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし

第六章

一なんぢら人に見せん為に其義を人の前に行ことを慎もし然ずば天に在す爾曹の父より報賞
二 を得じ 二是故に施儕を行とき人の衆を得ん為に會堂や街衢にて偽善者の如く貌を己が前に吹しむる勿れ我
三 まことに爾曹に告ん彼等ゐ既にその報賞を得たり 三なんぢ施儕をするとき右の手の為ことを左の手に知すな
四 勿れ 四如此するゐ其施濟の隠れんが為なり然ば隠たるに鑒たまふ爾の父ゐ明顯に報たまふべし○五なんぢ
五 祈る時に偽善者の如くなる勿れ彼等ゐ人に見られんが為に會堂や街衢の隅に立て祈ことを好われ誠に爾曹に
六 告ん彼等ゐ既にその報賞を得たり 六なんぢ祈る時ゐ殿戸なる室にいり戸を閉て隠微たるに在す爾の父に祈れ
七 隠微たるに鑒たまふ爾の父ゐ明顯に報たまふべし○七なんぢ祈る時ゐ異邦人の如く重複語を言なかれ彼

の父の凡て此等のものよ必ず關ることを知たまへり三三 爾曹まづ神の國と其義とを求よ然ば此等のものへ皆なんぢらに加らるべし三四 是故に明日の事を慮るな明日へ明日の事を慮わづらへ一日には一日にて足り

第七章

一 人を譏すること勿れ恐くは爾曹もまた譏せられん二 爾曹が人を量ることく己も量らるべし三 なんぢ兄弟の目にある梁木を視て己が目にある梁木を知らざるは何ぞや四 己の目に梁木のあるに如何で兄弟にむかひて爾が目にある物屑を我に取せよと曰ことを得んや五 僞善者よ先おのれの目より梁木をとれ然ば兄弟の目より物屑を取得るやう明かに見べし六 犬に聖物を與ふる勿また豕の前に爾曹の眞珠を投與る勿れ恐くは足にて之を蹂ふりかへりて爾曹を噬やぶらんと七 求よ然ば與られ尋よ然ば遇ん叩よ然ば開かるゝことを得ん八 盡すべて求る者へ得へ尋る者へ遇へ叩ん者へ開かるゝ可ればあり九 爾曹のうち誰か其子パンを求んに石を予へんや十 また魚を求んに蛇を予んや十一 然ば爾曹惡き者あから善賜物を其子に與ふるを知ましてや天に在す爾曹の父へ求る者に善物を予ざらんや十二 是故に凡て人に爲られんと欲ことく爾曹また人にも其ごとくなせ十三 窄き門より入よ汎濶にて滅る路へ潤その門へ大なり此より入もの多し十四 命に至る路へ窄その門へ小し其路を得もの少あり○十五 僞の預言者を謹めよ彼等へ綿羊の姿にて爾曹に來れども内へ殘狼なり十六 是その果に由て知べし雛が荊棘より葡萄をとり蒺藜より無花果を採ことをせん十七 凡て善樹へ善果を結び惡樹へ惡果を結べり十八 善樹へ惡果を結ばず惡樹へ善果を結ぶこと能ざる也十九 凡そ善果を結ざる樹へ斫れて火に投入らる二十 是故に其果に由て之を知べし○二一 我を召て主よ主よと曰もの皆に遍ふ者のみなり二二 其日われに謂て主よ主よ我なんぢの名に託て預言をなし爾の名に託て鬼を逐出し爾の名に託て多くの異能を行しに非すやと云もの多からん二三 其時われらに告れ曾て爾曹を知ず惡をなす者よ我を離去と曰ん二四 是故に凡て我この言を聽て行ふ者を磐の上に家を建たる智人に譬ん二五 雨ふり大水いで風ふきて其家を撞ども倒ることなし是磐を基礎と爲たれば也二六 凡て我この言を聽て行ざる者を沙の上に家を建たる愚なる人に譬ん二七 雨ふり大水いで風ふきて其家を撞ば終にへ倒てその傾覆おほいなり二八 イエス此等の言を語竟たまへるとき衆人其數を駭きあへり二九 そへ學者の如あらず權威を有る者の如く教たまへば也

第八章

一 イエス山を下しとき多の人々これに從へり二 癩病の者きたり拜して曰けるへ主もし旨に適ふきへ我を潔なし得べし三 イエス手を伸かれに拂て曰けるへ慎て人に告る勿れ唯ゆきて己を祭司に見せ且モーセが命じし禮物を献て彼等に證據をせよ○五 イエスカペナウンに入しとき百夫の長こたへけるへ主よ我僕癱瘓をやみ家に臥ねて甚だ惱めり七 イエス曰けるへ我ゆきて之を醫すべし八 百夫の長こたへけるへ主よ我なんぢを我が屋下に入奉るへ恐れ多し唯一言を出し給へ我僕は愈ん九 蓋われ人の權威の下にある者なるに我下に赤兵卒ありて此に往と曰ば往ゆき彼に來れと曰ば來る我僕に此を行と曰ば即ち行が故なり十 イエスこれを聞て奇みしたがひくる人々に曰けるへ我まことに爾曹に告んイスラエルの中にだに未だ斯る篤信に遇ざる也十一 われ爾曹に告ん多の人々東より西より來てアブラハム イサク ヤコブと偕に天國に坐し十二 國の部子へ外の幽暗に逐出され其處にて哀哭切齒することあらん十三 イエス百夫の長に往ねんちが信仰の如く爾に成べしと曰たまへる其時に僕へ愈たり○十四 イエス ペテロの家に入その岳母の熱を煩ひ臥ねたるを見て十五 その手に捫ければ即ち熱されり婦おきて彼等に事ふ十六 日暮たるとき人々鬼に憑れたる者を多く携來けれバイエス言にて鬼を逐出し病ある者を悉く醫せり十七 預言者イザヤに托て自ら我儕の疫を受われらの病を負と曰たまひしに應せんが爲なり○十八 偖イエス多の人々の己を環るを見て弟子に命じ岡の岸に往んとし給しに十九 ある學者きたりて曰けるへ師よ何處へ行給ふとも我從ん二十 イエス之に曰けるへ狐へ穴あり天空の鳥へ巢あり然ど人の子へ枕する所なし二一 また弟子の一人いひけるへ主よ先ゆきて父を葬ることを我に

容せ　三三　イエス曰けるへ我に從へ死たる者に其死し者を葬らせよ〇三三　イエス舟に登れゝ弟子等も之に從ふ　二四　此とき大ある颶風おこりて舟を蔽ばかりある浪たちしにイエスへ寢たり　二五　弟子等これに近きて醒し曰けるへ主よ救たまへ我儕亡んとす　二六　イエス彼等に曰けるへ此へ如何なる人ぞ風も海も之に從ひたり〇　二八　イエス向の岸なるガダラ人の地に至れるとき鬼に憑れたる二人のもの墓より出て彼を迎ふ猛こと甚しくして其途を人の過ること能へざりしほど也　二九　かれら呼叫て曰けるへ神の子イエスよ我儕なんぢと何の與あらん乎いまだ時いたらざるに我儕を責んとて此處に來るか　三〇　遠はなれて家の多のむれ食し居けれゝ　三一　鬼イエスに求て曰けるへ若われらを逐出さんとならゝ家の群に入しに總のむれ山坂より逸て湖にいり水に死たり　三三　牧者ども邑に逃走て此事と鬼に憑れたりしものの事を告れゝ　三四　イエスに逢んとて邑の者擧て出きたり彼を見て此境を出んことを願へり

第九章

一　イエス舟に登わたりて故邑に至けれゝ　二　癱瘋にて床に臥たる者を人や舁來れりイエス彼等が信ずるを見て癱瘋の者に曰けるへ子よ心安かれ爾の即赦れたり　三　ある學者たち心の中に謂けるへ此人へ瀆言を言ふと　四　イエスその惡念を知て曰けるへ爾曹いかなれゝ心に惡を懷ふや　五　爾の即赦されたりと言と起て歩めと言と孰か易き　六　それ人の子地にて罪を赦すの權あることを爾曹に知せんとて途に癱瘋の者に起て床を舁て家に歸れと曰けれゝ　七　起て其家に歸りぬ　八　人ゝこれを見て奇み此の如き權を人に賜し神を崇たり〇　九　イエス此より進往マタイと名くる人の稅關に座し居けるを見て我に從へと曰けれゝ起て從へり　十　イエス彼が家に食すること時稅吏即ある人おほく來りてイエス及その弟子と偕に食する乎　十一　パリサイの人これを見てその弟子に曰けるへ爾曹の師へ何故稅吏や即ある人と偕に食するや　十二　イエス聞て彼等に曰けるへ康強なる者へ醫者の助を須ず唯病ある者これを需　十三　われ矜恤を欲て祭祀を欲ずといふ此へ如何なる意か往て學ぶべし夫わが來るへ義人を招きて悔改させんが爲なり〇　十四　其時ヨハネの弟子イエスに來て曰けるへ我儕とパリサイの人へしばゝ斷食するに師の弟子の斷食せざるへ何故ぞ　十五　イエス彼等に曰けるへ新郎の友その新郎と偕に居うちへ哀むことを得んや將來新郎をひきさらるゝ日きたらん其時にへ斷食すべき也　十六　新き布を以て舊き衣を補ふ者へあらじ蓋つくろふ所のもの反て之を壞その縫ひ尤も甚だしからん　十七　また新き酒を舊き革嚢に盛る者へあらじ若しかせば嚢はりさけ酒も亦壞らん新酒を新嚢に盛なゝ兩ながら存べし〇　十八　イエス彼等に此事を言る時ある宰きたり拜して曰けるへ我女いま既に死り來て彼に手を按たまへゝ生べし　十九　イエス起て彼に從ひ其弟子と偕に往　二十　十二年血漏を患へる婦うしろに來て其衣の裾に捫れり　二一　蓋もし衣にだにも捫らゝば愈なんと思へばなり　二二　イエス宰の家に入しに笛ふく者および多の人の泣咷を見て　二四　之に曰けるへ退け女へ死るに非ず寢たるのみ人ゝイエスを哂笑ふ　二五　彼等を出しこと後いりて其手を執しに女起たり　二六　此聲名あまねく其地に播りぬ　二七　イエス此を去とき二人の瞽者したがひて呼曰けるへダビデの裔よ我儕を憐み給へ　二八　イエス家に入しに瞽者きたりければ彼等に曰たまひけるへ我此事を行得ると信ずるや答けるへ主よ然り　二九　イエス彼等の目に手を按て爾曹の信ずる如く爾曹に成べしと曰けれゝ　三十　其目ひらけたり　イエス嚴く戒て之に曰けるへ愼て人に知する勿れ　三一　然ごも彼等いでゝ遍く其地にイエスの名を播めたり〇　三二　瞽者の出るとき人ゝ鬼に憑れたる喑啞をイエスに携來りしに　三三　鬼おひ出されて喑啞ものいへり衆人あやしみ曰けるへイスラエルの中にも未だ斯る事へ見ざりき　三四　パリサイの人曰けるへ彼鬼の王に賴て鬼を逐出せる也〇　三五　イエス遍く都邑を廻其會堂にて教をなし天國の福音を宣傳へ民の中なる諸の病すべての疾を愈せり　三六　牧者なき羊の如く衆人なやみ又流離になりし放に之を見て憫みたまふ　三七　其とき弟子等に曰給けるへ收穫は多く工人は少し　三八　故に其稼主に工人を收穫場に送んことを願ふべし

第十章

一 偖イエスその十二弟子をよび彼等に汚たる鬼を逐いだし又すべての病すべての疾ひを醫す權を賜
二 へり 二その十二使徒の名は左の如さし首にはペテロと名けし シモンその兄弟アンデレ ゼベダイの子ヤ
三 コブその兄弟 三ピリポ バルトロマイ トマス 稅吏マタイ アルパイの子なるヤコブ タッダイ 四名
四 くろレッパイ カナンのシモン イスカリオテのユダ是すなわちイエスを賣しゝ者なり 五イエスこの十二を
五 遣さんとして命じ曰けるは異邦の途に往おかれ又サマリヤ人の邑にも入なかれ 六惟イスラエルの家の迷へる
六 羊に往け往て天國近に在と宣傳よ 八病の者を醫し癩病を潔し死たる者を甦らせ鬼を逐出すことをせ
七 よ 閑價なしに受たれば亦價なしに施すべし 九閑曹金または銀または錢を貯へ帶る勿れ 十行嚢二
八 の裏衣履杖も亦然そは工人の其食物を得ほ宜なり 十一凡そ鄉邑に至らば其中の好人を訪て出るま
九 で其處に留れ 十二人の家にいらば其平安を得べき者ならば閑曹の願ふ平安は其家
十 に至らん若し平安を受へからざる者あらば閑曹の願ふ平安は閑曹に歸るべし 十四 もし閑曹を接ず閑曹の言を
十一 聽ざる者あらば其家または其邑を去さき足の塵を拂へ 十五われ誠に閑曹に告ん審判の日到ればソドムとゴモラ
十二 の地は此邑よりも却て易からん〇十六われ閑曹を遣すは羊を狼の中に入るが如し故に蛇の如く智く鴿の如
十三 く馴眞かれ 十七 愼て人に戒心せよ蓋人あんぢらを集議所に解し又その會堂にて鞭つべければ也 十八又わ
十四 が緣故に因て侯伯および王の前に曳るべし是かれらと異邦人に證をあさんが爲なり 十九人あんぢらを解さば
十五 如何なにを言んと思ひ煩ふ勿れ其とき言べき事は閑曹に賜ふべし 二十是なんぢら自ら言に非ず閑曹の父
十六 の靈その衷に在て言あり 二一兄弟は兄弟を死に付し父は子を付し子は兩親を訴へ且これを殺さしむべし
十七 二又あんぢら我名の爲に凡の人に憎れん然ど終まで忍ぶ者は救はるべし 二三この邑にて人なんぢらを責な
十八 ば他の邑に逃れよ我まことに閑曹に告ん閑曹イスラエルの諸邑を廻盡さゝる間に人の子は來るべし 二四弟
十九 子は其師の如く僕は其主の如あらば足ぬべし若し人主
二十 を呼てベルゼブルと云ば況て其家の者をや 二六是故に彼等を懼るゝこと勿そへ掩れて露れざる者なく隱て知
二一 れざる者おければ也 二七われ幽暗に於て閑曹に告しことを光明に遞よ耳をつけて聽しことを屋上に宣播めよ
二二 二八身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ勿れ唯あんぢら魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れ
二三 よ 二九二羽の雀は一錢にて售に非ずや然るに閑曹の父の許おくれば其一羽も地に隕ること有じ 三十閑曹の頭の
二四 髮また皆かぞへらる 三一故に懼るゝ勿れ閑曹は多の雀よりも優れり 三二然れば凡そ人の前に我を識と言ん者
二五 を我も亦天に在す我父の前に之を識と言ん 三三人の前に我を
二六 識ずと言べし〇 三四地に泰平を出ん爲に我來れりと意なかれ泰平を出さんとに非ず又を出さん爲に來れり
二七 三五夫わが來るは人を其父に背かせ女を其母に背かせ媳を其姑に背かせんが爲なり 三六人の敵は其家の
二八 者あるべし 三七我よりも父母を愛む者は我に協ざる者な
二九 り 三八その十字架を任て我に從ざる者も我に協ざる者なり 三九その生命を得る者は之を失ひ我ために生命
三十 を失ふ者ハ之を得べし 四十閑曹を接る者ハ我を接る者なり 四一預言者
三一 なるを以その預言者を接る者は預言者の報賞をうけ 四二わが弟子なるを以て小き一人の者に冷なる水一杯にても飲する者ハ誠に閑曹に告ん必ず其報
三二 賞を受 四三わが弟子なるを以て小き一人の者に冷なる水一杯にても飲する者ハ誠に閑曹に告ん必ず其報
三三 賞を失はじ

第十一章

一 イエスその十二弟子に示畢しき此處を去り道を教へ廣んが爲に彼等の諸邑に往り〇二偖
二 ヨハ子獄にてキリストの行し業を聞その弟子二人を彼に遣して 三曰せけるは來べき者は爾なるか又われら
三 他に待べき乎 四イエス彼等に答て曰けるは爾曹が聞と見ところの事をヨハ子に往て告よ 五瞽者ハみ眸者
四 はあゆみ癩病人ハ潔まり聾者ハきゝ死たる者ハ復活され 貧者ハ福音を聞せらる 六れそ我ために躓かざ
五 る者は福なり〇 七衆等の歸れる後イエスヨハ子の事を人々に曰けるハ爾曹何を見んとて野に出しや風に
六 動さるゝ葦なる乎 八然ば爾曹何を見んとて出しや美服を著たる人なるか美服を著たる者ハ王
七 宮に在 九然ば何を見んとて出しや預言者あるか然われ爾曹に告ん彼ハ預言者よりも卓越たる者なり 十夫なん

ちに先ちて道を備る我が使者を我なんちの前に遣んと錄されたるハ即ち是なり十一誠に爾曹に告ん婦の生たる者の中いまだバプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき然ど天國の最小き者も彼よりハ大なる也十二バプテスマのヨハネの時より今に至るまで人ヤ勵て天國を取んとす勵たる者ハ之を取り十三それ凡の預言者と律法の預言したるハヨハネの時までなれバ也十四若なんぢら我言を承ることを好まバ來べきエリヤハ是なり十五耳ありて聽ゐる者ハ聽べし○十六我この世を何に譬んヤ童子街に坐し其侶を呼てせわれら笛ふけども爾曹をどらず哀をすれども爾曹胸うたずと云に似たり十八蓋ヨハネ來て食ふことを飲ことをせざれバ鬼に憑れたる者なりと人ヤ言り十九人の子きたりて食ふことをし飲ことを爲れバ又食を嗜み酒を好む人稅吏罪ある者の友也さいふ然ど智慧は智慧の子に義と爲らるゝ也○二十厥時イエス多の異能を行たまひたる諸邑の悔改めざるに由て責いひけるハ二十一あゝ禍なる哉コラジンよ噫禍なる哉ベテサイダよ爾曹の中に行し異能を若ツロとシドンに行しなるべしニ十二われ爾曹に告ん審判の日にはツロとシドンの刑罰は爾曹よりも却て易からん二十三既に天にまで擧られしカペナウムよ又陰府に落さるべし蓋なんぢに行し異能を若ソドムに行しならバ今日までも倘保存しならん二四我なんぢらに告ん審判の日にソドムの地ハ爾よりも却て易かるべし○二五其時イエス答て曰けるハ天地の主なる父よ此事を智者聰者に隱して赤子に顯したまふを謝す二六父よ然それ此の如は聖旨に適るなり二七父ハ我に萬物を予たまへり父の外に子を識者なし○二八凡て勞たる者また重を負る者は我に來れ我爾曹を息ません二九我は心柔和にして謙遜者なれバ我軛を負て我に學んぢら心に平安を獲べし三十蓋わが軛は易わが荷は輕ければ也

第十二章

一當時イエス安息日に麥の畑を過しが其弟子たち飢て穗を摘食はじめたり二パリサイの人これを見てイエスに曰けるは爾の弟子は安息日に爲まじき事を行り三之に答けるはダビデおよび從に在し者の饑しとき行し事を未だ讀ざる乎四即ち神の殿に入て祭司の他は已および從にをる者も食ふまじき供のパンを食へり五また安息日に祭司ハ殿の內にて安息日を犯せども罪なき事を律法に於て讀ざる乎六われ爾曹に告ん殿より大なるもの茲に在七われ矜恤を欲ずとは如何なることか之を知ば罪なき者を罪せざるべし八それ人の子は安息日の主たるあり○九此を去て彼等の會堂に入しに十一手なへたる人ありければ彼等イエスを訴へんとて之に問けるは安息日にハ醫すことを行べきや乎十一彼等に曰けるは爾曹の中に一の羊を有る者あらんに若その羊安息日に坑に陷らバ之を擧上ざる乎十二人は羊より優ること幾何ぞや然ば安息日に善を行は宜十三遂にその人に爾が手を伸よと曰けれバ伸せり即ち他の手の如く愈十四パリサイの人いでゝイエスを殺さんと謀れり十五イエス之を知て此を去しに多の人ヤこれに從ふ凡て疾病ある者をみな愈し十六我を人に露すこと勿れと戒たり十七これ預言者イザヤの云し言に十八視よ我が選し我僕ヅあはち我心に適たる我が愛む者われ之に我靈を賦ん彼異邦人に審判を示すべし十九彼は競ことなく喧ことなし人街に於て其聲を聞ことあらじ二十審判をして勝さげしむるまでは傷る葦を折ことなく煙れる麻を熄ことあらじ二一異邦人も亦その名に賴べしと有に應せん爲あり○二二爰に鬼に憑たる聾の瘖なる者をイエスの所に携來りければ此聾の瘖を醫して言ひ見るやうに爲り二三衆人みな奇みて曰けるは此人ハダビデの裔にハ非ざる乎二四パリサイの人きゝて曰けるは此人ハ鬼の王ベルゼブルを役ふに非ざれバ鬼を逐出ことなし二五イエスその意を知て彼等に曰けるハ凡て其國いで立んや二七若われベルゼブルに由て惡鬼を逐出さバ爾曹の子弟ハ誰に由て之を逐出すや夫かれらハ爾曹の裁判人となるべし二八若われ神の靈に由て鬼を逐出しゝならバ神の國ハや爾曹に至れり二九また勇士をまづ縛らざれバ如何で其家に入その家具を奪ふことを得んや縛て後に其家を奪ふべし三十我と偕ならざる者ハ我に背き我と偕に敵ざる者ハ散すなり三一是故に爾曹に告ん人ヤの凡て犯す所の罪と神を瀆ことハ赦れん然ど八ヤの聖靈を瀆ことハ赦るべからず三二言を以て人の子に背く者ハ赦るべし然ど言を以て聖靈に背く者ハ今世に於ても亦來世に於ても赦るべからず

三三 或ハ樹をも善とし其果をも善とせよ或ハ樹をも悪とし其果をも悪とせよ夫樹ハ其果に由て知るゝなり
三四 あゝ蝮の裔よ惡ものゝ汝等いかで善を言ことを得んや夫心に充るより口に言るゝ者なれバ也 三五 善人
三六 ハ心の善庫より善ものを出し惡人ハその惡庫より惡ものを出せり 三六 われ爾曹に告ん凡て人のいふ所の
三七 虚言ハ審判の日に之を訴へざるを得じ 三七 それ爾その言に由て義とせられ又其いふ言に由て
三八 罪ありとせらるゝ也〇 三八 此時ある學者とパリサイの人答て曰けるハ師よ休徴をなして我儕に見せんことを
三九 爾に請ふ 三九 答て彼等に曰けるハ奸悪なる世ハ休徴を求れども得すして曰けるハ四四 我が出し家に
四〇 じ四十 夫ヨナが三日三夜魚の腹の中に在しハ如く人の子も三日三夜地の中に在べし 四一 二子べの人審判の日に
四一 共に起て今の世の罪を定めん彼等ハヨナの誨に由て悔改たり夫ヨナより大なる者こゝに在 四二 南の女王
四二 さバきの日に共に起て今の世の罪を定めん彼ハ地の極よりソロモンの智慧を聽んとて來れり夫ソロモンより
四三 大なるもの此にあり 四三 惡鬼人より出て旱たる地を巡り安息を求れども得すして曰けるハ 四四 我が出し家に
四四 歸らん既に來しに空虚にして掃浄り飾れるを見 四五 遂に往て己よりも惡き七の惡鬼を携へ偕に入て此に居
四五 バその人の後の患狀ハ前よりも更に惡かるべし此おしき世もまた此の如ならん 四六 イエス人々に語をろ時
四六 その母と兄弟かれに言んとて外に立けれバ 四七 或人イエスに曰けるハ爾の母と兄弟なんぢに言んとて
四七 して外に立り 四八 イエス告し者に答て曰けるハ我母ハ誰ぞ我兄弟ハ誰ぞや 四九 手を伸その弟子を指て曰け
四八 ろハ是わが母わが兄弟なり 五十 蓋すべて我が天に在す父の旨を行ふ者ハ是わが兄弟わが姉妹わが母なれ
四九 バ也

第十三章

一 當日イエス家を出て海邊に坐せしに 二 多の人々彼に集來れバイエスハ舟に登て坐し凡
二 の人ハ岸に立り 三 イエス譬を以て多端の言を人々に語ぬ種まく者播に出しが 四 播るとき路の旁に遺し種
三 あり空中の鳥きたりて啄み盡せり 五 また土うすき磽地に遺し種あり直に萌出たれど 六 日の出しとき灼れしが
四 バ根おきが故に槁たり 七 また棘の中に遺し種あり棘そだちて之を敵ぜり 八 また沃壤に遺し種あり實を結べる

九 こと或ハ百倍あるひハ六十倍あるひハ三十倍せり 九 耳ありて聽ゆる者ハ聽べし 十 弟子等きたりて彼に
十 曰けるハ何故に譬をもて彼等に語り給ふや 十一 答て曰けるハ爾曹にハ天國の奥義を知ことを予たまへど彼
十一 等にハ予へ給ざれバ也 十二 それ有る者ハ予られてなほ餘あり無有者ハその有る者をも奪る〻也 十三 彼等ハ視
十二 ても見ず聽ても聽ず悟ざるが故に我譬を以て彼等に語れり 十四 イザヤの預言者に爾曹ハ聽ども悟らず視ども
十三 見ず 十五 蓋この民目にて見耳にて聞心にて悟り改めて我に醫されんことを恐その心を頑し耳を蔽ひ目を
十四 閉たりと云しに應へり 十六 然ど爾曹の目ハ見爾曹の耳ハ聞が故に福なり 十七 われ誠に爾曹に告ん多の預言
十五 者と義人ハ爾曹が見ところを見んとしたりしが得ず爾曹が聞ところを聞んとしたりしが聞ことを
十六 を得ざりき 十八 故に爾曹播種の譬を聽 十九 天國の教を聞て悟らざれバ惡鬼きたりて其心に播れたる種
十七 を奪ふ是路の旁に播たる種なり 二十 磽地に播たる種ハ是教を聽て速かに喜び受れども 二一 己に根なけ
十八 れバ暫時のみ教の爲に患難あるひハ迫らるゝ事の起る時ハ忽ち道に礙く者なり 二二 また棘の中に播れたる
十九 種ハ是教を聽ども此世の思慮と貨財の惑に教を聽て悟り實を結ざる者あり 二三 沃壤に播れたる種ハ是
二十 教を聽て悟る者なり〇 二四 また譬を彼等に示
二一 して曰けるハ天國ハ人畑に美種を播に似たり 二五 人々の寢たる間に其敵きたり麥の中に稗子を播て去り
二二 苗はへ出て實たるとき稗子も現れたり 二七 主人の僕きたりて曰けるハ主よ畑にハ美種を播ざりしか如
二三 何して稗子ある乎 二八 僕に曰けるハ敵人これを行り 二九 否おそらくハ爾曹稗子を拔あつめんとて麥をも共に拔べし 三十 收穫まで二ながら長おけ我かり
二四 いれの時まづ稗子を拔集て焚んが爲に之を束れ麥をバ我倉に收よと刈者に言ん〇 三一 また譬を彼等に示し
二五 曰けるハ天國ハ芥種の如し人これを取て畑に播バ 三二 萬の種より小けれども長てハ他の草より大にして
二六 天空の鳥きたり其枝に宿ほどの樹となる也〇 三三 また譬を彼等に語けるハ天國ハ酵酵の如し婦これをとり三
二七 斗の粉の中に藏せバ悉く膨發すなり 三四 イエス譬をもて凡て此等の事を衆人に語たまへり譬にあらざ

れば語り給へず三これ預言者に託て我醫を設て口を啓き世の始より隱たる事を言出さんと云れたるに應
せん爲なり○三六遂にイエス衆人を歸して家に入り其弟子きたりて曰けるへ畑の稗子の譬を我儕に解た
まへ三七之に答て曰けるへ美種を播者へ人の子なり三八畑へこの世界なり美種へ是天國の諸子なり稗子
へ惡魔の子類なり三九之をまく敵へ惡魔なり收穫へ世の末なり刈者へ天の使等なり四十稗子の斂て火に
焚る如く此世の末に於ても此の如くあるべし四一人の子その使者たちを遣して其國の中より凡て躓礙ござ
者また惡をなす人を斂て四二之を爐の火に投入るべし其處にて哀哭切齒すること有ん四三此とき義人へ其
父の國に於て日の如く輝かん耳ある者へ聽べし○四四また天國へ畑に藏たる寶の如し人みいださ
ば之を秘し喜び歸り其所有を盡く賣て之を買なり○四五また天國へ好眞珠を求んとする商人の如
し四六一の値たかき眞珠を見出さば其所有を盡く賣て之を買なり○四七また天國へ海に投る網の
如し四八既に盈れば岸に曳あげ坐てその嘉ものを器にいれ惡ものを棄るなり四九世の末に於てもも
此の如ならん天の使等いでゝ義者の中より惡者を取わけ五十之を爐の火に投入べし其處にて哀哭切
齒するにこと有ん○五一イエス彼等に曰けるへ此事を皆悟しや彼に曰けるへ主よ然五二イエス彼等に曰けるは
然ば天國について敎られたる學者へ新しき物と舊き物とを其庫より出す家の主の如し○五三イエス此譬を
言畢て此を去ぬ五四其故土にいたり會堂にて敎しに人々奇み曰けるへ此人の智慧と異なる能へ何處
より來るや五五これ木匠の子にあらずや其母かマリア其兄弟へヤコブヨセシモンユダに非ずや五六其妹
等へ皆我儕と偕に在に非ずや然ろに此人の凡て此等の事へ何處より來しや五七遂に厭て之を棄イエス彼等に
曰けるへ預言者へ其故土其家の外に於て尊まれざることなし五八彼等が信ずることなきに由て多の異
ろる能を此に行給へざりき

第十四章

一其ころ分封の君ヘロデイエスの聲名を聞てこの僕に曰けるへ是バプテスマのヨハ子なり彼死
より甦りたり故に異なる能を行ふなり二前にヘロデその兄弟ヒリポの妻ヘロデヤの事に由てヨハ子を捕
へ縛て獄に入たり四此ヘヨハ子ヘロデに此嬪を娶るへ宜からずと云しに因五彼ヨハ子を殺さんと欲ど
民これを預言者とするにより彼等を懼たりしが六ヘロデ誕生の日を祝へるに時ヘロデヤの女その座上にて舞
をなしヘロデを悅ばせければ七何なる物にても求に任て予んとヘロデ之に誓たり八女その母の勸ありしに
因バプテスマのヨハ子の首を盆に載て此に賜れと曰九王憂けれども既に誓たると席に列れる者の爲に予る
ことを命じ十即ち人を遣し獄に於てヨハ子の首を斬せ十一その首を盆に載て女に予ければ女へ之を其母
に捧たり十二ヨハ子の弟子等來りて屍を取これを葬り往てイエスに告十三イエスこれを聞て人をさけ舟に
登て其處を去さびしき處に往給ひしが衆人きゝて歩行にて彼に從へり○十四イエス出て多の人を見て之を憫
み其病る者を醫せり十五日くるゝ時其弟子きたりて曰けるへ此へ寂寞ところにして時もへや遲し諸邑に往て
自ら食を求させん爲に人々を去しめよ十六イエス彼等に曰けるへ人々往ずとも可爾曹之に食を予よ
十七答けるへ我儕此にたゞ五のパンと二の魚あるのみ十八イエス曰けるへ其を此に携來れ十九遂に衆人に命
じて草の上に坐しめ五のパンと二の魚をとり天を仰て謝しパンを擘て弟子にあたふ弟子之を衆人に予ぬ二十
みな食て飽其餘たる屑を拾しに十二の籠に盈たり二一食し者へ婦と幼童の外凡そ五千人なりき○二二頃
てイエス衆人を歸さんとして其弟子を强て舟にのせ前の岸へ先に渡しむ二三斯て衆人を歸しければ祈禱せん
とて密に山に上り日暮て獨そこに在せり二四舟へ海中に在て逆風の爲に浪に漂へさる二五夜の四時ごろイ
エス海の上を歩て之に至しに二六弟子其海の上を歩るを見て驚き此へ變化の物ならんと曰て懼れ叫たり二七
イエス頓て彼等に曰けるへ主よ若し爾ならば我に命じ水を履て爾の所に至しめよ二八ペテロ答て曰けるへ主よ我なり懼るゝ勿れ二九來と曰給ひければペテロ舟より下てイエスの所に至んとて浪の上を歩たれ
ど三十風の烈きを見て懼れ沈かゝりければ主よ我を救たまへと曰三一イエス頓て手を伸之を執て曰けるへ信
仰うすき者よ何ぞ疑ふや三二偖に舟に登けれバ風しづまりぬ三三舟に居し者ちかよりて彼を拜し曰けるへ誠
に爾へ神の子なり○三四遂に渡てゲ子サレの地に到しかバ三五其處の人々イエスを識て遍く四方に人を遣

し凡て病の者を携へ來らしむ 三六 只其衣の裾に捫らんことをイエスに願へり捫し者へ則ち愈されたり

第十五章 一時にエルサレムの學者とパリサイの人イエスに來て曰けるへ 二爾の弟子古の人の遺傳を犯へ何故ぞ蓋食する時に其手を洗ざれ〻也 三答て彼等に曰けるへ爾曹へ亦なんぢらの遺傳によりて神の誡をかすなにゆゑぞ 四それ神いましめて爾の父母を敬へ又父母を詈る者へ殺さるべしと宣給へり 五然るに爾曹へ犯へ何故ぞ 六その父母を敬へずとも可とす斯て爾曹遺傳により神の誡を廢くせり 七偽善者よイザヤへ能なんぢらに就て預言し 八此民へ口にて我に近き唇にて我を敬へども其心へ我に遠かり 九人の誡を教となして徒らに我を拜すと云り 十イエス人々を召て彼等に曰けるへ聽て悟れ 十一口に入るものへ人を汚さず口より出るもの是人を汚すあり 十二弟子きたりてイエスに曰けるへパリサイの人この言を聞て厭棄るを爾知か 十三答て曰けるへ我が天の父の植ざる者へみな拔るべし 十四彼等を棄おけ瞽者の相するは瞽者なり若瞽へしひのもの エスに答て曰けるへ此譬を我儕に解たまへ 十六イエス曰けるへ爾曹も未だ悟ざる乎 十七凡て口に入るものへ腹を運て則に落るを未だ知ざるか 十八口より出るものへ心より出これ人を汚すもの也 十九蓋心より出るは悪念 凶殺 奸淫 苟合 盜竊 妄證 謗讟 二十 此等へ人を汚すものなり然ど手を洗ずして食ふへ人を汚さず 二一イエス此を去てツロとシドンの地に往けるに 二二其地に往るカナンの婦いで〻呼へり曰けるへ主よダビデの裔よ我を憫み給へ我むすめ鬼に憑れて甚く苦めり 二三イエス一言も彼に答ざりしかば其弟子きたり請て曰けるへ我儕の後より呼へるが故に彼を去せ給へ 二四答て曰けるへイスラエルの家の迷へる羊の外に我へ遣されず 二五婦きたり拜して曰けるへ主よ我を助たまへ 二六答けるへ兒女のパンを取て犬に投與ふるへ宜からず 二七婦いひけるへ主よ然ど犬もその主人の牖より落る屑を食なり 二八遂にイエス答て曰けるへ婦よ爾の信仰へ大なり願の如く爾に成べし此時より其女いえたり 二九イエス此を去がリヲヤの海邊にゆき山に登りて坐せり 三十多の人々跛者瞽者瘠者殘缺者および各樣の疾病ある者を伴ひきたりイエスの足下に置ければ即ち之を醫しぬ 三一是に於て瘖者へものいひ殘疾へいえ跛者へあゆみ瞽者へ見たるを人々見て奇みイスラエルの神を榮たり 三二イエスその弟子を呼て曰けるへ我この衆人を憫む彼等われと偕に居ること三日にして食ふものなし飢させて去しむることを欲ず恐くへ途間にて惱ん 三三其弟子かれに曰けるへ曠野にて此多くの人に飽するほどのパンを何處より得んや 三四イエス人々に命じて地に坐しめ 三五七と些少の魚あり 三六イエス人々に命じて地に坐しめ 三七七と些少の魚あり 三六七のパンと魚を取て謝し之を擘て其弟子に予しかば弟子これを人々に予ふ 三七食てみな飽たり餘の屑を拾しに七の籃に盈り 三八之を食るもの婦と孩子の外に四千人ありき 三九イエス人々を去しめ舟に登てマグダラの境に至れり

第十六章 一パリサイとサドカイの人きたりてイエスを試んとて天の休徴を我儕に見せよと曰ければ 二彼等に答けるへ爾曹暮にへ夕紅に由て晴ならんと言 三晨にへ朝紅また曇に由て今日へ雨ならんといふ僞善者よ空の景色を別ことを知て時の休徴を別ち能へざる乎 四姦惡なる世へ休徴を求ることも預言者ヨナの休徴のほか休徴を予られじ遂に彼等を離れて去ぬ 五その弟子むかふの岸に到しにパンを携ふることを忘たり 六イエス彼等に曰けるへ愼めよパリサイとサドカイの人の麪酵を愼へざりし故ならん 八イエスこれを知て曰けるへ信仰うすき者よ何ぞ互にパンを携へざりしことを論ずる乎 九未だ悟らざるか五千人に五のパンを予しとき幾籃ひろひしや 十また四千人に七のパンを予しとき幾籃ひろひしや 十一パリサイとサドカイの人の麪酵を愼めとへパンにつきて言るに非るを何ぞ悟らざる 十二是に於て弟子その麪酵にへあらでパリサイとサドカイの人の教を謹めと言るなるを悟れり〇 十三イエスカイザリヤピリピの方に到しとき其弟子に問て曰けるへ人々へ人の子を誰と言や 十四彼等いひけるへ或人へバプテスマのヨハ子或人へエレミヤまた預言者の一人なりと言り 十五彼等に曰けるへ爾曹へ我を言て誰とする乎 十六シモンペテロ答けるへ活神の子キリスト 十七イエス答て彼に曰けるへヨナの子シモン爾へ福なり蓋血肉なんぢに示せるに非ず天に在す吾父なり 十八我また爾

十九 に告ん爾ハペテロなり我が教會をこの磐の上に建べし陰府の門ハ之に勝べからず
二十 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三十 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四十 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五十 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六十 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七十 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八十 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九十 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 百 百一 百二 百三 百四 百五 百六 百七 百八 百九 百十 百十一 百十二 百十三 百十四 百十五 百十六 百十七 百十八 百十九 百二十 百二十一 百二十二 百二十三 百二十四 百二十五 百二十六 百二十七 百二十八 百二十九 百三十 百三十一 百三十二 百三十三 百三十四 百三十五 百三十六 百三十七 百三十八 百三十九 百四十 百四十一 百四十二 百四十三 百四十四 百四十五 百四十六 百四十七 百四十八 百四十九 百五十 百五十一 百五十二 百五十三 百五十四 百五十五 百五十六 百五十七 百五十八 百五十九 百六十 百六十一 百六十二 百六十三 百六十四 百六十五 百六十六 百六十七 百六十八 百六十九 百七十 百七十一 百七十二 百七十三 百七十四 百七十五 百七十六 百七十七 百七十八 百七十九 百八十 百八十一 百八十二 百八十三 百八十四 百八十五 百八十六 百八十七 百八十八 百八十九 百九十 百九十一 百九十二 百九十三 百九十四 百九十五 百九十六 百九十七 百九十八 百九十九 二百 二百一 二百二 二百三 二百四 二百五 二百六 二百七 二百八 二百九 二百十 二百十一 二百十二 二百十三 二百十四 二百十五 二百十六 二百十七 二百十八 二百十九 二百二十 二百二十一 二百二十二 二百二十三 二百二十四 二百二十五 二百二十六 二百二十七 二百二十八 二百二十九 二百三十 二百三十一 二百三十二 二百三十三 二百三十四 二百三十五 二百三十六 二百三十七 二百三十八 二百三十九 二百四十 二百四十一 二百四十二 二百四十三 二百四十四 二百四十五 二百四十六 二百四十七 二百四十八 二百四十九 二百五十 二百五十一 二百五十二 二百五十三 二百五十四 二百五十五 二百五十六 二百五十七 二百五十八 二百五十九 二百六十 二百六十一 二百六十二 二百六十三 二百六十四 二百六十五 二百六十六 二百六十七 二百六十八 二百六十九 二百七十 二百七十一 二百七十二 二百七十三 二百七十四 二百七十五 二百七十六 二百七十七 二百七十八 二百七十九 二百八十 二百八十一 二百八十二 二百八十三 二百八十四 二百八十五 二百八十六 二百八十七 二百八十八 二百八十九 二百九十 二百九十一 二百九十二 二百九十三 二百九十四 二百九十五 二百九十六 二百九十七 二百九十八 二百九十九 三百 三百一 三百二 三百三 三百四 三百五 三百六 三百七 三百八 三百九 三百十 三百十一 三百十二 三百十三 三百十四 三百十五 三百十六 三百十七 三百十八 三百十九 三百二十 三百二十一 三百二十二 三百二十三 三百二十四 三百二十五 三百二十六 三百二十七 三百二十八 三百二十九 三百三十 三百三十一 三百三十二 三百三十三 三百三十四 三百三十五 三百三十六 三百三十七 三百三十八 三百三十九 三百四十 三百四十一 三百四十二 三百四十三 三百四十四 三百四十五 三百四十六 三百四十七 三百四十八 三百四十九 三百五十 三百五十一 三百五十二 三百五十三 三百五十四 三百五十五 三百五十六 三百五十七 三百五十八 三百五十九 三百六十 三百六十一 三百六十二 三百六十三 三百六十四 三百六十五 三百六十六 三百六十七 三百六十八 三百六十九 三百七十 三百七十一 三百七十二 三百七十三 三百七十四 三百七十五 三百七十六 三百七十七 三百七十八 三百七十九 三百八十 三百八十一 三百八十二 三百八十三 三百八十四 三百八十五 三百八十六 三百八十七 三百八十八 三百八十九 三百九十 三百九十一 三百九十二 三百九十三 三百九十四 三百九十五 三百九十六 三百九十七 三百九十八 三百九十九 四百 四百一 四百二 四百三 四百四 四百五 四百六 四百七 四百八 四百九 四百十 四百十一 四百十二 四百十三 四百十四 四百十五 四百十六 四百十七 四百十八 四百十九 四百二十 四百二十一 四百二十二 四百二十三 四百二十四 四百二十五 四百二十六 四百二十七 四百二十八 四百二十九 四百三十 四百三十一 四百三十二 四百三十三 四百三十四 四百三十五 四百三十六 四百三十七 四百三十八 四百三十九 四百四十 四百四十一 四百四十二 四百四十三 四百四十四 四百四十五 四百四十六 四百四十七 四百四十八 四百四十九 四百五十 四百五十一 四百五十二 四百五十三 四百五十四 四百五十五 四百五十六 四百五十七 四百五十八 四百五十九 四百六十 四百六十一 四百六十二 四百六十三 四百六十四 四百六十五 四百六十六 四百六十七 四百六十八 四百六十九 四百七十 四百七十一 四百七十二 四百七十三 四百七十四 四百七十五 四百七十六 四百七十七 四百七十八 四百七十九 四百八十 四百八十一 四百八十二 四百八十三 四百八十四 四百八十五 四百八十六 四百八十七 四百八十八 四百八十九 四百九十 四百九十一 四百九十二 四百九十三 四百九十四 四百九十五 四百九十六 四百九十七 四百九十八 四百九十九 五百 五百一 五百二 五百三 五百四 五百五 五百六 五百七 五百八 五百九 五百十 五百十一 五百十二 五百十三 五百十四 五百十五 五百十六 五百十七 五百十八 五百十九 五百二十 五百二十一 五百二十二 五百二十三 五百二十四 五百二十五 五百二十六 五百二十七 五百二十八 五百二十九 五百三十 五百三十一 五百三十二 五百三十三 五百三十四 五百三十五 五百三十六 五百三十七 五百三十八 五百三十九 五百四十 五百四十一 五百四十二 五百四十三 五百四十四 五百四十五 五百四十六 五百四十七 五百四十八 五百四十九 五百五十 五百五十一 五百五十二 五百五十三 五百五十四 五百五十五 五百五十六 五百五十七 五百五十八 五百五十九 五百六十 五百六十一 五百六十二 五百六十三 五百六十四 五百六十五 五百六十六 五百六十七 五百六十八 五百六十九 五百七十 五百七十一 五百七十二 五百七十三 五百七十四 五百七十五 五百七十六 五百七十七 五百七十八 五百七十九 五百八十 五百八十一 五百八十二 五百八十三 五百八十四 五百八十五 五百八十六 五百八十七 五百八十八 五百八十九 五百九十 五百九十一 五百九十二 五百九十三 五百九十四 五百九十五 五百九十六 五百九十七 五百九十八 五百九十九 六百 六百一 六百二 六百三 六百四 六百五 六百六 六百七 六百八 六百九 六百十 六百十一 六百十二 六百十三 六百十四 六百十五 六百十六 六百十七 六百十八 六百十九 六百二十 六百二十一 六百二十二 六百二十三 六百二十四 六百二十五 六百二十六 六百二十七 六百二十八 六百二十九 六百三十 六百三十一 六百三十二 六百三十三 六百三十四 六百三十五 六百三十六 六百三十七 六百三十八 六百三十九 六百四十 六百四十一 六百四十二 六百四十三 六百四十四 六百四十五 六百四十六 六百四十七 六百四十八 六百四十九 六百五十 六百五十一 六百五十二 六百五十三 六百五十四 六百五十五 六百五十六 六百五十七 六百五十八 六百五十九 六百六十 六百六十一 六百六十二 六百六十三 六百六十四 六百六十五 六百六十六 六百六十七 六百六十八 六百六十九 六百七十 六百七十一 六百七十二 六百七十三 六百七十四 六百七十五 六百七十六 六百七十七 六百七十八 六百七十九 六百八十 六百八十一 六百八十二 六百八十三 六百八十四 六百八十五 六百八十六 六百八十七 六百八十八 六百八十九 六百九十 六百九十一 六百九十二 六百九十三 六百九十四 六百九十五 六百九十六 六百九十七 六百九十八 六百九十九 七百 七百一 七百二 七百三 七百四 七百五 七百六 七百七 七百八 七百九 七百十 七百十一 七百十二 七百十三 七百十四 七百十五 七百十六 七百十七 七百十八 七百十九 七百二十 七百二十一 七百二十二 七百二十三 七百二十四 七百二十五 七百二十六 七百二十七 七百二十八 七百二十九 七百三十 七百三十一 七百三十二 七百三十三 七百三十四 七百三十五 七百三十六 七百三十七 七百三十八 七百三十九 七百四十 七百四十一 七百四十二 七百四十三 七百四十四 七百四十五 七百四十六 七百四十七 七百四十八 七百四十九 七百五十 七百五十一 七百五十二 七百五十三 七百五十四 七百五十五 七百五十六 七百五十七 七百五十八 七百五十九 七百六十 七百六十一 七百六十二 七百六十三 七百六十四 七百六十五 七百六十六 七百六十七 七百六十八 七百六十九 七百七十 七百七十一 七百七十二 七百七十三 七百七十四 七百七十五 七百七十六 七百七十七 七百七十八 七百七十九 七百八十 七百八十一 七百八十二 七百八十三 七百八十四 七百八十五 七百八十六 七百八十七 七百八十八 七百八十九 七百九十 七百九十一 七百九十二 七百九十三 七百九十四 七百九十五 七百九十六 七百九十七 七百九十八 七百九十九 八百 八百一 八百二 八百三 八百四 八百五 八百六 八百七 八百八 八百九 八百十 八百十一 八百十二 八百十三 八百十四 八百十五 八百十六 八百十七 八百十八 八百十九 八百二十 八百二十一 八百二十二 八百二十三 八百二十四 八百二十五 八百二十六 八百二十七 八百二十八 八百二十九 八百三十 八百三十一 八百三十二 八百三十三 八百三十四 八百三十五 八百三十六 八百三十七 八百三十八 八百三十九 八百四十 八百四十一 八百四十二 八百四十三 八百四十四 八百四十五 八百四十六 八百四十七 八百四十八 八百四十九 八百五十 八百五十一 八百五十二 八百五十三 八百五十四 八百五十五 八百五十六 八百五十七 八百五十八 八百五十九 八百六十 八百六十一 八百六十二 八百六十三 八百六十四 八百六十五 八百六十六 八百六十七 八百六十八 八百六十九 八百七十 八百七十一 八百七十二 八百七十三 八百七十四 八百七十五 八百七十六 八百七十七 八百七十八 八百七十九 八百八十 八百八十一 八百八十二 八百八十三 八百八十四 八百八十五 八百八十六 八百八十七 八百八十八 八百八十九 八百九十 八百九十一 八百九十二 八百九十三 八百九十四 八百九十五 八百九十六 八百九十七 八百九十八 八百九十九 九百 九百一 九百二 九百三 九百四 九百五 九百六 九百七 九百八 九百九 九百十 九百十一 九百十二 九百十三 九百十四 九百十五 九百十六 九百十七 九百十八 九百十九 九百二十 九百二十一 九百二十二 九百二十三 九百二十四 九百二十五 九百二十六 九百二十七 九百二十八 九百二十九 九百三十 九百三十一 九百三十二 九百三十三 九百三十四 九百三十五 九百三十六 九百三十七 九百三十八 九百三十九 九百四十 九百四十一 九百四十二 九百四十三 九百四十四 九百四十五 九百四十六 九百四十七 九百四十八 九百四十九 九百五十 九百五十一 九百五十二 九百五十三 九百五十四 九百五十五 九百五十六 九百五十七 九百五十八 九百五十九 九百六十 九百六十一 九百六十二 九百六十三 九百六十四 九百六十五 九百六十六 九百六十七 九百六十八 九百六十九 九百七十 九百七十一 九百七十二 九百七十三 九百七十四 九百七十五 九百七十六 九百七十七 九百七十八 九百七十九 九百八十 九百八十一 九百八十二 九百八十三 九百八十四 九百八十五 九百八十六 九百八十七 九百八十八 九百八十九 九百九十 九百九十一 九百九十二 九百九十三 九百九十四 九百九十五 九百九十六 九百九十七 九百九十八 九百九十九 千 千一 千二 千三 千四 千五 千六 千七 千八 千九 千十 千十一 千十二 千十三 千十四 千十五 千十六 千十七 千十八 千十九 千二十 千二十一 千二十二 千二十三 千二十四 千二十五 千二十六 千二十七 千二十八 千二十九 千三十 千三十一 千三十二 千三十三 千三十四 千三十五 千三十六 千三十七 千三十八 千三十九 千四十 千四十一 千四十二 千四十三 千四十四 千四十五 千四十六 千四十七 千四十八 千四十九 千五十 千五十一 千五十二 千五十三 千五十四 千五十五 千五十六 千五十七 千五十八 千五十九 千六十 千六十一 千六十二 千六十三 千六十四 千六十五 千六十六 千六十七 千六十八 千六十九 千七十 千七十一 千七十二 千七十三 千七十四 千七十五 千七十六 千七十七 千七十八 千七十九 千八十 千八十一 千八十二 千八十三 千八十四 千八十五 千八十六 千八十七 千八十八 千八十九 千九十 千九十一 千九十二 千九十三 千九十四 千九十五 千九十六 千九十七 千九十八 千九十九 千百 千百一 千百二 千百三 千百四 千百五 千百六 千百七 千百八 千百九 千百十 千百十一 千百十二 千百十三 千百十四 千百十五 千百十六 千百十七 千百十八 千百十九 千百二十 千百二十一 千百二十二 千百二十三 千百二十四 千百二十五 千百二十六 千百二十七 千百二十八 千百二十九 千百三十 千百三十一 千百三十二 千百三十三 千百三十四 千百三十五 千百三十六 千百三十七 千百三十八 千百三十九 千百四十 千百四十一 千百四十二 千百四十三 千百四十四 千百四十五 千百四十六 千百四十七 千百四十八 千百四十九 千百五十 千百五十一 千百五十二 千百五十三 千百五十四 千百五十五 千百五十六 千百五十七 千百五十八 千百五十九 千百六十 千百六十一 千百六十二 千百六十三 千百六十四 千百六十五 千百六十六 千百六十七 千百六十八 千百六十九 千百七十 千百七十一 千百七十二 千百七十三 千百七十四 千百七十五 千百七十六 千百七十七 千百七十八 千百七十九 千百八十 千百八十一 千百八十二 千百八十三 千百八十四 千百八十五 千百八十六 千百八十七 千百八十八 千百八十九 千百九十 千百九十一 千百九十二 千百九十三 千百九十四 千百九十五 千百九十六 千百九十七 千百九十八 千百九十九 二千 二千一 二千二 二千三 二千四 二千五 二千六 二千七 二千八 二千九 二千十 二千十一 二千十二 二千十三 二千十四 二千十五 二千十六 二千十七 二千十八 二千十九 二千二十 二千二十一 二千二十二 二千二十三 二千二十四 二千二十五 二千二十六 二千二十七 二千二十八 二千二十九 二千三十 二千三十一 二千三十二 二千三十三 二千三十四 二千三十五 二千三十六 二千三十七 二千三十八 二千三十九 二千四十 二千四十一 二千四十二 二千四十三 二千四十四 二千四十五 二千四十六 二千四十七 二千四十八 二千四十九 二千五十 二千五十一 二千五十二 二千五十三 二千五十四 二千五十五 二千五十六 二千五十七 二千五十八 二千五十九 二千六十 二千六十一 二千六十二 二千六十三 二千六十四 二千六十五 二千六十六 二千六十七 二千六十八 二千六十九 二千七十 二千七十一 二千七十二 二千七十三 二千七十四 二千七十五 二千七十六 二千七十七 二千七十八 二千七十九 二千八十 二千八十一 二千八十二 二千八十三 二千八十四 二千八十五 二千八十六 二千八十七 二千八十八 二千八十九 二千九十 二千九十一 二千九十二 二千九十三 二千九十四 二千九十五 二千九十六 二千九十七 二千九十八 二千九十九 三千 三千一 三千二 三千三 三千四 三千五 三千六 三千七 三千八 三千九 三千十 三千十一 三千十二 三千十三 三千十四 三千十五 三千十六 三千十七 三千十八 三千十九 三千二十 三千二十一 三千二十二 三千二十三 三千二十四 三千二十五 三千二十六 三千二十七 三千二十八 三千二十九 三千三十 三千三十一 三千三十二 三千三十三 三千三十四 三千三十五 三千三十六 三千三十七 三千三十八 三千三十九 三千四十 三千四十一 三千四十二 三千四十三 三千四十四 三千四十五 三千四十六 三千四十七 三千四十八 三千四十九 三千五十 三千五十一 三千五十二 三千五十三 三千五十四 三千五十五 三千五十六 三千五十七 三千五十八 三千五十九 三千六十 三千六十一 三千六十二 三千六十三 三千六十四 三千六十五 三千六十六 三千六十七 三千六十八 三千六十九 三千七十 三千七十一 三千七十二 三千七十三 三千七十四 三千七十五 三千七十六 三千七十七 三千七十八 三千七十九 三千八十 三千八十一 三千八十二 三千八十三 三千八十四 三千八十五 三千八十六 三千八十七 三千八十八 三千八十九 三千九十 三千九十一 三千九十二 三千九十三 三千九十四 三千九十五 三千九十六 三千九十七 三千九十八 三千九十九 四千 四千一 四千二 四千三 四千四 四千五 四千六 四千七 四千八 四千九 四千十 四千十一 四千十二 四千十三 四千十四 四千十五 四千十六 四千十七 四千十八 四千十九 四千二十 四千二十一 四千二十二 四千二十三 四千二十四 四千二十五 四千二十六 四千二十七 四千二十八 四千二十九 四千三十 四千三十一 四千三十二 四千三十三 四千三十四 四千三十五 四千三十六 四千三十七 四千三十八 四千三十九 四千四十 四千四十一 四千四十二 四千四十三 四千四十四 四千四十五 四千四十六 四千四十七 四千四十八 四千四十九 四千五十 四千五十一 四千五十二 四千五十三 四千五十四 四千五十五 四千五十六 四千五十七 四千五十八 四千五十九 四千六十 四千六十一 四千六十二 四千六十三 四千六十四 四千六十五 四千六十六 四千六十七 四千六十八 四千六十九 四千七十 四千七十一 四千七十二 四千七十三 四千七十四 四千七十五 四千七十六 四千七十七 四千七十八 四千七十九 四千八十 四千八十一 四千八十二 四千八十三 四千八十四 四千八十五 四千八十六 四千八十七 四千八十八 四千八十九 四千九十 四千九十一 四千九十二 四千九十三 四千九十四 四千九十五 四千九十六 四千九十七 四千九十八 四千九十九 五千 五千一 五千二 五千三 五千四 五千五 五千六 五千七 五千八 五千九 五千十 五千十一 五千十二 五千十三 五千十四 五千十五 五千十六 五千十七 五千十八 五千十九 五千二十 五千二十一 五千二十二 五千二十三 五千二十四 五千二十五 五千二十六 五千二十七 五千二十八 五千二十九 五千三十 五千三十一 五千三十二 五千三十三 五千三十四 五千三十五 五千三十六 五千三十七 五千三十八 五千三十九 五千四十 五千四十一 五千四十二 五千四十三 五千四十四 五千四十五 五千四十六 五千四十七 五千四十八 五千四十九 五千五十 五千五十一 五千五十二 五千五十三 五千五十四 五千五十五 五千五十六 五千五十七 五千五十八 五千五十九 五千六十 五千六十一 五千六十二 五千六十三 五千六十四 五千六十五 五千六十六 五千六十七 五千六十八 五千六十九 五千七十 五千七十一 五千七十二 五千七十三 五千七十四 五千七十五 五千七十六 五千七十七 五千七十八 五千七十九 五千八十 五千八十一 五千八十二 五千八十三 五千八十四 五千八十五 五千八十六 五千八十七 五千八十八 五千八十九 五千九十 五千九十一 五千九十二 五千九十三 五千九十四 五千九十五 五千九十六 五千九十七 五千九十八 五千九十九 六千 六千一 六千二 六千三 六千四 六千五 六千六 六千七 六千八 六千九 六千十 六千十一 六千十二 六千十三 六千十四 六千十五 六千十六 六千十七 六千十八 六千十九 六千二十 六千二十一 六千二十二 六千二十三 六千二十四 六千二十五 六千二十六 六千二十七 六千二十八 六千二十九 六千三十 六千三十一 六千三十二 六千三十三 六千三十四 六千三十五 六千三十六 六千三十七 六千三十八 六千三十九 六千四十 六千四十一 六千四十二 六千四十三 六千四十四 六千四十五 六千四十六 六千四十七 六千四十八 六千四十九 六千五十 六千五十一 六千五十二 六千五十三 六千五十四 六千五十五 六千五十六 六千五十七 六千五十八 六千五十九 六千六十 六千六十一 六千六十二 六千六十三 六千六十四 六千六十五 六千六十六 六千六十七 六千六十八 六千六十九 六千七十 六千七十一 六千七十二 六千七十三 六千七十四 六千七十五 六千七十六 六千七十七 六千七十八 六千七十九 六千八十 六千八十一 六千八十二 六千八十三 六千八十四 六千八十五 六千八十六 六千八十七 六千八十八 六千八十九 六千九十 六千九十一 六千九十二 六千九十三 六千九十四 六千九十五 六千九十六 六千九十七 六千九十八 六千九十九 七千 七千一 七千二 七千三 七千四 七千五 七千六 七千七 七千八 七千九 七千十 七千十一 七千十二 七千十三 七千十四 七千十五 七千十六 七千十七 七千十八 七千十九 七千二十 七千二十一 七千二十二 七千二十三 七千二十四 七千二十五 七千二十六 七千二十七 七千二十八 七千二十九 七千三十 七千三十一 七千三十二 七千三十三 七千三十四 七千三十五 七千三十六 七千三十七 七千三十八 七千三十九 七千四十 七千四十一 七千四十二 七千四十三 七千四十四 七千四十五 七千四十六 七千四十七 七千四十八 七千四十九 七千五十 七千五十一 七千五十二 七千五十三 七千五十四 七千五十五 七千五十六 七千五十七 七千五十八 七千五十九 七千六十 七千六十一 七千六十二 七千六十三 七千六十四 七千六十五 七千六十六 七千六十七 七千六十八 七千六十九 七千七十 七千七十一 七千七十二 七千七十三 七千七十四 七千七十五 七千七十六 七千七十七 七千七十八 七千七十九 七千八十 七千八十一 七千八十二 七千八十三 七千八十四 七千八十五 七千八十六 七千八十七 七千八十八 七千八十九 七千九十 七千九十一 七千九十二 七千九十三 七千九十四 七千九十五 七千九十六 七千九十七 七千九十八 七千九十九 八千 八千一 八千二 八千三 八千四 八千五 八千六 八千七 八千八 八千九 八千十 八千十一 八千十二 八千十三 八千十四 八千十五 八千十六 八千十七 八千十八 八千十九 八千二十 八千二十一 八千二十二 八千二十三 八千二十四 八千二十五 八千二十六 八千二十七 八千二十八 八千二十九 八千三十 八千三十一 八千三十二 八千三十三 八千三十四 八千三十五 八千三十六 八千三十七 八千三十八 八千三十九 八千四十 八千四十一 八千四十二 八千四十三 八千四十四 八千四十五 八千四十六 八千四十七 八千四十八 八千四十九 八千五十 八千五十一 八千五十二 八千五十三 八千五十四 八千五十五 八千五十六 八千五十七 八千五十八 八千五十九 八千六十 八千六十一 八千六十二 八千六十三 八千六十四 八千六十五 八千六十六 八千六十七 八千六十八 八千六十九 八千七十 八千七十一 八千七十二 八千七十三 八千七十四 八千七十五 八千七十六 八千七十七 八千七十八 八千七十九 八千八十 八千八十一 八千八十二 八千八十三 八千八十四 八千八十五 八千八十六 八千八十七 八千八十八 八千八十九 八千九十 八千九十一 八千九十二 八千九十三 八千九十四 八千九十五 八千九十六 八千九十七 八千九十八 八千九十九 九千 九千一 九千二 九千三 九千四 九千五 九千六 九千七 九千八 九千九 九千十 九千十一 九千十二 九千十三 九千十四 九千十五 九千十六 九千十七 九千十八 九千十九 九千二十 九千二十一 九千二十二 九千二十三 九千二十四 九千二十五 九千二十六 九千二十七 九千二十八 九千二十九 九千三十 九千三十一 九千三十二 九千三十三 九千三十四 九千三十五 九千三十六 九千三十七 九千三十八 九千三十九 九千四十 九千四十一 九千四十二 九千四十三 九千四十四 九千四十五 九千四十六 九千四十七 九千四十八 九千四十九 九千五十 九千五十一 九千五十二 九千五十三 九千五十四 九千五十五 九千五十六 九千五十七 九千五十八 九千五十九 九千六十 九千六十一 九千六十二 九千六十三 九千六十四 九千六十五 九千六十六 九千六十七 九千六十八 九千六十九 九千七十 九千七十一 九千七十二 九千七十三 九千七十四 九千七十五 九千七十六 九千七十七 九千七十八 九千七十九 九千八十 九千八十一 九千八十二 九千八十三 九千八十四 九千八十五 九千八十六 九千八十七 九千八十八 九千八十九 九千九十 九千九十一 九千九十二 九千九十三 九千九十四 九千九十五 九千九十六 九千九十七 九千九十八 九千九十九 一万 一万一 一万二 一万三 一万四 一万五 一万六 一万七 一万八 一万九 一万十 一万十一 一万十二 一万十三 一万十四 一万十五 一万十六 一万十七 一万十八 一万十九 一万二十 一万二十一 一万二十二 一万二十三 一万二十四 一万二十五 一万二十六 一万二十七 一万二十八 一万二十九 一万三十 一万三十一 一万三十二 一万三十三 一万三十四 一万三十五 一万三十六 一万三十七 一万三十八 一万三十九 一万四十 一万四十一 一万四十二 一万四十三 一万四十四 一万四十五 一万四十六 一万四十七 一万四十八 一万四十九 一万五十 一万五十一 一万五十二 一万五十三 一万五十四 一万五十五 一万五十六 一万五十七 一万五十八 一万五十九 一万六十 一万六十一 一万六十二 一万六十三 一万六十四 一万六十五 一万六十六 一万六十七 一万六十八 一万六十九 一万七十 一万七十一 一万七十二 一万七十三 一万七十四 一万七十五 一万七十六 一万七十七 一万七十八 一万七十九 一万八十 一万八十一 一万八十二 一万八十三 一万八十四 一万八十五 一万八十六 一万八十七 一万八十八 一万八十九 一万九十 一万九十一 一万九十二 一万九十三 一万九十四 一万九十五 一万九十六 一万九十七 一万九十八 一万九十九 二万 二万一 二万二 二万三 二万四 二万五 二万六 二万七 二万八 二万九 二万十 二万十一 二万十二 二万十三 二万十四 二万十五 二万十六 二万十七 二万十八 二万十九 二万二十 二万二十一 二万二十二 二万二十三 二万二十四 二万二十五 二万二十六 二万二十七 二万二十八 二万二十九 二万三十 二万三十一 二万三十二 二万三十三 二万三十四 二万三十五 二万三十六 二万三十七 二万三十八 二万三十九 二万四十 二万四十一 二万四十二 二万四十三 二万四十四 二万四十五 二万四十六 二万四十七 二万四十八 二万四十九 二万五十 二万五十一 二万五十二 二万五十三 二万五十四 二万五十五 二万五十六 二万五十七 二万五十八 二万五十九 二万六十 二万六十一 二万六十二 二万六十三 二万六十四 二万六十五 二万六十六 二万六十七 二万六十八 二万六十九 二万七十 二万七十一 二万七十二 二万七十三 二万七十四 二万七十五 二万七十六 二万七十七 二万七十八 二万七十九 二万八十 二万八十一 二万八十二 二万八十三 二万八十四 二万八十五 二万八十六 二万八十七 二万八十八 二万八十九 二万九十 二万九十一 二万九十二 二万九十三 二万九十四 二万九十五 二万九十六 二万九十七 二万九十八 二万九十九 三万 三万一 三万二 三万三 三万四 三万五 三万六 三万七 三万八 三万九 三万十 三万十一 三万十二 三万十三 三万十四 三万十五 三万十六 三万十七 三万十八 三万十九 三万二十 三万二十一 三万二十二 三万二十三 三万二十四 三万二十五 三万二十六 三万二十七 三万二十八 三万二十九 三万三十 三万三十一 三万三十二 三万三十三 三万三十四 三万三十五 三万三十六 三万三十七 三万三十八 三万三十九 三万四十 三万四十一 三万四十二 三万四十三 三万四十四 三万四十五 三万四十六 三万四十七 三万四十八 三万四十九 三万五十 三万五十一 三万五十二 三万五十三 三万五十四 三万五十五 三万五十六 三万五十七 三万五十八 三万五十九 三万六十 三万六十一 三万六十二 三万六十三 三万六十四 三万六十五 三万六十六 三万六十七 三万六十八 三万六十九 三万七十 三万七十一 三万七十二 三万七十三 三万七十四 三万七十五 三万七十六 三万七十七 三万七十八 三万七十九 三万八十 三万八十一 三万八十二 三万八十三 三万八十四 三万八十五 三万八十六 三万八十七 三万八十八 三万八十九 三万九十 三万九十一 三万九十二 三万九十三 三万九十四 三万九十五 三万九十六 三万九十七 三万九十八 三万九十九 四万 四万一 四万二 四万三 四万四 四万五 四万六 四万七 四万八 四万九 四万十 四万十一 四万十二 四万十三 四万十四 四万十五 四万十六 四万十七 四万十八 四万十九 四万二十 四万二十一 四万二十二 四万二十三 四万二十四 四万二十五 四万二十六 四万二十七 四万二十八 四万二十九 四万三十 四万三十一 四万三十二 四万三十三 四万三十四 四万三十五 四万三十六 四万三十七 四万三十八 四万三十九 四万四十 四万四十一 四万四十二 四万四十三 四万四十四 四万四十五 四万四十六 四万四十七 四万四十八 四万四十九 四万五十 四万五十一 四万五十二 四万五十三 四万五十四 四万五十五 四万五十六 四万五十七 四万五十八 四万五十九 四万六十 四万六十一 四万六十二 四万六十三 四万六十四 四万六十五 四万六十六 四万六十七 四万六十八 四万六十九 四万七十 四万七十一 四万七十二 四万七十三 四万七十四 四万七十五 四万七十六 四万七十七 四万七十八 四万七十九 四万八十 四万八十一 四万八十二 四万八十三 四万八十四 四万八十五 四万八十六 四万八十七 四万八十八 四万八十九 四万九十 四万九十一 四万九十二 四万九十三 四万九十四 四万九十五 四万九十六 四万九十七 四万九十八 四万九十九 五万 五万一 五万二 五万三 五万四 五万五 五万六 五万七 五万八 五万九 五万十 五万十一 五万十二 五万十三 五万十四 五万十五 五万十六 五万十七 五万十八 五万十九 五万二十 五万二十一 五万二十二 五万二十三 五万二十四 五万二十五 五万二十六 五万二十七 五万二十八 五万二十九 五万三十 五万三十一 五万三十二 五万三十三 五万三十四 五万三十五 五万三十六 五万三十七 五万三十八 五万三十九 五万四十 五万四十一 五万四十二 五万四十三 五万四十四 五万四十五 五万四十六 五万四十七 五万四十八 五万四十九 五万五十 五万五十一 五万五十二 五万五十三 五万五十四 五万五十五 五万五十六 五万五十七 五万五十八 五万五十九 五万六十 五万六十一 五万六十二 五万六十三 五万六十四 五万六十五 五万六十六 五万六十七 五万六十八 五万六十九 五万七十 五万七十一 五万七十二 五万七十三 五万七十四 五万七十五 五万七十六 五万七十七 五万七十八 五万七十九 五万八十 五万八十一 五万八十二 五万八十三 五万八十四 五万八十五 五万八十六 五万八十七 五万八十八 五万八十九 五万九十 五万九十一 五万九十二 五万九十三 五万九十四 五万九十五 五万九十六 五万九十七 五万九十八 五万九十九 六万 六万一 六万二 六万三 六万四 六万五 六万六 六万七 六万八 六万九 六万十 六万十一 六万十二 六万十三 六万十四 六万十五 六万十六 六万十七 六万十八 六万十九 六万二十 六万二十一 六万二十二 六万二十三 六万二十四 六万二十五 六万二十六 六万二十七 六万二十八 六万二十九 六万三十 六万三十一 六万三十二 六万三十三 六万三十四 六万三十五 六万三十六 六万三十七 六万三十八 六万三十九 六万四十 六万四十一 六万四十二 六万四十三 六万四十四 六万四十五 六万四十六 六万四十七 六万四十八 六万四十九 六万五十 六万五十一 六万五十二 六万五十三 六万五十四 六万五十五 六万五十六 六万五十七 六万五十八 六万五十九 六万六十 六万六十一 六万六十二 六万六十三 六万六十四 六万六十五 六万六十六 六万六十七 六万六十八 六万六十九 六万七十 六万七十一 六万七十二 六万七十三 六万七十四 六万七十五 六万七十六 六万七十七 六万七十八 六万七十九 六万八十 六万八十一 六万八十二 六万八十三 六万八十四 六万八十五 六万八十六 六万八十七 六万八十八 六万八十九 六万九十 六万九十一 六万九十二 六万九十三 六万九十四 六万九十五 六万九十六 六万九十七 六万九十八 六万九十九 七万 七万一 七万二 七万三 七万四 七万五 七万六 七万七 七万八 七万九 七万十 七万十一 七万十二 七万十三 七万十四 七万十五 七万十六 七万十七 七万十八 七万十九 七万二十 七万二十一 七万二十二 七万二十三 七万二十四 七万二十五 七万二十六 七万二十七 七万二十八 七万二十九 七万三十 七万三十一 七万三十二 七万三十三 七万三十四 七万三十五 七万三十六 七万三十七 七万三十八 七万三十九 七万四十 七万四十一 七万四十二 七万四十三 七万四十四 七万四十五 七万四十六 七万四十七 七万四十八 七万四十九 七万五十 七万五十一 七万五十二 七万五十三 七万五十四 七万五十五 七万五十六 七万五十七 七万五十八 七万五十九 七万六十 七万六十一 七万六十二 七万六十三 七万六十四 七万六十五 七万六十六 七万六十七 七万六十八 七万六十九 七万七十 七万七十一 七万七十二 七万七十三 七万七十四 七万七十五 七万七十六 七万七十七 七万七十八 七万七十九 七万八十 七万八十一 七万八十二 七万八十三 七万八十四 七万八十五 七万八十六 七万八十七 七万八十八 七万八十九 七万九十 七万九十一 七万九十二 七万九十三 七万九十四 七万九十五 七万九十六 七万九十七 七万九十八 七万九十九 八万 八万一 八万二 八万三 八万四 八万五 八万六 八万七 八万八 八万九 八万十 八万十一 八万十二 八万十三 八万十四 八万十五 八万十六 八万十七 八万十八 八万十九 八万二十 八万二十一 八万二十二 八万二十三 八万二十四 八万二十五 八万二十六 八万二十七 八万二十八 八万二十九 八万三十 八万三十一 八万三十二 八万三十三 八万三十四 八万三十五 八万三十六 八万三十七 八万三十八 八万三十九 八万四十 八万四十一 八万四十二 八万四十三 八万四十四 八万四十五 八万四十六 八万四十七 八万四十八 八万四十九 八万五十 八万五十一 八万五十二 八万五十三 八万五十四 八万五十五 八万五十六 八万五十七 八万五十八 八万五十九 八万六十 八万六十一 八万六十二 八万六十三 八万六十四 八万六十五 八万六十六 八万六十七 八万六十八 八万六十九 八万七十 八万七十一 八万七十二 八万七十三 八万七十四 八万七十五 八万七十六 八万七十七 八万七十八 八万七十九 八万八十 八万八十一 八万八十二 八万八十三 八万八十四 八万八十五 八万八十六 八万八十七 八万八十八 八万八十九 八万九十 八万九十一 八万九十二 八万九十三 八万九十四 八万九十五 八万九十六 八万九十七 八万九十八 八万九十九 九万 九万一 九万二 九万三 九万四 九万五 九万六 九万七 九万八 九万九 九万十 九万十一 九万十二 九万十三 九万十四 九万十五 九万十六 九万十七 九万十八 九万十九 九万二十 九万二十一 九万二十二 九万二十三 九万二十四 九万二十五 九万二十六 九万二十七 九万二十八 九万二十九 九万三十 九万三十一 九万三十二 九万三十三 九万三十四 九万三十五 九万三十六 九万三十七 九万三十八 九万三十九 九万四十 九万四十一 九万四十二 九万四十三 九万四十四 九万四十五 九万四十六 九万四十七 九万四十八 九万四十九 九万五十 九万五十一 九万五十二 九万五十三 九万五十四 九万五十五 九万五十六 九万五十七 九万五十八 九万五十九 九万六十 九万六十一 九万六十二 九万六十三 九万六十四 九万六十五 九万六十六 九万六十七 九万六十八 九万六十九 九万七十 九万七十一 九万七十二 九万七十三 九万七十四 九万七十五 九万七十六 九万七十七 九万七十八 九万七十九 九万八十 九万八十一 九万八十二 九万八十三 九万八十四 九万八十五 九万八十六 九万八十七 九万八十八 九万八十九 九万九十 九万九十一 九万九十二 九万九十三 九万九十四 九万九十五 九万九十六 九万九十七 九万九十八 九万九十九 十万 十万一 十万二 十万三 十万四 十万五 十万六 十万七 十万八 十万九 十万十 十万十一 十万十二 十万十三 十万十四 十万十五 十万十六 十万十七 十万十八 十万十九 十万二十 十万二十一 十万二十二 十万二十三 十万二十四 十万二十五 十万二十六 十万二十七 十万二十八 十万二十九 十万三十 十万三十一 十万三十二 十万三十三 十万三十四 十万三十五 十

十 地獄の火に投入られんよりは一眼にて生に入ハ善なり○十一 ナザリのこの小子の一人をも慎みて輕視なかれ我なんぢらに告ん彼等が天の使者ハ天にありて天に在す吾父の面を常に觀ゞなり十一 それ人の子ハ亡たる者を救ハん爲に來れり十二 爾曹いかに意ふや人もし百匹の羊あらんに其一匹まよひ九十九を山に置ゆきて迷し一を尋ざる乎十三 若たづねて之に遇ゞ我まことに爾曹に告ん迷ざる九十九の者よりも倘その一を喜ぶこと十四 是の如くこの小子の一人の亡ろハ天に在す爾曹が父の尊旨に非ず十五 もし兄弟なんぢに罪を犯ゞその獨ある時に往て諫よもし爾の言を聽ゞその兄弟を獲べし十六 もし聽ずゞ教會に告よもし教會に聽ずゞ之をなし凡の言を定んが爲に一人二人を伴ひ往十七 もし彼等にも聽ずゞ教會に告ん凡そ爾曹が地に於て繫ことハ天に於もつなぎ爾曹が地に於て釋ことハ天に於も釋べし十八 我また爾曹に告ん凡そ爾曹のうち二人の心を合せ何事にても求ゞ天に在す吾父ハ彼等の爲に之を成たまふべし十九 もし我名の爲に二三人の集れる處にハ我も其中に在べなり○二十 斯時ペテロ イエスに來りて曰けるハ主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯を赦べきか七次まで乎二一 イエス彼に曰けるハ爾に七次さハ言じ七次を七十倍せよ二二 是故に天國ハ王その臣と會計を調んとするが如し二三 調べ始しとき千萬金の負債したる者を王に曳來りしに二四 償ひ方なかりけれゞ主いかりて負債をみな償ふまで彼を獄吏に付せり二五 若おの〳〵其心より兄弟を赦すば我が天の父も亦なんぢらに此の如く行給ふべし

第十九章

一 イエス此等の事を言畢りしときガリラヤを去てヨルダンの外ユダヤの境に至りけるに二 多の人々從ひしかゞ此處にて彼等を醫し給へり三 パリサイの人きたりてイエスを試み曰けるハ人なにの故に係らず其妻を出すハ宜か四 答て彼等に曰けるハ元始に人を造り給ひし者ハ之を男女に造れり五 是故に人父母を離れて其妻に合二人のもの一體と爲なりと云るを未だ讀ざるか六 然ゞはや二にハ非ず一體なり神の合せ給へる者ハ人これを離すべからず七 イエスに曰けるハ然ゞ離緣狀を予て妻を出せとモーセが命ぜしハ何ぞや八 彼等に曰けるハモーセ爾曹の心の不情に因て妻を出すことを容したる也されど元始ハ如此あらざりき我なんぢらに告んもし奸淫の故ならで其妻を出し他の婦を娶る者も奸淫を行ふなり九 弟子等イエスに曰けるハ若し人妻に於て此の如くば娶らざるに若ず十 イエス曰けるハ此言ハ人みな受納ることを能ハず唯賦られたる者のみ之を爲うべし十一 それ母の腹より生來たる寺人あり又人にせられたる寺人あり又天國の爲に自らなれる寺人あり之を受納ることを得るものハ受納べし十二 ○十三 其とき人々イエスの手を按て祈らんことを求ひ嬰兒を彼に携來りけれゞ弟子是を阻たり十四 イエス曰けるハ嬰兒を容せ我に來ることを禁しむる勿れ天國にハこの如き者ハ此の如き者なり十五 即ち彼等に手を按て此を去ぬ○十六 或人きたりて彼に曰けるハ善師よ我かぎりなき生を得んが爲にハ何の善事を行べきか十七 彼に曰けるハ何故われを善と稱や一人の外に善者ハなし即ち神なり若し生命に入んと欲ハゞ誡を守るべし十八 彼こたへけるハ何か イエス曰けるハ殺す勿れ奸淫する勿れ盜む勿れ妄りの證を立る勿れ十九 爾の父と母を敬へ又己の如く爾の隣を愛すべし二十 少者かれに曰けるハ全かゝる事ハ皆我これを守れり尚我に缺たるところ我にある乎二一 イエス彼に曰けるハ全からんと欲ハゞ往て爾が所有を售て貧者に施せ然れば天に於て財あらん而して來り我に從へ二二 少者この言を聞て憂へ去ぬ彼の產業おほいなりければ也○二三 イエスその弟子に曰けるハ誠に爾曹に告ん富者ハ天國に入こと難し二四 また爾曹に告ん富者の神の

國に入よりハ駱駝の針の孔を穿るハ却て易し 二五 弟子之を聞て甚く驚き曰けるハ然ば誰か救を受べき乎 二六
イエス彼等を見て曰けるハ是人にハ能ハざる所あり然ど神にハ能ハざる所なし○ 二七 此ときペテロ答てイ
エスに曰けるハ我儕一切を棄て爾に從へり然ば何を得べき乎 二八 イエス彼等に曰けるハ我まことに爾に
告ん我に從へる爾曹ハ世あらたまり人の子榮光の位に坐する時なんぢらも十二の位に坐してイスラエルの
十二の支派を鞫べし 二九 凡て我名の爲に家宅あるひハ兄弟あるひハ姉妹あるひハ父あるひハ母あるひハ妻
あるひハ子あるひハ田疇を棄る者ハ百倍を受かつ窮なき生を嗣ん 三十 多の先なる者ハ後になり後なる者ハ
先になるべし

第二十章

一 それ天國ハ朝はやく出て葡萄園に工人を雇ふ主人の如し 二 工人にハ一日に銀一枚
を予んと約束なし彼等を葡萄園に遣せり 三 また九時ごろ出て街に徒く立る者を見て 四 爾曹も葡萄園
にゆけ相當の價を予んと彼等に曰けれバ則ち往り 五 また十二時と三時ごろ出て前の如く行り 六 五時ごろ出
て又ほかの立る者に遇て曰けるハ何ゆへ終日こゝに徒く立や 七 之に答て曰けるハ我儕を雇ふ者おきに因てな
り彼等に曰けるハ爾曹も葡萄園にゆけ相當の價を得べし 八 日暮るとき葡萄園の主人その家宰に曰ける
ハ勞力たる者等を呼て後に雇へる者を始とし先の者にまで價を給へよ 九 五時ごろに雇ハれし者ども來りて銀
一枚づゝを受たり 十 先の者ども來りて我儕ハ多く受るならんと意ひしに亦銀一枚づゝを受 十一 これを受て
主人を怨つぶやきけるハ 十二 この後至者の勞力たるハ一時バかりなるに終日くるしみを任あつさに當る我儕
と均しく之をなせり 十三 主人その一人に答て曰けるハ友よ我なんぢに不義をせず爾と銀一枚の約束をなし
たるに非ずや 十四 爾のものを取て往われ亦この後至者にも爾の如く予ふべし 十五 我物を以て我もふ如く行
ハ宜らず乎わが善に因て爾の目あしき乎 十六 此の如く後の者ハ先に先の者ハ後になるべし夫よばるゝ者ハ多
しと雖も選るゝ者ハ少なし○ 十七 イエスエルサレムに上ろとき途間にて人を離れ十二弟子を伴ひて彼等に
曰けるハ 十八 我等エルサレムに上り人の子ハ祭司の長と學者等に賣されん彼等これを死罪に定ゐ 十九 また

異邦人に解すべし 二十 又第三日に甦へるべし○ 二十一 其時ゼベダイの子等の母その子
と偕にイエスに來り拜して彼に求ること有けれバ 二 之に曰けるハ何を欲ふかイエスに曰けるハ此二人の我
子を爾の國に於て一人ハ爾の右一人ハ爾の左に坐ることを命ぜよ 二三 イエス答て曰けるハ爾曹ハ求ること
ころを知ず爾曹ハ我が飲んとする杯をのみ又わが受んとするバプテスマを受得るや彼等いひけるハ能すべ
し 二三 イエス彼等に曰けるハ誠に爾曹ハ我が杯を飲またわが受んとするバプテスマを受べし然ど我が右左に座
ることハ我が賜べきに非ず只わが父に備られたる者ハ賜らるべし 二四 十人の弟子これを聞て二人の兄弟を
憤れり 二五 イエス彼等を召て曰けるハ異邦の領主ハその民を主どり大人どもハ彼等の上に權を操こ
れ爾曹が知ところ也 二六 然ど爾曹の中にてハ然すべからず爾曹のうち大ならんと欲ふ者ハ爾曹に役るゝ者と
なるべし 二七 また爾曹のうち首たらんと欲ふ者ハ爾曹の僕となるべし 二八 此の如く人の子の來るも人を役ふ
爲にハ非ず反て人に役れ又おほくの人に代て生命を予その贖とならん爲なり○ 二九 彼等エリコを出し時
おほくの人々イエスに從へり 三十 二人の瞽者路の旁に坐をりしがイエスの過るを聞て呼叫いひけるハダビ
デの裔主よ我儕を憫み給へ 三一 衆人これに默れと戒むれども愈さけび曰けるハダビデの裔主よ我儕を憫み
たまへ 三二 イエス立止て之を呼いひけるハ爾曹われに何を爲られんと願ふや 三三 イエスに曰けるハ主よ我
儕の目の啓んことを願ふ 三四 イエス憫みて其目に手を按けれバ直に見ることを得イエスに從へり

第二十一章

一 かれら橄欖山のベテパゲに至りエルサレムに近ける時イエス二人の弟子を遣さんとして二
彼等に曰けるハ爾曹むかふの村に往やがて繫たる驢馬の其子と偕にあるに遇ん夫を解て我に牽きたれ 三 若な
んぢらに何とか言ものあらバ主の用なりと曰さらバ直に之を遣すべし 四 預言者の言に視よ爾の王ハ柔和にし
て驢馬すなハち驢馬の子に乘なんぢに來るとシヲンの女に告よと 五 云るに應せん爲に如此なせる也 六 弟子ゆ
きてイエスの命ぜし如くなし 七 驢馬と其子を牽きたり己の衣をその上に置ければイエスこれに乘り 八 衆人
おほくハ其衣を途に布あるひハ樹枝を伐て途に布ぬ 九 かつ前にゆき後に從ふ人々呼いひけるハダビデの

十四 斎ホザナよ主の名に託て來る者ハ福なり至上處にホザナよ○十イエスエルサレムに至れるとき都城こ
十五 ぞりて竦動いひけるハ是誰ぞや十一衆人いひけるハ此ハガリラヤのナザレより出たる預言者イエスなり○
十六 十二イエス神の殿に入て其中なる凡の賣買する者を逐出し兌銀者の案鴿をうる者の椅子を倒し十三彼
十七 等に曰けるハ我家ハ祈禱の家と稱らるべしと錄さるを汝ら盜賊の巣となせり十四瞽者跛者の人々
十八 殿に入てイエスに來りければ之を醫しぬ十五祭司の長と學者たち其行たまへるし奇事を見また兒童ら殿
十九 にて呼ハりダビデの斎ホザナよと云を聞て怒を含十六イエスに曰けるハ彼等が言ところを聞やイエス答て曰
二十 けるハ然り嬰兒乳哺者の口に讃美を備たりと錄されしを未だ讀ざる乎十七遂に彼等ハ離れ都城を出てベタニ
二十一 ヤに往そこに宿れり○十八翌あさ都城へ返るとき飢けれバ十九路の旁にある一の無花果の樹を見て其處に
二十二 來りしに葉の他に何も見ざりしかバ今よりのち永久も果を結ぶことなかれと之に曰たまひければ無花果立刻
二十三 に枯ぬ二十弟子これを見て奇み曰けるハ無花果の枯ることいかに速やと二十一イエス答て彼等に曰けるハ我まこ
二十四 とに爾曹に告んもし信仰ありて疑ハずバ此無花果に於ろことのみならず如斯山に命じ此より移されて海に入よ
二十五 と云ども亦成ん二十二且なんぢら信じて祈らバ求ふ所ことごとく得べしと二十三イエス殿に入て教たるとき祭司の
二十六 長および民の長老たち來り曰けるハ何の權威を以て此事をなすや誰この權威を爾に予しやと二十四イエス答
二十七 て彼等に曰けるハ我も一言なんぢらに問ん我にその事を告なバ我も何の權威をもて之を行さいふことを爾曹
二十八 に曰べし二十五ヨハ子のバプテスマハ何處よりぞ天よりか人よりか彼等たがひに論じ曰けるハ若し天よりと云
二十九 バ我儕を罵ること然バ何ゆゑ信ぜざるかと云ん二十六もし人よりと云バ我儕民を畏る蓋みなヨハ子を預言者と爲ばなり二十七遂
三十 に答て知ずと曰イエス彼等に曰けるハ我も何の權威を以て之を行か爾曹に語らじ二十八爾曹いかに意ふや或人
三十一 二人の子ありしが長子に來りて曰けるハ子よ今日わが葡萄園に往て働け二十九答て曰ずと曰しがのち悔て往た
三十二 り三十また次子にも前の如く曰けるに答て君よ我往べしと曰しが遂に往ざりき三十一此二人のもの孰か父の旨
に遵ひし彼等いひけるハ長子ありイエス彼等に曰けるハ誠に爾曹に告ん稅吏および娼妓ハ爾曹より先に神

三三 の國に入べし三二夫ヨハ子義道をもて來りしに爾曹これを信ぜず稅吏娼妓は之を信じたり爾曹これを
三四 見てなほ悔改めず彼を信ぜざりき○三三また一の譬を聞ある家の主人葡萄園を樹り籬を繞らし其中に
三五 酒榨をほり塔をたて農夫に貸て他の國へ往しが三四果期ちかづきければ其果を收ん爲に僕を農夫のもとに
三六 遣せり三五農夫ども其僕等を執へ一人を鞭ち一人を殺し一人を石にて擊り三六また他の僕を前よりも多く
三七 遣しけるに之にも前の如くなせり三七我子ハ敬ふならんと謂て終に其子を遣しふに三八農夫等その子を見て
三八 互に曰けるハ此ハ嗣子なり率これを殺して其產業をも奪べしと三九即ち之を執へ葡萄園より逐出して殺
三九 せり四十然バ葡萄園の主人きたらん時にこの農夫に何を爲べき乎四一彼等イエスに曰けるハ此等の惡人
四十 を甚く討滅し期に及てその果を納る他の農夫に葡萄園を貸予ふべし四二イエス彼等に曰けるハ聖書に工
四一 匠の棄たる石ハ家の隅の首石となれり是主の行給ふところにして我儕の目に奇さる所なりと錄されしを未
四二 だ讀ざる乎四三是故に我なんぢらに告ん神の國を爾曹より奪その果を結ぶ民に予らるべし四四この石の上に
四三 墮るものハ壞この石上に墜れバ其もの碎かるべし四五祭司の長等およびパリサイの人かれの譬を聞おのれ
四四 らを指て言るを識四六イエスを執へんと欲ひ謀しかど唯民を畏たり蓋人々かれを預言者とすればなり
四五 ○一イエス彼等に答てまた譬を語りけるハ二天國ハ或王その子の爲に婚筵を設るが如し三婚筵に
四六 請おける者を迎ん爲に僕たちを遣しふかど彼等きたらざるこことを好ます四又ほかの僕を遣さんざして曰けるハ
我が筵すでに備れり我が牛また肥畜も宰りて盡く備りたれバ婚筵に來れと請たる者に言五然ごも彼等かへりみずして去ぬ其一人ハ己の田にゆき一人ハ己の貿易に往り六他の者等ハその僕を執へ辱しめて殺せり七王これを聞て怒り軍勢を遣して其殺せる者を亡し又その邑を燒たり八是に於てその僕等に曰けるハ婚筵すでに備れどもこれを請たる者ハ客となるに堪ざる者なれバ九衢に往て遇ほどの者を婚筵に請け十その僕途に出て善者をも惡者をも遇ほどの者を悉く集けれバ婚筵の客充滿す十一王客を見んとて來りけるに茲に一人の禮服を著ざる者あるを見て十二之に曰けるハ友よ如何なれバ禮服を著ずして此處に來

十三 る乎かれ默然たり 十三 遂に王僕に曰けるハ彼の手足を縛りて外の幽暗に投いだせ其處にて哀哭また切齒す
十四 ること有ん 十四 それ召るゝ者ハ多しと雖も選るゝ者ハ少なし〇 十五 此時パリサイの人いでゝ如何してか彼
十五 を言誤らせんと相謀り 十六 その弟子とヘロデの黨とを遣して云せけるハ師よ爾ハ眞なる者なり眞をもて
十六 神の道を敎また誰にも偏らざることを我儕ハ知それ銀に由て人を取ざれば也 十七 然ば爾をカイザルに納るハ
十七 善や惡や爾いかに意ふか我儕に告よ 十八 イエスその惡を知て曰けるハ偽善者よ何ぞ我を試むるや 十九 貢の
十八 銀錢を我に見せよ彼等デナリ一をイエスに携來りしに 二十 之に曰けるハ此像と號ハ誰か二 答てカイザル也
十九 さいふ是に於てイエス彼等に曰けるハ然ばカイザルの物ハカイザルに歸しまた神の物ハ神に歸すべし 二一 彼
二十 等之をき丶奇さしてイエスを去ゆけり〇 二一 復生なしと言なせるサドカイの人この日イエスにきたり問て
二一 曰けるハ師よモーセの云るに人もし子なくして死ば兄弟その妻を娶りて子をうみ兄弟の後を繼すべ
二二 しと 二五 茲に我儕の中に兄弟七人ありしが兄めとりて死子なきが故に其妻を次子に遺れり 二六 その二そ
二三 の三その七まで皆然す 二七 後つひに婦もまた死たり 二八 甦るときハ此婦七人のうち誰の妻と爲べきか
二四 是みな彼を娶し者なれば也 二九 イエス答て彼等に曰けるハ爾聖書をも神の能力をも知ざるに由て謬れ
二五 り 三十 それ甦るときハ娶らず嫁ず天にある神の使等の如し 三一 死し者の甦ることに就ていまだ讀ざる乎そもく神の
二六 たまひし言に、三二 我ハアブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりとあるを未だ讀ざる乎そもく神ハ死し者
二七 の神に非ず生る者の神なり 三三 人やこれを聞て其訓を驚けり〇 三四 イエスサドカイの人を口を塞がし
二八 めたりと聞てパリサイの人一處に集りけるが 三五 その中なる一人の敎法師イエスを試みん爲に問て曰けるハ
二九 師よ律法のうち何の誡か大なる 三七 イエス答けるハ爾心を盡し精神を盡し意を盡し主
三十 なる爾の神を愛すべし 三八 これ第一にして大なる誡なり 三九 第二も亦これに同し己の如く爾の鄰を愛す
三一 べし 四十 凡の律法と預言者ハ此二の誡に因り〇 四一 パリサイの人の集れる時イエス彼等に問て曰けるハ
三二 四二 爾曹キリストについて如何おもふ乎これ誰の子なるか彼等イエスに曰けるハダビデの裔なり 四三 彼等に

四四 曰けるハ然ばダビデ靈に感じて何故これを主と稱へし乎ダビデ言 四四 主わが主に曰けるハ我あんちの敵を
四五 爾の足臺とせるまで我みぎに坐すべしと 四五 然ばダビデ既に之を主と稱たれば如何その子ならん乎 四六 誰一
四六 言これに答ること能ず此日より敢て又さふ者なかりき

第廿三章

二 厥時イエス人やと弟子とに告て曰けるハ 二 凡て彼等が爾曹に言ところを守て行ふべし然ど彼等が行ふ所を爲ことを勿れ遵かれらハ言のみにして行ハ
三 されば也 四 また彼等ハ重かつ負がたき荷を括て人の肩に負せ己ハ一の指をもて之を動すことすら好ず 五 彼
四 等の行ハ凡て人に見れんが爲にする也その佩經を幅濶し其衣の裾を大にし 六 また筵席の上座會堂の
五 高座 七 市上の問安人やよりラビ、ラビと稱られんとを好む 八 爾曹ハラビの稱を受ること勿れ遵かれらの
六 師ハ一人すなハちキリストなり爾曹ハみな兄弟なり 九 また地にある者を父と稱ること勿れ爾曹の父ハ一人
七 すなはち天に在す者なり 十 また導師の稱を受ること勿れ爾曹の導師ハ一人すなハちキリストなり 十一
八 爾曹のうち大なる者ハ爾曹の僕と爲べし 十二 凡そ自己を高する者ハ卑せられ自己を卑する者ハ高せられん〇
九 十三 噫なんぢら禍なるかな偽善ある學者とパリサイの人よ遵なんぢら天國を人の前に閉て自ら入ず且いら
十 んとする者の入をも許されば也 十四 噫なんぢら禍なるかな偽善ある學者とパリサイの人よ遵なんぢら寡
十一 婦の家を呑いつわりて長き祈をなす之に由て爾曹最も重き審判を受べければ也 十五 噫なんぢら禍なるかな偽善
十二 なる學者とパリサイの人よ遵なんぢら偏く水陸を歷巡り一人をも己が宗旨に引入んとす既に引入れば之を爾
十三 曹よりも倍したる地獄の子と爲り 十六 噫あんぢら禍なるかな瞽なる相よ爾曹ハいふ人もし殿を指て誓へ
十四 ば事なし殿の金を指て誓へば背べからずと 十七 愚にして瞽なるものよ孰か尊き 二十 それ祭の壇を指て誓ふ者ハ祭の壇および其上
十五 き十八 又いふ人もし祭の壇を指て誓へば事なし其上の禮物を指て誓へば背べからずと 十九 愚にして瞽なる
十六 者よ禮物と禮物を聖からしむる祭の壇とハ孰か尊き 二十 それ祭の壇を指て誓ふ者ハ祭の壇および其上
十七 の凡の物を指て誓ふなり 二一 また殿を指て誓ふ者ハ殿および其中に在す者を指て誓ふなり 二二 また天を指て

二三 聖ふ者へ神の寶座および其上に坐する者を指て誓ふなり○二三 噫なんぢら禍なるかな偽善なる學者とパリ
二四 サイの人よ蓋なんぢら薄荷、茴香、馬芹の十分の一を取納て律法の最も重き義と仁と信とを留置へ廢こ
二五 れ行ふ可もの也かれも亦廢べからざる者なり 二四 瞽者なる相者よ蠓を濾出して駱駝を呑もの也 二五
二六 わふ職なる哉偽善なる學者とパリサイの人よ 噫 杯と盤の外を潔して内には貪欲と淫欲とを充せり
二七 瞽者なるパリサイの人よ俯曹まづ杯と盤の内を潔せよ然ばその外も亦きよまるべし○二七 噫わんぢら
二八 偽善なる學者とパリサイの人よ俯曹預言者の墓を飾れり 二八 此の如く俯曹もまた外へ義く人に見れども内へ偽善と不法にて充 二九 噫なんぢら偽なる
二九 わざはひ
三〇 かな偽善ある學者とパリサイの人よ俯曹預言者の墓を立て義人の碑を飾り 三〇 又いふ我儕もし先祖の時に
三一 あらば預言者の血を流すに與せざりしをと 三一 然ば俯曹が預言者を殺し者の裔なるを自ら證す 三二 な
三二 んぢら先祖の量を充せ 三三 蛇蝮の類よ俯曹いかで地獄の刑罰を免れんや 三四 是故に我俯曹に預言者と智
三三 者と學者を遣さんに或へ之を殺し又十字架に釘或へ其會堂にて之を鞭ち或へ邑より邑へ逐苦め
三四 三五 そへ義なるアベルの血より殿と祭の壇の間にて俯曹が殺しバラキアの子ザカリアの血に至るまで地に
三五 流したる義人の血へ凡て俯曹に報來らんが爲なり 三六 われ誠に俯曹に告ん此事みな此代に報來るべし 三七
三六 噫エルサレムよエルサレムよ預言者を殺し俯に遣さるる者を石にて擲もの よ母雞の雛を翼の下に集る如く
三七 我なんぢの赤子を集んとせしと幾次ぞや然ど俯曹へ好ざりき 三八 視よ俯曹の家へ荒地となりて遺れん 三九 わ
三八 れ俯曹に告ん主の名に託て來る者へ福なりと俯曹の云んとき至るまで へ今より我を見ざるべし

第廿四章

一 イエス殿より出ければ其弟子すゝみて殿の構造を彼に觀せんとしたりしに 二 イエス彼等に曰
二 けるへ俯曹すべて此等を見ざるか我まことに俯曹に告ん此處に一の石も石の上に圮れすして へ遺らじと 三 イ
三 エス橄欖山に坐し給へるとき弟子ひそかに來りて曰けるへ何の時このこと有や又俯の來る兆と世の末の兆
四 へ如何なるぞや我儕に告たまへ 四 イエス答て彼等に曰けるは俯曹人に欺かれざるやう愼よ 五 蓋おほくの
五 人わが名を冒きたり我へキリストなりと云て多の人を欺くべし 六 又なんぢら戰と戰の風聲をきかん然ど愼
六 て慌るゝ勿れ此等の事へ皆あるを可あり然ども末期へ未だ至らず 七 民おこりて民をせめ國へ國をせめ饑饉、疫
七 病、地震ところ〴〵に有あらん 八 是みな禍の始なり 九 其とき人なんぢらを患難に付し俯曹を殺すべし又
八 九 あんぢら我名の爲に萬民に憎れん 十 此とき許多のもの躓かつ互に付し互に憾むべし 十一 また僞預言者おほく起て多の人を欺かん 十二 また不法みつるに因て多の人の愛情ひやゝかに爲べし 十三 然ど終まで忍ぶ
十 十一 十二 者へ救るゝことを得ん 十四 又天國の此福音を萬民に證せん然るのち末期いたるべし 十五 是故に預言者ダニエルに託て言れたる所の憂惡にくむべきもの聖處に立を見ば（讀者よく思ふべ
十三 十四 十五 し） 十六 厥時ユダヤにある者へ山に遁れよ 十七 屋上に在もの へ其家の物を取んとて下る勿れ 十八 田にある者
十六 十七 十八 へ其衣を取んとて歸る勿れ 十九 其日にへ孕める者と乳を飲する嬰へ禍 二十 爾曹冬またへ安息日
十九 二十 に逃ることを免れん爲に祈れ 二一 其とき大なる患難へ世の始より今に至るまで有ざりき又後
二一 にも有じ 二二 若その日を少くせられずば一人だに救るゝ者あからん然ど選れし者の爲に其日へ少くせらるべ
二二 し 二三 其時もしキリスト此處にありと彼處にありと爾曹に言ふ者あるとも信する勿れ 二四 そへ僞キリスト僞預
二三 二四 言者たち起て大なる休徴と異能を行ひ選れたる者をも欺くことを得べし之を欺く可れば也 二五 われ預じ
二五 め爾曹に之を告 二六 若キリスト野に在といふ者あるとも出る勿れ室に在と云もの有とも信する勿れ 二七 そへ
二六 二七 電の東より出て西にまで閃くが如く人の子も來るべければ也 二八 それ屍のある處にへ鷲あつまらん 二九 此
二八 二九 等の日の患難の後たゞちに日へ暗く月へ光を失ひ星へ空より墜ひ震ふべし 三十 其とき人の子の兆
三十 天に現るまた地上にある諸族へ哭哀み且人の子の權威と大なる榮光をもて天の雲に乘來るを見ん 三一
三一 又その使等を遣し笛の大なる聲を出しめて天の此極より彼極まで四方より其選れし者を集むべし○
三二 三二 夫なんぢら無花果樹に由て譬を學べ其枝すでに柔かにして葉萌めば夏の近きを知 三三 此の如く爾曹も凡
三三 て此等の事を見ば時ちかく門口に至ると知 三四 われ誠に爾曹に告ん此等の事こと〴〵く成まで此民へ廢ざる

三五 天地ヘ廢ん然ど我言ヘ廢じ 三六 その日その時を知ものヘ唯わが父のみ天の使者も誰もしる者なし
三七 ノアの時の如く人の子の來るも亦然らん 三八 それ洪水の前ノア方舟にいる日までヘ人々飲食嫁娶
などして 三九 洪水の來り悉く之を滅すまで知ざりき此の如く人の子も亦きたらん 四十 其とき二人田に在ん
に一人ヘ取れ一人ヘ遺さるべし 四一 二人の婦磨ひき居んに一人ヘとられ一人ヘ遺さるべし 四二 是故に爾曹
の主いづれの時きたるかを知ざれば怠らずして守れ 四三 爾曹これを知もし家の主人ぬすびと何の時きたるか
を知ば其家を守て破らすまじ 四四 然ば爾曹もまた預備せよ意ざる時に人の子きたらんと爲ばなり 四五 時に及
て糧を彼等に予さする爲に主人がその僕等の上に立たる忠義にして智僕ヘ誰なる乎 四六 その主人の來
らん時かくの如く勤るを見るよ僕ヘ福なり 四七 我まことに爾曹に告ん其所有をみな彼に督らすべし 四八
若その惡僕おのが心に我が主人の來るヘ遲らんと意ひ 四九 その朋輩を打撻きて酒に醉たる者どもと共に飲
食し始なば 五十 その僕の主人おもヘざるの日しらざるの時に來りて 五一 之を斬殺し其報を僞善者と同うす
べし其處にて哀哭切齒すること有ん

第廿五章 一 其とき天國ヘ燈をとりて新郎を迎に出る十人の童女に比ふべし 二 その中の五人ヘ智く五人ヘ
愚なり 三 愚ある者ヘ其燈をとるに油を携へざりしが 四 智き者ヘ其燈と倂に油を器に擔へたり 五 新
郎おそかりければ皆假寐して眠れり 六 夜半ぶに叫びて新郎きたりぬ出て迎よと呼聲ありければ 七 ここの童女ど
も皆おきて其燈を整へたるに 八 愚ある者ヘ智き者に曰けるヘ我儕の燈熄んとす願くヘ爾曹の油を
我儕に分予よ 九 智きもの答て曰けるヘ我儕と爾曹とに恐くヘ足まじ爾曹賣者に往て己が爲に買ヘかれら
買んとて往しとき新郎きたりければ既に備たる者ヘ之と偕に婚筵に入しかば門ヘ閉られたり 十一 斯て後その僕等の主がへりて
除の童女きたりて曰けるヘ主よ主よ我儕の爲に開たまへ 十二 答て我まことに爾曹に告ん我ヘ爾曹を知ずと曰
り 十三 然ば忘らずして守れ爾曹その日その時を知ざればなり〇 十四 また天國ヘ或人の旅行せんとして其僕を
よび所有を彼等に預るが如し 十五 各人の智慧に從ひて或者にヘ銀五千 或者にヘ二千 或者にヘ一千を予へ

十六 たき直に旅行せり 十六 五千の銀を受し者ヘ往て之を貿易し他に五千を得たり 十七 二千を受し者も又他に二
十八 千を得たり 十八 然るに一千を受し者ヘ往て地を堀その主の金を藏せり 十九 歷久て後その僕等の主がへりて
二十 彼等と會計せしに 二十 五千の銀を受し者ヘその他に五千の銀を餘たりと曰ければ 二一 主かれに曰けるヘあゝ善且忠なる僕
二一 ものを 二 らせん爾の主人の歡樂に入よ 二二 二千の銀を受し者きたりて主よ我に二千の銀を預しが他に二千
二三 の銀を儲たりと曰ければ 二三 主かれに曰けるヘあゝ善且忠なる僕そなんぢ寡なる事に忠なり我なんぢに多
二四 ものを督らせん爾の主人の歡樂に入よ 二四 また一千の銀を受し者きたりて曰けるヘ主よ爾ヘ嚴人にて
二五 播ざる處より穫ちらさゞる處より斂ること知れり 二五 故に我懼てゆき主の一千の銀を地に藏し置り今なん
二六 ぢ爾の物を得たり 二六 その主こたへて曰けるヘ惡つ惰れる僕そ爾わが播ざる處より斂り散ざる處よ
二七 り斂ること知か 二七 然らば我が金を兌換舖に預置べきなり然ば我が歸たるとき本と利とを受べし 二八
二八 是故に彼の一千の銀を取て十千の銀ある者に予よ 二九 それ有る者ヘ予られて尙あまりあり無有者ヘその有る
二九 物をも奪るべし也 三十 無益なる僕を外の幽暗に逐やれ其處にて哀哭切齒すること有ん〇 三一 人の子おのれの榮
三十 光をもて諸の聖使を率來る時ヘその榮光の位に坐し 三二 萬國の民をその前に集め羊を牧者の綿羊
三一 と山羊とを別か如く彼等を別ち 三三 綿羊をその右に山羊をその左に置べし 三四 斯て王その右にある者に云ん
三二 吾父に惠る〻者よ來りて創世より以來なんぢらの爲に備られたる國を嗣よ 三五 蓋おんぢら我が飢し時われに
三三 食せ渴しとき我に飮せ旅せし時われを宿らせ 三六 裸なりし時われに衣せ病しとき我をみまひ獄に在しとき我
三四 に就れいなり 三七 是に於て義者かれに答て云ん主よ何時なんぢの飢たるを見て食せまた渴たるに飮しま
三五 た何時主の旅したるを見て宿らせ又裸なるに衣しや 三九 何時主の病また獄に在を見て爾に至りし乎
三六 王こたへて彼等に曰ん我まことに爾曹わが此兄弟の最微者の一人に行ることを爲に即ち
我に行しなり 四一 遂にまた左にある者に曰ん詛せらるべき者よ我を離れて惡魔と其使者の爲に備たる火に

四二 る火に入よ 四二 蓋なんぢら我が飢し時われに食せず渇しとき我に飲せず 四三 旅せし時われを宿らせず裸なりし時われに衣ず病また獄に在し時われを顧ざれば也 四四 是に於て彼等また答て曰ん主よ何時なんぢの飢また渇また旅し又裸また病また獄に在を見て主に事ざりし乎 四五 其とき王こたへて彼等にいへん我まことに爾曹に告ん此最微者の一人に行ざるは即ち我に行ざりし也 四六 此等の者は窮なき刑罰にいり義者は窮なき生命に入べし

第二十五章

一 偖イエスこの諸の言を言竟りて其弟子に曰けるは 二 二日のうち逾越節なるは爾曹が知ところ也それ人の子は十字架に釘られん爲に付さるべし 三 此とき祭司の長および民の長老等カヤパと云る祭司の長の邸の庭に集り 四 詭計をもてイエスを執へ殺さんと共々に謀いひけるは 五 祭の日には行べからず恐くは民の中に亂おこらん 〇 六 イエスベタニヤの癩病人シモンの家に居たまへる時 七 ある婦雪花石の壜物に貴たかき香膏を盛てイエスの食する所に攜來り其首に灑しかば 八 弟子等これを見て怒を含曰けるは 九 此糜費のこと爲は何故ぞや 一〇 若これを賣ば多の金を得て貧者に施すことを得ん 一一 イエス知て彼等に曰けるは何ぞ此婦を惱すや彼は我に善事を行へる也 一二 貧者は常に爾曹と偕にあれど我は常に爾曹とにても此婦が我の體に膏を灌しは我の葬の爲に行へる也 一三 我なんぢらに眞理を告ん天の下いづくにても此福音の宣傳らるべき處には此婦の行し事もその記念の爲に言傳らるべし 〇 一四 其とき十二弟子の一人おるイスカリオテのユダと云るもの祭司の長等の所に往て曰けるは 一五 我なんぢらに彼を賣さば譲何を與るか遂に銀三十にて約したり 一六 此時よりイエスを賣さんと機を窺ひぬ 〇 一七 除酵節の首の日弟子イエスに來り曰けるは我爾が爲に何處に備ふべき乎 一八 イエス曰けるは京城にいり某に至ていへ師いふ我が時近きければ我弟子と偕に逾越の節筵を爾が家に行べしと 一九 弟子イエスに命ぜられし如して逾越の食を備ふ 二〇 日くるゝ時イエス十二弟子と偕に席に就 二一 食する時いひけるは我まことに爾曹に告ん爾曹のうち一人われを賣なり 二二 彼等いたく憂て各イエスに曰出けるは主よ我

二三 なる乎 二三 答て曰けるは我と偕に手を盂に着る者即ち我を賣す者あり 二四 人の子は已について錄されたるごとく逝ん然ど人の子を賣す者は禍あるかな彼その人生れざりしあらば反て幸なりしならん 二五 彼を賣すユダ答て曰けるは我あるや之に曰けるは爾の言る如し 二六 かれら食する時イエス餅を取て祝し之をさき弟子に與て曰けるは取て食これは我身あり 二七 また杯を取て謝し彼等に與て曰けるは爾曹みな此杯より飲これは新約の我血にして罪を赦さんが爲に衆の人の爲に流 所のもの也 二九 われ爾曹に告ん今より後なんぢらと偕に新しき物を吾父の國に飲ん日まで再びこの葡萄にて造れる物を飲じ 〇 三〇 かれら歌を謳てのち橄欖山に往り 三一 其時イエス彼等に曰けるは今夜なんぢら皆われに就て礙かん蓋われ牧者を擊ば群の綿羊ちらん と錄されたれば也 三二 然ど我甦りて後爾曹に先ちがリラヤに往べし 三三 ペテロ答てイエスに曰けるは皆なんぢに就て礙かじ 三四 イエス彼に曰けるは我まことに爾に告ん今夜鷄鳴かざる前に爾三次われを知ずと言ん 三五 ペテロ彼に曰けるは我ん主と偕に死るとも爾を知ずと言じ弟子みな如此いへり 〇 三六 厥時イエス彼等と偕にゲツセマネといふ處に至て弟子等に曰けるは爾曹こゝに坐われ彼處に往て祈らん 三七 ペテロおよびゼベダイの二人の子を携へ憂へ哀みを催し 三八 彼等に曰けるは我心いたく憂て死るばかり也こゝに待て我と偕に目を醒しておれ 三九 少し進往てひれふし祈いひけるは吾父よ若かなへ少此杯を我より離ち給へ然ど我心の從を成んとするに非ず聖旨に任せ給へ 四〇 而て弟子に來り其寢たるを見てペテロに曰けるは如此一時も我と偕に目を醒をる能ざる乎 四一 惑に入ぬやう目を醒かつ祈そ の靈には願ふなれど肉體よわきなり 四二 二次ゆきて祈いのり曰けるは吾父よ若われに此杯を飲さで離つことを能ずば聖旨に任せ給へ 四三 來りて又かれらの寢たるを見これ彼等の目疲たる也 四四 彼等を離れて又ゆき第三次も同言をもて祈れり 四五 遂に其弟子に來りて曰けるは今は寢て休め時は近し人の子罪人の手に付されん 四六 起よ我儕往べし我を賣す者近きたり 〇 四七 如此いへるとき十二の一人なるユダ劍と棒とを持たる多の人々と偕に祭司の長と民の長老の所より來る 四八 イエスを賣す者かれらに號をなして曰けるは我

接吻する者い夫なり之を執へよ 四九直にイエスに來りラビ安かと曰て彼に接吻す 五十イエス彼に曰けるハ友よ何の爲に來るや遂に彼等すゝみ來り手をイエスに措て執へぬ 五一イエスに偕に在し者の一人手を伸べ劍を拔て祭司の長の僕を擊その耳を削おとせり 五二イエス彼に曰けるハ爾の劍を故處に收よ凡て劍を取る者ハ劍にて亡ぶべし 五三我いま十二軍餘の天使を吾父に請て受ること能ハずと爾豈おもふや 五四もし然せば如此あるべき事を錄し聖書に如何で應ハん乎 五五此時イエス人々に曰けるハ劍と棒とを持て盜賊を執ふる如く我を執にきたる乎われ日々爾曹と偕に殿に坐して誨しに爾曹われを執ざりし 五六然ど此の如くなるハ皆預言者の錄たる所に應成せん爲なり遂に弟子等みなイエスを離れて逃去ぬ 五七イエスを執たる者これを曳て學者と長老の集れる所の祭司の長カヤバに攜ゆく 五八ペテロ遠く離れてイエスに從ひ祭司の長の庭にまで至その結局を見んとて內にいり僕と偕に坐せり 五九祭司の長等および長老すべての議員ともにイエスを殺さんことを求て妄證を求れども得ず 六十多の妄りの證者二人きたりて曰けるハ六一この人嘗に言ることあり我よく神の殿を毀ちて三日の內に之を建うべしと 六二祭司の長たちて曰けるハ爾ごたふる言なき乎ここの人々の爾に立る證據は如何 六三イエス默然たり祭司の長こたへて曰けるハ我なんぢを活神に誓せて之を告しめん 六四イエス彼に曰けるは爾が言る如し且われ爾曹に告ん此のち人の子大權の右に座し天の雲に乘て來るを爾曹みろべし 六五是に於て祭司の長その衣を裂て曰けるハ此人ハ褻瀆ことを言り何ぞ外に證據を求んや爾曹ら今その褻瀆たることを聞り 六六なんぢら如何おもふ乎かれら答て曰けるハ彼ハ死に當れり 六七是に於て彼等その面に唾し且拳にて擊 六八曰けるハ基督よ爾を擊者ハ誰か我儕に預言せよ ○ 六九ペテロ庭に坐ゐけるにひとりの婢きたりて爾もガリラヤのイエスと偕ありき曰けれども 七十ペテロ凡の人の前に此言を背ハすして我なんぢが言ところを知ずと曰り 七一出て門口に至れる時また他の婢これを見て其處にある者に曰けるハ此人もナザレのイエスと偕に在しと 七二ペテロ又認めて誓ふ我この人を知ずと 七三暫くありて旁らに立たる者すゝみ近てペテロに曰けるハ誠に爾もその黨の一人なり爾の言ひ且暫て我その人を知ずと曰しが 七四此に於て三次われを知ずといふことを云たまへる言を憶起しぬ 七五ペテロイエスの謂ひしことばを思ひ出て凡の祭司の長と民の長老とともに謀てイエスを賣しこれを殺さんとし 二一既に彼を縛ひきゆきて方伯のポンテオピラトに解せり ○ 二是に於てイエスを賣ユダその銀を殿に投棄て其處を去ゆきて自ら縊ぬ 二三祭司の長長老等に返して曰けるハ無辜の血を賣ことを得ず 二四曰けるハ無辜の血を付し我ハ罪を犯しわ彼等いひけるハ我儕に於て何ぞ與らんや爾みづから當べし 二五ユダその銀を殿に投棄て其處を去ゆきて自ら縊ぬ 二六祭司の長たち銀を取て曰けるハ此ハ血の價なれバ賽錢の箱に入べからずと共に謀この銀をもて旅客を葬る爲に陶工の田を買り 二七故に其田ハ今に至るまで血田と稱らる 二八是に於て預言者エレミヤに託いはれたる言にイスラエルの民に估られ估られし者の價の銀三十を取 二九主の我に命せし如く陶工の田を買ぬと有に應へり ○ 三十偖イエス方伯の前にたつ方伯イエスに問て曰けるハ爾ハユダヤ人の王なるか イエス之に曰けるハ爾が言る如し 十一祭司の長長老たち彼を訴ふれども何の答もせず 十二是に於てピラト彼に曰けるハ此人ゃあんぢに立る證のかく大なるを聞きかざる乎 十三方伯の甚奇とするまでにイエス一言も答せざりき 十四この祭の日には方伯より民の願に任せて一人の囚人を釋の例あり 十五時にバラバと云る一人の名高き囚人ありけれバ 十六ピラト民の集りしとき彼等に曰けるハバラバか又はキリストと稱ふるイエスなる乎なんぢら誰を釋さんと欲ふや 十七これ娼嫉に由てイエスを解したりさ知バなり ○ 十八方伯審判の座に坐りたる時その妻いひ遣しけるハ此義人に爾干ることを勿れ蓋われ今日夢の中に彼につきて多く憂たり 十九祭司の長長老たち衆人を勸てバラバを請しイエスを殺さんことを求さ民に啜む 二十方伯こたへて彼等に曰けるハ二人のうち孰を我なんぢらに釋さんことを望むや彼等バラバと答ふ 二一ピラト曰けるハ然バキリストと稱ふるイエスに我なにを處べきか衆いふ十字架に釘よと 二二ピラト曰けるハ彼なにの惡事を行しや彼等ますゝ喊叫て十字架に釘よと 二三

者すゝみ近てペテロに曰けるハ誠に爾もその黨の一人なり爾の言ひ且暫て我その人を知ずと曰しが 七四此に於て三次われを知ずといふことを云たまへる言を憶起しぬ 七五ペテロイエスの謂ひしことばを思ひ出て凡の祭司の長と民の長老とともに謀てイエスを賣しこれを殺さんとし 二一既に彼を縛ひきゆきて方伯のポンテオピラトに解せり ○ 二是に於てイエスを賣ユダその銀を殿に投棄て其處を去ゆきて自ら縊ぬ 二三祭司の長長老等に返して曰けるハ無辜の血を賣ことを得ず 二四曰けるハ無辜の血を付し我ハ罪を犯しわ彼等いひけるハ我儕に於て何ぞ與らんや爾みづから當べし 二五ユダその銀を殿に投棄て其處を去ゆきて自ら縊ぬ 二六祭司の長たち銀を取て曰けるハ此ハ血の價なれバ賽錢の箱に入べからずと共に謀この銀をもて旅客を葬る爲に陶工の田を買り 二七故に其田ハ今に至るまで血田と稱らる 二八是に於て預言者エレミヤに託いはれたる言にイスラエルの民に估られ估られし者の價の銀三十を取 二九主の我に命せし如く陶工の田を買ぬと有に應へり ○ 三十偖イエス方伯の前にたつ方伯イエスに問て曰けるハ爾ハユダヤ人の王なるか イエス之に曰けるハ爾が言る如し 十一祭司の長長老たち彼を訴ふれども何の答もせず 十二是に於てピラト彼に曰けるハ此人ゃあんぢに立る證のかく大なるを聞きかざる乎 十三方伯の甚奇とするまでにイエス一言も答せざりき 十四この祭の日には方伯より民の願に任せて一人の囚人を釋の例あり 十五時にバラバと云る一人の名高き囚人ありけれバ 十六ピラト民の集りしとき彼等に曰けるハバラバか又はキリストと稱ふるイエスなる乎なんぢら誰を釋さんと欲ふや 十七これ娼嫉に由てイエスを解したりさ知バなり ○ 十八方伯審判の座に坐りたる時その妻いひ遣しけるハ此義人に爾干ることを勿れ蓋われ今日夢の中に彼につきて多く憂たり 十九祭司の長長老たち衆人を勸てバラバを請しイエスを殺さんことを求さ民に啜む 二十方伯こたへて彼等に曰けるハ二人のうち孰を我なんぢらに釋さんことを望むや彼等バラバと答ふ 二一ピラト曰けるハ然バキリストと稱ふるイエスに我なにを處べきか衆いふ十字架に釘よと 二二ピラト曰けるハ彼なにの惡事を行しや彼等ますゝ喊叫て十字架に釘よと 二三

その言の益なくして唯亂の起んとするをしり水を取て人々の前に手をあらひ曰けるハ此義者の血に我は
罪ゑし爾曹みづから之に當れ 二五 民みな答て曰けるハ其血ハ我儕と我儕の子孫に係るべし 二六 是に於てパ
ラを彼等に釋しイエスを鞭ちて之を十字架に釘ん爲に付したり 二七 方伯の兵卒イエスを擔へ公廳に至り全營
を其もとに集め 二八 彼の衣を褫て絳色の袍を着せ 二九 棘にて冕を編其首に冠しめ又葦を右手に持せ且そ
の前に跪づき嘲弄して曰けるハユダヤ人の王安かれ 三十 また彼に唾し其葦を取て其首を擊り 三一 嘲弄し畢
りて其袍をはぎ故衣をきせ十字架に釘んとて彼を曳ゆく 三二 その出し時クレネ人のシモンといふ者に遇
ければ強て之に十字架を負せたり〇 三三 彼等ゴルゴタ譯ズ即ち髑髏といへる處に來り 三四 醋に膽を和せて
イエスに飲せんと爲たりしに嘗て飲ことをせざりき 三五 斯てイエスを十字架に釘しのち鬮を拈て其衣を分
これ預言者の言に彼等互に我が衣を分わが裏衣を鬮にすと云しに應へり 三六 兵卒こゝに坐してイエスを守
れり 三七 また罪標に此ハユダヤ人の王イエスなりと書して其首の上に置り 三八 其とき二人の盜賊イエスと
偕に一人ハ其右一人ハ其左に十字架に釘らる〇 三九 往來の者イエスを誉り首を搖て曰けるハ 四十 殿を毀
ちて三日に之を建る者よ自己を救へ爾もし神の子ならば十字架より下よ 四一 祭司の長學者長老等も亦お
なじく嘲弄して曰けるハ 四二 人を救て己が身を救あたはず若イスラエルの王たらば今十字架より下るべし然
ば我儕かれを信ぜん 四三 彼ハ神に依賴めり神もし彼を愛しまば今救ふべし蓋かれ我ハ神の子なりと云し也
四四 同に十字架に釘られたる盜賊も同くイエスを詈れり〇 四五 晝の十二時より三時に至るまで其地あまねく
黑暗となる 四六 三時ごろイエス大聲にエリ、エリ、ラマサバクタニと呼りぬ之を譯ば吾神わが神なんぞ我を
遺たまふ乎と云る也 四七 旁らに立たる者のうち或人これを聞て彼ハエリヤを呼るなりと曰 四八 其中の一人直
に走り行て海絨をとり醋を含せ之を葦につけてイエスに飲しむ 四九 餘人曰けるハ俟エリヤ來りて彼を救
ふや否試べし〇 五十 イエスまた大聲に呼りて氣絶たり 五一 殿の幔上より下まで裂て二となり又地ふるひ
磐さけ 五二 墓ひらけて既に寢たる聖徒の身おほく甦へり 五三 墓を出て聖城に入おほくの

人に現れたり〇 五四 百夫の長と偕にイエスを守たるもの地震および其自し事を見て甚く懼れ此ハ誠に神の
子なりと曰り〇 五五 此處に遙に望ぬたる多の婦ありし彼等ハガリラヤよりイエスに從ひ事し者等なり
五六 其中に居し者ハマグダラのマリアとヤコブヨセの母なるマリアとゼベダイの子等の母と也〇 五七 日く
れてイエスの弟子なるヨセフと云るアリマタヤの富人きたりてピラトに往イエスの屍を請しかば 五八 ピ
ラトその屍を付せと命ず 五九 ヨセフ屍を取て潔き裏布に裹み 六十 之を磐に鑿たる己が新しき墓におき大
なる石を墓の門に轉して去 六一 マグダラのマリアと他のマリアと墓に對て坐し其處に居り〇 六二 預備日の翌
日祭司の長とパリサイの人等ピラトの所に集來り曰けるハ 六三 主よ我儕憶起ぜり彼の僞者いきて在し
とき三日のうち甦らんと言し 六四 是故に命じて三日に至まで墓を固守しめよ恐くハ其弟子夜きたりて之を竊
み死より甦りたりと民に言ん然ば後の惑ハ先よりも愈勝るべし 六五 ピラト彼等に曰けるハ守兵ハ爾曹に
あり往て意のまゝに固守しめよ 六六 是に於て彼等ゆきて石に封印し守兵をして墓を固守しめたり

第二十八章

一 安息日終てのち七日の首の日黎明にマグダラのマリアおよび他のマリア其墓を觀んとて
來りしに 二 大なる地震ありて主の使者天より降り墓の門より石を轉し其上に坐す 三 その容貌ハ閃電のごと
く其衣服ハ雪のごとく白し 四 守兵かれを懼戰き死たる者の如くなりぬ 五 天使こたへて婦に曰けるハ爾
曹おそるゝ勿れ我なんぢらが十字架に釘られしイエスを尋ることを知 六 彼ハ此に在ず其言る如く甦りたり
爾曹きたりて主の置れし處を見よ 七 且ゆきて其弟子に告よ彼ハ死より甦りたりと民に言ん然ば我これを爾曹に告ん
處に於て爾曹かれを見べし我これを爾曹に告ん 八 婦懼ながらも甚く喜びて急墓をさり弟子に告んと走り
往り 九 弟子に告んとて往きイエス彼等に遇て安かれと曰ひ 十 婦ハ懼ろゝ勿れ去て我が兄弟にガリラヤに往と告
等に曰けよハ懼ろゝ勿れ去て我が兄弟にガリラヤに往と告よ彼處にて我を見べし〇 十一 婦の去しのち 守兵
のうち或者ども城に至り凡て有し事を祭司の長等に告しかば 十二 彼等と長老あつまりて共に謀おほくの銀子
を兵卒に給て曰けるハ 十三 爾曹いへ我儕が寢たる時その弟子夜きたりて彼を竊りさ 十四 此事もし方伯に聞

五 ることも我儕これに勤て爾曹に憂慮なからしめん 十五 かれら銀子を取て嚼められたる如したりし是に於て此
六 の如き話今日に至るまでユダヤ人の中に傳播られたり〇十六 十二の弟子ガリラヤに往てイエスの彼等に
七 命じ給ふ所の山に至り十七 イエスを見て拝せり然ど疑へる者もありき十八 イエス進て彼等に語いひけるへ
八 天のうち地の上の凡の權を我に賜れり十九 是故に爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈
九 の名に入て弟子とし二十 且わが凡て爾曹に命ぜし言を守れと彼等に教よ夫われ世の末まで常に爾曹と偕に
二十 在なりアメン

新約全書馬太傳福音書　終

馬可傳　第一章　自一至廿七節

一 新約全書馬可傳福音書
二 これ神の子イエスキリストの福音の始なり 二 預言者の錄して視よ我なんぢの面前に我使を遣
三 さん彼なんぢの前に其道を設くべし 三 野に呼る人の聲あり云く主の道を備へ其經すぢを直せよと有が如く 四
四 ヨハネ野に於てバプテスマを施し罪の赦を得させんが爲に悔改のバプテスマを宣傳たり 五 ユダヤの全
五 國およびエルサレムの人々かれに來りて各その罪を認へしヨルダンといふ河にてバプテスマを受 六 ヨハ
六 ネ駱駝の毛衣を著腰に皮帶をつかれ蝗蟲と野蜜を食へり 七 かれ宣傳けるは我より勝れる者わが後に來ら
七 ん我は屈て其履の紐を解にも足ず 八 我は水をもてバプテスマを施すべし丸當時イエスがリヤのナザレ
八 より來りヨルダンにてヨハネよりバプテスマを受 十 頓て水より上れるとき天開れ鴿の如く其上に降るを
九 十 見たり 十一 又天より聲ありて云ふんぢは我が愛子わが悦ぶ所の者なりと〇十二 斯て靈たちにイエスを野に
十一 十二 逐たれり天の使等これに事ぬ〇十四 ヨハネの囚れし後イエスガリラヤに至り神の國の福音を傳ひけるは
十二 十三 期へ滿り神の國へ近けり爾曹悔改めて福音を信ぜよ〇十六 イエスガリラヤの一湖の邊を歩る時シ
十三 モンと其兄弟アンデレの湖に網うてるを見る彼等は漁者なり 十七 イエス彼等に曰けるは我に從へ
十四 我爾曹を人を漁る者とせん 十八 彼等たちに其網を棄て之に從へり 十九 此より少し進行せべダイの子ヤ
十五 コブとその兄弟ヨハネの舟に在て網つくろふを見て 二十 直に彼等を召給ひしかば其父ゼベダイを傭人と
十六 共に舟に遺て彼に從へり〇二一 彼等カペナウムに至るイエス即ち安息日に會堂に入て數を爲しに 二二 人々
十七 その教を駭き合り蓋學者の如ならず權威を有る者の如く敎たまへばなり 二三 其會堂に汚たる鬼に憑たる
十八 人ありて二四 喊叫いひけるは嗟ナザレのイエスよ我儕へ爾と何の與り有んや爾きたりて我儕を滅すか我なん
十九 ぢへ誰なる乎を知即ち神の聖なる者なり 二五 イエス之を責て曰けるは默聲を發すこと勿れ其處を出よ 二六 汚
二十 たる鬼その人を拘攣させ大聲に叫びて彼を出たり 二七 衆人みな驚き相問て曰けるは何事ぞや是いかなる

新しき勢ぞや汚たる鬼さへ權威をもて命じければ從へり二八是に於てイエスの聲名徧くガリラヤの四方に
擧りぬ○二九彼等やがて會堂を出ヤコブ及ヨハネと共にシモンアンデレの家に至しに三十シモンの岳母
熱を病て臥ければ或人たよちに之をイエスに告三一イエス往て其手をとり彼を起しければ熱たちまち去ぬ
斯て其婦彼等に供奉たり三二夕かた日の落さ人々すべての病を患へるもの鬼に憑たる者をイエスに携
へ來る三三その邑こぞりて門に集れり三四イエス各樣の病を患へる多の人々を醫し又多の鬼を逐出し鬼
の言ふ事を許さゞりき證鬼かれを識たるに因てなり○三五昧爽にイエス早く起人なき所にゆき其處にて祈
禱せり三六シモンおよび彼と共に在し者等その跡を蹤ゆき三七彼に遇て曰けるハ衆人みな爾を尋ぬ三八イエ
ス彼等に曰けるハ我ハ教を宣傳る爲に爾曹と偕に附近の鄉村へ往ん我これが爲に來れば也三九イエス徧
くガリラヤの國を經めぐり其會堂にて教を宣且鬼を逐出せり○四十癩病のもの一人かれに來りて跪
き求ひ曰けるハ爾もし聖意に適きハ我を潔く爲得べしと四一イエス憫みて手をのべ彼に拄て我意に適へ
り潔なれと四二言やいなや直に癩病はなれ其人きよまれり四三イエス殿く之を戒め愼みて何をも人に告
る勿れ但ゆきて己が身を祭司に見せ其潔られし爲に摩西が命ぜし所の物を獻て彼等に證據をなせと言て
去しめたり四五然ども彼いで〳〵先この事を大に言つたへ語り廣めければイエス此後あらハに城に入がたく曠
人なき所に居給ひしが人々四方より彼に來れり

一敷日の後イエス復カペナウムに來しに二彼の宅に居ことを聞えければ直に多の人々集きたり門
に立べき塲處さへもなき程おりきイエス彼等に教を宣三此に癱瘋を病たる者を四人に舁せイエスに來れる者
ありしが四群集によりて近づき能かりければ彼の居ところの屋蓋を取除き癱瘋の人を床のまゝ縋下せり五イ
エス其信仰を見て癱瘋の人に曰けるハ子よ爾の罪赦されたりと六數人の學者こゝに坐し居しが心中に思ひ
ろハ七斯人ハ何故かゝく惡口を言か神にあらずして誰か即ち罪を赦すことを得んと八イエス直に彼等が心中に斯
の如き事を論ずるを自ら其心に知て彼等に曰けるハ爾曹なんぞ心中に斯る事を論ずる乎九癱瘋の人に爾
の罪ハ赦されたりと言と起て爾の床を取て行と言と孰れ易や十それ人の子地にて罪を赦すの權威あることを
爾曹に知せんとて遂に癱瘋の人に十一我なんぢに告おきて床を取なんぢの家に歸れと曰ければ十二その人た
ちに起て床をとり衆人の前にいづ衆人みな駭き神を崇て曰けるハ我儕いまだ斯の如きことを見しことなし
○十三イエスまた海邊に往しに人々みな彼に來ければ是等を敎ふ十四此より進てアルパヨの子レビといふ者
の稅吏の役所に坐し居けるを見て我に從へと曰ければ彼たちて從へり○十五斯てイエスその家にて食する
時おほくの稅吏罪ある人々イエス及び弟子と共に坐せり是等の者許多ありてイエスに從ひぬ十六學者とパ
リサイの人かれが稅吏および罪ある人と共に食するを見て其弟子に曰けるハ何ゆゑ稅吏罪ある人と共に
食飮する乎十七イエス聞て彼等に曰けるハ康強なる者ハ醫者の助を賴ず唯病ある者これを需わが來しハ
義人を召ために非ず罪ある人を召て悔改させんが爲なり○十八ヨハ子の弟子及びパリサイの人つれに
斷食する事ありけれど彼等イエスに來いひけるハ曰ハ子の弟子とパリサイの弟子ハ斷食するに爾の弟子ハ何
ゆゑ斷食せざる乎十九イエス彼等に曰けるハ新郎の朋友その新郎と共にゐる間に斷食することを得べき乎か
れら新郎と共にゐる間ハ斷食することを得じ二十將來かれら新郎をさらるゝ日きたらん其日にハ斷食すべき
也二一新しき布を舊き衣に縫つくろふ者あらじ若し然せば其新に補へるもの舊きを綻して其破かへつて
惡なるべし二二亦あたらしき酒を舊き革囊にいるゝ者あらじ若し然せば酒も革囊も亦壞るべし新き酒ハ新しき革囊に盛べきもの也○二三偖イエス安息日に麥の畠を過りし
いで弟子あゆみつゝ麥の穗を摘はじめければ二四パリサイの人彼に曰けるハ彼等安息日に爲まじき事をす
るハ何故ぞ二五イエス答けるハダビデ及び從に在し者の乏くして飢しとき行たる事を未だ讀ざる乎二六即
ち祭司の長アビアタルのとき神殿に入て唯祭司の外ハ食まじき供物のパンを食つゝ從に在し者にも與た
りと言また彼等に曰けるは安息日ハ人の爲に設られたる者にして人ハ安息日の爲に設られたる者に非す
二七然ば人の子ハ安息日にも主たる也

第三章 一 イエスまた會堂に入しに一手枯たる人ありけるが 二 衆人イエスを訟んとして彼の此人を安息
日に醫すや否や窺へり 三 イエス手枯たる人に曰けるは中に立よ 四 また衆人に曰けるは安息日しに善を行ふと
悪を行ふと生るを救ると殺すと孰か爲べき彼等默然たり 五 イエス怒を含て環視し彼等が心の頑硬なるを
憂へ手枯たる人に爾の手を伸よと曰ければ彼その手を伸しに即ち他の手のごとく愈たり 六 パリサイの人い
でゝ如何してかイエスを殺さんと直にヘロデの黨に相謀りぬ ○ 七 イエスその弟子と共に海邊に退しに多
の人ヤガリラヤより彼に從へり又ユダヤ 八 エルサレム イドマヤ ヨルダンの外また ツロとシドンの邊より多
の人ヤイエスの行し事を聞て彼に群り來る 九 イエス人ヤの擁集に因て凡て疾ある人や手にて彼に捫んとて
我に備おけと其弟子に曰り 十 是イエス數多の人ヤを愈しゝに因て凡て疾ある人や手にて彼に捫逼
しが故おり 十一 また汚たる鬼かれを見て其前に俯伏さけびて爾ハ神の子ありと曰しを 十二 イエス彼等に我を
揭すること勿れと嚴く戒めたり ○ 十三 イエス山に登り其意に適ふ所の者を召しかば來りて彼に就り 十四 是に
於て十二人を立て己と偕に置また教を宣傳る爲に遣し 十五 かつ病を醫し鬼を逐出すの權威を授く 十六 乃
ちシモンをペテロと名け 十七 ゼベダイの子ヤコブと其兄弟ヨハネこの二人をボアネルゲと名くと之を譯れば雷
の子なり 十八 又アンデレ ヒリポ バルトロマイ マタイ トマス アルパヨの子ヤコブ タダイ シモン
ン 十九 又イスカリオテのユダ此ハイエスを賣しゝ者なり 二十 此等の者家に入しに多の人ヤ又來り集りけれ
ば食する暇もなかりき 二一 其親屬きゝて彼ハ狂氣せりと言て之を拳んさて來る 二二 又エルサレムより下れ
る學者等も彼ハベルゼブルに憑れたり且鬼の王に藉て鬼を逐出すなりと曰り 二三 イエス彼等を召び譬を以
て曰けるはサタンハ何でサタンを逐出し得んや 二四 もし國おのれに悖て分爭ハゞ其國立べからず 二五 もし
家おのれに悖て分爭ハゞ其家立べからず 二六 若サタン己に悖り起て分爭ハゞ彼たつ可からず
反て終るなるべし 二七 誰にても勇士の家に入て其家具を奪んさせバ先勇士を縛らされバ尋ふこと能わし
縛て後その家を奪ふべし 二八 われ誠に爾曹に告ん人の凡の罪と瀆す所の褻瀆ハ赦るべけれど 二九 聖靈を瀆す
者ハ限なく赦さるゝ可らず限なき刑罰に干らん 三十 斯いへるは人ヤイエスを惡鬼に憑たりと言しが故なり ○
三一 その兄弟と母と來りて戸外にたち人を遣してイエスを呼しむ 三二 多の人ヤイエスを環て坐したりし
が彼に曰けるハ視よ爾の母と兄弟戸外に在て爾を尋ぬ 三三 イエス答て曰けるハ我母わが兄弟ハ誰ぞや
斯て側に坐する人ヤを環視して曰けるハ我母わが兄弟を見よ 三五 それ神の旨に從ふ者ハ是わが兄弟
わが姉妹わが母なり

第四章 一 イエスまた海濱にて教訓を始しに多の人ヤかれに集りけれバ彼舟に乘て坐し凡の人ヤハ海に沿て
岸に立り 二 かれ譬を以て多の事を彼等に教ふ教て曰けるハ 三 聽よ種播もの播んさて出 四 播るさき或種ハ路の
傍に遺しが空の鳥きたりて之を食へり 五 或種ハ土うすき磽地に遺しが土深からざれバ直に萌出たれど 六 日出し
かバ曝れ根なきが故に枯たり 七 或種ハ棘の中に遺しが棘そだちて之を敵れバ實を結ざりき 八 また或種ハ
沃壤に遺しが其苗はえいでゝ蕃り實を結ぶこと或ハ三十倍或ハ六十倍或ハ百倍せり 九 また彼等に
曰けるハ耳ありて聽ゆる者ハ聽べし ○ 十 衆人の居さりし時イエスの側に在し者と十二弟子と此譬を問し
かバ 十一 イエス彼等に曰けるハ神の國の奥義を爾曹に賜へり知こさを賜へど凡て譬を以てす 十二 是かれら視ども見ず聽ども聽ず且悟らず改めて其罪の赦を得ざらん爲なり 十三 また彼等に曰けるハ爾曹この譬を知ざるか然バ如何して凡の譬を識こさを得んや 十四 それ播者ハ數を播なり 十五 道の播れて路の傍に遺しものハ人道を聽しさき直にサタン來て其心に播れたる道を奪取なり 十六 また磽地に播れたるものハ人道を聽さき直に喜びて之を受 十七 然ども己の根なきが故たゞ暫時のみ後道の爲に患難あるこ
たるものハ人道を聽さき直に喜びて之を受 十七 然ども己の根なきが故たゞ暫時のみ後道の爲に患難あるこ
も已ず 十八 又棘の中に播れたるものハ人こさバを聽ごし 十九 此世の思慮
ひハ逍害に遇さきハ忽ち躓く者なり 十八 又棘の中に播れたるものハ人こさバを聽ごし 十九 此世の思慮
と貨財の惑また各樣の情欲いり來りて道を蔽により終に實を結ざる者なり 二十 沃壤に播れたるものハ人道
を聽て之をうけ或ハ三十倍あるひハ六十倍あるひハ百倍の實を結ぶ者なり ○ 二一 また彼等に曰けるハ
燈を持來りて斗の下あるひハ牀の下に置もの有んや之を燭臺の上に置ならずや 二二 隱て明瞭にならざる

ハなく藏て露れざる者ハおし 三三 耳ありて聽ゆる者ハ聽べし 二四 また彼等に曰けるハ聽さこゝろを愼めよ爾曹が度る所の量を以て爾曹も度らるべし聽たる爾曹にハなほ加られん 二五 それ有る者ハなほ與られ無有者ハ有る者をも取るゝ也〇 二六 また曰けるハ神の國ハ人種を地に播が如し 二七 日夜起臥する間に種ハえいでゝ成長ども其然る故を知ず 二八 それ地ハ自から實を結ぶものにして初にハ苗つぎに穗いで穗の中に熟したる穀を結ぶ 二九 既に熟ば獲時いたるに因て直に鎌を入さする也〇 三十 また曰けるハ神の國ハ何に比へ何の譬を以て之を喩ん 三一 一粒の芥種のごとし之を地に播さきハ百樣の種より微けれど 三二 既に播て萌出れば百樣の野菜より大くかつ巨たる枝を出して空の鳥その蔭に棲ほどに及あり〇 三三 イエス彼等の聽得さこゝろに循ひ多かる譬をもて教を彼等に語れり 三四 譬に非ざれバ彼等に語らず イエスその弟子と共に居るさき彼等に悉く之を解聽せり〇 三五 偖その日の夕暮イエス彼等に向の岸に濟れと曰けれバ 三六 弟子たち衆人を歸らせイエスの舟に在しを其まゝ之ぞ偕に濟れり又他の小舟もこゝに往り 三七 時に颶風おこり浪うちこみて殆ど舟に滿 三八 イエス舟の尾に枕して寢たりしが弟子かれの目を醒して曰けるハ師よ我儕が溺るゝをも顧み給ハさるや 三九 イエス起て風を戒め且海に靜りて穩かに爲と曰けれバ風やみて大に和たり 四十 斯て彼等に曰けるハ何故かく懼るゝや爾曹何ぞ信なき乎 四一 彼等甚しく懼れ互に曰けるハ風と海さへも順ふ是誰なるぞ耶

第五章 一 かれら海を濟てガダラ人の地に著 二 舟より イエスの上れるさき惡鬼に憑れたる人たゞちに墓間より出て彼に遇 三 この人ハ墓間を居處させり 曩次桎梏ご鏈をもて繫ごも鏈をうちきり桎梏を打砕により之を繫うる者なく亦誰も之を制し得もの無りき 五 夜も晝も恆に山と墓間に於て喊叫また石をもて己が身に傷つけぬ 六 彼はるかにイエスを見て趨より之を拜し 七 大聲に呼りけるハ至上神の子イエスよ我なんぢと何の與り有んや我神に託て求ふ我を苦むることなかれ 八 是イエス惡鬼に人より出よと曰しに因てなり 九 イエス彼に爾の名ハ何と問しに答けるハ我儕おほきが故に我名をレギヨンと云 十 切に此土地より我儕を逐出す勿れとイエスに求たり 十一 茲に多の豕の群山に草を食ぬたりしが 十二 凡の惡鬼かれに求て我儕を遣て豕に入せよと曰け

れバ 十三 イエス直に彼等を許せり汚たる鬼その人より出て豕に入しかバ約そ二千匹ほごの群はげしく颺て出 十四 たり山坡より海に落て海に溺ぬ 十五 牧者ごも逃ゆきて此事を邑また鄉村に告けれバ衆人其ありし事を覩んさて 十五 イエスに來りて惡鬼に憑れたる者すなわちレギヨンを持たりし人の衣服をつけ證ある心にて坐し居けるを見て懼めへり 十六 此事を見し者ごも惡鬼に憑れたりし者の事と豕の事を彼等に告けれバ 十七 頓てイエスに其境を出んことを求ぬ 十八 イエス舟に登んさせしさき惡鬼に憑たりし者さもに居んことを求けれごも 十九 イエス許ずして彼に曰けるハ爾の家に歸り親屬に往て主の爾に行したまへる大なる事をデカポリスに言揚しけれバ衆人みな駭きあへり〇 二十 彼ゆきてイエスの己に行たまへる大なる事をデカポリスに言揚しけれバ衆人みな駭きあへり〇 二十 彼ゆきてイエスの己に行たまへる大なる事をデカポリスに言揚しけれバ衆人みな駭きあへり〇 二一 イエス舟に乘て復海の彼岸に濟しに大勢の人ゃ彼に集るイエスへ海に近をれり 二二 會堂の宰ヤイロといふ人きたりイエスを見て其足下に伏 二三 切ゃに求いひけるハ我いとけなき女死ろ瀕になりぬ之を救んさ爲に來りて手を彼に按たまへ然バ女ハ生べし 二四 イエス彼と共に往き衆多の人ゃ彼に從ひて擁わ〔へり〕 二五 爰に十二年血漏を患たる婦あり 二六 此婦おほくの醫者の爲に甚だ苦められ其所有をも盡く費しけれごも何の益もなく弥て惡かりしが 二七 イエスの事を聞て群集の中より彼ハ後に來 その衣に捫りし 二八 是その衣にだに捫らバ愈るべしと曰バなり 二九 斯て血の漏ること直にとまり既に痊なりし事を身に覺たり 三十 イエス自ら能力の己より出たるを知おほせいの人ゃを顧みて曰けるハ我衣に捫りし者ハ誰なる乎 三一 弟子かれに曰けるハ群集の人ゃの爾に擁めふを見て我に捫りし者ハ誰ぞと曰たまふ乎 三二 イエス此の事を行ろしし婦ん見んと環視しけれバ 三三 婦おそれ戰慄おのが身にせられし事を知て來りて彼の前に俯伏ことごとく實情を告ぐ 三四 イエス彼に曰けるハ女よ爾の信なんぢを救りて安然にして往なんぢの痊いゆべし〇 三五 イエスこの事を言をろうちに會堂の宰の家より人ゃ來りて曰けるハ爾の女すでに死たり何ぞ師を煩ハす乎 三六 イエス直に其告る所の言をきゝ會堂の宰に曰けるハ懼るゝ勿たゞ信ぜよ 三七 イエスペテロとヤコブ及その兄弟ヨハネの外ハ誰にも共に往ことを許さゞりき 三八 既に會堂の宰の家に來りて人ゃの忙亂いたく

哭泣を見る 三九 入て彼等に曰けるハ何ぞ忙亂かつ哭や女ハ死ろに非たゞ寢たる耳 四十 彼等イエスを哂笑ふ
スベて の人々を出し女の父母とその從へる者等を率つれ女の臥たる所に入 四一 女の手を執て之に曰けるハ
タリタ クミ之を譯ベ女よ我なんぢに命す起よと 四二 直に女起て行めけ彼ハ年十二歳なり彼
等ほなみだ驚きぬ 四三 イエス此を去て故郷に到しに其弟子ら彼に從ひぬ 二 安息日に及けれバ會堂にて教をはじむ
衆人これを聞て奇み曰けるハ如何して此人に斯のごとき事あるか誰より此智慧を授られて如此ふしぎある事
たも其手より行か 三 彼ハ木匠に非ずやマリアの子ヤコブ ヨセ ユダ シモンの兄弟にして其姉妹も此に我
傍と共に在に非ずや遂に人々 彼に躓けり 四 イエス彼等に曰けるハ預言者ハその故郷その親戚その室家の外
に於ては尊がれざることなし 五 イエス彼處にて患者に手を按たゞ數人を醫し給ふ外ふしぎなる事を行ことを
能ざりき 六 また彼等の信ぜざるを奇み遂に諸鄉を經巡て數をおせり 七 イエス十二の弟子を召て彼等を二
人づゝ遣さんとして之に惡鬼を逐出す權威を授け 八 且かれらに命じけるハ一の杖の外ハ旅の用意に何をも携
なかれ旅袋麪食また金をも携ず 九 たゞ履をはきき二の衣をきるな勿れ 十 また彼等に曰けるハ何處にても人
の家に入バその所を去まで其處に居よ 十一 凡て爾曹を接ずおんぢらに聽ざる者には其處を去ざる證のため足
下の塵を拂へ我まことに爾曹に告ん審判の日ハいたらバソドムとゴモラの此邑よりも却て易かるべし 十二 弟子
たち出て人々に悔改むべきことを宣傳へ 十三 また多の惡鬼を逐出し又多の病る者に膏を沃て醫しぬ 十四
イエスの名播りければヘロデ王これを聞て曰けるハバプテスマを施しゝヨハ子死より甦れる故に奇異あるこ
能をあす也 十五 或人ハ之をエリヤありさいひ或ハ往昔の預言者の如き預言者なりと曰ふ 十六 ヘロデ之を聞て曰
けるハ是わが首斬し所のヨハ子也れ死より甦りたる也 十七 蓋ヘロデその兄弟ピリポの妻ヘロデヤの
事に因て人を遣しヨハ子を捕て獄に繫げり蓋ヘロデが彼の婦を娶しを 十八 ヨハ子諫て爾兄弟の妻
を納ゝ宜からずと曰るに因てなり 十九 ヘロデヤ彼を怨て殺さんと欲しかど能ざりき 二十 ヘロデヘヨハ子を

義かつ善なる人と知て彼を敬ひ彼を保護かれに聞て多の事を行ひ且喜びて彼に聽ことをせり 二一 斯てヘ
ロデその誕生の日もろ〳〵の大臣千人の長およびガリラヤの尊き人々に享宴をなせる機會の日いたりけ
れバ 二二 ヘロデヤの女きたりて舞をなしヘロデと其席に列れる人々を樂ましむ王その女に曰けるハ何にて
も我に求へ爾が望ところの者ハ我なんぢに與ふべし 二三 又彼に凡そ爾が求るものハ我が領分の半に至
るとも爾に與んと誓ふ 二四 女いで其母に何を求べきや乎と曰けれバ母乃ちバプテスマのヨハ子が首と曰
ふ 二五 女たゞちに急ぎ王にきたり求てバプテスマのヨハ子が首を盆に載て即時に我に賜へと曰ふ 二六 王甚だ
憂けれども既に誓たること同席の者の故をもて之を拒むことを欲ず 二七 王たゞちにヨハ子の首を携來れと命
じて兵卒を遣しければ彼ゆきて獄に於て之を斬 二八 其首を盆にのせ携來りて女に與ふ女ハ之を其母に與た
り 二九 ヨハ子の弟子等この事を聞て來り其屍を取て墓に葬りぬ 三〇 使徒等イエスに集りて行へる事と
教し事とを悉く彼に告ぐ 三一 イエス彼等に曰けるハ爾曹來て我と偕に暫く寂寞ところに往て休むべ
し是往來のもの多して食する暇も無ればなり 三二 かれら人を避舟にて寂寞ところに往り 三三 其往を見て
衆人おほくイエスなしり諸邑より歩行にて趨り彼等の往んとする所へ先ち往てイエスに集れり 三四 イエ
ス出て多の人を見に彼等ハ牧者なき羊の如き者なるに因て之を憫み許多の事を教はじめぬ 三五 時すでに暮
景になりければ其弟子かれに來いひけるハ此ハ寂寞ところにして時も既晩し 三六 衆人の食ふべき物なきが故
に其自ら四周の鄉村に往てパンを市んが爲に彼等を去しめ給へ 三七 イエス答けるハ爾曹これに食を與
よ弟子かれに曰けるハ我儕ゆきて銀二百のパンを市かれらに與て食しむ可か 三八 イエス彼等に曰けるハ
パン ハ幾何ある往て視よ彼等みて其數をしり五のパンと二の魚ありと答ふ 三九 イエス衆の人を組々にして
青草の上に坐しめよと命じければ 四十 或ハ百人或ハ五十人づゝ列坐せり 四一 イエスその五のパンと二の
魚をとり天を仰ぎ謝してパンをわり弟子に與て人々の前に陳しむ又二の魚を毎人に分與ぬ 四二 衆人みな
食て飽 四三 そのパンと魚の餘屑を拾しに十二の筐に盈たり 四四 パンを食たる男およそ五千人ありき 四五 直

にイエスその弟子を強て舟に乘むかふの岸なるベテサイダへ先わたらしめ己れ衆人を歸しむ四六衆人を歸しゝのち祈禱の爲に山に往り四七日暮て舟ハ海の中に在イエスハ獨り陸に居り四八風逆ふに因て弟子等の舟を掉に勞たるを見て曉の四時ごろイエス海の上を履きたり彼等を過んさせしに四九弟子その海を履るを見て變化の物ならんと思ひ叫びたり五十盡弟子みな之を見て懼しが故なりイエス直に彼等に語りて曰けるハ心安かれ我なり懼るゝこと勿れ五一遂に舟に登しかば風やみぬ彼等心の中に駭き異めること甚だしゝ五二是其心の愚昧に因てパンの奇跡をも覺ざりし也○五三既に濟ゲ子サレといふ地に到て舟泊せり五四彼等舟より出しに頓て人やイエスを知て五五徧く四方の地へ馳ゆき病る者を床の儘にて舁ひイエスの在す處やを聞出して之に就り五六凡そイエスの至るところ或ハ鄉あるひハ邑あるひハ村その街市に病る者を置て彼に其衣の裾にだに捫らせ給へと求りしが乃ち捫るほどの者ハみな愈たり

第七節　一パリサイの人と或學者たちエルサレムより來りてイエスの前に集り二彼の弟子の中に潔らざる手即ち盥ざる手にてパンを食する者ありしを見て之を責めたり三蓋パリサイの人とユダヤの人やハみな古の人の遺傳を守りて其手を潔あらハざれバ食せず四市より歸きたりて盥されバ亦食せず此ほか杯桃鍋および牀を洗など多端の遺傳を受守れり五是に於てパリサイの人と學者等イエスに問けるハ爾の弟子ハ何ゆゑ古の人の遺傳に遵ハすして盥ざる手を以てパンを食するや六イエス答て彼等に曰けるハイザヤハ僞善者なる爾曹を指てよく預言せり其錄しるす言に此民ハ唇にて我を敬へども其心ハ我に遠かり七人の誡を教ふ爲て徒らに我を拜すと曰り八夫爾曹ハ神の誡を棄て人の遺傳を守れり即ち鍋杯を洗おほく此の如き事を行ふ九また彼等に曰けるハ爾曹ハ實に己の遺傳を守んとて能も神の誡を棄る者なり十モーセ曰けるハ爾の父母を敬へ又父あるひハ母を詈る者ハ殺るべしと十一然ど爾曹ハ曰もし人父あるひハ母に對て爾を養ふべき物ハコルバン即ち禮物なりと曰バ十二而して人の其父あるひハ母の爲に何をもすることなゝらもるさ行事を爾曹許す十三斯なんぢらハ其教る所の遺傳をもて神の道を廢うす又おほく此類の事を行ふ○

十四イエスまた衆庶を召て彼等に曰けるハ爾曹みな我言を聞て悟れ十五外より人に入るものハ人を汚すこと能ハず然ど人より出るものハ人を汚す也十六聽ゆる耳ある者ハ聽べし○十七イエス衆庶を離れて室に入しにその弟子たちへの意を問ければ十八彼等に曰けるハ爾曹もなほ悟ざるか凡そ外より人に入るものハ人を汚し能ハざる事を知ざる乎十九蓋その心に入ず腹に入て厠に遺すなハち食ふ所のもの潔れり二十又曰けるハ人より出るものハ人を汚す二一人の心より出るもの〻ハ惡念、奸淫、苟合、兇殺、二二盜竊、貪婪、惡慝、詭譎、好色、嫉妬、謗瀆、驕傲、狂妄なり二三是等の惡行ハみな内より出て人を汚すもの也○二四イエス此を去てツロとシドンの境にゆき家に入て人に知れざらん事を欲しが隱れ得ざりき二五それ惡鬼に憑たる幼き女を有る婦イエスの事を聞て來り其足下に伏たるに因てなり二六この婦ハサイロピニケに生れしギリシヤの者なりイエスに求り二七イエス彼に曰けるハ先兒女に飽しむべし兒女のパンを取て犬に投るハ善らず二八婦こたへて曰けるハ主よ然されど犬も案の下に在て兒女の遺屑を食ふ也二九イエス婦に曰けるハ此言に因て歸れ惡鬼ハ爾の女より出たり三十婦その家に歸しに惡鬼既に出て牀に女の臥たるを見る○三一イエツロとシドンの地を去てデカポリスの地を過ガリラヤの海に至れり三二人ヤ聾の訥ろ者をイエスに携來りて手を按給ハん事を求けれバ三三イエス衆人を離れ之を外へ携ゆき指を其耳にさしいれ又唾して其舌に捫り三四且天を仰て嘆じ其人に對てエツパタと曰これを釋よとの義なり三五直に其耳ひらけ舌の絡ゆるみて正く言へり三六イエス之を人に告る勿れと彼等を戒むれバ戒むるほど益言揚しぬ三七衆人はなハだしく駭きて曰けるハ此人の行し所こと〴〵く善あるひハ聾を聽えさせ或ハ啞者を言へしめたり

第八節　一當時あつまれる人や甚だ多りしが何の食物も有ざりければイエス其弟子を召て曰けるハ二我この多の人を憐む既に三日われと共に居しゆゑ今なにも食物なし三もし飢しまゝ其家に歸さバ途間に倒ん其中に遠處より來れる者あれバ也四その弟子かれに答けるハ此野にて何處よりパンを得この人やを飽

六 しめん乎 五イエス彼等に問けるハヽン幾何あるや七ゝ答ふ 六イエス人々に命じて地に坐せしめ七のパンを取
七 て謝し之をわり人々の前に陳しめんが爲その弟子に與けれバ即ち人々の前に陳り 七また小き魚を
八 てり之をも祝して人々の前に陳ゝ 八人々これを食て飽その餘屑を七の籃に拾り 九之を食る者おほよそ四千
九 人なり乃ちイエス之を歸しぬ〇 十イエス直に其弟子ゝ共に舟に乗てダルマヌタの方に往しに 十一パリサイ
十 の人いでゝ彼を試んがため天よりの休徴を求めて詰はじむ 十二イエス心の中に深く歎息して曰けるハ此
十一 世の人なんぞ休徴を求るや誠に我なんぢらに告ん休徴ハ此世の人に必ず與られじ 十三イエス彼等を離れて
十二 復舟に乗むかふの岸に濟れり〇 十四さて弟子パンを携ふることを忘たゞ一のパンのみ舟に有き 十五イエス彼
十三 等を戒めて曰けるハ戒心してパリサイの人のヘロデの酵を愼めよ 十六弟子たがひに論じて曰けるハ
十四 これパンを携へざりし故ならん 十七イエス之を知て彼等に曰けるハ何ぞ互にパンを携へざりし事を論ずるや
十五 汝だ悟ざるか爾曹の心なほ頑か 十八目ありて視ざるか耳ありて聽ざるか又四千人に七のパンを擘あたへし時
十六 のパンを擘あたへし時その餘屑を幾筐ひろひしや答けるハ七なり 十九また五千人に五
十七 その餘屑を幾筐ひろひしや答けるハ十二なり 二十何ぞ悟ざる乎〇 二一イエス彼等に曰けるハ
十八 に至けれバ人々醫者を携來りて之に手を按たまへん事を求り 二二イエスベテサイダ
十九 に至りて手を彼に按ひけるハ何か視るや 二四醫者目を擧て曰けるハ我この人々の歩行を見に樹の如し 二五
二十 遂にイエスまた兩手を彼の目に按その目を愍させければ乃ち愈て庶物あきらかに視たり 二六イエス彼を
二一 其家に歸らせ曰けるハ此村に入なかれ且この村人にも告る勿れ〇 二七イエスその弟子と共にカイザリヤピリ
二二 ピの諸村へゆく途間にて其弟子に問て曰けるハ衆人ハ我を曰て誰とする乎 二八答けるハ或人ハバプテスマの
二三 ヨハ子或人ハエリヤ或人ハ預言者の一人なりと曰り 二九イエス
テロ答けるハ爾ハキリストなり 三十イエス彼等を戒めて我事
子の必ず多の苦難をうけ長老祭司の長學者どもに棄られ且殺されて三日の後に甦ることを彼等に示し

三二 始たまへり 三一 明に之を示し給しかバペテロイエスを援て諫んことせしに 三三イエス回顧その弟子を見て
三三 ペテロを戒め曰けるハサタンよ我後に退け爾ハ神の情を思ふ能ハず反て人の情を思ふ〇 三四衆人と其弟子を
三四 共に召て彼等に曰けるハ若し我に從んと欲ふ者ハ己を棄その十字架を負て我に從へ 三五そハ生命を全ふせ
三五 んとする者ハ之を喪ひ我だめ且福音の爲に生命を喪ふ者ハ之を得べければ也 三六もし人全世界を得とも
三六 其生命を喪ハヽ何の益あらん乎 三七また人何をもて其生命に易んや 三八姦悪なる此世に於て我と我道を
三七 恥る者をバ人の子も亦聖使と共に父の榮光もて來る時之を恥べし

第九章

一 イエスまた彼等に曰けるハ我まことに爾曹に告ん此に立もの〳〵中に神の國の權威をもて來るを見
二 まで ハ死ざる者あり〇 二さて六日の後イエスペテロヤコブヨハ子を伴ひ人を避て高山に登り給ひしが彼
三 等の前にて其容貌かハり 三其衣ひかやき白こと甚だしくして雪の如く世上の布漂も斯しろくハ爲能ハざ
四 るべし 四エリヤとモーセ共に彼等に現れてイエスと語れり 五ペテロ答てイエスに曰けるハラビ我儕こ
五 こに居ハ善われらに三の廬を建せ給へ一ハ主のため一ハモーセのため一ハエリヤの爲にせん 六此ハ其問ことを
六 知ざりしなり彼等いたく懼しに因モ斯て雲彼等を蔽ひ聲雲より出て曰けるハ此ハ我が愛子なり之に聽
七 べし 八頓て弟子環視けれバイエス己の外ハ一人をも見ざりき 九山を下る時にイエス彼等に命じて人の子
八 の死より甦る迄ハ爾曹の見し事を人に告る勿れと曰り 十弟子等ここの言を守かつ互に論じ曰けるハ死より
九 甦るとハ何の事か 十一彼等イエスに問て曰けるハエリヤハ前に來るべしと學者の曰るハ何ぞや 十二イエ
十 ス答て曰けるハ實にエリヤハ前に來りて萬事を復振また人の子に就てハ其多の苦難を受かつ輕慢らる
十一 る事を書しるされたり 十三然ど我なんぢらに告んエリヤ既に來しに彼に就て錄されたりし如く人々意の任
十二 に之を待へり〇 十四イエス弟子等の所にきたり多の人々の彼等と論じなりしを見たり 十五衆人たぶちに彼を見て駭き趨より
十三 て禮をなせり 十六イエス學者に問けるハ弟子と何事を論ずるや 十七衆人のうち一人こたへけるハ師よ我ものいハぬ惡鬼に憑れたる我子を爾に携來れり 十八惡鬼の憑時

ハ彼傾跌され洙をふき齒を切て疲勞はつる也これを逐出さんことを我なんぢの弟子に請しかど彼等能ざりき 十九 イエス彼等に答て曰けるハ嚮信なき世なる哉いつまで我なんぢらと共に在んや何時まで我なんぢらを忍んや彼を我に携來れ 二十 彼等その子を携來りしに惡鬼イエスを見て忽ち彼を拘擊しむ彼地に仆れ轉て涕を出ぬ 二一 イエスその父に問けるハ幾何時より如此なりしや父いひけるハ少時より也 二二 惡鬼さけびて大に彼を拘擊しめて出しかば彼死たるものの如なりぬ人ゝこれを曰に死りと云 二七 イエスその手を執て扶ければ彼たてり〇 二八 イエス家に入しにそのでし其弟子ひそかに問けるハ我儕これを逐出すこと能ざりし何故ぞ 二九 イエス彼等に曰けるハ此族ハ祈禱さんげにあらざれば逐出すこと能ざる也〇 三十 彼等こゝを去てガリラヤを過この事をイエス人の知を欲ざりき 三一 蓋その弟子に教て人の子ハ人の手に付され彼等に殺され殺されてのち第三日に甦るべしと曰たまふが故なり 三二 其さき弟子等この言を曉らず亦問こと恐たり〇 三三 偖イエスカペナウンに至り室に居て弟子に問けるハ爾曹途間にて何を互に論じ誰か大ならんとの爭ありければなり 三四 弟子默然たり是途間にて互に論じ誰か凡の人の後さなり且すべての人の使役こならんと欲ふ者ハ凡の人の後さなり且すべての人の 三五 イエス坐して其十二を召かれらに曰けるハ若し首たらんと欲ふ者ハ凡の人の後さなり且すべての人の 三六 また孩提を取て彼等の中に立て之を抱き 三七 凡そ我名の爲に斯のごき孩提の一人を接る者ハ即ち我を接るなり又われを接る者ハ即ち我を接るに非ず我を遣し〻者を接るなり〇 三八 ヨハ子彼に答て曰けるハ師よ我儕に從ハざる者の爾の名に托て惡鬼を逐出せるを見しが我儕に從へざる故これを禁たり 三九 イエス曰けるハ其人を禁る勿れ蓋わが名により異ある能を行ひて輕易しく我を誹得る者ハあらじ 四十 我儕に敵たハざる者ハ我儕に屬者なり 四一 爾曹をキリストに屬者として我名の爲に一杯の水にても爾曹に飲すゑ者ハ我まことに爾曹に告ん其人ハ賞を失ハざる也 四二 また凡そ我を信ずる小子の一人を礙する者ハ其首に磨を懸られて海に投入られん方その人の爲になほ善るべし 四三 若し爾の一手あんぢを礙かさば之を斷され兩手ありて地獄すなハち滅ざる火に往んよりハ缺にて永生に入ハ爾の爲に善ること也 四四 彼處に入もの〻蟲つきず火きえず 四五 若あんぢの一足なんぢを礙かさば之を斷され兩足ありて地獄すなハち滅ざる火に投入られんよりハ跛にて永生に入ハ爾の爲に善なり 四六 彼處に入もの〻蟲つきず火きえず 四七 もし爾の一眼なんぢを礙かさば之を拔いだせ兩眼ありて地獄の火に投入られんよりハ一眼にて神の國に入ハ爾の爲に善なり 四八 彼處に入もの〻蟲つきず火きえず 四九 蓋すべての人ハ鹽をつくる如く火を以せられ凡の祭物ハ鹽をもて鹽つけらる 五十 鹽ハ善ものなり然ど鹽もし其味を失ハゞ何をもて之に味を加んや爾曹心の中に鹽を有て又たがひに睦み和ぐべし

第十章

一 イエス此を去ヨルダンの外を經てユダヤの境の內に來しに多の人やまた彼に集りければ恒の如く彼等に救誨を爲たまへり 二 パリサイの人來て彼を試み問けるハ人その妻を出すハ可か 三 答て曰けるハモーセ爾曹に何と命ぜしや 四 彼等曰けるハモーセハ離緣狀を書與へて之を出すことを許せり 五 イエス答て彼等に曰けるハモーセ爾曹の心つれなきに因て此命を爲たるなり 六 然ど開闢のはじめ神人を男女に造り給へり 七 故に人ハその父母を離その妻に合て 八 二人のもの一體と成べし然ば二にハ非ず一體なり 九 是故に神の繫せ給へる者ハ人これを離すべからず〇 十 室にゐて弟子等また此事を問ければ十一 イエス彼等に曰けるハ凡そ其妻を出して他の婦を娶る者ハ其妻に對して奸淫を行ふなり 十二 また婦もし其夫を出して他に嫁がば此婦も奸淫を行ふなり〇 十三 イエスに撫れんがため人ゝ孩提を携來ければ弟子等その携來る者を責めたり 十四 イエス之を見て憤を含かれらに曰けるハ孩提を我に來せよ彼等を禁ゑ勿れ神の國に居ものハ斯の如き者なり 十五 誠に我なんぢらに告ん凡そ孩提の如くに神の國を承ざる者ハ之に入ことを得ざる也 十六 即ち彼等を抱て手をその上に按これを祝せり〇 十七 イエス途に出けるに一人はしり來りて跪き問けるハ善

十八 師よ我かゝりなき生命を贖ためには何を行べき乎 十八 イエス彼に曰けるハ何ぞ我を善と稱や一人の外に善者ハ
十九 なし即ち神なり十九 誡ハ爾が誡ところなり奸淫するな殺なかれ殺すな盗なかれ妄の證を立るな拐騙
二十 なかれ爾の父と母を敬へ二十 答て曰けるハ師よ是みな我が幼きより守れるもの也 二一 イエス彼を見て愛
二一 み曰けるハ爾なほ一を虧ゆきて其所有をうり貧者に施せ然ば天に於て財あらん而して來り十字架を操
二二 て我に從へ 二二 彼この言に因て哀み憂て去ぬ彼ハ大なる產業を有る者なれバなり 二三 イエス環視てその弟
二三 子に曰けるハ財を有る者の神の國に入は如何に難かな 二四 弟子この言を駭けり イエス復こたへて彼等に曰
二四 けるハ小子よ財を恃む者の神の國に入ハ如何に難かな 二五 寧ろ駱駝の針の孔を穿るハ
二五 却て易し 二六 弟子たち甚く駭き互に曰けるハ然ハ誰か救を受べき乎 二七 イエス彼等を見て曰けるハ是人に
二六 ハ能ざる所なれど神に於てハ然らず神ハ能ざる所なけれバ也 二八 是に於てペテロ彼に曰けるハ我儕一切を舍
二七 て爾に從へり 二九 イエス 答て曰けるハ誠に爾曹に告ん我と福音の爲に家宅あるひハ兄弟あるひハ姉妹
二八 あるひハ父あるひハ母あるひハ妻あるひハ兒女あるひハ田畝を舍る者ハ 三十 この世にて百倍を受ざる者な
二九 し即ち家宅、兄弟、姉妹、母、兒女、田畝を迫害と共に受 又後の世にハ窮なき生を受ん 三一 然ど多の先
三十 なる者ハ後になり後なる者ハ先になるべし〇 三一 扨彼等
三一 彼等おごろき且おそれて從へりイエス十二を伴ひて豫に
三二 エルサレムに上り人の子ハ祭司の長と學者等に付れん彼等これを死罪に定め異邦人に付し 三四 又これを嘲
三三 弄し鞭ち唾し且これを殺ん斯て第三日に甦るべし〇 三五 ゼベダイの子ヤコブとヨハネ子イエスに來りて曰
三四 けるハ師よ我儕が求る事を願くハ我儕に成たまへ 三六 彼等に曰けるハ爾曹に我が何を成ん事を欲ふや 三七 彼
三五 等いひけるハ爾榮を得んごき我儕の一人を其右に一
三六 爾曹ハ求ふ所を知ず爾曹わが飲ごころの杯を飲わが受る所のバプテスマを受得るや 三九 彼等いひけるハ能
三七 すべしイエス彼等に曰けるハ爾曹ハ實に我が飲ところの杯を飲また我が受る所のバプテスマを受べし 四十

四一 然ど我が右左に坐する事ハ我が予ふべきに非たゞ備られたる者へ予らるべし 四一 十人の弟子これを聞てヤ
四二 コブとヨハネを憤れり 四二 イエス彼等を召て曰けるハ爾曹ハ異邦人の君と見る者ハ其民を治また大なる者ども
四三 ハ彼等の上に權を執これ爾曹が知ごころ也 四三 然ど爾曹の中にてハ然す可らず爾曹のうち首たらんと欲ふ者
四四 ハ爾曹に役るう者ごならん 四四 また爾曹のうち首たらんと欲ふ者ハ凡の人の僕ごならん 四五 蓋人の子の來
四五 るも人を役ふ爲に非ず反て人に役れ且おほくの人に代その命を予て贖ごならん爲なり〇 四六 斯て彼等
四六 エリコに至りイエスその弟子ご大なる群集の人々ご共に
四七 者路の旁に坐して乞ねけるが 四七 ナザレのイエスなり
四八 ヘ 四八 多の人々これに緘默ご 戒めけれごも 愈よゞ
四九 ス立止りて彼を召さ命じけれバ人々 瞽者を召て彼に曰
五十 表衣を棄たちてイエスに來れり 五一 イエス 答て彼に曰
五一 主よ見なん事を欲ふ 五二 イエス彼に曰けるハ往なんちの信仰なんちを救へり直に彼見ることを得イエスに從
五二 ひて路を行り

第十一章

一 かれら橄欖山のベテパケとベタニヤに至りエルサレムに近ける時イエス二人の弟子を遣さん
二 さして二彼等に曰けるハ爾曹對面の村に往かしこに入ば頓て人の未だ乘ざる所の繋げる驢馬の子を見べし其
三 を解て牽來れ 三 もし誰か爾曹に何ゆゑ然する乎といふ者あらバ主の用なりと曰さバ直に其を此に遣るべし
四 彼等ゆきて門の外の岐路に繋げる驢馬の子を見て之を解けれバ 五 其處に立る人々のうち或人かれらに曰け
五 るハ此驢馬の子を解て如何する乎 六 弟子イエスの命ぜし如く曰しかバ遂に許たり 七 弟子驢馬の子をイエスに
六 牽きたりて己が衣を其上に置けれバイエスこれに乘り
七 て路上に布 九 つ前にゆき後に從ふ人々呼り曰けるハホザナよ主の名に託て來る者ハ福あり 十 主の名に
八 託て來る我儕の父ダビデの國ハ福あり至上處にホザナよ〇 十一 イエスエルサレムに至り聖殿に入

十二 で悪くみまへし時すでに暮に及けれバ十二さ僧にベタニヤに出往り○十二明日われらベタニヤより出し時イ
十三 エス餓たり十三遙に葉ある無花果の樹を見てその樹に何か有んさて來しに葉の他なにも見ざりき是無花果樹
十四 の時に非れバ也十四イエスの樹に對て今よりのち永久も爾の果を食ふ人あらざれさいふ弟子これを聞り○
十五 十五彼等エルサレムに至りイエス殿に入てその中にな
十六 る賣買する者を殿より逐出し兌銀者の案、鴿を
十七 覆者の椅子を倒し十六かつ器具を以て殿を過ることを許さず十七また彼等に諭て曰けるは我室は萬國の人
十八 の祈禱の室と稱らるべしと錄されたるに非や然るに爾曹ハ之を盜賊の巢と爲り十八學者と祭司の長これを聞
十九 て如何してかイエスを喪さんと謀しが彼を懼たり盜人
二十 城邑を出行り二十翌朝かれら無花果の樹を過る時その
二一 ズに曰けるハラビ見よ詛し所の無花果樹ハ枯たり二一イエス答て彼等に曰けるハ神を信ぜよ二二誠に我
二二 なんぢらに告ん誰にても其心に疑ふ事なく其いふ所の
二三 其言の如く成べし二三是故に我なんぢらに告ん凡そ祈禱の時その求ふ所のものハ必ず得べしと信ぜバ必ず得
二四 べし二四又なんぢら立て祈禱する時もし人を憾ことあらバ之を免せ盜天に在す爾曹の父も亦その過を
二五 免されん爲なり二六もし爾曹免さずバ天に在す爾曹の父
二六 エルサレムに至りイエス殿を行るとき祭司の長學者およ
二七 以て此事を行や誰が此事を行べき爲に爾に此權威を與しや二九イエス答て彼等に曰けるハ我も一言なんぢ
二八 らに問ん我に答よ然バ我なんぢらに何の權威を以て之
二九 りか人よりか我に答よ三十彼等たがひに論じ曰けるハ若し天よりと云バ然バ何故かれを信ぜざるかと曰ん
三十 三一 もし人よりと云バ彼等民を懼たる也蓋民みな曰ハ子を預言者と爲に因三三遂に答て知ずと曰イエス答
三一 三二 て曰けるハ我も何の權威を以て之を行か爾曹に語じ
三二 三三
三三

第十二章　一イエス譬をもて彼等に語れり或人葡萄園を樹り籬を環し酒槽をほり塔をたて農夫に租

二 與て他の國へ往しが二期いたりければ葡萄園の果を收取んために僕を農夫の所に遣しけるに三農夫等これを
三 執へ打撲きて徒く返しめたり四また他の僕を彼等に遣しに前より多く遣しに或ハ撲あるひハ殺しぬ六爰に一人の愛子
四 返しむ五又ほかの者を遣しに之をも殺せり又ほかに
五 ありけるが此わが子を敬ふならんと曰て遂に其子を遣
六 せバ農夫等たがひに曰けるハ此ハ嗣子なり來これ
七 を殺さん然バ產業ハ我儕の者とならん七乃ち執へて之
八 を殺し葡萄園の外に棄たり八然バ葡萄園の主人な
九 にを爲べきか彼きたりて農夫等を打滅し葡萄園を他の人に託ふべし十工匠の棄たる石ハ屋の隅の首石
十 と成り十一これ主の成たまへる事にして我儕の目に奇とする所ありと錄されしを未だ讀ざる乎十二彼等イエスを其
十一 十二 譬ハ己等を指て語れりと知イエスを執んとせしが衆人を懼てイエスを去ゆけり○十三彼等イエスの所に來
十二 十三 に由て陷いれんとしてパリサイの人さヘロデの黨の
十三 中より數人を遣せり十四遣されし者等イエスに問けるハ
十四 師よ我儕に
十五 教れバなり貴をカイザルに納るハ宜や否われら納べきか納ざる可か十五イエスその實ならざるを知て彼等に
十六 曰けるハ何ぞ我を試るやデナリを携來りて我に覩よ十六かれら携來りければイエス彼等に曰けるハ此像
十七 と號ハ誰か答てカイザルなりと曰十七イエス曰けるハ
十八 カイザルの物ハカイザルに歸し又神の物ハ神に歸すべ
十九 し彼等これを奇させり○十八復生なしさ曰あせる
二十 モーセが我遺るにハ人の兄弟もし子なくして妻を留し死バその兄弟ハ第二の者これを娶また子なくして死第三も
二一 二十 爰に七人の兄弟ありしが長子妻をめとり子なくして
二二 二一 また然す三七人みな之を娶たれど子なく終にハ此婦も死り三二復生の時かれら甦らバ此婦ハ誰の
二三 二二 妻さ爲べきか蓋七人おなじく之を娶たれバ也二四イエス答て彼等に曰けるハ爾曹ハ聖書をも神の能をも
二四 二三 知ざるに因て謬れるならず乎二五それ死より甦る時ハ娶ず嫁がず天にある使者等の如し二六死し者の甦
二五 二四
二六 二五
二七 二六 る事に就てハモーセの荊棘中の篇に神かれに語て我ハアブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりさ曰たまひ

二七 しを爾曹譏ざる乎 二七 神ヘ死し者の神に非ず生る者の神なり 爾曹大に謬れり〇 二八 學者の一人彼等の議
二九 論を聞てイエスの善これに應しを知きたり彼に問けるヘ 諸すべてのいましめ中誡の首ハイスラエルよ聽け主なる我儕の神ハ
三〇 ろへ諸誡のうち何れ首ぉる乎 三一 即ち一の主なり 三二 なんぢ心を盡し精神を盡し
三二 意を盡し力を盡して主なる爾の神を愛すべし是誡の首なり 三三 第二も亦これに同し己の如く爾の隣
三三 を愛すべし斯より大なる誡なし 三四 學者イエスに曰けるヘ善かな師よ爾神ハ即ち一にして他に神なし
三四 と曰しべ誠なり 三五 また心を盡し智慧を盡し精神を盡し力を盡して之を愛し又おのれの如く隣を愛するハ諸
三四 の燔祭と禮物よりも愈なり 三六 イエス彼が道理を知ろ答を見て之に曰けるヘ爾神の國より遠からず此の
三五 ち敢てイエスに問者なかりき〇 三七 イエス殿に在て教誨を爲る時かれらに答て曰けるヘ何ぞ學者ハキリスト
三六 をダビデの裔ぃふ乎 三八 夫ダビデ聖靈に感じて自いふ主わが主に曰けるヘ我なんぢの敵を爾の足臺とな
三七 すまで我右に坐せよと 三九 如此ダビデ自ら彼を主と稱たり然ハ如何で其裔ならんや 四〇 多の人ぁ喜びてイエ
三八 スに聞こと之を爲り〇 四一 イエス教をなせる時かれらに曰けるヘ 四二 一人の貧き嫠婦きたりてレプタ二を投入る此ハ四厘ほどに直れり 四三 イエスその弟子を召て彼等に
三九 會堂の高坐筵の上座を好 四十 また嫠婦の家を呑いつへりて長き祈をする學者を謹防よ彼等の審判る
四〇 ること尤も重し〇 四一 イエス賽錢の箱に對て坐し人ぁの錢を箱に入るを見たまひしに多の富者ハ多く投入
四一 たり 四二 一人の貧き嫠婦きたりてレプタ二を投入る此ハ四厘ほどに直れり 四三 イエスその弟子を召て彼等に
四二 曰けるヘ誠に我なんぢらに告ん箱に投入し凡の人ぁよりも此貧き嫠婦ハ多く投入たり 四四 そハ彼等ハ皆そ
四三 の餘れる所を以て入この婦ハその不足ところより其すべての所有すなハち全業を盡く入たれバ也

第十三章

一 イエス聖殿より出けれバ一人の弟子かれに曰けるヘ師よ觀たまへ此石この殿宇いかに盛んなら
二 ずや 二 イエス答て曰けるヘ爾曹この大なる殿宇を見か一の石も石の上に圮れずしてハ遺しまたくわじだら
三 山にて殿に對ひ坐し給しにペテロヤコブヨハ子アンデレ竊に問けるヘ 四 何の時此事あるや又すべて此
四 事の成ん時ハ如何なる兆あるや我儕に告たまへ 五 イエス答て彼等に曰けるヘ人に欺かれざるやう愼めよ 六

七 蓋おほくの人わが名を冒來り我ハキリストなりと曰て多の人を欺くべし 七 爾曹戰と戰の風聲を聞ざる
八 ㊀擾る勿れ是等の事ハみな有べきなり然ども末期ハ未だ至らず 八 民ハ起て民を攻め國ハ國を攻また隨在に
九 地震あり饑饉、變亂あり是等ハ苦難の始なり 九 爾曹みづから愼めよ盞なんぢら集議所に付され又會堂にて
十 擲たれ且證を爲んため我事に因て侯および王の前に曳立らるべし 十 而して福音ハまづ萬民に宣傳ざるを
十一 得ず 十一 人なんぢらを曳解さん以前より何を言んと慮また
十二 べし盞ものいふ者ハ爾曹に非ず聖靈なり 十二 兄弟ハ兄弟を死に付し父ハ子を付し亦子ハその父母に逆
十三 ひて之を死しめ 十三 又わんぢらハ我名に緣て凡の人に憎るべし然ど終まで忍ぶ者ハ救るゝを得ん 十四 預言
十四 者ダニエルが言し所の殘暴にくむ可ものゝ立べからざる所に立を見バ（讀者よく思べし）其時ユダヤにある
十五 者ハ山に避れよ 十五 屋上になる者ハ室に下る勿れ又物を取んとて室に入る勿れ
十六 十六 田になる者ハ衣服を取んとて歸る勿れ 十七 其日にハ孕る者と乳を哺する婦ハ禍なる哉
十七 十八 祈れ 十九 其日に患難あらん此の如き患難ハ神の物を創造たまひし開闢より今に至るまで有ざりき亦後
十八 にも有じ 二十 もし主その日を減少し給ずバ一人だに救るゝ者なし然ど主の選たまへる所の選れ者の爲に
十九 其日を減少し給ふべし 二一 其時もしキリスト此にあり彼に在と爾曹にいふ者あるとも信する勿れ 二二 そハ僞
二十 キリスト僞預言者おこりて休徴と奇能を行ひ選れたる者をも欺くべくばけれバ也 二三 なんぢら愼よ我預じめ爾曹に盡く之を告 二四 厥時この患難の
二一 ㊀後ち天の勢ひ震ふべし 二六 其とき人ぁハ人の子の大なる權威と榮光を以て雲の中に現れ來るを見ん 二七 ま
二二 た其とき人の子その使者等を遣して地の極より天の極まで四方より其選れし者を集むべし 二八 夫なんぢら
二三 無花果樹に由て譬を學 その枝すでに柔かにして葉めぐめバ夏ハ近を知 二九 此の如く爾曹も凡て是等ハ事を
二四 見バ時ちかく門口に至ると知 三十 われ誠に爾曹に告ん是等の事ことごとく成までハ此民ハ逝ざるべし 三一 天
二五 地ハ廢ん然ど我言ハ廢じ 三二 其日その時を知者ハ惟わが父のみなり天にある使者も子も誰も知者なし〇

三三 此日いづれの時きたる乎を知されバ爾曹つゝしみて目を醒し祈禱せよ 三四 それ人は子ゝ遠行せんとして
三五 其權を僕等に委れ、各に爲べき事を任け又閽者に忌らず守れと命じて家をさる人の如し 三五 是故に爾曹
三六 も忌らすして守れ蓋家の主人あるひゝ夕あるひゝ夜半あるひゝ鷄鳴時あるひゝ早晨に歸るかを知されバ
三七 也 三六 恐くゝ不意の時きたりて爾曹が眠るを見ん 三七 われ忌らずして守れと爾曹に告るゝ凡の人に
三八 告るなり

第十四章 一 さて逾越即ち除酵節の二日前に祭司の長と學者たち詭計を以てイエスを執へ殺さん
二 とし 二 曰けるゝ祭の日にゝ爲べからず恐くゝ民の中に亂起らん〇 三 イエスベタニヤの癩病人シモンの家に
三 て食し居たまへる時ある婦蠟石の盒に價貴きナルドの香膏を盛て携來り其盒を裂りイエスの頭に膏
四 を沃たり 四 或人々互に怒を含いひけるゝ此膏を糜ずゝ何故ぞや 五 之を鬻バ三百有奇のデナリを得
五 て貧者に施すを得んと 此婦を言詰む 六 イエス曰けるゝ彼に係る勿れ何ぞ此婦を擾すや我に善事
六 を行へる也 七 貧者ゝ常に爾曹と偕に在バ爾曹意に隨せて彼等を濟ることを得べし我ゝ常に爾曹と偕に
七 在ず 八 此婦ゝ力を盡して作り盖あらかじめ我を葬るの備をなせり 九 我まことに爾曹に告ん
八 天の下いづくにても此福音を宣傳らるゝ處にゝ此婦の行し事も亦その記念の爲に言傳らるべし 十 さ
九 て十二の一人なるイスカリテのユダイエスを付さんとて祭司の長に往しに 十一 彼等これを聞て悅び銀子を
十 予んと約せしかバユダゝイエスを付さんと機を窺へり〇 十二 除酵節の首の日すなわち逾越の羔
十一 を殺すべき日弟子イエスに曰けるゝ逾越の食を何處へ往て我儕備ふべき乎 十三 イエス二人の弟子を遣さん
十二 して之に曰けるゝ京城に往さらバ水を盛たる瓶を擎る人に遇べし之に從へ 十四 その入ところの家の主人に師
十三 いふ我弟子と偕に逾越を食すべき客房ゝ安に在やと曰 十五 然れバ彼陳設たる大なる樓房を爾曹に示
十四 べし我儕の爲に其處に備よ 十六 弟子ゆきて京城に入しにイエスの曰たまへる如く遇しかバ逾越の備をなせり
十五 〇 十七 日暮てイエス十二の弟子と偕に來れり 十八 かれら席に就て食する時イエス曰けるゝ誠に我なんぢらに

十九 告ん我と偕に食する爾曹のうち一人われを賣すべし 十九 彼等愛て各々イエスに言出けるゝ我なる乎また他
二十 の一人も曰けるゝ我なる乎 二十一 イエス答て曰けるゝ人の子ゝ已に就て錄されたる如く逝ん然ど人の子を賣
二一 爲ん 二二 かれら食する時イエスパンを取て祝し之を擘かれらに予て曰けるゝ取て食へ此ゝ我身なり 二三 また
二二 杯を取て謝し彼等に予けれバ皆この杯より飲り 二四 イエス曰けるゝ此ゝ新約の我血にして衆の人の爲に
二三 流す所のもの也 二五 我まことに爾曹に告ん今よりのち新しきものを神の國にて飲ん日までゝ葡萄にて製るも
二四 のを飲じ〇 二六 彼等歌を詠て橄欖山に往り 二七 イエス彼等に曰けるゝ今夜なんぢら皆われに就て礙かん蓋
二五 われ牧者を擊ん其羣散しと錄されたれバ也 二八 然ど我よみがへりて後なんぢらに先ちがリラヤに
二六 往べし 二九 ペテロイエスに曰けるゝ假令みな礙くとも我ゝ然らず 三十 イエス彼に曰けるゝ我まことに爾に告
二七 ん今日この夜鷄二次鳴まへに爾三次われを知ずと曰ん 三一 彼また力言いひけるゝ我ゝ爾と偕に死るも
二八 とも爾を知ずと曰に弟子みな如此いへり 三二 遂にペテロヤコブヨハ子を伴ひゆき甚しく憂へ哀を催し 三三 彼等に曰けるゝ
二九 祈る間ここに坐せよ 三三 遂にペテロヤコブヨハ子を伴ひゆき甚しく憂へ哀を催し 三四 彼等に曰けるゝ
三十 我心いたく愛て死ばかりなり爾曹ここに待て目を醒し居 三五 イエス少し進行て地にふし祈り曰けるゝ
三一 若かなはゞ此時を去しめ給へ 三六 また曰けるゝアバ父よ爾に於てゝ凡の事能ざるなし此杯を我より
三二 取たまへ然ど我が欲ふ所を成んとするに非ず爾が欲ふ所に任せ給へ 三七 イエス來りて彼等の寢たるを見ペテ
三三 ロに曰けるゝシモンあんぢ寢たるか一時も目を醒し居ること能ざる乎 三八 誘惑に入ぬやう目を醒かつ祈その心
三四 神へ願あれご肉體よわき也 三九 復ゆきて同言を曰て祈れり 四十 返りて復彼らの寢たるを見る此ゝ彼等そ
三五 の目倦たるなりイエスに何と對ふ可やを知ざりき 四一 三次きたりて彼等に曰けるゝ今ゝ寢て安め充分なり
三六 時いたれり人の子ゝ罪人の手に賣さるゝ也 四二 起よ我儕ゆくべし我を賣す者近けり〇 四三 斯いへる時たゞ
三七 ちに十二の一人なるユダ刃と杵とを携たる多の人々と共に祭司の長學者及び長老の所より來る 四四 イエ

四五 スを賣者かれらに號をなして曰けるハ我が接吻する者ハ其なり之を執て愼さ曳去よ 四五 即ち來りてイエス
四六 に近よりラビ、ラビと曰て接吻せり 四六 人々手をイエスに措て執ふ 四七 傍に立る者の一人刃を抜て祭司
四七 の長の僕を撃その耳を削り 四八 イエス答て彼等に曰けるハ刃と棒さをもち盜賊を執る如くして我を執に來
四八 る乎 四九 われ日々なんぢらと共に殿にて教しに爾曹われを執ざりき然ど此ハ聖書に應せんが爲なり 五十 弟子
四九 みなイエスを離て奔去ぬ 五一 一少一者その身にたゞ麻の夜具をまとへ執けれバ 五二 かれ麻の夜具をすて裸にて逃去り〇 五三 衆人イエスを祭司の長に携往けるに祭司の長老
五十 および學者等こと〴〵く彼の所に集れり 五四 ペテロ遠く離れてイエスに從ひ祭司の長の庭の内まで入傍
五一 ご共に坐して火に燠まり居り 五五 祭司の長および議員みな
五二 人々イエスに妄の證を言出せども其證あハず 五七 或人々たちて妄の證を言出しけるハ 五八 かれ手
五三 を以て作たる此聖殿を毀ち三日の間に手を以て作ざる別の殿を建んと言しを我傍ハ聞り 五九 如此いひしが其
五四 證また符ず 六十 祭司の長中に立てイエスに問いひけるハ爾ハ答ふる言なき乎この人々の爾に立ろ證據ハ如何
五五 六一 イエス默然として何も答ざりけれバ祭司の長また彼に問て曰けるハ爾ハ頌べき者の子キリストなる乎
六二 イエス曰けるハ然り人の子大權の右に坐し天の雲の中に現れ來るを爾曹みろべし 六三 是に於て祭司の長
六四 その衣を裂て曰けるハ我傍なんぞ復ほかに證據を求んや 六四 その褻瀆たる言ハ爾曹も聞る所なり爾曹如何に
六五 意ふや彼等擧てイエスを死に當るべき者と擬たり 六五 或者ハ彼に唾し又その面を掩ひ拳にて擊いひけるハ
六六 預言せよ亦僕等手の掌にて彼を批り 六六 ペテロ下庭に在しに祭司の長のあろ婢きたりて 六七 其火に燠ま
六七 り居を見つら〳〵彼を視て曰けるハ爾もナザレのイエスと偕に在し 六八 ペテロ肯ハすして曰けるハ我これ
六八 を知ず亦なんぢが言ところの事を識得ざるなり斯て庭門に出れバ鷄鳴ぬ 六九 その婢かれを見て傍に
六九 立る者に又いひけるハ此人もかの二黨の一人なり 七十 ペテロまた肯ハず少頃して傍に立る者またペテロに
七十 曰けるハ爾誠に彼の黨の一人なり蓋爾ハガリラヤの人なり其方言これに合り 七一 是に於てペテロ

七二 誓て我神の祟を受るとも爾曹が曰その人を我ハ識ざる也と曰し 七二 此とき鷄二次鳴れバペテロイエ
六 スの鷄二次なく前に三次我を識ずと曰んと言たまひし事を憶起し且これを思反して哭悲めり
第十五章 一 不旦に及び直に祭司の長長老學者たち凡の議員と共に議てイエスを繋り曳携てピラトに解せ
二 り 二 ピラト彼に問けるハ爾ハユダヤ人の王なるや イエス答けるハ爾が言る如し 三 祭司の長多端をもて
三 彼を訟ふ 四 ピラト復イエスに問て曰けるハ何も答ざるか彼等が爾について證を立しこと幾何かりぞ乎 五 ピラ
四 トの奇と爲までにイエス何をも答ざりき 六 傍ここの節筵にハ彼等が求に任せて一人の囚人を赦すの例なり 七 時
五 にバラバと云る者あり己と共に謀叛せし黨と同く繋れ居たりしが彼等ハその謀叛のとき人を殺しゝ逆罪
六 なり 八 人々聲を揚て呼り恒例の如せん事を求りル ピラト彼等に答て曰けるハユダヤ人の王を爾曹に我が釋
七 さん事を欲むや 十 是ピラト祭司の長等の嫉に因てイエスを解したりと知バなり 十一 祭司の長民ともにバラ
八 バを釋さん事を求と唆む 十二 ピラトまた答て彼等に曰けるハ然バユダヤ人の王と爾曹が稱る者にハ何を我が
九 處ん事をなんぢら欲むや 十三 彼等また叫びて之を十字架に釘よと曰 十四 ピラト彼等に曰けるハ彼なんの惡事
十 を行しや彼等ます〳〵叫びて之を十字架に釘よと曰 十五 ピラト民の懽びを取んとしてバラバを彼等に釋しイ
十一 エスを鞭ちて之を十字架に釘ん爲に付せり 十六 兵卒等これを公廳に携ゆき全營を呼集め 十七 彼に紫の
十二 袍をきせ棘にて冕を編て冠しめたり 十八 斯て曰けるハユダヤ人の王安かれ 十九 また葦を以て其首を擊か
十三 つ唾し跪きて拜しぬ 二十 嘲弄し畢て紫の衣をはぎ故の衣をきせて十字架に釘んとて曳往しが 二一 アレ
十四 キサンデルとルフの父なるクレヱのシモンと云るもの田間より來りて其處を經過りければ强て之にイエ
十五 スの十字架を負せたり 二二 イエスをゴルゴダ譯バ即ち髑髏と云る所に携來り 二三 沒藥を酒に和て飲せんと
十六 爲りしに之を受ざりき 二四 イエスを十字架に釘しのち誰が何を取んと鬮を拈てその衣服を分てり 二五 朝の第
十七 九時にイエスを十字架に釘 二六 その罪標をユダヤ人の王と書つく 二七 二人の盜賊かれと共に一人を其右一人
十八 を其左に十字架に釘らる 二八 これ聖書に彼ハ賊人と共に算られたりと云しに應り 二九 往來の者イエスを詬

三十 り首を揺て曰けるハ聰聖殿を毀て之を三日に建る者よ 三十 自己を救て十字架を下よ 三一 祭司の長學者等も
三一 同く嘲弄して互に曰けるハ人を救て自己を救ひ能ず 三二 イスラエルの王キリストハ今十字架より下るべし然
三二 我儕見て之を信ぜん又ともに十字架に釘られたる者等も彼を詬れり 三三 第十二時より三時に至るまで徧く
三四 地のうへ暗なりぬ 三四 第三時にイエス大聲に呼りエリ、エリ、ラマサバクタニと曰これを譯ゝ吾神わが神何
三五 ぞ我を遺たまふ乎と云るなり 三五 傍らに立たる者のうち或人これを聞て彼ハエリヤを呼なりと曰 三六 一人は
三六 しり往て海綿をとり醋を漬せ之を葦に束て彼に飲しめ曰けるハ俟エリヤ來りて彼を救ふや否ことろむべし〇
三七 イエス大なる聲を發て氣絶 三八 殿の幔上より下まで裂て二と爲り 三九 イエスに對て立たる百夫の長
三九 かく呼り氣絶したを見て曰けるハ誠に此人ハ神の子なり〇 四十 また遙に望ねたる婦ありし其中に在し者ハマ
四十 グダラのマリアおよび年少ヤコブとヨセの母なるマリア又サロメなり 四一 彼等ハイエスのガリラヤに居たま
四一 ひし時これに從ひ事し者等なり亦この他にも彼と共にエルザレムに上りし多の婦ありき〇 四二 是日い
四二 備節日にて安息日の前の日なりし故 四三 日暮ころ
四三 人ハ神の國を慕る者なり彼はゞからずピラトに往てイエスの屍を求たり 四四 ピラトイエスの已に死るを奇
四四 み百人の長を呼て彼ハ死てより時を經たるや否やを問 四五 百夫の長より聞て之たしり 屍をヨセフに予
四五 ふ、四六 ヨセフ亞布を買求めてイエスを取下し之をその亞布にて裹み磐に鑿たる墓におき石を墓の門に轉
四六 し置り 四七 マグダラのマリア及ヨセの母なるマリア其屍を葬し處を見たり

第十六章

一 安息日過てマグダラのマリアとヤコブの母なるマリアとサロメとイエスに
二 抹んさて來れり 二 七日の首の日いと早く日の出る時彼ら墓に來り 三 互に曰けるハ誰が我儕の爲に石を墓の門
三 より轉し呉ん也 四 斯て彼等目を擧れバ石の已に轉あるを見る 五 墓に入
四 るに白衣んきたる少者の右の方に坐せるを見て駭き異めり 六 少者かれらに曰けるハ駭き異む勿
五 れ爾曹ハ十字架に釘られしナザレのイエスを尋ね彼ハ甦りて此に居す彼を葬し處を覩よ 七 且ゆきて其弟子
六 ならびにペテロに告よ彼ハ爾曹に先ちてガリラヤに往り爾曹かしこにて彼を見べし即ち其なんぢらに言しが如し
七 八 さバテロに告よ彼ハ爾曹に先ちてガリラヤに往り爾曹かしこにて彼を見べし即ち其なんぢらに言しが如し
八 九 彼等いでゝ墓より奔れり且戰慄かつ駭き亦一言をも人に語ざりき是懼しが故なり〇 九 イエス七日の首
九 十 の日よあけごろ甦りて先マグダラのマリアに現る彼より七の惡鬼を逐出せり 十 イエスと共に在
十 十一 し者の哭哀める時に此婦きたりて是等の事を告 十一 彼等イエスの活て此の婦に見え給ひしことを聞しが
十一 十二 信ぜざりき 十二 此後かれらの中二人の者鄉村へ往けるが路を行ときイエス異たる貌にて彼等に現る 十三 こ
十二 十三 の二人の者ゆきて他の弟子等に告けれども亦これをも信ぜざりき〇 十四 又その後十一の弟子の食しをる時に
十三 十四 現れて彼等が信おきさ其心の頑さを責め給へり是かれらイエスの甦り給るのち其を見し者の言ところ
十四 十五 を信ぜざりし故なり 十五 イエス彼等に曰けるハ偏く世界を廻て凡の人に福音を宣傳よ 十六 信じてバプテ
十五 十六 スマを受る者ハ救れ信ぜざる者ハ罰に定らるゝ也 十七 信ずる者にハ左の如き奇跡したがふべし我名に託て惡
十六 十七 鬼を逐出し異邦の方言をいひ 十八 また蛇を操へ毒を飲さも害なく又手を病の者に按なバ即ち愈ん〇 十九 斯て
十七 十八 主ハ彼等に語しのち天に擧られ神の右に坐しぬ 二十 弟子たち徧く福音を宣傳ふ主も亦かれらに力を協せ其
十八 十九 從ふ所の奇跡によりて道を堅うしたまへりアメン
二十

新約全書馬可傳福音書 総

第一章

一 我儕の中に篤く信ぜられたる事を始より親く見て道に役たる者の
二 我儕に傳し如く記載んと多
三 の人々これを手に執る故に貴きテヨピロよ三我も原より諸の事を詳細に考究たれば次第を爲て爾に書お
四 くり爾が教られし所の確實を曉せんと欲り〇五 ユダヤの王ヘロデの時にアビアの班なる祭司ザカリアと
五 云る者あり其妻もアロンの裔にて名をエリサベツと云 六 共に神の前にて幾 人なり凡て主の誡命と規儀を
六 虧なく行へり七 エリサベツ 姙なきが故に彼等に子なし又二人とも年も老ぬ 八 ザカリアその 班 次に値て
七 神の前に祭司の職を行ふ時 九 祭司の 例に從ひ鬮を抽て主の殿にいり香を燒ことを得 十 香を燒ける時に
八 衆の人々みな外に居て祈れり 十一 主の使者香壇の右に立てザカリアに現れしかば 十二 ザカリア之を見て
九 驚懼る 十三 天使彼に曰けるはザカリアよ懼るな勿れ爾の祈禱すでに聞たまへり爾の妻エリサベツ男子を生
十 其名を 十四 ヨハネと名くべし 十四 爾に喜と樂あらん多の人其誕生を
十一 の前に大ならん又葡萄酒と濃酒とを飲じ母の胎より生 十五 それ此子主
十二 を主なる其神に歸す可れば也 十七 彼エリヤの心と才能を以て主の先に行ん是父の心に子を慈ませ逆れる者
十三 を義人の智に歸せ主の爲に新なる民を備んとなり 十八 ザカリア天使に曰けるは我すでに年老 妻もま
十四 た年邁たれば何に因てか此事あるを知ん 十九 天使こたへて曰けるは我ヘガブリエルと て神の前に立者なり
十五 爾に語てこの喜の音を告ん爲に遣されたれば 二十 其時いたりて必ず成べき我が言を信ざるに因なん
十六 ち瘖となりて此事の成日まで言ふこと能ざらし 二一 民ザカリアを俟ねて其殿の内に久を怪む 二二 ザカリア出
十七 て言ふこと能ざりしかば彼等その殿の内にて異象を見たる事を曉たりザカリア衆人に首を以て示し竟に
十八 瘖となれり 二三 その職事の日滿ければ家に歸りぬ 二四 此後その妻エリサベツ孕て隱りしこと五ケ月にし
十九 て 二五 曰けるは主わが耻を人の中に濯せん爲に眷顧たまふ時へ此の若く我に爲り〇 二六 此六ケ月に當りガ
二十 ブリエルと名たる邑の 二七 ダビデの家のヨセフと云る人の聘定せし所の處女に神よりガブリエルとい

二八 ふ天使を遣されたり其處女の名はマリアと云り 二八 天使こゝ
二九 に僧に在す開へ女の中にて福なる者あり 二九 處女その言を
三〇 使いひけるへマリアよ懼るゝ勿れ開は神より恩を得たり 三〇 天
三一 三一 かれ大なる者と爲て至上者の子と稱られん又主たる神その
三二 の家を窮なく支配すべく且その國終ることあらざるべし 三二 マリア
三三 して此事ある可や 三三 天使こたへて曰けるは聖靈なんぢに臨る至上者の大能なんぢを庇ん是故に開が生
三四 ところの聖なる者は神の子と稱らるべし 三四 それ開の親戚エリサベツ彼も年老て男子を孕り緊姙
三五 と稱れたりしが今すでに孕て六ケ月になりぬ 三五 蓋神に於は
三六 是主の使女あり開の言る如く我に照かし天使つひに彼を去り〇 三九 當時マリア起て亟ひこ山地ある一ツの邑
三七 に往 四十 ザカリヤの家に入てエリサベツに問安したりしに 四一 エリサベツマリアの問安を聞しか其胎孕
三八 腹の内にて跳動たりエリサベツ聖靈に感され 四二 大聲に呼ひけるは女の中にて開へ福なる者たり亦孕
三九 る所の者も福なり 四三 わが主の母われに來われ何に由てか此事を得し 四四 夫あんぢの問安の聲わが耳に入
四〇 しさき胎孕よろこびて我腹の中に跳れり 四五 主の言を信ぜし者へ福なり 四六 マリア曰けるは我心主を崇め 四七 我靈はわが
四一 も救主なる神を喜ふ 四八 是その使女の卑微を
四二 も省顧たまふが故なり今よりのち萬世までも我を福なる者と稱べし 四九 それ權能を有たまへる者われに大
四三 なる事を成り其名は聖 五十 その矜恤は世々かれを畏る者に及ばん 五一 其膊の方を發して心の驕る者を
四四 散し 五二 權柄ある者を位より下し卑賤者を擧 五三 飢たる者を美食に飽せ富る者を從く返らせ給ふ 五四 アブ
四五 ラハムと其子孫を窮なく憐むことを忘すして 五五 其僕イスラエルを扶持たまへり是われらの先祖に言たまひしが如なり 五六 マリアエリサベツと居しこと三ケ月ばかりにて己が家に歸たりき〇 五七 偖エリサベツ產期
四六 みちて男子を生り 五八 その隣里の者また親戚のもの主がエ

五九 喜べり 五九 第八日に及けれが彼等子に割禮せんとて來り其父の名に因ザカリアと名んとせしに 六十 其母こた
六〇 へて然す可らず曰ふ子と名べしと曰けれが 六一 彼等エリサ
六一 者あし 六二 彼ら遂に其父に頭にて示いかに名んと欲が問たるに 六三 ザカリア寫字板を請て其名はヨハネと
六二 書しるしふかれ皆奇めり 六四 ザカリアの口たゞちに啓て舌さけ言ひて神を頌たり 六五 その隣里に住たる人
六三 人みな懼れ又すべて此事を徧く猶太の山地に傳播されしかば 六六 聞もの皆これを心に藏て此子は如何なる者にか成んと曰り偖主の手かれと共に在き
六四 ヲエルの神へ讃美べき哉これ其民を眷顧て贖を爲し 六九 我儕の爲に救救の角を其僕ダビデの家に擡たまへり也 七十 古より聖なる預言者の口を以て言たまひしが如し 七一 即ち我儕を敵また凡て我儕を惡む者の手
六五 より脫す救なり 七二 此は仁惠を我儕の先祖に施し又その聖約を忘じと也 七三 是我儕の先祖アブラハムに
六六 立し所の誓にして 七四 我儕を敵の手より救ひ我儕の生涯を 七五 聖と義とに於て懼なく主に事しめんと也
六七 汝小兒よ開へ至上者の預言者と稱られん盖なんぢ主に先ちて行その路を備んと爲ばなり 七七 神の深き矜
六八 恤に頼その罪を赦されて救れん事を其民に示さんため也 七八 その矜恤に頼て旭の光上より
六九 に住る者を照し我儕の足を導きて平康なる路に至せんとて 七九 幽暗と死陰
七十 強健にしてイスラエルに顯るふの日まで野に居り

三章 一 常時天下の戶籍を查る詔命カイザルアウグストより出たり 二 此の戶籍調查はクレニオスリヤ
二 を管理し時の初次に行われたりし也 三 人みな戶籍に登んとて各その故邑に歸たり 四 ヨセフもダビデの宗族
三 又血統なれば戶籍に登んとて 五 已に孕る其聘定の妻マリアと共にガリラヤの邑ナザレより出てユダヤに上
四 りダビデの邑ベテレヘムといふ所に至れり 六 此に居て產期滿ければ 七 家子を生それを布に裹て槽に臥せた
五 り此は客舍に彼等の居處あかりしが故なり〇 八 近傍に羊を牧もの有けるが野に居て夜間その群を守たり
六 とに 九 主の天使きたりて主の榮光かれらを環照ければ牧者おほいに懼たり 十 天使これに曰けるは懼る

十二 ここ勿れわれ萬民に關りたる大なる喜の音を爾曹に告べし十一それ今日ダビデの邑に於て爾曹の爲に救
十三 主うまれ給へり是主たるキリストなり十二爾曹布にて裹し嬰兒の槽に臥たるを見ん是其徴なり十三俄
十四 に衆の天軍あらはれ天使と共に神を讃美て曰けるハ十四天上さいころにハ榮光神にあれ地にハ平安人に
十五 ハ恩澤あれ十五天使等かれらを離て天に行けれバ羊を牧もの互に曰けるハ斯
十六 るに其有し事を見んさて十六急き至りマリアとヨセフまた槽に臥たる嬰兒に對
十七 き天使の語し事を傳播けれバ十八聞者みな羊を牧者の
十八 に記て思しぬ二十羊を牧者その見聞せる所みな已に
二十 り〇二一子に割禮を行ふべき八日の日いたりけれバ其いまた胎に宿ざる先に天の使者の稱し如く名をイエス
二一 と稱たり〇二二モーセの律法に循ひて潔の日滿けれバ嬰兒を携て主に獻んが爲エルサレムに上れり二三是
二二 主の例に初に坐るゝ男子ハ主の聖者と稱べしと錄されたるが如し二四また主の律法に遵ひ一隻あるひ
二三 ハ雛鴿二一を獻ふべしと言るに循ひて祭を行んが爲なり〇二五偖エルサレムにシメオンと云る人あり斯
二四 人ハ義かつ敬ありてイスラエルの民の慰められん事を俟る者なり聖靈その上に臨り二六また主のキリス
二五 ト を見ざる間ハ死しと聖靈にて示さる二七かれ聖靈に感じて神殿に入り兩親その子イエスを律法の例に循
二六 ひて行わんと携來りしに二八シメオン嬰兒を抱き神を讃美いひけるハ二九主よ今その言に從ひて僕を
二七 安然に世を去逝せ給ふ三十我目すでに萬民の前に設たまひし救を見たり三一これ異邦人を照さん光なり三二是
二八 また爾の民イスラエルの榮なり三三その父母ハ嬰子に就て語る事を奇みたり三四又シメオン彼等を祝て其
二九 母マリアに曰けるハ此嬰兒ハイスラエルの多の人の顛て且興らん事と誹謗を受ん其號に立らる三五
三〇 これ衆の心の念の露れんが爲なり又劍なんぢが心をも刺透べし〇三六アセルの支派パヌエルの女に
三一 アンナと云る預言者あり彼ハ甚老邁あり其處女なりしとき夫に適て七年さもに居たり三七この老女ハ齢
三二 ほよそ八十四歳の寡なりしが殿を離ず夜も晝も斷食と所禱を爲て神に事ふ三八此時この老女も倶に立て

三九 主を讃美し亦エルサレムにて贖を望る凡の人に此子の事を語れり〇三九主の律法に循ひて悉く覆け
四〇 れバがリラヤの己が邑ナザレに歸たり四〇其子や〻成長して精神強健に知慧みち神の恩寵その上に臨り
四一 〇四一偖その兩親毎年に逾越の節筵にエルサレムに往しが四二彼の十二歳の時また節筵の例に循ひエルサ
四二 レムに上れり四三節筵の日卒て返往けるに其子イエスエルサレムに留りぬ然るに四四ヨセフと母これを知ず
四三 同行人の中に在ならんと意ひ一日程を行て親戚知音の者に尋しが四五遇ざりければ彼を尋てエルサレム
四四 に返り四六三日ののち殿にて遇られ教師の中に坐し且聽かつ問おたり四七聞者みな其知慧と其應對とを奇
四五 せり四八兩親これを見て驚き母かれに曰けるハ子よ何ぞ我儕に如此行たるや爾の父と我と愁て爾を尋たり
四六 四九イエス答けるハ何故われを尋るや我ハ我父の事を務べきを知ざる乎五十然ど兩親ハ其語る事を曉ず
四七 五一イエスこれと共に下りナザレに歸て彼等に順ひ居り其母これらの凡の事を心に藏ぬ五二イエス知慧も齢
四八 も軀增り神と人とに益愛せられたり

第三章

一テベリオカイザル在位の十五年ポンテオピラトハユダヤの方伯となりヘロデハガリラヤの分封の
二 君と爲り其兄弟ピリポハイツリア及テラコニテの地の分封の君となりルサニアハアビレ子の分封の君
三 と爲りニアンナスとカヤパ祭司の長と爲たりし時ザカリアの子ヨハネ野に居て神の命令を受三ヨルダンの邊
四 なる四方の地に來り罪の赦を得させんが爲に悔改のバプテスマを宣傳たり四預言者イザヤの言を載
五 たる書に野に呼る人の聲あり云く主の道を備その徑を直せよ五諸の谷ハ埋られ諸の山岡ハ夷られ風曲
六 たるハ直く崎嶇ハ易せられ六人ハみな神の救を見ることを得んと有が如し七茲にバプテスマを受んとて來れる
七 衆人にヨハ子曰けるハ嗚呼蝮蛇の裔よ誰が爾曹に來らんと爲る怒を避べき事を告しや八然ば悔改に符る
八 果を結べし爾曹心に我儕が先祖にアブラハム有と謂ことを勿れ爾曹に告ん神ハ能この石をアブラハムの
九 子と爲しむべし九今や斧を樹の根に置る故に凡て善果を結ざる樹ハ伐れて火に投入らるゝ也十衆人ヨハ子に
問て曰けるハ然ば我儕何を爲べき乎十一答て曰けるハ二の衣服を有る者は有ぬ者に分與よ食物を有る者

も亦然すべし　十二稅吏もバプテスマを受んとて來り曰けるは師よ我儕は何を爲べきか　十三答て曰けるは定例の稅銀の外に多く取ること勿れ　十四兵卒も亦問て曰けるは我儕は何を爲べきや答て曰けるは人を強暴し或は訛詐ることを爲なかれ得ところの給料を以て足りとせよ　十五民望し時なれば衆人みな心に約翰は或はキリストなるやと忖度たりしに　十六ヨハ子之に答いひけるは我は水を以てバプテスマを爾曹に施ほどこすなれど我より能力ある者きたらん我は其履帶を解にも足ず彼は聖靈と火を以てバプテスマを爾曹に施ほどこすべし　十七手には箕を持て其禾場を潔め麥を斂て其藏にいれ殻を滅ざる火にて燒べし　十八ヨハ子また多端を以て勸をなし福音を民に宣傳たり　十九さて分封の君なるヘロデその兄弟ピリポの妻ヘロデヤの事およびその凡の惡事をヨハ子に責られければ　二十猶も惡事を加へヨハ子を獄に囚たり　二一民みなバプテスマを受けるにイエスも亦バプテスマを受て祈るさき天ひらけ　二二聖靈鴿の如き狀にて其上に降ぬ又天より聲ありて云なんぢは我愛子わが喜ぶ所の者なり　二三時にイエス年おほよそ三十にして福音を宣始む人々にヨセフの子と意れ給へりヨセフの父はヘリ　二四其父はマツタテ其父はレビ其父はメルキ其父はヤンナ其父はヨセフ　二五其父はマタテヤ其父はアモス其父はナホム其父はエスリ其父はナゲ　二六其父はマアテ其父はマタテヤ其父はセメイ其父はヨセフ其父はユダ　二七其父はヨハナ其父はリエセル其父はヨヤレム其父はマツタテ其父はレビ　三十其父はシメオン其父はユダ其父はヨセフ其父はエリアキム　三一其父はメレア其父はマイナン其父はダビデ　三二其父はエッサイ其父はオベデ其父はボアズ其父はサルモン其父はナアソン　三三其父はアミナダブ其父はアラム其父はエスロン其父はパレス其父はユダ　三四其父はヤコブ其父はイサク其父はアブラハム其父はテラ其父はナコル　三五其父はセルグ其父はラガチ其父はパレク其父はヘベル其父はサラ　三六其父はカイナン其父はアパザデ其父はセム其父はノア其父はラメク　三七其父はマトサラ其父はエノク其父はヤレド其父はマレレエル其父はカイナン其父はエノス其父はセツ其父はアダムアダムは即ち神の子なり

第四章

一偖イエス聖靈に感されてヨルダンより歸り靈に導かれ野に適て　二四十日惡魔に試らる此諸日なにをも食ず四十日畢てのち餓たり　三惡魔かれに曰けるは神の子ならば此石に命じてパンと爲せ　四イエス答けるは人はパンのみにて生る者に非ず唯神の凡の言に由と錄されたり　五惡魔また彼を高山に携ゆき一瞬間に天下の萬國を示して　六曰けるは此すべての權威と榮華を爾に予ん我これを委任たれば我が欲む者に之を予ふべし　七故に若わが前に拜跪ば悉く爾のものとならん　八イエス答けるはサタンよ退け獨主たる爾の神に拜跪これにのみ事べしと錄されたり　九惡魔またイエスをエルサレムに携ゆき聖殿の頂に立て曰けるは爾もし神の子ならば此より己が身を投よ　十そは神その使者等に命じて爾を護せよと錄されたり　十一爾が足の石に觸ざるやう彼等手にて扶べしと錄さるゝ　十二イエス答けるは主たる爾の神を試む可らずと云おけり　十三惡魔この誘試みな畢て暫く彼を離たり　十四イエス聖靈の能を以てガリラヤに歸しに其聲名あまねく四方の地に廣がりぬ　十五斯て彼等が會堂にて教を爲凡ての人々に榮を得たり○　十六その長育しところなるナザレに來り常例の如く安息日に會堂に入て聖書を讀んとて立ければ　十七預言者イザヤの書を予しにイエス其書を展て斯錄れたる所を見出せり　十八主の靈われに在す故に貧者に福音を宣傳んとて我を遣し又囚人に釋ん事と盲者に見させん事を示し又壓制らるゝ者を縱ち　十九主の禧年を宣揚んが爲に我を遣せり　二十イエス書を捲その役者に予へて坐しければ會堂に在者みな目を注て視なせり　二一イエス彼等に曰けるは此ふ錄れたる事は今日なんぢらの前に應り　二二衆かれを稱讚その口より出る所の恩惠の言を奇み曰けるは此ヨセフの子に非や　二三イエス彼等に曰けるは爾曹かならず我に諺を引て醫者みづからを醫せ我儕が聞し所のカペナウンにて行し事を自己の家鄉なる此土にも行べしと云ん　二四また曰けるは我まことに爾曹に告ん預言者その家鄉にては敬重るゝ者に非ず　二五われ誠を以て爾曹に告ん預言者エリヤの時三年と六ヶ月天ざりて遍地おほいなる饑饉なりし其時イスラエルの中

二六 に多の寡ありしかど 二六 エリヤ|は其一人へだに遣されず只シドンなるサレパタの一人の寡に遣されたり
二七 また預言者エリシャの時にイスラエルの中に多の癩者ありしかど其一人だに潔られず惟スリヤのナ
二八 ーマンのみ潔られたり 二八 會堂に在し者これを聞て大に|悤ほり 二九 起てイエスを邑の外に出し投下さんと
二九 て其邑の趾たる山の崖にまで曳往り 三十 然にイエス彼等の中を徑行て去ぬ 三一 ガリラヤのカペナウンと云
三十 ふ邑に至りて安息日ごとに衆人を教しに 三二 その言|權威有ければ衆人その教に驚けり㊀三三 會堂に
三一 汚たる鬼の靈に憑れたる人あり大聲に喊叫いひけるは 三四 噫ナザレのイエスよ我儕なんぢと何の與あらん
三二 や開きたりて我儕を喪すか我なんぢを知すなわち神の聖ある者なり 三五 イエス之を責て曰けるは
三三 默を出ことを勿れ其處を出よ惡鬼つひに其人を衆人の中に仆し傷すして出ぬ 三六 衆人みな驚き互に語いひけ
三四 るは權威と能力を有て汚たる鬼に命ずしかば出去り是いかなる道ぞや 三七 是に於てイエスの聲名徧く此四
三五 方の地に揚りぬ㊀三八 イエス會堂を出てシモンの家に入しにシモンの妻母おもき熱病を患ひ居たりき
三六 衆人之が爲にイエスに求れば其傍に立て熱を斥しに熱退けり 婦直に起て彼等に事たり
三七 日の入ころ各樣の病を患たる者をもてる人々皆其をイエスに携來ければ一々其上に手を按て醫
三八 せり 四一 惡鬼も亦多の人々を出さり喊叫て曰ふは神の子なりと然ど其キリストなるを識ればなり 四二 明旦イエス出て人なき處に往ければ衆人|尋來て其離去ことを止むる
三九 師よわれら終夜はたらきしかど所得なかりき然ど爾の言に從ひて網を下さん 六 既に下して魚を圍ること甚
四十 だ多く網さけかゝりければ 七 いま一艘ある舟の侶を招きて來り助しめしに彼等が來し時其魚二艘の舟に物
四一 て沈んばかりなりし 八 シモンペテロ之を見てイエスの足下に俯て主よ我を離たまへ我は罪人なりと曰り 九 是
四二 シモンおよび偕に在し者みな漁し所の魚の夥しきに驚ける也 十 シモンの侶なるゼベダイの子ヤコブと
四三 ヨハネも亦然りイエスシモンに曰けるは愼ろふ勿れなんぢ今より人を獲べし 十一 彼等舟を岸に寄おき一切
四四 を捨てイエスに從へり㊀十二 イエスある邑に居しときに|癩病を患る者ありイエスを見て俯伏れ
四五 がひ曰けるは主もし聖旨にかなふときは我を潔なし得べし 十三 イエス手を仲彼に按て我心にかなへり潔なれと曰けれど直に癩病愈たり 十四 イエス彼を戒めて曰けるは人に告ることを勿れただ往て己を祭司に示しつ
四六 潔られし爲にモーセが命ぜし如く獻物をなし證據を彼等に爲よ 十五 然ども|イエスの聲名ますます揚りて許
四七 多の人々或は教を聽んとし或は病を|癒れんとて集り來れり 十六 イエス常に人あき處に退きて祈り給ひ
四八 き㊀十七 一日イエス教を爲る時パリサイの人と數法師ガリラヤの諸鄕ユダヤエルサレムより來て此に坐
四九 しぬ彼等の病を|癒すべき主の能顯れたり 十八 或人癱瘋を患たる者を牀に載て舁來り之を家に入イエス
五十 の前に置んと欲ども 十九 群集にて舁入べき方なかりければ屋上に升り瓦を取除て其人を牀のまゝ衆人の中へ
五一 組下しイエスの前に置り 二十 イエスその信あるを見て患者に人よ爾の卽|赦さるゝと曰ければ 二一 學者とパ
五二 リサイの人々心に思出けるは此褻瀆ことを言ふ者は誰ぞ神より外に誰か卽を赦すことを得んや 二二 イエスそ
五三 の意を知て答いひけるは何を爾曹心の中に論ずるや 二三 爾の卽赦さるゝいふと起て行と言と孰か易き 二四
五四 それ人の子地にて卽をゆるすの權威あることを爾曹に知せんとて遂に癱瘋の人に我なんぢに告おきて牀をさ
五五 り家に歸れと曰ければ 二五 その人 衆の前にて直に起て臥居たる牀をさり神を崇て己が家に歸ぬ 二六 衆人
五六 みな駭きて神を崇つゝ大に|懼て曰けるは我儕今日奇異なる事を見たり㊀二七 此後イエス出てレビと云る稅
五七 吏の稅關に坐し居けるを見て我に從へと曰ければ 二八 レビ一切を捨おき起て從へり 二九 レビ己の家にてイ
五八 エスの爲に|豐なる筵を設しに稅吏また他の人々も共に筵に坐したる者多かりければ 三十 其所の學

三一 者さパリサイの人イエスの弟子に怨言曰けるハ爾曹何ぞ更また卵ある人々と共に飲食するや何故ぞ三二イ
三二 エス答て曰けるは厭強なる者ハ醫者の助を需す惟病ある者これを需む三三わが來るハ義人を召ん爲
三三 に非ず即ある人を召て悔改させんが爲なり三三彼等イエスに曰けるハ約翰の弟子は屢斷食また祈
三四 禱をなすパリサイの弟子も亦然り然るに爾の弟子飲こと食ことを爲すハ何故ぞ三四イエス曰けるハ新郎の朋
三五 友その新郎と一處に居ハ之に斷食なさしむる事を得んや三五將來新郎と別るゝ日いたらん其日にハ斷食す
三六 べきなり三六譬を以て曰けるは新衣を裁取て俗衣を補ふ者あらじ若然せバ新衣をも壞ひ且
三七 新衣より取たる布ハ俗ものと合ず三七また新酒を新革袋に盛べき者ぞ斯てこそ兩ながら存なれ
三八 袋をはりさき漏出かつ革袋も壞るべし三八新酒ハ新革袋に盛べし
三九 三九酒を飲て立刻に新酒を欲者ハ有し是旨ハむざと云バなり

第六章 一逾越節の二日ののち首の安息日イエス麥の
二 ら穗しかバ二或パリサイの人かれらに曰けるハ爾曹安息日に行まじき事を何ぞ
三 ろバダビデおよび從に在し者の饑しき行たる事を米だ讀ざる乎四即ち神の殿に入たゝ祭司の外ハ食まじき
四 供物のパンを取て食かつ從に在し者にも予たり五又曰けるハ人の子ハ安息日にもまたる也〇六また一の
五 安息日にイエス會堂に入て教ふ此に右の手枯たる人ありけれバ七學者とパリサイの人イエスこれを安息
六 日に醫ならんかと窺ひ竊かれを訴んと欲バなり八イエスその意を知て手なへたる人に起て中に立よと曰
七 けれバ其人おきて立り九イエス曰けるハ我なんぢらに問ん安息日に善を行と惡を行と又生を救ると殺と
八 孰をか行べき十遍に衆人を環視て其人に手を伸よと曰けれバ彼その如せしに手すなへち愈て他の手の如くな
九 れり十一彼等大に怒て如何にイエスを處んと互に議あへり〇十二當時イエス祈禱の爲に山に往て終夜
十 神に祈れり十三夜明てイエス弟子を呼その中より十二人を選て之を使徒と稱く十四即ちペテロと名給ひし
十一 シモンその兄弟アンデレ及ヤコブとヨハネとピリポとバルトロマイ十五マタイとトマスアルパイの子なる
十二 ヤコブとセロテと云るシモン十六ヤコブの兄弟のユダとイスカリオテのユダあり此ユダハイエスを賣たる
十三 者なり十七イエス是等と共に下て平かなる地に立しに許多の弟子と夥しき人々ユダヤの四方またエルザ
十四 レム及ツロシドンの海邊より來集りて或ハ其教を聽ん或ハ病を醫されん事を冀へり十八又惡
十五 鬼に雜されたる者あり成く醫されたり十九衆みなイエスに捫らんことせり是能力の其身より出て彼等を醫
十六 せバ也〇二十イエス目を擧弟子を見て曰けるハ爾曹貧者ハ福なり神の國ハ即ち爾曹の所有あれバ也
十七 二一爾曹いま飢たる者ハ福あり飽ことを得べければ也爾曹いま哭者ハ福なり笑ことを得べければ也
十八 二二人の子の爲に人なんぢらを憎また絶け詈り爾曹の名を惡しとして棄なバ爾曹福なり二三其日にハ
十九 欣び踊れ爾曹天に於て賞賜大なれバ也その先祖が預言者に行たりしも是の如し二四爾曹富者ハ禍なる
二十 哉すでに安樂を受バなり二五爾曹飽者ハ禍なるかな飢んとすればなり爾曹いま笑者ハ禍なるかな
二一 哀み哭んとなればなり二六凡の人なんぢらを譽なバ爾曹禍なる哉その先祖が僞の預言者に行たりし
二二 も是の如し二七我に聽ところの爾曹に告ん汝仇を愛し爾曹を惡者を善し二八詛者を祝し虐遇者の爲に
二三 祈禱せよ二九人なんぢの頬の右方を擊バ亦左方の頬を向よ人に施れんことする事ハ亦人にも其如く施よ
二四 ば之に與へ爾の物を奪ば其をまた索る勿れ三一已人る者を愛するハ何の賞賜あらんや惡人にても已を愛す
二五 あらんや惡人もまた是の如く行なり三四爾曹償ること得んと思ふ人に借ハ何の賞賜あらんや惡人も其
二六 ごとく償を得んとて亦惡人に借なり三五爾曹仇を愛し又善をなし何をも望すして借與よ然ば其賞賜ハ
二七 大なり且至上者の子と爲ん夫上者ハ恩を忘るゝ者及び不善者にまで慈愛を施せバ也三六是故に爾曹の
二八 父の憐憫の如く亦憐憫を爲べし三七人を誡するな勿れ然バ爾曹も誡せられず人を怨せ然バ爾曹も怨るべし三八人に與よ然ば
二九 即せられ人を怨せ然バ爾曹も誡せられず人を卽するな勿れ然バ爾曹も
三十 いれ溢るゝ迄にして爾曹の懐に納ん爾曹量る所の其量にて亦人に量るべし〇三九また譬を彼等に曰け

ゐは賢ヘ賢の相者をなし得ろや相共に滿盈に陷らざらん乎 四十弟子ハ其師に跪す凡そ全備なる者ハ其師の如なるべし 四一なんぢ兄弟の目にある梁木を知ざるハ何ぞや 四二如何で己の目にある梁木を見て己の目にある屑物を我に取せよと云ことを得んや偽善者よ先なれ 四三それ惡果を結ハ善樹に非ず又善果を結ハ惡樹に非ず 四四凡の樹ハその果に因て識る荊棘より無花果を採ず亦蒺藜より葡萄を採じ 四五善人は善心の善庫より善を出し惡人ハその惡庫より惡を出す蓋心に充るより口に言ふ也 四六爾曹わが言ことを行ハずして何ぞ我を主よ主よと稱ろや 四七凡て我に就り我言を聞て行ハ者を譬て爾曹に示さん 四八其人ハ家を建るに土を深く堀て基礎を磐上に置ハあり 四九聽て行ハざる者ハ基礎おく家を土の上に建たる人の如し横流これを衝ときハ其家

第七章

一イエス此すべての言を民に教へをはりてカペナウンに入しに 二ある百夫の長その愛する僕やみて死ばかりなりけれバ 三イエスの事を聞ユダヤの長老等を遣して來り僕を助け給んことを求り 四彼等イエスに就り切に勸いひけるハ此事を求る人は善人なり 五我民を愛し我儕の爲に會堂を建たり 六イエス彼等と共に往て既や其家に近けるとき百夫の長朋友を遣して曰せけるハ主よ自己を勞動こと勿れ我が家裏に入奉るは憚多し 七故に我なんぢの前に出も亦憚ありと 八第一言を發たまへよ我僕ハ愈ん 九蓋われ人の權威の下に屬る者なるに我下に亦兵卒ありて此に往と命バ往かれ彼に來と命バ來る我僕に之を行と命バ即ち行が故なり 十イエス聞て之を奇み從へる人やを顧て曰けるハ我なんぢらに告んイスラエルの中にても未だ斯ろ篤信に遇ざりき 十一遣されたる者家に歸て病たりし僕を見バ已に全快なせり 十二翌日イエスナインと云る邑に往けるに許多の弟子および許多の人ゟも共に往り 十三邑の門に近づきしとき舁出さるゝ死人あり其母ハ嫠にて此ハ獨の子なり邑の人多これに伴ふ 十四主憐を見て愍み哭なかれと曰て近より其棺に手を按けれバ舁る者ども止れり イエス曰けるハ 十五死たる者起て且言ひ始むイエス之を其母に予せり 十六衆人みな懼て神を崇いひけるハ大なる預言者われらの中に興る神その民を眷顧たまへり 十七イエスの此聖名ユダヤの全國また編く四方に揚りぬ〇 十八ヨハネ子の弟子すべて是等の事を彼に告けれバ 十九ヨハネ子二人の弟子を召て言遣しけるハ來るべき者ハ爾ある乎亦われら他に俟べきや乎 二十その二人イエスに來り曰けるハバプテスマのヨハネ子我儕を爾に遣して言しむ來るべき者ハ爾ある乎亦われら他に俟べきや 二一此時イエス多の疾あるひハ病および惡鬼に憑たる者を醫し且おほくの瞽に見ることを賜たり 二二イエス彼等に答曰けるハ爾曹が見ところ聞ところをヨハネ子に往て告よ夫瞽者ハ見跛者ハ行み癩者ハ潔り聾者ハきゝ死し者ハ復活され貧者ハ福音を聞せらる 二三凡そ我爲に躓かざる者ハ福なり 二四ヨハネ子の使者さりし後イエスヨハネ子の事を衆人に曰けるは何を見んとて野に出しや風に動さるゝ葦なる乎 二五然バ爾曹なにを見んとて出しや美服を衣たる人なるか 文 繡を衣て奢る者ハ王の宮にあり 二六然バ何を見んとて出しや預言者なるか然われ爾曹に告ん是預言者よりも卓越たる者なり 二七これ書に先ちて道を備ろ我使者を爾の前に遣んと錄されたるハ即ち此なり 二八我あんぢらに告ん婦の生る者のうち未だバプテスマのヨハネ子より大なる預言者ハ無されど神の國の至微者も彼よりハ大なる也 二九ヨハネ子に聞る庶民また稅吏ハ其バプテスマを受て神を義とせり 三十パリサイの人また數法師ハ其バプテスマを受ず自ら暴ひて神の旨に背たり 三一然バ此世の人やを何に比へ又何に譬んや 三二童子市に坐し互に呼て我儕笛ふけどもなんぢら舞ず悲歌をすれどもなんぢら哭ず 三三蓋バプテスマのヨハネ來りてパンを食ず酒をも飲ざれバ惡鬼に憑たる者なりと爾曹いへり 三四人の子きたりて食ふ事をし飲ことを爲バまた食を嗜み酒を好の人稅吏罪ある人の友なりと爾曹いへり 三五然ど智慧ハ智慧の子に義と爲らる〇 三六或パリサイの人イエスを請て共に食せん事を願けれバイエスパリサイの人の家に入て食に就り 三七邑の中に惡行ある婦ありけるがイエスがパリサイの人の家に坐せるを知て蠟石の盒に香膏を携來り 三八イエスの後にた

ち足下に哭き涙にて其足を濡し首の髪をもて之を拭かつ其足に口を接また香膏を之に抹り三九イエスを請たるパリサイの人これを見て心の中に謂けるハ此人もし預言者ならバ押し者ハ誰なる乎又如何なる婦なる乎を知ん此婦ハ悪行を爲る者なり四十イエス之に答て曰けるはシモン我なんぢに言事あり答けるハ師よ言たまへ四一イエス曰けるハ或債主に二人の負債人ありて一人ハ金五百一人ハ五十を負しに四二償ハなかりけれバ債主ハ二人を免たり然バ二人の者その債主を愛すること孰が多き我に聞せよ四三シモン答けるハ我おもふに免るゝ事の多き者ならんイエス曰けるは爾が遖モンに曰けるハ此婦を見か我なんぢの家に入に爾ハ我足に水ん給ず此婦ハ涙にて我足ん濡し首の髪をもて拭り四五爾ハ我に口を接ず此婦ハ我こゝに入し時より我足に口を接て已ず四六爾ハ我首に膏を抹ず此婦ハ我足に香膏を抹り四七是故に我あんなり赦るゝこと少き者ハ其愛も亦少し四八是に於て其婦に曰けるハ爾の罪赦さる四九同に坐せる者ども心の中に謂けるハ此人ハ是何人なれバ罪をも赦す乎五十イエス婦に曰けるハ爾の信爾を救り安然にして往

第八章

一此後イエス郷邑を周遊て神の國の福音を宣傳ふ十二の弟子も偕に從ひぬ二また前に惡鬼を患たりし者病を痊れたる婦等も從ひたり即ち七の惡鬼を逐出されたるマグダラと稱マリア三又ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ又スザンナ此ほか多の婦ありて皆その所有を以てイエスに仕事たりき〇四衆の人々諸邑より出てイエスの所に集りけれバ譬ん以て曰りけり五種まく者種を播んとて出ぬ播るとき路旁に遺し種踏られ且天空の鳥これを食へり六また石上に遺し種ありて萌出て槁たり是潤なきが故なり七またり棘の中に遺し種あり棘も同に生長て之を窒り八また沃壌に遺し種あり生出て實を結べること百倍せり是を言畢て呼りけるハ耳ありて聽ゆる者ハ聽べし九其弟子ども其譬の奥義を爾曹にハ知ことを賜ご他の者にハ譬を以てす此ハ視ても見ず聽ても悟ざる爲なり十一夫この譬の種ハ神の道なり十二路の旁に遺しハ聽し後惡鬼の爲に其心より道を奪るゝ者あり彼ハ人の信じて救れんことを恐る十三石上に遺しハ聽とき歡びて道を受れども根なければ暫の間信ずるのみ患難に遇時ハ道に背く者なり十四棘の中に遺しハ聽て往こゝの世の諸慮と財貨と宴樂とに厭れて實ざる者あり十五沃壌に遺しハ正かつ善心にて道を聽これを守り忍て實を結ぶ者なり〇十六燈を燃し器にて之を弇ひ或ハ床下におく者なし入來る者の其光を見んが爲に壺の上に置べし十七隱て現れざる者あく露出ざる者なし十八是故に留曹聽ことを愼め有る者ハなほ予られ無有者ハ有りと意ふ所の物をも奪るべし〇十九此時イエスの母と兄弟きたりけれど群集に因て近くことを能ざりしかバ二十或人これをイエスに告て曰けるハ爾が母と兄弟あんぢに遇んとて外に立り二一イエス答て曰けるハ神の道を聽て之を行ふ者ハ乃ち我母わが兄弟あり〇二二一日イエス弟子と共に舟に登て彼等に湖の前岸へ渡べしと曰けれバ即ち漕出せり二三舟の走る時イエス寢たり颶風湖に吹下し舟に水滿んとして危かりしかバ二四弟子きたりてイエスを醒し曰けるハ師よ師よ我曹亡んとすイエス起て風と浪とを叱ければ息て平穩になりぬ二五イエス曰けるハ爾曹の信何所に在や彼等駭き且奇みて互に曰けるハ斯てガリラヤに對るガダラ人の地に着て二七岸に登し時ある一人邑より出てイエスに遇この者ハ久く惡鬼に憑れ衣をきず家に住ず惟墓にのみ居たりき二八イエスを見て喊叫その前に俯伏し大聲に呼りけるハ至上神の子イエスよ我あんぢと何の與あらんや爾に求る我を苦むること勿れと二九此惡鬼に人より出よとイエスが命じたるに因てなり彼の憑れたる事すでに久しく鏈また桎梏にて繫守ごも其を打碎き惡鬼の爲に野に逐ぬ三十イエス之に問て曰けるハ爾が名ハ何と稱や答けるハレギヲン是おほくの惡鬼の入たるが故なり三一惡鬼イエスに求けるハ命じて底なき所に往しむる勿れと三二此に多の豕の羣山に草を食ぬたりしが彼等その豕に入んことを許せと求けれバ之を許せり三三惡鬼その人より出て豕に入しかバ其群はげしく斜下り山坡より湖に落て溺る三四牧者ども其有し事を見て逃ゆき之を邑まち村に告たり三五衆人その有し事を見んとて出て

イエスの所に來れば惡鬼の離れし人衣を着たしかなる心にてイエスの足下に坐せるを見て懼あへり三六惡鬼に憑れたりし人の救れし狀を見たる者この事を彼等に告げれば三七ガダラ四方の多の衆庶イエスに此を去んことを求り是大に懼しが故なりイエス舟に登て返り給ふ三八惡鬼の離たる人イエスと共に居んことを求けるにイエス之を去しめて三九家にかへり神の爲に行し大なる事を人に告よと曰ければ途に去てイエスの己に行たまひし大なる事を邑に傳たり○四十イエス返たるとき衆人みな佇望て之を喜び接ふ四一ヤイロさ云る人あり此も會堂の宰なり俯おほよそ十二歳なる一人の女ありて瀕死なりければ來イエスの足下に伏て我家に來り給んことを求りイエスの往とき衆人これに擁あへり四二十二年血漏を患ひ醫者の爲にその所有を盡く耗しけれど誰にも痊れ得ざりしが四三婦あり十二年血漏を患ひ醫者の爲にその所有を盡く耗しけれど誰にも痊れ得ざりしが四四イエスの後に來て其衣の裾に捫ければ血の漏と止ぬ四五イエス曰けるへ我に捫る者へ誰ぞや衆人みな捫ざれば彼得ざりしペテロおよび偕に在る者ども曰けるへ師よ衆人なんらに擁擠せまるに我に捫る者ありと能力の我身より出るを覺れば也四六イエス曰けるへ女よ人みな特に捫れる者なしと曰りペテロおよび偕に在たちに愈たるとを衆人の前に告四七その嬶みづから隱せぬを知たのち來て前に伏さへりし故と其たゞく言る時に會堂の宰の家より人きたりて宰に曰けるへ女よ安然にして往四八イエス之をきゝ答て宰に曰けるへ懼るゝ勿たゞ信ぜよ女へ痊べし四九イエス家に入にペテロヤコブヨハネおよび偕に在女の父母の外たれにも偕に入を許さゞりき五〇衆人みな特に捫る者へ誰ぞや衆人みな女の爲に哭哀しかばイエス曰けるへ哭なかれ死たるに非ず寐たる耳五一彼等その死たるを知ば之を笑へり五二イエス人々を皆いだして女の手をさり女起よと呼曰ければ五三其魂かへりて忽ち起たりイエス命じて食を予しかば五六分毋へ駭異ぬイエスこの行しことを人を告るを戒め給へり

第九章

一イエス十二の弟子を召集め凡の惡鬼を出し病を醫せん爲に二彼等を遣さんとして曰けるへ路資に何をも携ざれ杖また旅嚢麵糧金へ二の衣をも帶と勿四何の家に入さらば其處に居りて亦其處より去五留まを不接者あらば其邑を出る時かれらに證のため足より塵を拂へ六弟子いでゝ遍く諸鄉にゆき福音を宣傳つつ病を醫せり○七分封の君ヘロデイエスの行し諸事を聞て惑り或人へ之をヨハネ子の甦れるなりと言人あり八人へエリヤの現れたる也さいひ又あ人へ古の預言者の一人甦れる也さ言ば九ヘロデ曰けるへ我ヨハネ子の首を斬り斯る事の聞ゆる者へ誰なるかへロデ之を見んと欲ふ○十使徒たち歸來りて其行しことをイエスに告イエス彼等を携ひて潛にベツサイダと云る邑の邊なる野に退きしに十一衆人しりて從ければ之を接て神の國の事を語つゝ醫を求る者を醫せり○十二日暮くさき十二の弟子きたりてイエスに曰けるへ此の野なれば衆人を去せ四圍の鄉村へゆきて宿をとり食を覓ろ事を爲たまへ十三イエス曰けるへ爾曹これに食を予へよ答けるへ我儕たゞ五のパンと二の魚ある耳この許多の人の爲に往て買に非されば別にイエス弟子に曰けるへ衆人を五十人づゝ列べ坐せしめよ十五弟子その如く行て彼等をみな坐せしめたり十六イエス五のパンと二の魚をとり天を仰ぎ祝して之をわり弟子に予へ衆の前に陳しむ十七みな食飽て餘の屑を十二の筐に拾たり○十八イエス衆の在ざりしとき祈禱したりしが弟子も偕に居りイエス之に問て曰けるへ衆人へ我を誰と言て誰と爲か十九答て曰けるへバプテスマのヨハネ子或へエリヤ或へ古の預言者の一人の甦れる也さ二十イエス曰けるへ爾曹へ我を誰と言て誰と爲かペテロ答けるへ神のキリストなり二一イエス彼等を戒て此事を何人にも告る勿れさ命じたり二二又曰けるへ人の子かならず多の苦を受て長老祭司の長學者どもに棄られ且殺され第三日に甦るべし二三又イエス衆人に曰けるへ若われに從へんと欲ふ者へ己に克て日々その十字架を負て我に從へ二四その生命を保全せんと欲者へ之を喪ひ我ために生命を喪ふ者へ之を保全すべし二五人もし全世界を利するとも自己を喪ひ自ら亡なば何の益あらん乎二六我と我道とを恥る者を人の子も亦おのが榮光と父と聖使の榮光とをもて來る時これを恥べし二七われ誠に爾曹に告ん此に立者の中に神の國を見まで死ざる者あり○二八此事を言けるのち八日ばかり過てイエスペテロ

二九 日ハ子ヤコブを携ひ断続せんとて山に登れり二九 祈れる時に其顔の貌つれと異り其衣服白く輝きぬ三十 二
三一 人の人ありて之と言へり即ちモーセとエリヤあり榮光の内に現れて三一 イエスのエルサレムにて既や世を
三二 逝んとする事を語る三二 ペテロおよび偕に在し者等いたく睡たりしが已に醒てイエスの榮光また偕に立る
三三 二人を見たり三三 この二人のイエスと別るゝ時ペテロイエスに曰けるハ師よ此に居ハ善われらに三の廬を建
三四 せ給へ一ハ爾のため一はモーセのため一へエリヤの爲にせん此ハ其言ところを知ざりし也三四 かく言るさ
三五 き雲きたりて彼等を蔽へり其雲に入しとき弟子たち懼ぬ三五 聖靈より出て曰けるハ此ハ我愛子なり之に聽へ
三六 し三六 聖靈たれど惟イエス一人を見たり弟子たち口を緘て見たりし事を當時ハ誰にも告ざりき◎三七翌日山
三七 より下りけれど許多の人々イエスを迎ふ三八 其中の或一人よばゝりて曰けるハ師よ願くハ我子を看顧たまへ
三八 此ハ我獨子あるに三九 惡鬼の爲に遇れて俄然さけび泡をふき拘攣られて傷み離るゝこと實に難し四十 我
三九 これを逐出す事を爾の弟子に求しかど能ざりき四一 イエス答て曰けるハ噫信あき悖逆世なる哉われ爾曾の
四十 中に爾曾を忍て幾何時あらんや爾が子を此に携來れ四二 來ば惡鬼かれを傾跌て拘攣ぬイエス汚たる鬼を斥
四一 て其子を醫し父に予へたり四三 衆人みな神の大なる能を駭きイエスの行し事を美めろ時にイエス弟子に曰
四二 けるハ四四 此言を爾曾耳に藏めよ夫人の子ハ人の手に付されん四五 彼等この言を悟ざりし悟ざるやう
四三 に隠されたる也彼等もまた憚て此事を問ざりき◎四六 弟子等のうち互に誰か大ならんとの爭論ありければ四七
四四 イエス其心の念を知て孩子をとり側にたてろ四八 彼等に曰けるハ我名の爲に此孩子を接る者ハ即ち我
四五 を接るなり我を接る者ハ我を遣しゝ者を接るなり凡て爾曾のうち最も小き者ぞ是大ならん 四九 ヨハ子
四六 答て曰けるハ師よ爾の名に托て鬼を逐出せる者を見たりしが我儕と共に從ハざる故これを禁たり五十 イエス
四七 曰けるハ禁ること勿れ我儕に敵抗ざる者ハ我儕に屬者なり◎五一 イエス天に升るの日いたりければエルサレ
四八 ムに往こゝを確定めたり五二 使者等を先に遣しけれど彼等ゆきてイエスに備んが爲サマリヤ人の鄉に入し
四九 に五三 鄉人そのエルサレムに向行さまなるが故にイエスを納ざりき五四 弟子のヤコブヨハ子此事を見て曰

五五 けるハ主よ我儕エリヤの行し如く天より火を召降し彼等を滅さんとす可か五五 イエス顧みて之を責め曰け
五六 るハ爾曾の心如何なる乎を自ら知ざるなり五六 人の子ハ人の命を滅す爲に來ず惟これを救ふ爲なり遂に他
五七 の鄉に往り◎五七 路を行さき或人イエスに曰けるハ主よ何處に往たまふとも我從ハん五八 イエス彼に曰け
五八 るは狐ハ穴あり天空の鳥ハ巢あり然ども人の子ハ枕する所なし五九 又ある一人に曰けるハ我に從へ彼いひけ
五九 るハ主よ先ゆきて父を葬る事を我に容せ六十 イエス曰けるハ死たる者に其死し者を葬らせ爾ハ往て神の國を
六十 宣よ六一 又ある一人曰けるハ主よ爾に從ハん先ゆきて家人に別を告ることを容せ六二 イエス曰けるは手を
六一 犂に著て後を顧る者ハ神の國に當ざる者也

第十章

一 此後主また七十人を立て之を兩個づゝに分ち自ら至んとする諸邑諸地へ前に遣さんとて
二 彼等に曰けるハ収穫ハ多く工人ハ少し故にその稼主に工人を収穫所に遣んことを求べし三 往
三 われ爾曾を遣すは羔を狼のなかに入るが如し四 嚢また旅袋また履を携ること勿れ五 人の家に入ば先此家の安全ならん事を求へ
四 若こゝに安全の子あらば爾曾が祈る安全ハ其家に留らん若しからずば其祈る安全なんぢらに歸べし七 其家に居りて供る所のものハ之を飲食せよ蓋工人の其
五 工錢を獲ハ宜なれば家より家に移ることを爲されど八 邑に入んに接る者あらば其なんぢらの前に供る者を
六 食せよ九 邑の中なる病の者を醫せ亦衆人に神の國ハ爾曾に近けりと曰へ十 もし邑に入んに接る者なくば衢に
七 出て曰へ十一 我儕に沾たる爾が邑の塵ハ爾曾に對て拂ん然ども神の國の近けるを知 十二 われ爾曾に告ん其日
八 ソドムの刑罰ハ此邑よりも却て易からんソドムの刑罰ハ此邑よりも却て易からんべし十三 あゝ
九 いたらざソドムの中に行し異能を若ツロとシドンに行しならバ彼等ハ早く賦を着灰を被り坐して悔改しなる
十 ベし十四 審判にハツロとシドンの刑罰ハ爾曾よりも却て易からん十五 已に天にまで擧られたるカペナウムよ
十一 又陰府に陥さるべし十六 爾曾に聽者ハ我に聽なり爾曾を棄る者ハ我を棄るなり我を棄る者ハ我を遣しゝ者を
十二 棄るなり◎十七 七十人喜び返りて曰けるハ主よ惡鬼さへも爾の名に因て我儕に服せり十八 イエス曰ける

十九 われ電の如くサタンの天より隕るを見し
二十 我なんぢらに蛇蠍を踐また敵の諸の權を制ふる權威を賜たり必ず爾曹を害ふ者あらじ二十一然ども惡鬼の爾曹に服しふる事に喜とする勿れ爾曹が名の天に錄されしを喜とすべし二一此時イエス心に喜びて曰けるは天地の主なる父よ此事を智者と達者とに隱して赤子に顯し給ふを謝す父よ然それ是の如きに意旨に適ふなり二二父に萬物を我に賜ふ父の外に子に誰あるを識者なく子および子の顯す所の者の外に父に誰あるとを識者なし二三イエス弟子を顧て竊に曰けるは
二四 爾曹が見ところの事を見るその目は福なり二四我なんぢらに告ん多の預言者および王も爾曹が見ところの事を見んとせしかども見ず爾曹が聞ところの事を聞んとせしかども聞ざりき○二五爰に一個の教法師あり起て彼を試み曰けるは師よ我あにを爲ば永生を受べき乎二六イエス曰けるは律法に錄されしは何ぞ爾かに讀か二七答て曰けるは爾心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべし亦己の如く鄰を愛すべし二八イエス曰けるは爾の答へ然り之を行はゝ生べし二九彼みづからを義なき者に爲んとてイエスに曰けるは我鄰とは誰なる乎三十イエス答て曰ぬすびと強盜に遇り強盜その衣服を剝取て之を打擲き瀕死になして去ぬ三一斯る時に或祭司この路より下しが之を見過にして行り三二又レビの人も此に至り進み見て同く過行り三三或サマリアの人旅して此に來り之を見て憫み三四近よりて油と酒を其傷に沃これを裹て己が騾馬にのせ旅邸に携往て介抱せり三五次日いづるとき銀二枚を出し館主に予て此人を介抱せよ費もし增ば我かへりの時あんぢに償ふべしと曰り三六然ば此三人のうち誰か強盜に遇し者の鄰なると爾意ふや三七彼いひけるは憫ある人なりイエス曰けるは爾も往て其ごとく爲よ○三八かれら路を行る時イエス一鄕に入けれバマルタと云る婦これを迎て自己の家に入ぬ三九その姉妹にマリアと云る者ありイエスの足下に坐りて其道を聽り四十マルタ供給のこと多して心いりみだれイエスに近よりて曰けるは主よ我が姉妹われを一人遺て勞動しむるを何とも意ざるか彼に命じて我を助しめよ四一イエス答て曰けるはマルタよマルタよ爾多端により思慮ひて心勞せり四二

然ど無て叶ふまじき者は一なりマリアは既に善業を擇たり此ひとつ彼より奪べからざる者なり

第十一章

一イエス某所にて祈禱しけるに畢しとき一人の弟子其弟子に教し如く我儕にも祷ることを教たまへ二イエス曰けるは祈る時は斯いふべし天に在す我儕の父よ願くは聖名を尊崇させ給へ爾國を臨らせ給へ三爾旨の天に成ごとく地にも成せ給へ我儕の日用の糧を每日に與たまへ四我儕に罪を犯す者を凡て免せば我儕の罪をも免し給へ我儕を試探に遇せず惡より拯出し給へ五また彼等に曰けるは爾曹の中もし或人夜半に其友へ往て友よ我が朋輩旅より來しに供べき物なきゆゑ三のパンを借よと曰んに六內に居もの答て我を煩はす勿れ既や門は閉われと共に兒曹も牀に在ば起て予ること能ずといふ者あらん乎七我なんぢらに告ん其友なるにより起て予ざれ難ひたすら請が故に其需に從ひ起て予べし八我なんぢらに告ん求よ然ば予られ尋よ然ば得ん叩よ然ば啓るゝことを得ん九蓋すべて求る者は得たづぬる者はあひ門を叩者は啓るれば也十爾曹のうち父たる者誰か其子のパンを求んに石を予んや魚を求んに其に代て蛇を予んや十一卵を求んに蠍を予んや十二然ば爾曹惡者なから善賜をその兒曹に予るを知まして天に在す爾曹の父は求る者に聖靈を予ざらん乎○十三イエス瘖啞なる惡鬼を逐出しけるに惡鬼いでゝ瘖啞ものいひしかば人々驚けり十四其中なる者の曰けるは彼は惡鬼の王ベルゼブルに藉て惡鬼を逐出せるなり十五イエスその意を知て曰けるは互に分爭ふ國は亡び互に分爭ふ家は傾るゝなり十六若サタンも自ら分爭ふ其國いかで立んや其なんぢら我を言てベルゼブルに藉て惡鬼を逐出すこと爾曹の子弟は誰に藉て惡鬼を逐出すや夫かれらは爾曹の裁判人と爲べし二十若われ神の指をもて惡鬼を逐出たるならば神の國は既や爾曹に來れり二一勇者鎧を擐て邸を守るときは其所有安全なり二二もし之より勇者きたりて其に勝ときは其恃とせる鎧を奪ひ且贓物を分べし二三我と偕ならざる者は我に叛き我と偕に斂ざる者は散すなり○二四惡鬼人より出て旱たる所をめぐり安を求れども得ずして曰けるは我出し家に歸らん二五已に來しに掃淨

二六 り飾れるを見 二六遂に往て己より も悪き七の悪鬼を携へ入て此に居 其人の後の患状 前より更に悪かるべ
二七 し 二七 この話を言るとき群集の中より 一婦聲を揚て曰けるハ爾を孕し腹と爾の吮し乳 福なり 二八イ
二八 エス答けるハ然されど神の道を聽て其を守る者の福にハ若ず〇 二九人々擁集れる時イエス曰けるハ今
二九 の世ハ悪し奇跡を求るこも預言者ヨナの奇跡の外に奇跡ハ予られじ 三十蓋ヨナが二子べけ人に奇跡こ爲し如
三十 く人ベけ子ハ今の世に奇跡こ爲べし 三一南方ベけ女王審判ベけ日に共に起て今
三一 の世の人の罪を斷めん彼等ハヨナの勸言に因て悛改めたり夫ヨナより大なる者こゝに在 三二燈を燃て
三二 隱たる處あるひハ升の下におく者なし入來る者の其光を見ん爲に燭臺の上に置なり 三四身の燈ハ目なり
三三 神を愛することを厭これ行ふべき事なり彼も亦厭べからざる者あり 四三禍なる哉なんぢらパリサイの人よ
三四 會堂の高座市上の問安を好めり 四四禍なる哉それ爾曹パリサイの人よ 四五ある教法師こたへて曰けるハ師よ此言ハ我儕をも辱しむ 四六イエス曰けるハ爾曹も禍なるかな數
三五 也 四五ある教法師こたへて曰けるハ師よ此言ハ我儕をも辱しむ 四六イエス曰けるハ爾曹も禍なるかな數
三六 法師よ任がたき荷を人に負せ自ら指一をも其荷に拔す 四七禍なる哉なんぢらハ預言者の墓を建なんぢら
三七 の先祖ハ之を殺せり 四八實に爾曹先祖の爲る事をこのむ證明を爲り夫れらハ之を殺し爾曹ハ其墓を建 四九
三八 是故に神の智慧いへる言あり我預言者および使徒を彼等に遣さんに其中の或者を殺し或者を窘むべしさ

五十 創世より以來ながしふ凡の預言者の血ハ此代に於て討さんこと爲なり 五一即ちアベルの血より殿こ祭
五一 壇の間に殺されたるザカリヤの血にまで並われ誠に爾曹に告ん之を此代に討すべし 五二なんぢら禍あるか
五二 な教法師よ智識の鑰を奪て自ら入ず且入んとする者をも阻り 五三此言を語るとき學者こパリサイの人々深
五三 く憤恨を含て多端の事を詰かけ 五四その口より出る言を何事も取へ訴んとして伺ひたり

第十二章

一 一そのとき數萬の人々相踐あふ程に集れりイエス先弟子に曰けるハ爾曹パリサイの人の齟齬を
二 謹めよ是偽善なり 二それ掩れて露れざる者ハたく隱て知れざる者ハなし 三是故に爾曹幽暗に語しことハ光明
三 に聞ゆべし密なる室にて耳に附言しことハ屋上に揚ろべし 四我友よ爾曹に告ん身體を殺して後に何をも爲能
四 ざる者を懼るふ勿れ 五われ懼べき者を爾曹に示さん殺したる後に地獄に投入る權威を有る者を懼よ我まこと
五 に爾曹に告ん之を懼べし 六五の雀ハ二錢にて售に非ずや然るに神に於ハ其一をも忘れ給ハず 七爾曹の首
六 の髮また皆かぞへらる故に懼るふ勿れ爾曹ハ多の雀より貴れり 八又われ爾曹に告ん我を人の前に識と言
七 ん者をハ人の子も亦神の使者の前に之を識と言ん 九我を人の前に認ざる者をハ神の使者の前に彼も識ざ
八 言ろべし 十凡そ人の子を謗る者ハ赦さる可らず 十一人なんぢらを會堂また執
九 政および權ある者の前に曳ゆかれ 十二其時に說べき言ハ聖靈なんぢらに
十 示すべし〇 十三衆人の中より一人イエスに曰けるハ師よ我が兄弟に遺業を我に分ふと命たまへ 十四イエス
十一 曰けるハ人よ誰われを立て爾曹の裁判人また物を分つ者と爲しぞ 十五イエス衆人に曰けるハ戒心して貪心
十二 を愼めよ夫人の生命ハ所蓄の饒なるに因ざる也 十六またこゝに譬を彼等に語て曰けるハ或富人その田畑よく
十三 實ければ 十七自ら忖いひけるハ我が作物を藏る所なき 十八又曰けるハ我かく爲ん我倉を毀
十四 ち更に大なるを建すべて我が作物と貨を其所に藏べし 十九斯て靈魂に對ひ魂よ多年を過ほどの許多の貨
十五 物を有たれば安心して食飲樂めよと言んとす 二十然ろに神これに曰けるハ無知なる者よ今夜なんぢが靈魂
十六 こそろふこと有べし然ば爾の備し物ハ誰が有になる乎 二一凡そ己の爲に財を積ハ神に就て富ざる者ハ

二二 此の如あり 二三 イエスその弟子に曰けるハ故に我なんぢらに告ん爾曹生命ハ爲に何を食ひ身體ハ爲に何を著
二三 んとて思ひ煩ふ勿れ 二三 生命ハ糧より優り身體ハ衣よりも優れり 二四 偶を思見よ稼ず穡ず倉も納屋も有
二四 ず然ども神ハなほ此等を養ふ況て爾曹ハ鳥よりも貴きこと幾何ぞや 二五 爾曹のうち誰かよく思ひ煩ひて其生命
二五 を寸陰も延得んや 二六 然ハ最小事すら能ざるに何ぞ其他を思ひ煩ふや 二七 百合花ハ如何して生長かを思
二六 二七 へ勞ず紡がざる也我爾曹に告ん ソロモンの榮華の極の時だにも其一に及ざりき 二八 神ハ今
二八 日野に在て明日爐に投入らるゝ草をも如此よそほせ給へバ況て爾曹をや吁信仰うすき者よ 二九 爾曹何な
二九 二三 食ひ何を飲んと求むる勿また思ひ惑ふこと勿れ 三〇 凡て是等の物ハ世界の邦人の求るもの也なんぢらの父ハ
二三 二一 是等の物ハ爾曹に無て叶ぬ事を知 三一 たゞ神の國を求めよ然バ是等の物ハ爾曹に加らるべし 三二 小き羣よ懼
三二 ろふ勿れ爾曹の父ハ喜びて國を爾曹に予へ給ハん 三三 爾曹の所有を售て施し已が爲に常に蔵ざる財布すあれ
三三 ち盡ざる財寶を天に備よ其處ハ盜賊も近よらず蠹も壞ハざる也 三四 爾曹の財寶の在ところにハ爾曹の心も亦
三四 三五 そこに在べし 三五 爾曹腰に帶し火燈を燃して居 三六 主人婚筵より歸來り門を叩バ速に啓ん爲に彼た
三五 三六 待人の如せよ 三七 主人きたりて其目を醒し居を見あバ此僕ハ福なり誠に我なんぢらに告ん主人みづから
三六 三七 腰に帶し僕を食に就せ前て之に供事すべし 三八 或ハ二更あるひハ三更に主人きたりて然なせるを見あバ此
三八 僕ハ福あり 三九 爾曹これを知べし若し家の主人盜賊いづれの時に來かを知バ其家を守て破せまじ 四〇
三九 四〇 然バ爾曹も預じめ備せよ不意ときに人の子きたらんと爲べなり 四一 ペテロ曰けるハ主よ此譬ハ我儕に
四〇 四一 言か又ハ凡の人に言か 四二 主いひけるハ時に及て食物を給與じめん爲に主人かその僕等の上に立たる忠
四二 義にして智き家宰ハ誰なる乎 四三 其主人きたる時に是の如く勤るを見らるゝ僕ハ福なり 四四 我まことに
四三 四四 爾曹に告ん其所有を皆かれに督らすべし 四五 若その僕心の中に我が主人の來るハ遲らんと思その僕
四四 四五 婢を扑たゝき食飲して且酒に醉はじめバ 四六 其僕の主人おもハざるの日しらざるの時に來りて之を斬殺し
四五 四六 エスまた衆人に曰けるハ雲の西より起るを見バ直に雨ふらんと即ち然り 四七 南より風ふけバ暑がら
四六 四七 んと爾曹いふ果て然り 四八 偽善者よ天地の色象を別ことを知て此時を別ち能ざるは何ぞや 四九 また何ぞ自ら
四七 四八 公義を審ざる乎 四九 なんぢ訟る者と共に有司に往さき途中にて心を盡して彼より釋されんことを求めよ
四八 四九 恐くハ訟る者なんぢを裁判人にひき裁判人なんぢを下吏に付し下吏なんぢを獄に入ん 五〇 我おんぢに
四九 五〇 告ん一錢も殘ず償ふまでハ爾そこを出ことを得ざる也

第十三章

一 當時あつまりたる者の中にピラトがガリラヤ人の血を其供物に雜し事をイエスに告る者ありし
二 イエス答て彼等に曰けるハ爾曹此ガリラヤ人ハ是の如く害されし故に凡のガリラヤ人よりも益りて罪
ある者と意ふや 三 我なんぢらに告ん然ず爾曹悔改めずバ皆おなじく亡さるべし 四 シロアムの塔たふれて
壓死されし十八人ハエルサレムに住る凡の人やよりも益りて罰ある者と意ふや 五 われ爾曹に告ん然ず爾
曹悔改めずバ皆おなじく亡さるべし 六 又この譬を云りけるハ或人その葡萄園に植おきたる無花果樹ありしが來
て之に果を求れども得ざりけれバ 七 其園丁に曰けるハ我三年きたりて此無花果樹に果を求れども得ず
之を斫され何ぞ徒らに地を塞や 八 園丁こたへけるハ主よ我その周圍を堀て之に糞するまで今年も容せ
もし果を結バ善もし結ずば後に之を斫べし 〇 十一 イエス安息日に或會堂にて教しに十八年鬼に
わづらはされたる婦ありて腰僂て少も伸ること能ざりき 十二 イエス之を見てよび婦よ爾ハ其病より釋さるゝと
曰て 十三 手を婦に按けれバ直に伸て神を讃美たり 十四 會堂の宰イエスの安息日に醫したる事を怒こた

十五 へて衆人に曰けるハ都を爲べきの日六日あれバ其中に來りて醫さるべし安息日に爲ざれ
十六 て曰けるハ僞善者よ爾曹おの〳〵安息日にハ其牛や驢を槽より牽出して水を飲さよる乎
十七 ハアブラハムの裔なり十八年サタンに縛られたる其娘を此安息日に解べからざらん乎
十八 けれバ敵對しゝ者みな慚ぬ又衆人みな其行し懿き事を悦べり
十九 比へ又あにゝ譬んや十九一粒の芥種の如し人これを取て其園に播バ長生て大なる樹となり天空の鳥その
二十 枝に摶なり二十又いひけるハ我神の國を何に譬んや二一酵酵の如し婦これを取て三斗の粉の中に納せば盡
二一 く發出すなり○二二イエス教つゝ各城各鄉を過エルサレムに向て旅行り二三或人いひけるハ主よ救
二二 る者ハ少き乎二四イエス彼等に曰けるハ窄門に入ために力を盡せ我なんぢらに告ん入んと求て能ざる
二三 者おほし二五家の主人おきて門を閉し後に爾曹外にたち門を叩て主よ主よ我に啓こ曰んに主人こたへて我
二四 おんぢらハ何處より來しか知ずと曰ん二六然る時に我儕ハ爾の前に食飲し爾また我儕の衢に教たりしと言
二五 出さんに二七主人こたへて我おんぢらに告ん何處より來しか知ず皆惡を爲す者よ我を去と曰ん二八爾曹アブ
二六 ラハムイサクヤコブ及び凡の預言者ハ神の國に在て爾曹ハ外に投出さるゝを見ん時に哀哭切齒すること有
二七 べし二九また人々四や東北や南より來りて神の國に坐するならん三十その後の者ハ先に先の者ハ後に爲
二八 べし○三一當日あるパリサイの人々來りてイエスに曰けるハヘロデ爾を殺さんとする故に此を離往
二九 答て曰けるハ爾曹ゆきて其狐に告よ我今日明日惡鬼を逐出し病を醫し第三日に此事をはらん三三然ごも今
三十 日明日また次日ハ我かならず行べし蓋預言者ハエルサ
三一 ルサレムよ預言者を殺し爾に遣されし者を石にて擊る者よ母鷄の雛を翼の下に集むる如く我なんぢの赤子
三二 を集んと爲しこと幾回ぞや爾曹ハ欲ず三五視よ爾曹の家ハ墟と爲て遺さるべし誠に我なんぢらに告ん主の名
三三 に託て來る者ハ福なりと爾曹いはん時いたる迄ハ我を見ざるべし

第十四章 一イエス安息日に食事の爲ある宰なるパリサイの人の家に入しに人々かれを窺たり二其前に

三 腹脹を患ひたる人ありしかバ三イエス應て教法師とパリサイの人々に曰けるハ安息日に醫す事ハ宜や否
四 かれら默然たりイエスかの人を執へ醫して之を去しめ五彼等に答て曰けるハ爾曹のうち誰か驢あるひハ牛
五 なごの阱に陷たらんに安息日にハ遽かに曳出さゞる乎六彼等この言に就て對ること能ざりき○七斯て其席
六 に請れたる人々の首席を擇を見てイエス譬を以て彼等に曰けるハ八なんぢ婚筵に請れんとき首座に坐する
七 こと勿れ恐くハ爾より尊人まれかれなバ九彼と爾を請し者來りて友よ首座に進こと爾に言バ同席
八 て末座に往べし十是故に爾まれんぬ時ハ往て末座に坐よ請し者自ら卑だる者ハ高くせらるべし十二又かれ
九 の者の前に爾尊まるべし十一凡そ自ら高ぶる者ハ卑され自ら卑だる者ハ高くせらるべし十二又かれ
十 た請る者に曰けるハ爾午餐あるひハ晩餐を設るとき朋友兄弟親戚また富る隣の人を請ふかれ恐くハ彼等
十一 も亦爾を請て其報答を爲んと十三爾貧乏殘疾跛者醫者などを請け十四然バ爾福なるべ
十二 し蓋彼等ハ爾に報ること能ず義き人々の甦らん其時なんぢに報答あればなり十五イエス彼に曰けるハ或人おほいなる筵を設て多賓
十三 を請けり十七筵のとき僕を其請たる者に遣して百物はや備たれバ來るべしと言せけるに十八彼等みな
十四 おなじ事はりそのにじめ一人だに我
十五 聞てイエスに曰けるハ神の國に食する者ハ福なり
十六 な同く辭ぬ其始の者かれに曰けるハ我田地を買たれバ往て視ざるを得ず願くハ我を允し給へ十九又一人
十七 の者いひけるハ我五緡の牛を買たれバ之を試むる爲に往んと欲ハ我を允し給へ二十又一人の者いひけるハ
十八 我妻を娶たり是故に往ことを得ざる也二一其僕かへりて此事を主人に告けれバ主人怒て其僕に曰けるハ
十九 速かに邑の衢巷に往て貧者癢疾跛者醫者などを此に引來れ二二僕曰けるハ主よ命の如く行り然ごも尚
二十 あまりの座あり二三主人僕に曰けるハ道路や藩籬の邊にゆき強て人々を引來り我家に盈しめよ二四我なん
二一 ぢらに告ん彼まれきたる人々は一人だに我餐を嘗ふ者なし○二五多の人々イエスと偕に行しがイエス
二二 顧みて彼等に曰けるは二六凡そ我に來てその父母妻子兄弟姉妹また己の生命をも憎む者に非ざれば我弟
二三 子と爲ことを得ず二七又その十字架を仕すして我に從ふ者ハ我弟子と爲ことを得ず二八なんぢら誰か城を築か

二九 えんに先坐して其費この事の竣さでに足や否を計ざらん乎 二九 恐くハ基を置て之を成能ずバ見者みな嘲笑
三〇 て 三〇 此人ハ築始て成遂ざりしと曰ん 三一 また王いでゝ他の王と戦はんに先坐して此一萬人をもて彼が
三一 二萬人に敵すべきや否を籌ざらん乎 三二 もし及ずバ敵なほ遠れる時に使を遣して和睦を求べし 三三 然バ此
三二 の如く爾曾その所有を盡く捨ざる者は我弟子と爲ことを得ず 三四 鹽は善物なり然ども鹽その味を失ほゞ何
三三 をもて之に味を和んや 三五 田にも糞にも益なく外に棄らるゝなり耳ある者は聽べし

第十五章

一 さて税吏と罪ある者どもイエスに聽んとて近よりければ 二 パリサイの人と學者たち譏謝て曰
二 此人ハ罪ある人に接りて共に食せり 三 イエス此譬を彼等に語て曰けるハ 四 爾曾のうち誰か一百の
三 羊あらんに若その一を失ハゞ九十九を野におき往て其失し羊を獲までハ尋ざらん乎 五 尋得バ喜て之
四 を己の肩に負 六 家に歸て其友と其隣の人々を召集て曰ん我と共に善べ我うしをへる羊を獲たれバ也 七 わ
五 れ爾曾に告ん此の如く一人の罪ある人悔改むる悔改をへる義人よりハ尚天に於て喜ことあらんハまた婦のうち誰か金錢十枚をもち其一枚を失ハゞ燈火を燃て家を掃除し之を獲までハ切に
六 尋ざらん乎 九 尋得バ其友と其鄰の人々を召集て曰ん我と共に喜べ我うしなへる金錢を獲たれバ也 十 われ
七 爾曾に告ん此の如く一人の罪ある人悔改めをへる神の使の前に喜ことあるべし 〇 十一 また曰けるハ 或人子二人
八 ありき 十二 その季子父に曰けるハ父よ我得べき業を我に分予よ 父その産を彼等に分たれバ 十三 譏日も
九 過ざるに季子その産を盡く集て遠國へ旅行せしが放蕩にして其分資を皆そこにて耗せり 十四 盡く費つ
十 しゝとき大ある饑饉その地に有て彼ともしく爲はじめけれバ 十五 往て其地の一民に身を投たり其人彼を牧
十一 ために彼を野に遣せり 十六 かれ豕の食する所の豆莢をもて己が腹を果さんと欲ふほどゞあれど何も彼に予る
十二 人なし 十七 自ら省悟て曰けるハ我父の所にハ食物あまれる傭人の許多か有に我ハ飢て死んとす 十八 起て
十三 我父に往て曰ん父よ我天と爾の前に罪を犯たれバ 十九 爾の子と稱るに足ざる者ゝ如く我を爲たまへと 二〇 即ち起て其父に往り尚ほく有しに
十四 父その僕等に曰けるハ 二一 父よ我天と爾の前に罪を犯たれバ爾の子と稱るに足ざる也 二二 父その僕等に曰けるハ
十五 主もて樂まん 二四 是わが子死て復生うしなひて復得たれバ也とて樂ことを始む 二五 その兄田に在しが
十六 歸て家に近き樂と舞の音を聞 二六 その僕の一人を召て是何事ぞやと問るに 二七 僕曰けるハ爾の弟
十七 歸りたり恙なく彼を得たりしに因て爾が父肥たる犢を宰たるなり 二八 兄いかりて入ず是故に其父いでゝ彼
十八 に勸しバ 二九 父に答て曰けるハ我多年なんぢに事て未だ爾の命に背ず然ども我友と樂む爲に羔
十九 も予し事なし 三〇 然に妓の爲に爾の業を耗しまた我所有ハ皆なんぢの屬なり 三一 爾の弟死て復生う
二十 三一 父かれに曰けるハ子よ爾ハ常に我と共に在また我所有ハ皆なんぢの屬なり 三二 爾の弟死て復生う
二一 しなひて復得たるが故に我儕喜て樂むハ當然の事なり

第十六章

一 イエス又その弟子に曰けるハ或富る人に操會者ありけるが主の所有を耗しことを主人ハ訴へらる
二 主人操會者を呼ていけるハ爾に就て我きゝうたる事が何ぞや今後おんぢを操會者さ爲えざれバ其會計
三 る條件を我に辨よ 三 操會者みづから意るハ主人我操會を奪なバ何を爲ん我鋤を執にハ力なく
四 恥かしゝ 四 われ操會を奪れん時ハ是等の家に迎ちるべき所爲を知りて 五 途に主人の負債人を悉く召て其
五 首の者に曰けるハ爾わが主に負債なにほどある乎 六 答ていふ油百斗なり彼に曰けるハ爾の券書を取いそぎ
六 坐して五十と書よ 七 又一人に曰けるハ爾の負債幾何ある乎答ていふ小麥百斛なり彼に曰けるハ爾の券書を
七 取て八十と書よ 八 主人その所爲の巧なるに因て此不義なる操會者を譽たり夫この世の子儕ハ此世に於ハ光
八 の子輩よりも尤も巧なり 九 我なんぢらに告ん不義の財を以て己が友を得よ此ハ乏からん時彼ら爾曾を永
九 遠宅に接んが爲なり 十 小事に忠き者ハ大事にも忠からず 十一 故に若なんぢら不義の財に忠からざる者ハ大事にも忠く小事に忠からざる者ハ大事にも忠からず 十一 故に若なんぢら不義の財に忠からざる者ハ大事にも忠く小事に忠からざる者ハ大事にも忠からず 十一 故に若なんぢら不義の財に忠からざる者ハ大事にも忠く小事に忠からざる者ハ大事にも忠からず 十一 故に若なんぢら不義の財に忠からざる者ハ大事にも忠く小事に忠からざる者ハ大事にも忠からず 十一 故に若
十 所有を爾曾に與んや 十二 爾曾もし人の所有に不義あらバ誰か爾曾の
十一 一人の僕ハ二人の主人に事ること能ず蓋これを惡かれを愛し或ハ此を重んじ彼を輕ん

すれば也なんぢら神と財に兼事ふること能ず十四然ふかきパリサイの人々此事を聞てイエスを嘲哂たり十五
イエス彼等に曰けるは爾曹人々の前に自己を義とする者なり然ども神は爾曹の心を知り夫人の崇ぶ所
の者は神の前に惡るきものなり十六律法と預言者はヨハネまでなり其のち神の國は宣傳らる肯用力て之に入
んと爲なり十七天地の壞るは律法の一畫の廢るよりも易し十八凡そ其妻を出して他の者を娶ば奸淫を行
ふ也また夫に出されたる婦を娶る者も奸淫を行ふなり〇十九爰に富る人あり紫袍と細布を衣て日々奢樂
めり二十亦ラザロと云る貧者あり其く腫物を患て富る人の門に置れ二一其案より落る餘屑にて養れん
と欲へり又犬きたりて其腫物を舐ふ二二貧者死たれば天の使者たちに依てアブラハムの懐に送れたり
富る人も死て葬られしが二三陰府にて痛苦をうけ其目をあげ遙にアブラハムと其懐に在ラザロを見て
二四喊叫いひけるは父アブラハムよ我を憐みラザロを遣して其指の尖を水に蘸わが舌を涼しめ給へ我この火
酷の中に苦めばなり二五アブラハム曰けるは子よ爾は生たりし時に爾の福を受またラザロは其苦を受し
を憶へ今かれは慰られ爾は苦めらるるなり二六斯耳ならず此より爾曹に渉んとするも亦えざる爲に我儕と爾曹との間に限おかれたる巨ある淵あり二七答けるは然ば父よ願くは我
父の家へラザロを遣たまへ二八蓋われに五人の兄弟あり亦かれらが此苦の所に來ざる爲に證據
に爲しめよ二九アブラハム曰けるは彼等にはモーセと預言者あれば之に聽べし三十答けるは然ず父アブラハ
ムよもし死より彼等に往者あらば悔改べし三一アブラハム曰けるは若モーセと預言者に聽ずば縦ひ死よ
り甦る者ありとも其勸を受ざるべし

第十七章

一イエス弟子に曰けるは躓さるる事かならず來らん其を來らす者は禍なる哉二これの小子
の一人を躓するよりは磨石を頸に懸られて海に投入られんこと其人の爲に宜るべし三自己を謹よ若兄
弟なんぢに罪を犯さば之を諫よ彼もし悔あば免せ四もし一日に七次なんぢに對
われ悔ると曰ば免すべし〇五使徒主に曰けるは我儕に信を益せよ六主いひけるは爾曹もし芥種一粒ほどの
信あらば此桑樹に抜て海に植れと曰ども爾曹に從ふべし七誰か僕あり耕し或は畜を牧ば僕あ
らんに彼田より歸たる時亟かに往て食に就よいふ者あらんや八反て曰すや我食を備わが食飲をいるまで
帶を束われに事て後なんぢ食飲すべしと九僕主人の命ぜし事に從へばとて主人かれに謝すべきか然じと我
ん愈りし事をみな行たる時も我儕は無益の僕なすべき事を行たるなりと謂〇十一
イエスエルサレムに往ときサマリヤとガリラヤの中を經十二ある村に入しとき十人の癩者ありて彼
ひ遙に立て聲を揚いひけるは十三師イエスよ我儕を矜恤たまへ十四イエス之を見て曰けるは往て己を祭司に
見せよ彼等ゆく間に潔られたり十五その一人己が醫されたるを見て返來り大聲に神を崇め十六イエスの足
下に俯伏て謝せり彼はサマリヤ人なり十七イエス答て曰けるは潔られし者は十人に非や其九人は何處に在
か十八この異邦人の外に神に榮を歸せんとて返たる者あらざる乎十九また彼に曰けるは起て往なんぢの信仰
なんぢを救り二十神の國は何の時きたる乎とパリサイの人に問れければイエス答て曰けるは神の國は顯れ
て來ものに非ず二一此に視よ彼に視よと人の言べき者にも非ず夫神の國は爾曹の衷に在ニ二また弟子に曰け
るは爾曹人の子の一日を見たく欲ふ日來らん然ども見ざるべし二三人々なんぢらに此に見よ彼に見よと曰
ん然ども往なかれ從ふ勿れ二四それ電光の天の彼處より閃き天の此處に光るが如く人の子も其日に如此あ
べし二五然ど人の子かならず先おほくの苦を受また此世の人に棄られん二六ノアの時に有し如く人の子の
時にも然あるべし二七即ちノア方舟に入し日まで衆人食飲、貿易、樹藝、構造などなり
滅せり二八又ロトの時にも如此ありき衆人食飲、貿易、樹藝、構造などなり二九ロトソドムより出
し日天より火と硫磺を雨せて彼等を皆滅せり三十人の子の顯るる日にも亦斯有べし三一其日には人屋
上に在ば其器具室に在とも之を取んとて下なかれ亦田畑にある者も同く歸なかれ三二ロトの妻を憶べし
三三凡そ其生命を救んとする者は之を喪ん者は之を存べし三四我なんぢらに告ん其夜
ふたり同床に在んに一人は執れ一人は遺さるべし三五二人の婦さもに磨ひき居んに一人は執れ一人は遺

さるべし 三六 かれら答て曰けるハ主よ此事何處に有や彼等に曰けるハ
第十八章 一 イエスまた人の恒に祈禱して沮喪すまじき爲に譬を彼等に語けるハ
二 いざる裁判人ありけるが 三 其邑に嫠婦ありて我を我仇より救たまへと曰て彼に至しに
四 かれしばし其のち心の中に思けるハ我神を畏ず人をも敬へざれど 五 此嫠われを煩せば彼が絕ず來て
六 我を詐さる爲に之を救へん 六 主いひけるハ不義なる裁判人の言し事を聽 七 況て神ハ晝夜祈る所の選たる
七 者を久く忍さも終に救ざらんや 八 我なんぢらに告ん神ハ速に彼等を救へん然ど人の子きたらんとき信を
世に見んや ○ 九 又みづから義と意ひ人を輕むる或人にイエス此譬を語れり 十 二人祈んとて殿に登りしが
其一人ハパリサイの人一人ハ稅吏なりき 十一 パリサイの人たちて自ら如此いのれり神よ我ハ他の人の如く
強盜、不義、奸淫せず亦此稅吏の如くにも有ざるを謝す 十二 われ七日間に二次斷食し又すべて獲もの
の三十分の一を獻たり 十三 稅吏ハ遠に立て天をも仰ぎ見ず其胸を拍て神よ罪人なる我を憐み給へと曰り
十四 我なんぢらに告ん此人ハ彼人よりハ義と爲れて家に歸たり凡て己を舉る者ハ卑られ自己を卑す
者ハ高らるべし ○ 十五 イエスに按られんがため人々嬰孩をも携來りしに弟子たち見て之を責たり 十六 イエ
ス嬰孩を呼び弟子に曰けるハ嬰孩を我に來せよ彼等を禁ること勿れ神の國ハ此の如き者なり 十七 誠に爾
曹に告ん凡そ嬰孩の如く神の國を承ざる者ハ之に入ことを得ざる也 ○ 十八 或宰ことふて曰けるハ善師よ永
生を嗣ために我なにを行べき乎 十九 イエス彼に曰けるハ何ぞ我を善と稱や一の外に善者ハなし即ち神な
り 二十 誠ハ爾が知こころなり奸淫する勿れ殺なかれ竊なかれ妄證を立る勿れ爾の父と母とを敬へ
二一 答けるハ是みな我幼より守れる者なり 二二 イエス之を聞て曰けるハ爾なほ一を闕その所有を悉く
售て貧き者に施せ然ば天に於て財あらん而して來り我に從へ 二三 かれ大に富る者なりしかば之を聞て甚く
憂たり 二四 イエスその甚く憂しを見て曰けるハ富る者の神の國に入ハ如何に難かな 二五 富る者の神の國に入
より駱駝の針の孔を穿ハ却て易し 二六 之を聞る者ども曰けるハ然ば誰が救を受べき乎 二七 イエス曰けるハ

人の爲得ざる所ハ神の爲得こころ也 二八 ペテロ曰けるハ我儕一切を捨て爾に從へり 二九 イエス彼等に曰け
ろハ誠に爾曹に告ん凡そ神の國の爲に家あるひハ父母あるひハ兄弟あるひハ妻あるひハ兒女を捨る者ハ
三十 今世にて幾倍をうけ來世にハ永々の生を受ざる者なし ○ 三一 イエス十二の弟子を携ひて之に曰けるハ
我儕エルサレムに上る人の子に就て預言者の錄されし事ハみな應らるべし 三二 夫人の子ハ異邦人に解され戲
弄凌辱られ唾せらるべし 三三 且かれら鞭撻て之を殺さん又第三日に甦るべし 三四 弟子この語を少も達
ず亦この言る事かれらに隱たり亦その語れる言を知ざりき ○ 三五 イエスエリコに近よれる時ある瞽者道の
旁に坐して乞たりしが 三六 大衆の過を聞て此ハ何事ぞと曰ければ 三七 人ナザレのイエスの過なりと告
三八 瞽者よばゝりて曰けるハダビデの裔イエスよ我を矜恤たまへと呼れり 三九 前だち行者ども默止よと之を斥れども愈
ダビデの裔よ我を矜恤たまへと呼れり 四十 イエス立止り彼を携來よと命す瞽者ちかよりければ 四一 イエス
彼に問けるハ爾われに何を爲れんと欲ふや答けるハ主よ見なんことを受 四二 イエス彼に曰けるハ見ことを受
よ爾の信なんぢを救へり 四三 彼やがて見え神を崇てイエスに從ひぬ民みな之を見て神を讃美たり
第十九章 一 イエスエリコに入て經行きニ ザアカイと云る人あり 税吏の長にて富る者なり 三 イエスの如
何なる人なるか見んと欲ども身量ひくければ大衆あるに因て見ことを得ず 四 彼を見んとて趨ゆき桑樹に升れ
りイエスその道を過んとするに故なり 五 イエス此に來り仰て彼を見いひけるハザアカイよ速き下れ我今日かな
らず爾の家に宿らん 六 彼いそぎ下り喜てイエスを迎たり 七 衆人これを見てみな怨言いひけるハ彼ハ往て罪
ある人の客と爲れり 八 ザアカイ起て主よ我所有の半を貧者に施さん若われ誣て人より收たる所
あらば四倍にして之を償のふべし 九 イエス彼に曰けるハ今日この家すくはるゝことを得たり蓋この人もアブ
ラハムの裔なれば也 十 それ人の子ハ喪ひし者を尋て救んが爲に來れり 十一 衆人この言を聞る時また譬を設
て曰り此ハエルサレムに近かつ衆人神の國たよちに顯明るべしと意が故なり 十二 ある貴き者みづから領
地を受て歸んとて遠國へ往ざき 十三 十人の僕を召て彼等に金十斤を手で曰けるハ我來まで商賣せよ 十四

その國民かれを慕て後より使を遣し曰けるハ我儕この人を王さする事を欲ず 十五 領地を受て歸し時おの
おの商賈して幾何の利を得たるかを知んとて金を予おきたる僕等を召さ命じぬ 十六 初の一人きたりて曰
けるハ主よ爾の一斤ハ十斤の利を得たり 十七 主人いひけるハ善僕よ爾ハ少き者に忠なれバ十の邑を宰
どろべし 十八 また次の一人きたりて曰けるハ主よ爾の一斤ハ五斤の利を得たり 十九 主人曰けるハ爾も五
の邑を宰どろべし 二十 また一人きたりて曰けるハ主よ爾の一斤ハ此に在われ手巾に裹て藏置たりき 二一 蓋
なんぢ嚴人なるが故に我おそれたり爾置ざる者を取まざる者を穫と知 二二
ハ惡僕よ我なんぢの口に因て爾を鞫べし爾われハ嚴者にて置ざる者を取まざる者を穫と知 二三
然に何ぞ我來るとき本と利を得んが爲に我金を兌錢肆に預ざりしや 二四 遂に傍に立る者に曰けるハ此人の
一斤を取て十斤有る者に予よ 二五 衆人主人いひけるハ我
なんぢらに告ん夫有者ハ予られ不有者ハ其所有ものまで取るべし 二六 且わが敵すなわち我が支配を欲ざる
者を此に曳來りて我前に誅せ 二七 イエス此事を言しのち衆人に先だちてエルサレムに上れり 二九 皺概と名る
山に邨るとき弟子二人を遣さんとて曰けるハ 三十 對面の村にゆけ彼處に入
ハ人の未だ乘ざる所の繋たる牝駒に遇べし其を解て將來れ 三一 もし誰か爾曹に何ゆゑ解やと問者あらバ如
此こたふべし主の用なりと 三二 遂されたる者往けれバ果て其語たまへる如く遇ぬ 三三 かれら牝駒を解さき其
主等かれらに何ぞ牝駒を解やと曰しかバ 三四 答て主の用なりと曰 三五 之をイエスに牽來り已が衣を駒に
置イエスを其上に乘 三六 イエス往けるとき衆人その衣を路上に布り 三七 イエス橄欖山
名に近て來る主ハ爾の弟子みな喜び其見し所の奇跡なる凡の能に因て大聲に神を讃て曰けるハ 三八 主の
なり天に於ては和平に至上に所
人イエスに曰けるハ師よ爾の弟子を貴めよ 四十 彼等に答けるハ 四一 既に近づけるとき城中を見て之が爲に哭い
呼べし 四二 もし爾だにも今この爾の日に於て爾の

平安に關る事を知ば 福なるに今なんぢの目に隱たり 四三 爾の敵なんぢの周邊に壘を築き四方より圍攻
四四 爾と其中なる兒女を擊滅し石を石の上に遺ざる日きたらん是なんぢ其賓顧たまふの時を知ざれバ也
四五 イエス殿に入その中にて賣易せる者を逐出し 四六 彼等に曰けるハ我室ハ祈禱の殿なりと錄されたるに爾
曹これを盜の巢と爲り 四七 イエス日々に殿にて教ふ祭司の長學者民の尊者ども彼を殺ん謀ども民
みな心を傾けて其教を聽るが故に 四八 爲べき方を知ざりき

第二十章

一日イエス殿にて民を教へ福音を宣しに祭司の長學者長老共に近よりイエスに語て曰け
る ニ 何の權威を以て此事を行が誰この權威を予たるか 三 答て曰けるハ我も一言なんぢらに問ん
且われに告よ 四 ヨハネのバプテスマハ天よりか人よりか 五 彼等たがひに曰けるハ若天よりと云バ然バ何故か
れを信ぜざる乎と曰ん 六 もし人よりと云バ民みなヨハネを預言者と信ずれバ我儕を石にて擊んとて 七 遂に答
て癸よりなるか知ずと曰り 八 イエス彼等に曰けるハ我も亦なにの權威を以て之を行かを爾曹に告ず〇 九 即ち
この比喩を民に譬れり或人葡萄園をつくり農夫に租與て久しく他國へ往しが 十 期いたりければ葡萄園の
果を受收ん爲に僕を農夫の所に遣しけるに農夫等これを撲たゝきて徒く返せたり 十一 また他の僕を遣し
しに之をも撲たゝき辱しめて徒く返せたり 十二 又三次僕を遣しに之をも傷けて逐出しけれバ 十三 葡萄
園の主曰けるハ我いかに爲ん我愛子を遣すべし之を見バ豈敬ならん 十四 農夫ども之を見て互に謀いひ
けるハ此ハ嗣子なり率れを殺さん業ハ我儕の所有になる可と 十五 彼を葡萄園の外に出して殺せり然
バ葡萄園の主いかに彼等を處べき乎 十六 來て此農夫等を滅し葡萄園を他人に託べし人やこれを
聞て曰けるハ然ハ有ざれ 十七 イエス彼等を見て曰けるハ匠人の棄たる石是こそ隅隅の首石となれと錄さ
れしは何ぞや 十八 此石の上に墮るものハ碎べし 十九 祭司の長學者爺その己を指て此譬を語たるを知この時イエスを執へんと爲しかども民を畏たり 二十 即ち之を窺ひその言を取て方
伯の政事の權威に解さんとして自ら義人と僞れる間者を遣せり 二一 就てイエスに問けるハ師よ我儕なんぢの

言ところ教るところ正くかつ偏らず誠を以て神の道を教るを知 二三われら税をカイザルに納るは宜や否 二三イエスその詭譎なるを知て曰けるゝ何ぞ我を試るや 二四デナリを我に見せよ此像と號ゝ誰なるか答てカイザルなりと曰 二五イエス曰けるゝ然バカイザルの物ゝカイザルに納め神の物ゝ神に納よ 二六かれら民の前に其言を執得ず且その答を奇とし意て默然たり○二七 黙ろ事なしと言サドカイの人きたりてイエスに問けるゝ 二八師よモーセ我儕に書遺ゝ若人の兄弟妻あり子なくして死バ其嗣を繼すべしと 二九然バ七人の兄弟あらんに長子妻を娶り子なくして死 三〇第三も之を娶り七人同く之を娶り子なくして 三一終に婦も死たり 三二然バ七人ともに此婦を妻とせし故に甦りたる時ゝ誰の妻と爲べき乎 三四イエス答て曰けるゝ此世の子ゝ娶嫁ことあり 三五彼世に入り死より復生に足らのゝ娶嫁ことなし 三六是また死ること能ざるが故あり蓋天の使と伴く復生の子にて神の子あれバ也 三七さて死し者の甦ることを モーセ棘中の篇に主をアブラハムの神イサクの神ヤコブの神と稱て之を明白せり 三八それ神は死たる者の神に非ず生る者の神なり蓋神の前にハ皆生る者なれバ也 三九その學者等こたへ曰けるゝ師よ善いへり 四十此のち敢てイエスに問者なかりき○四一イエス彼等に曰けるゝ人ゝ如何なれバキリストをダビデの裔と言や 四二ダビデ自ら詩の篇に主わが主に曰けるゝ我あんぢの敵を爾の足臺と爲まで我が右に坐すべしと言り 四四然バダビデ之を主と稱たれバ如何で其裔ならん乎 四五民みな之を聽る時ゝ其弟子にいひけるゝ 四六長服を衣て遊行ことを好み市上にて人の問安、會堂の高坐筵間の上坐を喜ぶ學者を愼めよ 四七彼等ゝ孀婦の家を呑いつゝ長祈なす審判るゝこと尤も重し

第廿一章

イエス目をあげ富る人ゝの捐輸を賽錢箱に投るを見 二又ある貧き孀婦のレプタ二箇を投たるを見て曰けるゝ 三われ誠に爾曹に告ん此貧き寡婦は衆の者よりも多く投たり 四蓋かれらは皆その餘ある所より捐輸を神にさゝげ此婦ゝ不足ところより其所有を盡く獻たれバ也○五また或人殿の美石と奉納物を以て修飾ることを語しに 六イエス曰けるゝ爾曹の見る所のもの石を石の上にも遺す地さるゝ日いたらん 七彼等ことふて曰けるゝ師よ何の時この事あらん正に此事の來らん時ゝ如何なる兆あり乎 八イエス曰けるゝ爾曹つゝしみて惑さるゝ事なかれ蓋おほくの者わが名を冒きたり我ゝキリストなり時ゝ近よれりと云ん然ど爾曹從ふ勿れ 九戰亂を聞ことき懼るゝ勿れ此等の事の先に有ゝ止を得ざることなり也然ど末期ゝ未だ遽ならず 十又曰けるゝ民ゝ民を攻國ゝ國を攻 十一各處に大なる地震、饑饉、疫病おこり且おそろべき事と大なる休徵天より現るべし 十二此事より先に人ゝ爾曹を執へ苦め會堂および獄に解し我名の爲に王および侯の前に曳往べし 十三然ど爾曹が此事に遭ゝ證と爲なり 十四故に爾曹まづ何を對んと思慮ましき事を心に定よ 十五蓋すべて爾曹に仇する者の辨駁また敵對ことを爲えざるべき口と智とを我なんぢらに賜へん 十六又あんぢら父母、兄弟、親戚、朋友等より解され且汝らの中ある者ゝ殺さるべし 十七爾曹わが名の爲に人ゝ憾れん 十八然ども爾曹の首髮一縷も喪ゝじ 十九なんぢら忍耐て其生命を全うせよ 二十なんぢら軍勢にエルサレムの圍るゝを見なバ其亡ちかきに在と知 二一その時ユダヤに在者ゝ山に逃よエルサレムに在者ゝ出よ鄉下に在者ゝエルサレムに入なかれ 二二これ刑罰の日にして錄されたる事のみな應らるゝ日なり 二三其日にゝ孕たる者と哺乳兒ある者ゝ禍なる哉これ地に大なる災ありて怒この民に及べければ也 二四人ゝ刀刃に斃れ且さらへられて諸國に曳れエルサレムゝ異邦人の時滿るまでゝ異邦人に踏躙さるべし 二五また日月星に異象あるべし地にてゝ諸國の人、哀み海と波との 二六此事の成ん時にゝ起て爾曹の首を擡よ蓋なんぢらの贖ちかづけバ也 二七イエス嘗を彼等に語けるゝ無花果と凡の樹を見よ 二八既に萌ば爾曹これを見て自ら夏ゝはや近と知 二九此の如く爾曹も此等の事成を見バ神の國の近を知 三〇誠に我なんぢらに告ん此事み な成までゝ此世ゝ逝ざるべし 三一天地ゝ廢る可らず 三二爾曹みづからを愼よ恐く

へ飲食に耽り世事に累れ爾曹の心昏迷なりて慮よらざる時に此日なんぢらに臨ん 三五 これ機檻の如く遍く地の上に居者に臨むべし 三六 是故に爾曹儆醒て此臨んとする凡の事を避また人の子の前に立得やうに常に祈れ 三七 イエス晝ハ殿にて教へ夜ハ出て橄欖と云る山に宿ぬ 三八 民みな彼に聽んとて朝はやく殿に來れり

第廿二章

一 逾越と云る除酵節近けり 二 祭司の長學者たち如何してかイエスを殺さんと窺ふ 但民を畏たり 三 僧サタン十二の中のイスカリオテと稱るユダに入ぬ 四 かれ祭司の長たちと殿司等に往如何してかイエスを付さんと語けれバ 五 彼等喜びて銀子を予んと約す 六 ユダ諾ひて人々の居ざる時にイエスを付さんと機を窺へり ○ 七 さて除酵節なる逾越の羔を殺べき日になりけれバ 八 イエス ペテロと ヨハネを遣よ九 かれら答けるハ何處に之を備んと爲ハ 十 イエス曰けるハ城下に入バ水を盛たる瓶を擎る人なんぢらに遇べし其入ところの家に隨ひ往て十一 家の主に師なんぢに云われ弟子と共に逾越を食すべき客房ハ何處に在やと曰 十二 然すれバ彼そなへたる大なる樓房を示すべし其處に備よ 十三 彼等ゆきてイエスの曰給ひたるが如く見て逾越を備へり 十四 時至けれバ イエス食に就ぬ又使徒も共に就たり 十五 イエス彼等に曰けるハ我苦難を受る先に爾曹と共に此逾越を食すること大に願へり 十六 われ爾曹に告ん之を神の國に成までハ復これを食せじ 十七 イエス杯を擎り謝して曰けるハ之を取て互に分よ 十八 我なんぢらに告ん神の國の來るまでハ葡萄より造しものを飲じ 十九 また パンを擎り謝して擘かれらに予て曰けるハ此ハ爾曹の爲に予る わが身體なり我を記ん爲に此を行 二十 また食してのち杯を擎り曰けるハ 此杯は爾曹の爲に流す我血にして立る所の新約なり 二一 夫われを賣す者の手は我と共に案にあり 二二 人の子は果して定られたる如く逝ん然ども人の子を賣す人ハ禍なる哉 二三 かれら此事を爲ん者ハ誰なる乎と互に問ぬ 二四 また彼等の中にて長たる者ハ誰なるかと互の爭ありき 二五 イエス彼等に曰けるハ異邦人の王ハ其民を支配す又その上に權を秉者ハ恩を施す者と稱らる 二六 然ども爾曹ハ如是すべからず爾曹のうち大なる者ハ幼か如く首たる者ハ役る者の如なるべし 二七 食に就る者と事る者と孰か大なる食に就る者ならずや然ども我ハ爾曹の中に事る者の如し 二八 わが患難に於て我と偕に居し者ハ爾曹なり 二九 我父の我に任ぜし如く我も爾曹に國を任すべし 三十 これ爾曹わが國に於て我案に食飲し且位に坐してイスラエルの十二の支派を鞫んが爲也 三一 主またシモンよシモンよサタン爾曹を索めて麥の如く簸んとす 三二 然ども爾の信仰絶ざろやう爾の爲に祈れり 爾歸ん時其兄弟を堅せよ 三三 シモン曰けるハ主よ我獄にまでも死にまでも爾と共に往んと心を定たり 三四 イエス曰けるハペテロ我なんぢに告ん今日鷄なかざる前に爾三次われを識ずと言ん ○ 三五 又彼等に曰けるハ我財布、旅袋、履をも帶ずして爾曹を遣しゝとき事の缺たるも有しや答けるハ無りき 三六 イエス彼等に曰けるハ今ハ財布ある者ハ之をとれ族袋ある者も亦然り此等を有ぬ者ハ衣服を賣て刃を買べし 三七 我なんぢらに告ん彼ハ鄙人の中に算られし事我に於て應らるべし蓋われを指たる事ハ必ず成らる可れバ也 三八 彼ら曰けるハ主よ有しこれ刃を指たるなり ○ 三九 イエス出て例の如く橄欖の山に往けるに其弟子も從へり 四十 其處に至て彼等に曰けるハ誘惑に入ざるやう祈れ 四一 イエス彼等を離て石の投らるゝほど隔り曲膝いのり曰けるハ 四二 父よ若し聖旨に肯バ此杯を我より離ち給へ然ども我意に非たゞ聖旨のまゝに成たまへ 四三 使者天より彼に現れて健壯を添ぬ 四四 イエス痛く哀み切に祈れり其汗ハ血の滴りの如く地に下たり 四五 祈禱より起て弟子に來り彼等が憂て寢れるを見 四六 曰けるハ何ぞ寢るや起て誘惑に入ざるやう祈れ 四七 如此いへるとき許多の人やきたる又十二の一人あるユダと云る者其に先ちてイエスに接吻せんと近よれり 四八 イエス曰けるはユダ爾は接吻をもて人の子を賣す乎 四九 その側に居たる者等事の及んとするを見て曰けるは主よ我儕刃をもて擊べき乎 五十 其中の一人祭司の長の僕を擊て其右の耳を削落せり 五一 イエス答て之を釋せと曰その耳に捫て醫したり 五二 イエス此に來し祭司の長殿司および長老等に曰けるは爾曹刃と棒とを持來り强盜に當が如する乎 五三 われ日々に爾曹と偕に殿に在し時は我に手を措こと無

四 り き然ろに今は爾曹の時かつ黒暗の勢なり 五四 彼等イエスを執へ曳て祭司の長の家に携往りペテロ遥に
五五 從ひぬ 五五 人々中庭のうちに火を焼て同に坐しけれバペテロも其中に坐したり 五六 或婢かれが火の傍
五六 に坐せるを見これを熟視て曰けるは此人も彼と偕に在し 五七 ペテロ承ずして女よ我これを識ずと云り五八
五七 頃刻して他の人も亦見て曰けるは爾も彼等の一人なりペテロ曰けるは人よ我は然ず 五九 約そ一時ほど過て復
五八 ほかの人力言けるは誠に此人も彼と偕に在し是がりラヤの人なれば也 六〇 ペテロ曰けるは人よ我あんぢの
五九 言ところを識ずと言も果ず忽ち鶏鳴ぬ 六一 主身を回てしペテロを見たまへり今日鶏なく前に三次われ
六〇 を識ずと言んと主の曰たまひし言をペテロ憶起し 六二 外へ出て痛く哭り〇 六三 イエスを護れる者ども嘲弄
六一 して彼を撲 六四 其目を掩ひ問て曰けるは爾を撲者は誰なるか預言せよ 六五 また多端の事を言て之を謗れり
六二 平旦に民の長老、祭司の長、學者ども集りてイエスを集議所に曳往て 六七 曰けるは爾もしキリストなら
六三 が我儕に告よイエス曰けるは假令われ爾曹に言とも信ぜざるべし 六八 又たとひ我なんぢらに詰とも答ざるべ
六四 し 六九 今より後人の子は大權ある神の右に坐せん 七〇 皆いひけるは然が爾ハ神の子なるかイエス曰けるは爾
六五 曹が言る如く我は是なり 七一 彼等いひけるは我儕この人が民を惑し稅を力
六六 一衆人みな起てイエスをピラトに携ゆき 二 イザルに納ろことを禁み自ら王なるキリストと稱るを見たり 三 ピラトイエスに問て曰けるハ爾ハユダヤ人の
六七 王なるか答けるハ爾が言る如し 四 ピラト祭司の長等と衆人に曰けるハ我この人に於て罪あるを見ず 五 彼等ま
六八 すく極力いひけるハ彼はガリラヤより始て遍しユダヤを教へ此處まで來て民を亂せり 六 ピラトガリラ
六九 ヤと聞て此人はガリラヤ人なる乎を問 七 其ヘロデの所管なるを知て之をヘロデに遣る此時ヘロデもエルサレ
七〇 ムに在しがイエスを見て甚だ喜べり蓋各〻嫌なる彼が風聲を聞て久く之を見んことを欲ひ且その奇異な
七一 る事を見んと望ねたれバ也 八 是故に多言を以て問けれども イエス何をも答ざりき 九 祭司の長學者たち
七二 側に立て切に彼を訟ぬ 一〇 ヘロデその士卒と共に彼を藐視朝弄して華服を衣せ復ピラトに遣れり

一一 リ 一一 ピラトこヘロデ先にハ仇たりしが當日ぞ互に親を爲り〇 一二 ピラト祭司の長有司および民等を呼
一二 あつめて 一三 曰けるハ爾曹この人を我に携來りて民を亂したる者なりと爲せり我なんぢらの訟る所を以て
一三 爾曹の前に鞫ども其罪あるを見ず 一四 ヘロデも亦然り蓋我儕に遣せざ彼もイエスが行事の死罪に當る
一四 見ざりき 一五 故にわれ笞ちて之を釋さん 一六 蓋この節期に必ず一人を釋こと有べなり 一七 彼等みな一齊よれ
一五 はりて此人を除きバラバを我儕に釋せと曰ん 一八 彼ハ城下に一揆を起し人を殺して獄に入し者なり 一九 故に
一六 ヲトハイエスを釋さんと欲ひ復かれらに曰しかど 二〇 かれら呼りて之を十字架に釘よと曰 二一
一七 ピラト三次いひけるハ彼ハ何の悪事を行しや我いまだ彼の死罪あるを見ざれバ笞ちて釋さん 二二 彼等厲く
一八 聲をたてゝ彼を十字架に釘んと言募れり遂に彼等と祭司の長の聲勝たり 二四 ピラトその求の如く擬て 二五 彼
一九 等が求る一揆を起し人を殺して獄に入たる者を釋し其意に任せてイエスを付せり 二六 彼等イエスを曳往さ
二〇 き田間より出來れるシモンと云る者を執へ其に十字架を負せてイエスに從へせたり 二七 衆の民およ
二一 び婦等も從ふ婦等ハ彼を哭哀めり 二八 イエス彼等を顧いひけるハエルサレムの女子よ我爲に哭なか
二二 れ惟おのれと己が子の爲に哭ヘ 二九 蓋ざる者いまだ孕ざるの胎いまだ哺せざるの乳は福なりと曰ん日きたら
二三 ん 三〇 當時人々山に對て我儕を掩へと曰ん 三一 もし青木にさへ如此なさば枯木
二四 は如何せられん〇 三二 又他に二人の罪人をイエスと偕に死罪に處はんとて曳往り 三三 彼等クラニオンと云る
二五 所に至りて此にイエスおよび罪人を十字架に釘ぬ一人をイエスの右一人を左に置 三四 イエス曰けるハ父よ彼等
二六 を赦し給へ其爲ところを知ざるが故なり彼等鬮をしてイエスの衣服を分つ 三五 人々立てイエスを見たり有
二七 司も亦嘲哂ふて曰けるハ彼は他人を救へり若キリスト神の選たる者ならバ自己を救べし 三六 兵卒も亦かれ
二八 を嘲弄し來り醋を予て 三七 爾もしユダヤ人の王ならバ自己を救へと曰り 三八 又ギリシヤ ロマ ヘブルの文字に
二九 て此はユダヤ人の王なりと書る罪標を其上に建たり 三九 懸られたる罪人の一人イエスを譏て曰けるハ爾も
三〇 しキリストならバ己と我儕を救へ 四〇 他の一人こたへて彼を責め曰けるハ爾おなじく審判を受ながら神を畏

四二 ざる乎 四一 我儕は當然なり行ての報を受ぁれど此人は何も不是事はわざりし也 四二 斯てイエスに曰けるは主よ爾國に來ん時我を憶たまへ 四三 イエス答けるは誠に我なんぢに告ん今日あんぢは我と偕に樂園にをる 四四 在べし ⊙ 時約そ十二時ごろより三時に至まで遍く地のうへ黑暗と爲れり 四五 日光くらみ殿の內の幔 四六 眞中より裂たり イエス大聲に呼り曰けるは父よ我靈を爾の手に託く如此いひて氣絕ゆ 四七 百夫の長この成し事を見て神を崇め曰けるは誠に此人は義人なりき 四八 之を觀んとて聚れる衆人みな此ありし事等を見て儕を拊て返れり 四九 イエスの相識の人々およびガリラヤより隨ひし婦ごも遠く立て此等の事を見たり ⊙ 五十 議員たるヨセフと云る善かつ議なる人あり 五一 彼等の評議と行爲を肯はざりき是はユダヤのアリマタヤの邑の人にて神の國を慕る者なり 五二 此人ピラトに往イエスの屍を乞て 五三 之を取下し布にて裹いまだ人を葬し事なき石の營たる墓に置り 五四 此日は備節日なり且安息日近きぬ 五五 ガリラヤよりイエスと偕に來りし婦たち後に隨ひて其墓と屍の置れたる狀を見たり 五六 彼等かへりて香物と香膏を備へ置て誡に從ひ安息日を休めり

第廿四章

一 七日の首日の昧爽に此婦たち備置たる香物を携て墓に來しに他の婦等も偕に來れり 二 彼等石の墓より轉たりしを見て 三 入けれバ主イエスの屍を見ず 四 之が爲に困踏をりしに輝る衣服を着たる二人その旁に立り 五 かれら懼て面を地に伏けれバ其人いひけるは爾曹何ぞ死たる者の中に生たる者を尋るや 六 彼ハ此に在ず甦りたり彼がガリラヤに居しとき爾曹に語て 七 人の子ハ必ず罪ある人の手に付され十字架に釘られ第三日に甦ると可と云たりしを憶起よ 八 みな十一の弟子と他の弟子等に告 九 此等の事を使徒に告たる者ハマグダラのマリア ヨハンナヤコブの母なるマリア又他に偕に在し婦等なり 十 使徒その語れる虛誕と意ひて信ぜず 十一 ペテロ起て趨り墓に往かゞまりて臬布のかたよせ在を見て其遇ところの事を奇みつゝ歸れり ⊙ 十二 當日二人の弟子エルサレムより三里バかり隔りたるエマヲと云る村に往けるに 十三 互に此等の所遇ごとを語あへり 十四 語り論ずる時に

イエス自ら近づきて偕に往り 十六 然ど彼等の目遮されて知ことを得ざりき 十七 イエス曰けるハ爾曹行つ互に哀み談論ことゝハ何ぞ乎 十八 その一人のクレオパと云る者答けるハ爾ハエルサレムの旅人にして獨このごろ有し事を知ざる乎 十九 答けるハ何事ぞや之に曰けるハナザレのイエスの事なり此人ハ神と萬民のまへに言と事を奇みつゝ 二十 祭司の長と有司等かれを死罪に解して十字架に釘たり 二一 我儕イスラエルを贖ハん者ハ此人なりと望たりし又それ而已ならず此等の事の成しより今日ハ第三日前に於て行ま詩に大なる能ある預言者なりしが 二二 我儕の中なる或婦たち我儕を驚駭せり彼等朝はやく墓に往 二三 その屍を見ずして來り天使あるに 二四 我儕と偕に在し者も墓に往たるに婦の言る如にて且かれを見ざりき 二五 イエス曰けるハ預言者の凡て言たる事を信ずる心の遲き愚なる者よ 二六 キリストハ此等の難を受て其榮光に入べきに非や 二七 故にモーセより凡の預言者を始すべての聖書に於て己に就ての事ハ解明されたり 二八 彼等ゆく所の村に近きけるに彼ゆき過んと爲る狀をなせバ 二九 彼等勸め曰けるハ日昃きて暮に及ぬ我儕と偕に止れ彼いりて止る 三十 共に食に就る時パンをとり謝して擘かれらに予けれバ 三一 二人の者の目ひらかに爲て彼を識り又忽ち其目に見ず爲り 三二 彼等たがひに曰けるハ途間にて我儕と語かつ聖書を解る時我儕の心熱しに非ずや 三三 此時かれら起てエルサレムに歸り十一の弟子および同なる人の集りに現れたり 三四 二人の者も途間にて所遇ごとパンを擘たまへるに因て識たる事を語れり 三五 此事を語れる時イエス自ら其中に立て曰けるハ爾曹安かれ 三六 かれら駭き懼れて見ごころの者を靈あらんと意り 三七 イエス曰けるハ爾曹何ぞ駭くや何ぞ心に疑ひ起るや 三八 我手わが足を見て我なるを知れ我を摸て視よ靈ハ我が在る如に肉と骨ハ有ざる也 三九 其手足を示せしに 四十 如此いひて 四一 彼等喜べども猶信ぜず異めるに因て 四二 食る物ある乎と曰けれバ 四三 炙たる魚と蜜房を予ふ 四四 之を取て其前に食せり 四五 また彼等に曰けるハモーセの例預言者の詩また詩の篇に錄されたる我事につく凡の言の必ず應べきハ我もと爾曹と偕に在しとき語れる所なり 四六 是に於て聖書を悟